

大宰府条坊跡 26

—第225次調査—



平成16年

太宰府市教育委員会

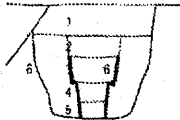
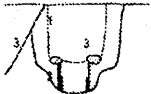
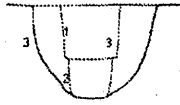
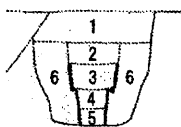
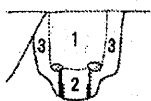
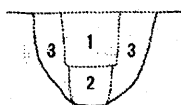
大宰府条坊跡 26

—第225次調査—

平成16年

太宰府市教育委員会

『大宰府条坊跡26』正誤表

頁・行	誤	正
2頁12行・32行、3頁15行	調査主任	調査
2頁12行・32行、3頁15行	主査 城戸康利	主任主査 城戸康利
2頁27行	(保護活用係) 久保山元信(平成15年7月1日～)	文化財保護係長 久保山元信(平成15年7月1日～) 保護活用係長 久保山元信(平成15年10月1日～)
2頁28行	神原 稔	神原 稔(～平成15年9月30日)
2頁29行	事務主査 永尾彰朗(平成15年10月1日～)	調査係長 永尾彰朗(平成15年10月1日～)
3頁10行	(保護活用係)	保護活用係長
3頁11行	文化財調査係長 神原 稔	(削除)
3頁12行	事務主査 永尾彰朗	調査係長 永尾彰朗
7頁 第3図	国道31号線	県道31号線
116頁 S-33暗褐色土	坏身(小田編年IIB)	坏身(小田編年IIB)
17頁 第9図	225SE009  225SE009 1. 明灰色土 2. 黄褐色土 3. 黄褐色粘土 4. 灰色砂 5. 灰色粘土 6. 暗灰色砂 225SE010  225SE010 1. 黄褐色土 2. 黄褐色粘土 3. 灰色土 225SE011  225SE011 1. 暗褐色土 2. 黄色粘土 3. 暗黄褐色土	225SE009  225SE009 1. 明灰色土 2. 黄褐色土 3. 黄褐色粘土 4. 灰色砂 5. 灰色粘土 6. 暗灰色砂 225SE010  225SE010 1. 黄褐色土 2. 黄褐色粘土 3. 灰色土 225SE011  225SE011 1. 暗褐色土 2. 黄色粘土 3. 暗黄褐色土

序

本書は共同住宅建築に先立ち、平成14・15年度に発掘調査を行いました大宰府条坊跡第225次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁跡の南に広がる広大な都市遺跡です。今回の調査では古代から中世にかけての遺跡が確認され、特に井戸が多く検出されています。出土遺物も多く、古代から中世にかけての大宰府を知る上で重要な手がかりが得られました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

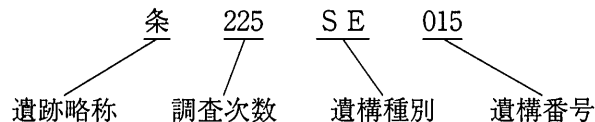
最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成16年 6 月

大宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は、大宰府条坊跡第225次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は、太宰府市五条2丁目188番地に所在し、調査対象面積は791.89m²、調査面積は756.00m²、調査期間は平成15（2003）年2月28日から同年7月15日までである。
3. 発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもとに（株）玉川文化財研究所（所長 戸田哲也）が行った。
4. 遺構の実測は中山豊・香川達郎・佐々木竜郎・前川昭彦・伊東甚吉、写真撮影は香川・中山が行い、調査地の空中写真は（有）空中写真企画が撮影した。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって報告書に示す方位はすべて座標北（G. N）を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から約6°30′西偏する。
6. 本書に掲載した遺構番号は以下の要領で理解される。なお、本書中では遺跡略称の「条」（大宰府条坊跡）を省略した。



7. 本書掲載の遺物実測図番号と写真図版番号は対応関係にあるが、写真図版のみの資料に関してはR（遺物実測）番号を表記した。
8. 本書に使用した土器・陶磁器類の分類は、以下の文献に準拠した。また、陶磁器分類は井上信正、森田レイ子の指導のもとに香川達郎が行った。その他の遺物に関しては巻末に掲載した。
土 器 『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市教育委員会 1983
『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇』太宰府市教育委員会 1992
輸入陶磁器 『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会 2000
文字瓦 石井好雄・高橋章1978「大宰府出土の瓦について（2）」『九州歴史資料館研究論集4』
滑石製石鍋 森田勉1995「滑石製品－特に石鍋を中心として－」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集』
森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
9. 本書の執筆は、戸田哲也・河合英夫の指導のもとにⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶを香川達郎、Ⅴの縄文時代土器および石器を佐々木竜郎が行っているが、Ⅲ. 調査の経緯は井上信正、Ⅵ. 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が分担執筆した。なお、出土獣骨類については樋泉岳二氏の教示を得た。
10. 報告書作成業務は（株）玉川文化財研究所において行った。
11. 写真図版（カラー）については、付属のCD-ROMに収録している。詳細はCD-ROM内のテキストデータ「はじめにお読み下さい」を参照のこと。
12. 縄文土器の拓本は、断面の左側に表面、右側に裏面を配置している。
13. 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
14. 木製品の保存処理は、（株）東都文化財保存研究所に委託した。
15. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管し、公開・活用する予定である。

目 次

I. 調査地の位置と歴史	1
II. 調査組織	2
III. 調査に至る経緯	4
IV. 調査整理の方法	4
V. 調査の概要	9
1. 層 位	9
2. 遺 構	13
1) 井 戸	13
2) 掘立柱建物	27
3) 柵 列	29
4) 溝	30
5) 土 坑	30
6) 整 地	32
7) 流 路	32
8) 小 穴	32
3. 遺 物	33
1) 井戸出土遺物	33
2) 掘立柱建物出土遺物	69
3) 溝出土遺物	70
4) 土坑出土遺物	71
5) 整地出土遺物	75
6) 流路出土遺物	76
7) 小穴出土遺物	78
8) 各層出土遺物	79
VI. 自然科学分析	81
VII. 小 結	92
遺構番号台帳	95
掘立柱建物・柵列・溝・整地層の座標方位一覧	97
出土銭貨計測表	97
土師器計測表	98
出土遺物一覧表	107
報告書抄録	巻末

I. 調査地の位置と歴史

大宰府市は、福岡平野の南東最奥部、北に大城山を抱える四王寺山脈、東に宝満山をはじめとした三郎山地、西からは南にかけて背振山地とその前山となる牛頸低山地が迫る、狭長な平野部である二日市低地帯を中心に所在する。

当市は古代の西海道九国二島を総管し、外交・軍事機能をも担った地方最大の官衙「大宰府」が存在した地として知られる。周囲には天智天皇二年（663）、白村江での敗戦後に唐・新羅の侵攻に備えて大野城、基肄城、水城等防衛拠点を築いており、自然地形と相まって堅固な要害となっていることが、都市化が進んだ現在でも理解することができる。

1968年、鏡山猛は、この狭長な平野のなかに大宰府政庁を中心とした条坊制の都市が存在することを指摘し、条坊研究のさきがけとなった（鏡山 1968）。鏡山は「観世音寺文書」の記載内容や政庁礎石、現状地割り等を検討し、1区画を1町（約109m）四方とし、南北22条、東西各12坊の条坊を想定した。その範囲は2.4km×2.6km四方で、隣接する筑紫野市にまで及んでいる。その後、金田章裕（金田 1989）は、1区画の面積を8反とした上で、100m四方とする条坊プランを提示し、成立を10世紀中頃と推定した。

一方、考古学的方法による条坊域の確認作業は、1968年以来、今日も精力的に進められており、発掘資料に基づいた分析が狭川真一（狭川 1991）、井上信正（井上 2001）らにより提起され、実体解明へと繋ぐ指針となっている。

今日に至る成果の概略を列記すると、7世紀後半頃成立する掘立柱形式の第Ⅰ期政庁が、8世紀前半に朝堂院形式の第Ⅱ期政庁に改められる。この時朱雀大路や観世音寺前面道路が施工され、街区は1区画が約90m四方と推定された。両者には設計基準の相違がみられ、朱雀大路が左郭1坊の一部を利用している状況から、街区の施工基準は第Ⅰ期に遡る可能性が指摘された。政庁は天慶四年（941）の藤原純友による焼き討ちの後、Ⅲ期政庁として再建され、この頃に街区も前段階を踏襲しつつ新たに形成されるようである。これらはおおむね11世紀後半から12世紀前半には機能を停止し、Ⅲ期政庁も律令体制解体のなかで終焉を迎える。

中世以降、都市としての求心力は東側（左郭）の観世音寺周辺や太宰府天満宮周辺へと移っていくことが、遺構の分布推移からみられる。発見された遺構の方向性から、条坊の遺制を踏襲するものに加え、正方位を向かないものも現れる。また居館的な施設が出現し、鑄造生産遺構が観世音寺周辺や鉾ノ浦遺跡から集中的に検出される。

今次調査地は、鏡山条坊復元案によると左郭7坊8条にあたる。二日市低地帯のなか、河川の下刻によって生じた低位段丘および沖積地に立地し、現地表の標高は34.5mを測る。北側約100mには、御笠川が博多湾に向け西流し、川を渡った240mほど北には「府の大寺」である観世音寺が鎮座している。また、調査地北隣には「どんかん道」と通称される古道が、太宰府天満宮と榎社（南館）を結んでおり、毎秋の神幸祭には大宰権帥菅原道真の御霊が古式に則り往還する。

引用・参考文献

- 鏡山 猛 1968「大宰府都城の研究」風間書房
- 金田章裕 1989「大宰府条坊プランについて」『人文地理』41-5 人文地理学会
- 狭川真一 1991「大宰府条坊跡の復元－発掘調査の成果から－」『条里制研究』6号 条里制研究会
- 井上信正 2001「大宰府の街区割りと街区政立についての予察」『条里制・古代都市研究』通巻17号 条里制・古代都市研究会

Ⅱ．調 査 組 織

調査・整理を実施した平成14年度および平成15、16年度の調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会調査組織

(平成14年度／2002年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文化財保護係長	和 田 敏 信
	文化財調査係長	神 原 稔
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 事	大 石 敬 介
調査主任	主 査	城 戸 康 利
	技 術 主 査	山 村 信 榮
		中 島 恒 次 郎
	主 任 技 師	井 上 信 正 (調査担当)
		高 橋 学
		宮 崎 亮 一
	技 師 (嘱託)	下 川 可 容 子
		森 田 レ イ 子
		柳 智 子
		渡 邊 仁

(平成15年度／2003年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文化財保護係長	和 田 敏 信 (～平成15年 6 月30日)
	(保護活用係)	久保山 元 信 (平成15年 7 月 1 日～)
	文化財調査係長	神 原 稔
	事 務 主 査	永 尾 彰 朗 (平成15年10月 1 日～)
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 事	大 石 敬 介
調査主任	主 査	城 戸 康 利
	技 術 主 査	山 村 信 榮
		中 島 恒次郎
	主 任 技 師	井 上 信 正 (調査・整理担当)
		高 橋 学
		宮 崎 亮 一

技 師 (嘱託)	下 川 可容子
	森 田 レイ子
	柳 智 子
	渡 邊 仁

平成16年度／2004年度)

総括 教 育 長	關 敏 治
庶務 教 育 部 長	松 永 栄 人
文化財課長	木 村 和 美
文化財保護係長	和 田 敏 信
(保護活用係)	久保山 元 信
文化財調査係長	神 原 稔
事 務 主 査	永 尾 彰 朗
事 務 主 査	藤 井 泰 人
主 任 主 事	大 石 敬 介
調査主任 主 査	城 戸 康 利
技 術 主 査	山 村 信 榮
	中 島 恒次郎
主 任 技 師	井 上 信 正 (調査・整理担当)
	高 橋 学
	宮 崎 亮 一
技 師 (嘱託)	下 川 可容子
	森 田 レイ子
	柳 智 子
	渡 邊 仁
	長 直 信

(4) 玉川文化財研究所調査組織 (平成14～平成16年度)

所 長	戸 田 哲 也
調査研究部長	河 合 英 夫
主任研究員	中 山 豊
主任研究員	香 川 達 郎 (調査・整理報告担当)
研 究 員	北 平 朗 久
研 究 員	佐々木 竜 郎 (報告担当)
研 究 員	前 川 昭 彦
調 査 員	伊 東 甚 吉

Ⅲ．調査に至る経緯

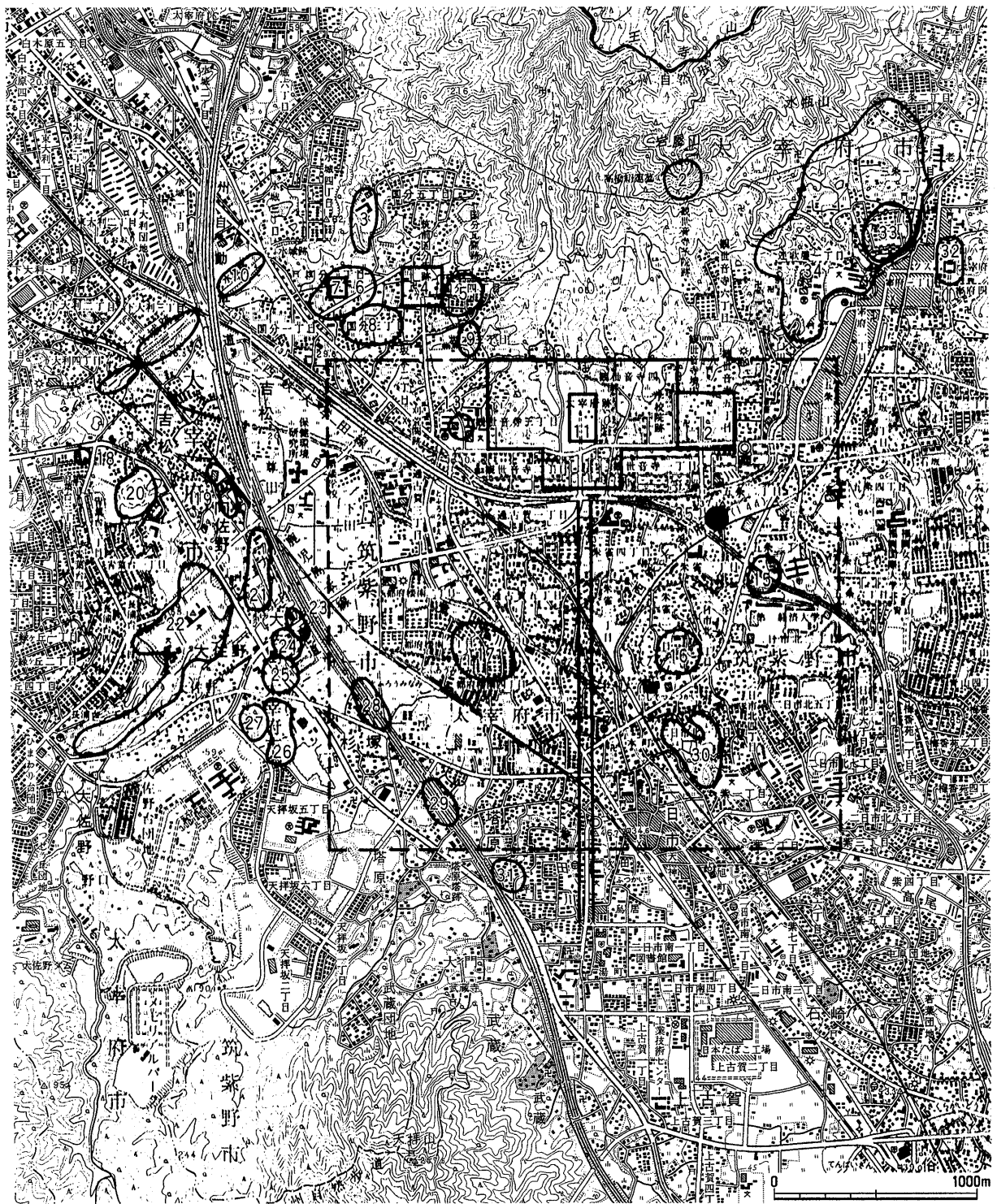
調査地は、太宰府市五条2丁目188番地に所在する。当地は、以前から文化財有無の問い合わせがあったが、平成10年1月28日地権者より地上げして田地としたいとの申し出があり、事前に確認調査を実施し、遺構確認の際は遺構を保全して1.5m地上げを行うことで協議が進められた。平成10年2月6日に確認調査を行った結果、当時の地表面より30cm下に遺跡が包蔵されていることが判明した。そして対象地全体を盛土する際、耕作土の除去作業時に文化財課職員が立会を行って遺構保全を確認した。

その後、平成14年11月8日に、対象地でマンション建設についての事前問い合わせがあった。協議の結果、マンション建設部分と上下水道等配管工事が行われる部分については工事による遺跡破壊が免れないため、この部分の発掘調査を実施することとなった。調査区以外の部分は地下保存されている。なお、調査の具体化に伴い、太宰府市教育委員会から株式会社玉川文化財研究所に発掘調査・整理報告業務の委託がなされた。発掘調査は平成15年2月14日～7月15日の期間で実施され、その後整理報告に移行した。

Ⅳ．調査整理の方法

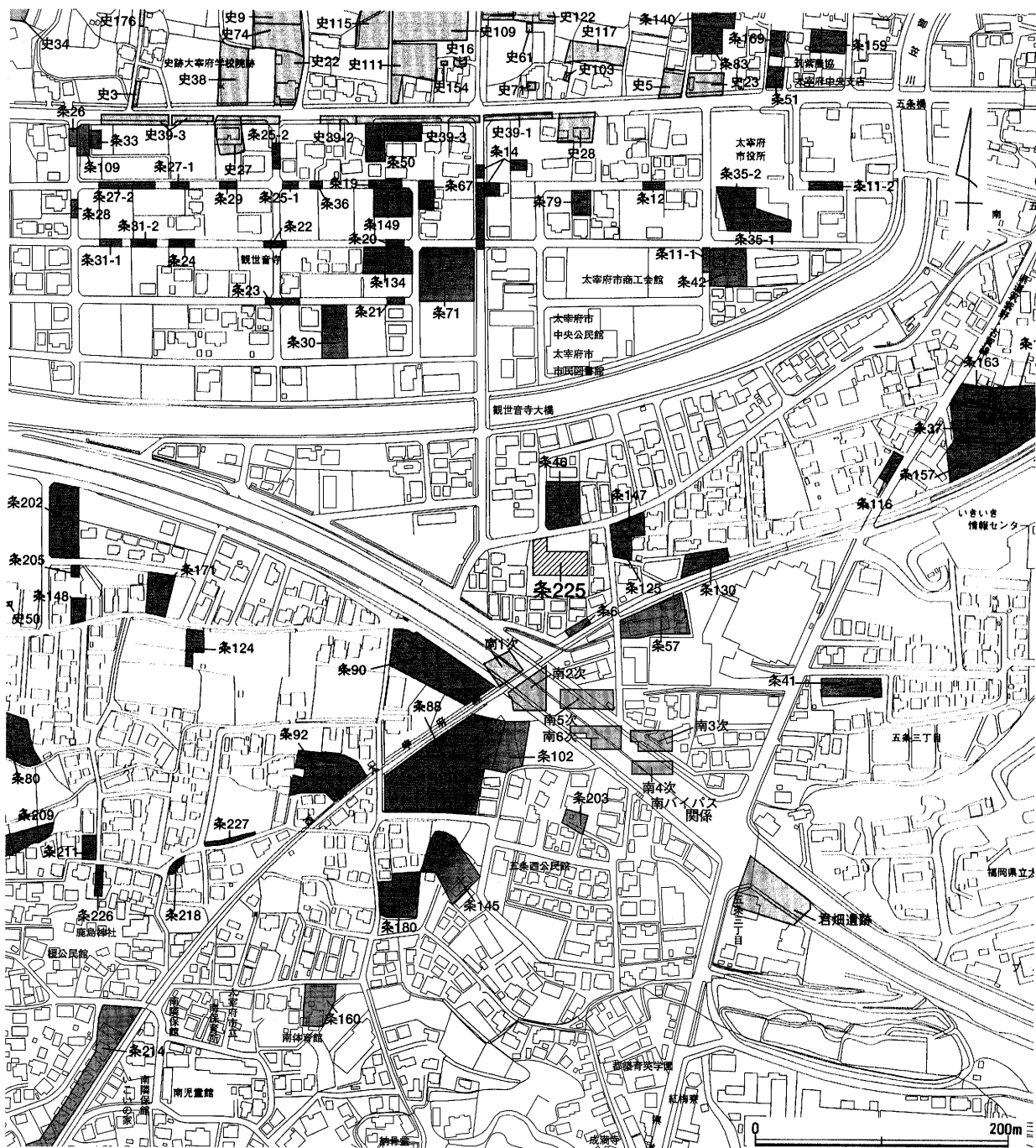
調査整理にあたっては「佐野地区遺跡群Ⅰ」（太宰府市教育委員会 1989『太宰府市の文化財』第14集）、および「太宰府市における埋蔵文化財調査指針」（太宰府市教育委員会 2000年4月作成、2001年9月改正）に準拠した。現地調査では、まず重機を用いて盛土と耕作土を除去し、その後遺構面まで下がった時点で基準点・水準点移動をし、国土座標第Ⅱ座標系に則って、調査区内を3m方眼で網羅する杭打ちを行った。遺構確認は3×3mの発掘区ごとに行い、発見された遺構は遺構番号（S-番号）を付与した後、1/100の遺構略測図に平面形と重複関係、土層堆積状況等を記録して出土遺物と整合性を持たせた。遺構実測図は立面図や個別図、土層断面図その他を1/20で適宜作成し、遺構全体図を1/20で作成した。発見遺構は段階に応じて写真撮影を行い、遺構全体が完掘に至った時点で、調査区全体を上空から写真撮影し記録作業を完了した。

整理作業は、出土遺物の洗浄を行った後、分類を行い台帳に記載し、遺構時期判断の基礎資料とした（巻末「出土遺物一覧表」として収録）。その際、貿易陶磁器については「大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編一」（太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財』第49集）により分類し、その点数を数えた。また、古代国産施釉陶器についても同様に破片数を数えた。土師器坏、小皿、碗などについては、おおむね1/3以上残存し、口径、器高、底径が復原できそうなものを抽出し、台帳に登録（M-番号）した後、計測を行い、遺構時期判断の根拠とした（巻末「土師器計測表」として収録）。実測対象とした遺物には遺物実測番号（R-番号）を付し、台帳化した。今次報告する遺構に関しては、調査時の番号（S-1等）に性格を与えた（SD001等）。



- | | | | |
|------------|------------------|-----------|-------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯遺跡 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遺賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 桶田山遺跡 |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府条坊跡 (破線内) | 23. 雛川遺跡 | 32. 太宰府天満宮 (安楽寺跡) |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 岩畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 浦城跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 原遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. 大宰府条坊跡第225次調査 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前遺跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

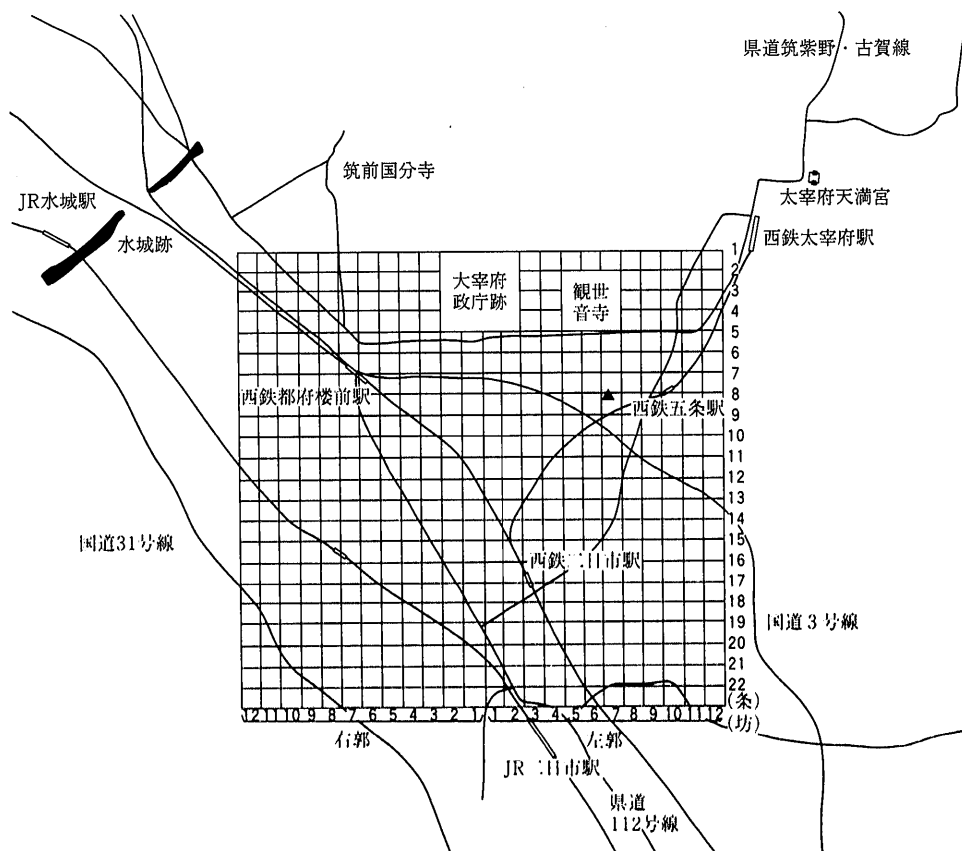
第1図 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)



第2図 報告調査地と周辺遺跡 (1/5,000)

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	6	太宰府市教育委員会 1981 「筑前国分尼寺跡・障ノ尾遺跡―他、歴史時代遺跡調査概要2編―
大宰府条坊跡	11-1	太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	11-2	太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	12	太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	14	太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	19	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	20	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	21	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	22	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	23	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	24	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	25-1	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	25-2	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	26	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	27-1	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	27-2	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	28	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	29	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	30	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	33	未報告
大宰府条坊跡	35-1	未報告
大宰府条坊跡	35-2	未報告
大宰府条坊跡	36	未報告



第3図 調査地点概念図 (1/40,000 条坊は鏡山案 ▲調査地)

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	41	未報告
大宰府条坊跡	42	未報告
大宰府条坊跡	46	未報告
大宰府条坊跡	50	大宰府市教育委員会 1999 「大宰府条坊跡XI 第50次調査」
大宰府条坊跡	57	未報告
大宰府条坊跡	67	未報告
大宰府条坊跡	71	未報告
大宰府条坊跡	79	未報告
大宰府条坊跡	83	未報告
大宰府条坊跡	88	未報告
大宰府条坊跡	90	未報告
大宰府条坊跡	92	未報告
大宰府条坊跡	102	未報告
大宰府条坊跡	109	未報告
大宰府条坊跡	116	未報告
大宰府条坊跡	124	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	125	未報告
大宰府条坊跡	130	未報告
大宰府条坊跡	134	未報告
大宰府条坊跡	140	未報告
大宰府条坊跡	145	未報告
大宰府条坊跡	147	未報告
大宰府条坊跡	149	大宰府市教育委員会 1999 「大宰府条坊跡Ⅱ—大宰府条坊跡第149次調査—」
大宰府条坊跡	157	大宰府市教育委員会 2002 「大宰府条坊跡21—第156・157・158次調査—」
大宰府条坊跡	158	大宰府市教育委員会 2002 「大宰府条坊跡21—第156・157・158次調査—」
大宰府条坊跡	159	未報告
大宰府条坊跡	160	未報告
大宰府条坊跡	163	未報告
大宰府条坊跡	169	未報告
大宰府条坊跡	171	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	180	未報告
大宰府条坊跡	189	未報告
大宰府条坊跡	203	未報告

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	218	未報告
大宰府条坊跡	225	本書掲載
大宰府条坊跡	226	未報告
大宰府条坊跡	227	未報告
大宰府史跡	9	九州歴史資料館 1971 「大宰府史跡—昭和46年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	22	九州歴史資料館 1973 「大宰府史跡—昭和47年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	27	九州歴史資料館 1975 「大宰府史跡—昭和49年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	28	九州歴史資料館 1974 「大宰府史跡—昭和48年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	38	九州歴史資料館 1977 「大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	39-1	九州歴史資料館 1976 「大宰府史跡—昭和50年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	39-2	九州歴史資料館 1977 「大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	39-3	九州歴史資料館 1976 「大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	61	九州歴史資料館 1979 「大宰府史跡—昭和53年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	74	九州歴史資料館 1982 「大宰府史跡—昭和56年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	103	九州歴史資料館 1987 「大宰府史跡—昭和61年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	109	九州歴史資料館 1989 「大宰府史跡—昭和63年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	111	九州歴史資料館 1989 「大宰府史跡—昭和63年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	115	九州歴史資料館 1990 「大宰府史跡—平成元年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	117	九州歴史資料館 1990 「大宰府史跡—平成元年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	122	九州歴史資料館 1993 「大宰府史跡—平成4年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	154	九州歴史資料館 1995 「大宰府史跡—平成6年度発掘調査概報—」
大宰府史跡	176	九州歴史資料館 1998 「大宰府史跡—平成9年度発掘調査概報—」
福岡南バイパス遺跡	1	福岡県教育委員会 1978 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第8集
福岡南バイパス遺跡	2	福岡県教育委員会 1978 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第8集
福岡南バイパス遺跡	3	福岡県教育委員会 1976 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第3集
福岡南バイパス遺跡	4	福岡県教育委員会 1976 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第3集
福岡南バイパス遺跡	5	福岡県教育委員会 1975 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第2集
福岡南バイパス遺跡	6	福岡県教育委員会 1977 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第6集
君畑遺跡		福岡県教育委員会 1977 「福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告」第7集

↑出現、■増加、■減少

2000.2補訂

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上限)		標識磁器	準標識磁器
				灰釉	緑釉		
⑥	700	I	A B				
	725	II					
	750	III					
		IV					
	800	V		猿投0-10 井ヶ谷IG-78	長門?・畿内	白磁I類 越州窯系青磁I, II類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 紋胎
	825	VI	A B	黒笹K-14 篠岡S-4 黒笹K-90	長門・洛北・(洛西)・(黒笹K-14) 洛西 黒笹K-90		
	850	VII					青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器
	900	VIII					
	925	IX		虎溪山1 (折戸0-53)	近江		
	950	X		折戸0-53		越州窯系青磁III類 白磁XI類	
①	1000	XI		東山III-72 (丸472)			
	1050	XII	A B	丸石2 百代寺 東山III-105 篠岡S-1		白磁碗II, III, IV, V-1~3, VI, XII, XIII類 皿II, IV, V, VI, VII類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁O類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁I, II, III類 青白磁
	1100	XIII					白磁鉢III類・碗XIV類
	1150	XIV				龍泉窯系青磁碗I-1~4, 6 皿I類 同安窯系青磁碗I~IV, 皿I類	白磁碗VIII, V-4, 皿III類(増加)
	1200	XV					白磁碗VII, 皿VIII-1類
③	1230	XVI				龍泉窯系青磁碗II-a, b類	白磁皿VIII-2類
	1250	XVII				龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	
	1250	XVIII					龍泉窯系青磁碗II-c類 白磁X類 黒釉陶器
④	1300	XIX				龍泉窯系青磁IV類	
	1330	XX					白磁B, C類 安南鉄絵
⑦	1450						
⑧	1500						

紀年銘資料

- ①A.D. 927 延長5年, 大宰府74次SD205A溝
 ②A.D. 1091 寛治5年, 平安京左京4条1坊SE8井戸
 ③A.D. 1224 貞応3年, 大宰府33次SD605溝
 ④A.D. 1304 嘉元2年, 大宰府109.111次SD3200溝
 ⑤A.D. 1330 元徳2年, 大宰府45次SX1200池
 ⑥A.D. 784 延暦3年, 長岡京102次SD10201溝
 ⑦A.D. 1459・1465 長祿3・寛正5年, 福岡市井相田CII・SG16池
 ⑧A.D. 1501 文龜元年, 大宰府70次SD1805溝
 ⑨A.D. 1265 文永2年, 博多62次713土壙

文献

- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 ⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 ⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ⑨福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

大宰府土器形式と国産陶器・貿易陶磁器編年

V. 調査の概要

1. 層 位

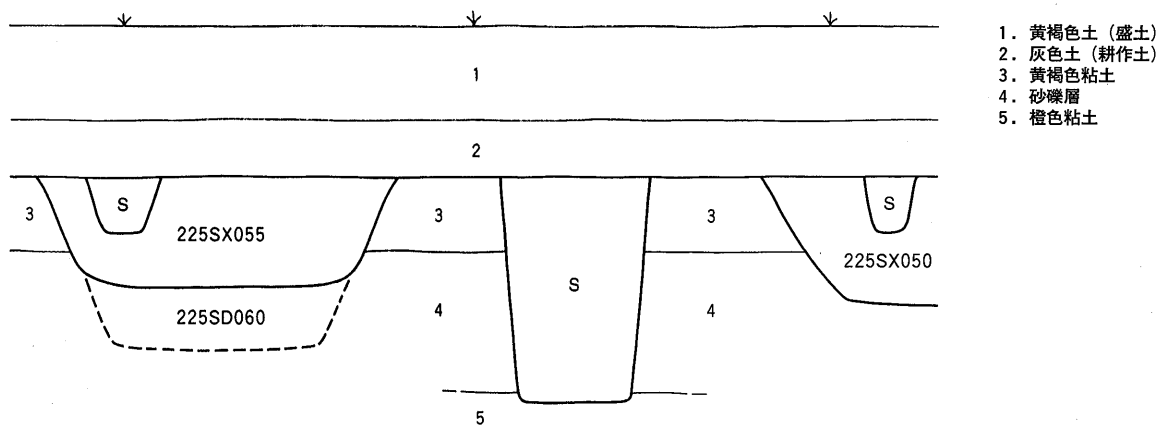
最上層は調査に至る経緯で述べたように近年の盛土である。黄褐色を呈し、層厚は西側で1.3m、東側で1.7mを測る。下層には盛土以前の耕作土である灰色土および暗灰色土が層厚20～25cm程度堆積する。この耕作土を除去した後に遺構面を検出した。

遺構面はほぼ平坦で、標高は約34.5mを測る。検出遺構の基盤層は遺構略測図に示すような平面分布をしており、黄褐色粘土が調査区南側を中心とした広範囲を占めている。黄褐色粘土の遺構面からは縄文時代晩期の土器をごく微量検出しており、本層は該期包含層の可能性がある。調査区北側では砂層が主体的に分布している。また、黄褐色粘土の下層には茶褐色砂、灰色砂礫等の砂礫層が堆積していることが、検出された井戸壁での地山層観察から把握された。

遺構面には自然堆積層に加え、整地層が調査区の東側（225SX055）と西側（225SX050）に分布する。平安時代の形成と考えられ、東側では自然流路（225SD060）を、西側では凹地を埋め立てている。

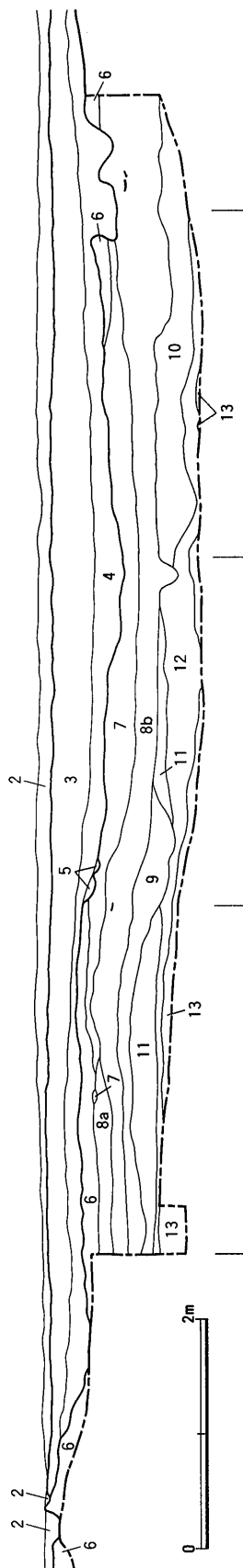
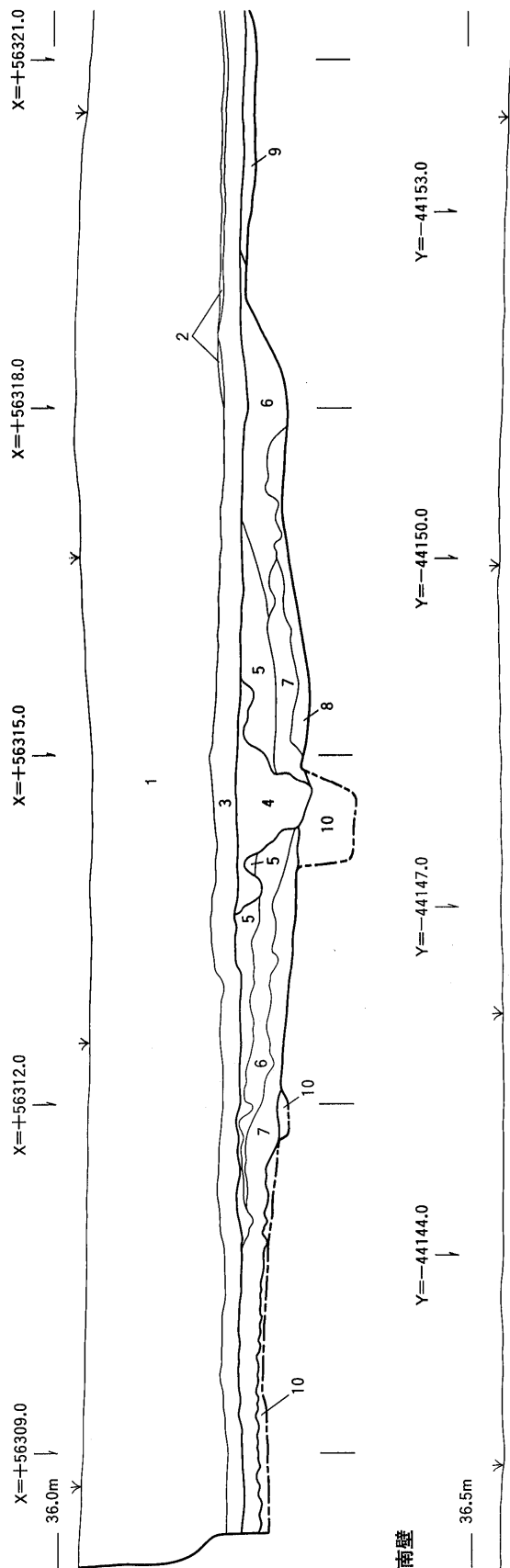
自然流路（225SD060）は最終河床の時期が平安時代前期頃と考えられ、さらに下層の堆積状況をトレンチにより観察した。砂層を主体とする土層は流水性の堆積を示す細かな互層を形成しており、層中からは縄文時代後～晩期および弥生時代中期に比定される土器を検出した。しかしながら部分的な確認にとどまったため、流路の規模や、地山層との層位的関係は不明瞭である。

確認し得た地山の最下層は橙色粘土であるが、調査区東端に位置する井戸225SE020および225SE047の底部付近で確認されたのみで、その広がりや層厚は不明である。層上面の標高は225SE047で31.8mを測る。なお、透水性の低い本層まで掘り込まれた上記の井戸2基は溜井であった可能性がある。



第4図 土層模式図

西壁



- 調査区西壁
1. 黄褐色土 (茶土)
 2. 暗灰色土 (現代耕作土)
 3. 灰色土 (現代耕作土)
 4. 暗灰色土等 (225SE003)
 5. 黒色土 (225SX050)
 6. 黒褐色土 (225SX050) 炭化物含有
 7. 黄褐色土 (225SX050)
 8. 暗灰色土 (225SX050)
 9. 茶褐色砂地山
 10. 黄灰色地山
- 調査区南壁
1. 黄褐色土 (茶土)
 2. 灰色土 (現代耕作土)
 3. 暗褐色土 (225SX055) 炭化物含有
 4. 黒褐色土 (225SX055)
 5. 暗褐色土 (225SX055)
 6. 灰黄色シルト (225SD060)
 7. 暗灰色砂 (225SD060)
 - 8a. 暗黄灰色シルト (225SD060) 炭化物多量含有
 - 8b. 黄灰色シルト (225SD060)
 9. 黒褐色砂礫 (225SD060)
 10. 灰色砂 (225SD060)
 11. 明灰色砂 (225SD060)
 12. 黒色砂 (225SD060)
 13. 灰色砂礫 (225SD060)

第5図 調査区西・南壁面土層図 (1/60)



第6図 大宰府条坊跡第225次調査遺構配置図 (1/150)

2. 遺 構

1) 井 戸

225SE002 (第7図、図版2)

調査区西側B14区で検出。検出面での平面形は円形であるが、北東－南西方向がやや長い。径は1.7m～1.85m、深度は1.8mで、底面標高は32.6mを計測する。井戸枠はやや北東に寄った位置から結物を検出した。円筒形の結物は20枚の樽板からなり、径55.0～60.0cm、残存高50.0cmを計測し、外面下位に幅6.0cmほどの箍の痕跡が1段巡る。また結物の外周から遺存状態の悪い板材を5枚検出したが、腐朽を免れた井戸枠上段結物の下端部と考えられた。

遺構内覆土は模式図のような堆積状況であり、遺構上層（暗灰色土）、井戸枠内（上層から暗灰色粘土・黒褐色粘土）、裏込め（暗灰色砂）に分かれ、遺物は各土層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SE003 (第7図、図版2)

調査区西側C14区で検出。遺構西側が一部調査区外に延びている。他遺構との重複関係では225SE005を切って構築される。検出面での平面形は不整形を呈し、径は2.4m～2.6m、深度は1.7mで、底面標高は32.7mを測る。井戸枠は円筒状を呈するが、枠材は検出されなかった。

灰色土（現代耕作土）に覆われた遺構内覆土は模式図のような堆積状況であり、井戸枠内（上層から暗灰色土・青灰色粘土）、裏込め（暗黄褐色土）に分かれ、遺物は暗灰色土、青灰色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は茶褐色砂であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SE005 (第7図、図版2)

調査区西側C14区で検出。他遺構との重複関係では整地225SX050を切って構築され、西側を225SE003に切られる。検出面での平面形は隅丸方形を基調としており、南北2.5m、深度1.9mで、底面標高は32.5mを計測する。井戸枠は検出した材の在り方から、横板井籠組と類推され、その仕口は各々の板材両端（小口）が凹・凸形に加工されていることから目違い柄組と理解される。横板は長さ1.05m、幅6.0～8.0cm、厚さ3.0cmに復原されるが、裏込め側から圧力を受け、折れ曲がっている。水溜は径60.0～74.0cm、深さ28.0cmを測り、材として朽ちた曲物が検出された。

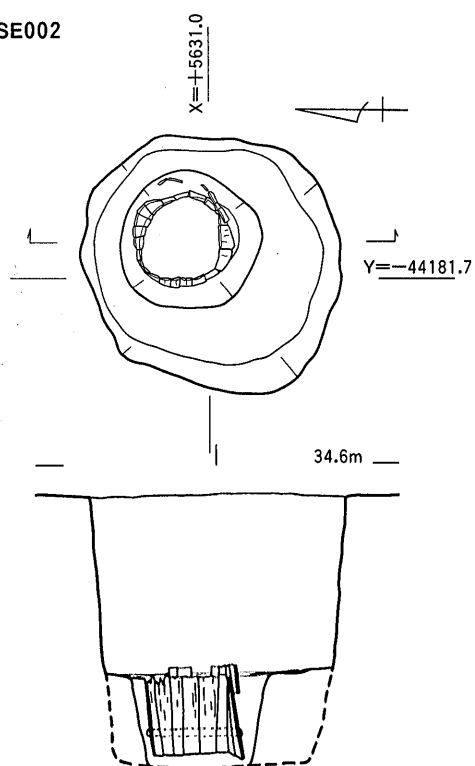
遺構内覆土は模式図のような堆積状況であり、井戸枠内（上層から黒褐色土・明灰色土）、水溜内（黒褐色粘土）、裏込め（暗灰色土）に分かれ、遺物は黒褐色土、黒褐色粘土から出土した。本址は水溜底面で滲み出る程度の僅かな湧水があり、最深部の地山層は茶褐色砂であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、X～XI期（10世紀後半～11世紀中頃）頃に埋没したものと考えられる。

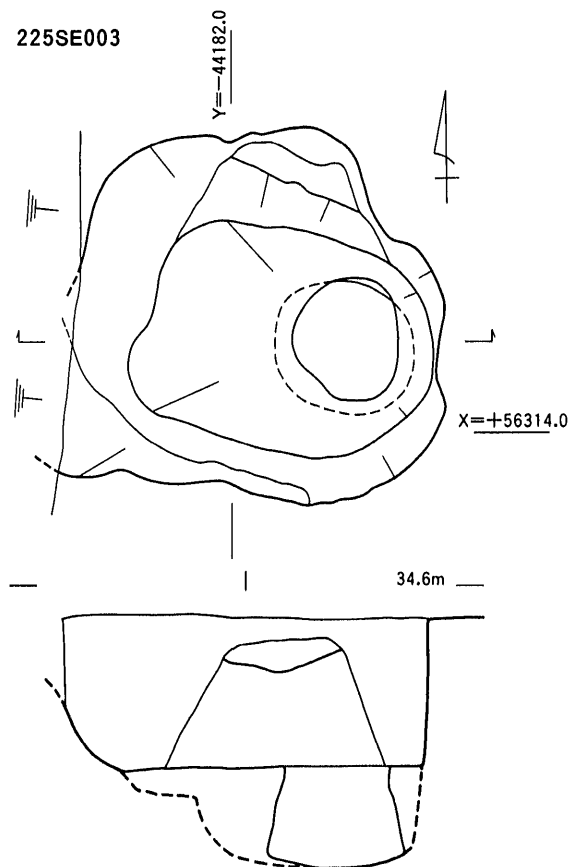
225SE006 (第8図、図版3)

C11区で検出。他遺構との重複関係では225SK007を切って構築される。検出面での平面形はやや東西に長い楕円形を呈し、南北2.55m、東西2.9m、深度は1.85mで、底面標高は32.7mを測る。井戸枠

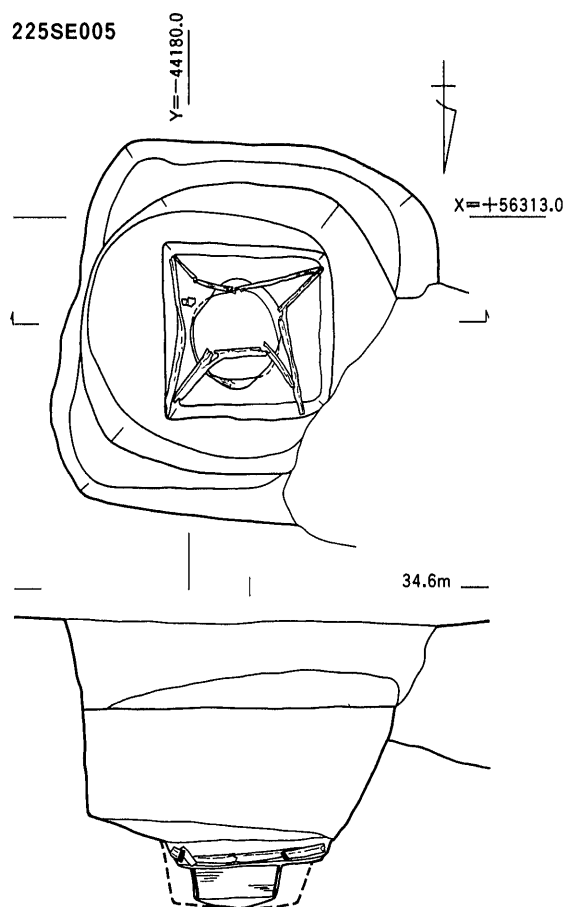
225SE002



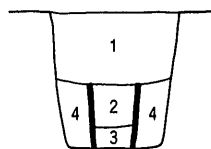
225SE003



225SE005

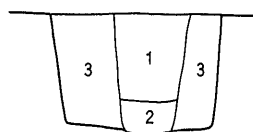


225SE002



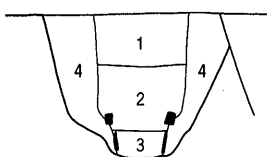
225SE002
1. 暗灰色土
2. 暗灰色粘土
3. 黑褐色粘土
4. 暗灰色砂

225SE003

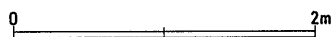


225SE003
1. 暗灰色土
2. 青灰色粘土
3. 暗黄褐色土

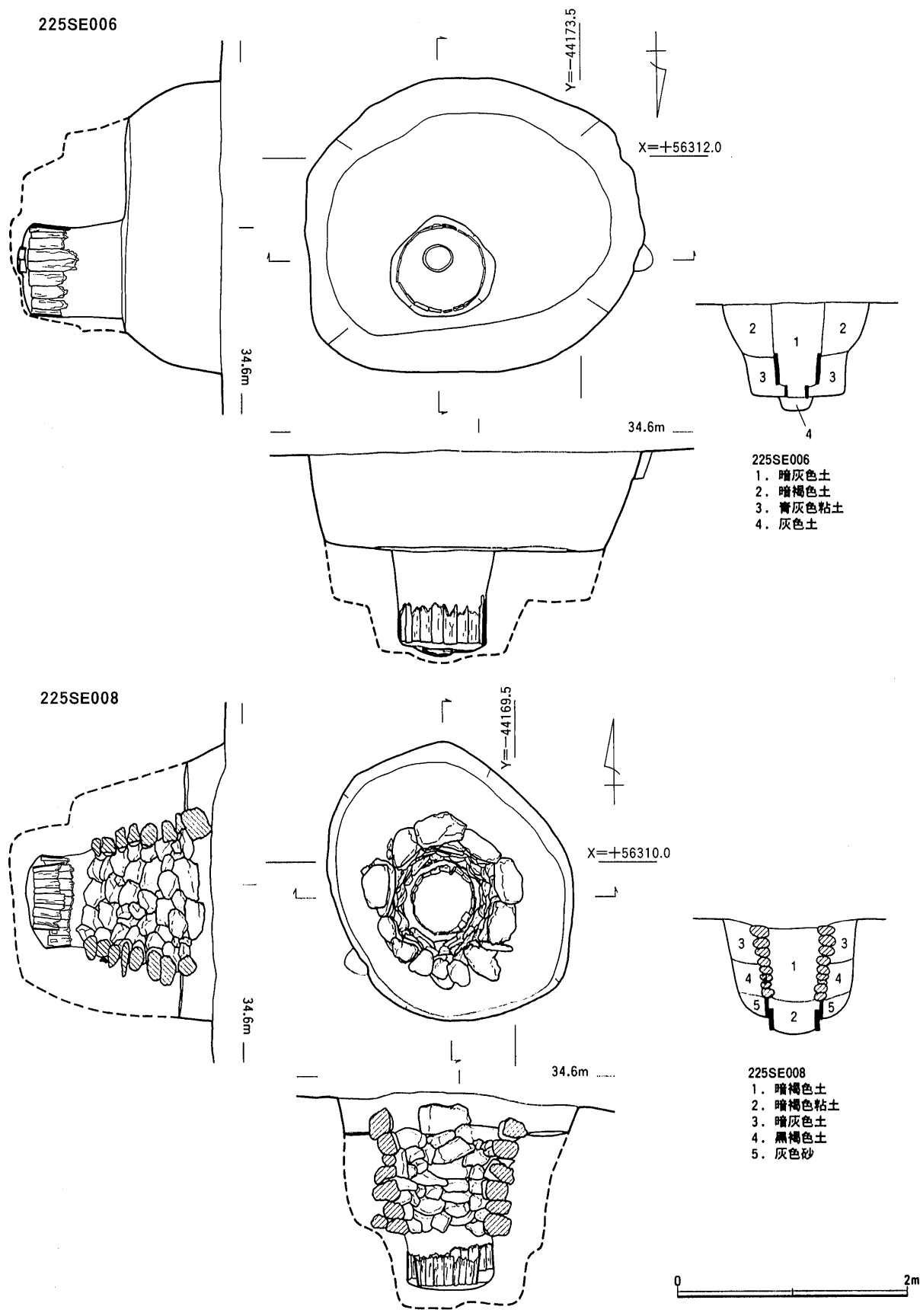
225SE005



225SE005
1. 黑褐色土
2. 明灰色土
3. 黑褐色粘土
4. 暗灰色土



第7図 225SE002・003・005実測図 (1/50)



第 8 图 225SE006 · 008 实测图 (1/50)

は北側に寄った位置から検出した。杵材は円筒形の結物で21枚の樽板からなり、径77.0cm、残存高43.0cmを測る。水溜には径20.0cm、高さ6.0cmの小振りの曲物を据える。

遺構内覆土は、遺構上層～井戸杵・水溜内（暗灰色土）、裏込め（上層から暗褐色土・青灰色粘土・灰色土）に分かれ、遺物は暗灰色土、暗褐色土、青灰色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の最終埋没と考えられる。

225SE008（第8図、図版3）

B10区で検出。他遺構との重複関係では225SE009、225SE010を切って構築される。検出面での平面形はやや歪んだ円形を呈し、南北2.95m、東西2.0m、深度は1.87mで、底面標高は32.7mを測る。

井戸杵は上部構造の石組と下部構造の結物で構成される。石組は拳大から長径50.0cmの花崗岩を用い、勾配を持たせながら積み上げるが、石材の大小や積み石方向に規則性は見出せず、雑な構築方法を採用。石組の開口部は径0.92～1.0m、最下段で径0.66～0.7cm、深さは検出面から1.2mを測る。

下部構造の結物は2段が残存していた。上段結物は下段結物の外周を巡る。樽板26枚からなり、径75.0～80.0cm、残存高25.0cmを計測する。樽板には下端部に方形の柄穴を穿つものが8枚認められた。下段は樽板21で構成され、径55.0～60.0cm、残存高29.0cmを計測する。

遺構内覆土は、石組井戸杵内（暗褐色土）、結物井戸杵内（暗褐色粘土）、裏込め（上層から暗灰色土・黒褐色土・灰色砂）に分かれ、遺物は灰色砂を除く各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は茶褐色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物から、G期（XIX期～、14世紀初～後半）以降に埋没したものと考えられる。

225SE009（第9図、図版4）

B10区で検出。他遺構との重複関係では225SE008に南側を切られる。検出面での平面形は隅丸方形を基調とし、東西2.35m、南北2.6m、深度2.0m、底面標高は約32.6mを計測する。井戸杵は径52.0cmの円形を呈し、結物と類推される板材が14枚認められたが、腐朽が著しいうえに井戸杵を全周していなかった。水溜には径40.0cm、残存高20.0cmの曲物を据えており、井戸杵との間隙には拳大の花崗岩が隙間なく詰められていた。

遺構内覆土は、遺構上層（明灰色土）、井戸杵内（上層から黄褐色土・黒褐色粘土）、水溜内（上層から灰色砂・灰色粘土）、裏込め（暗灰色砂）に分かれ、遺物は明灰色土、黒褐色粘土、灰色砂、灰色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は茶褐色砂礫であった。

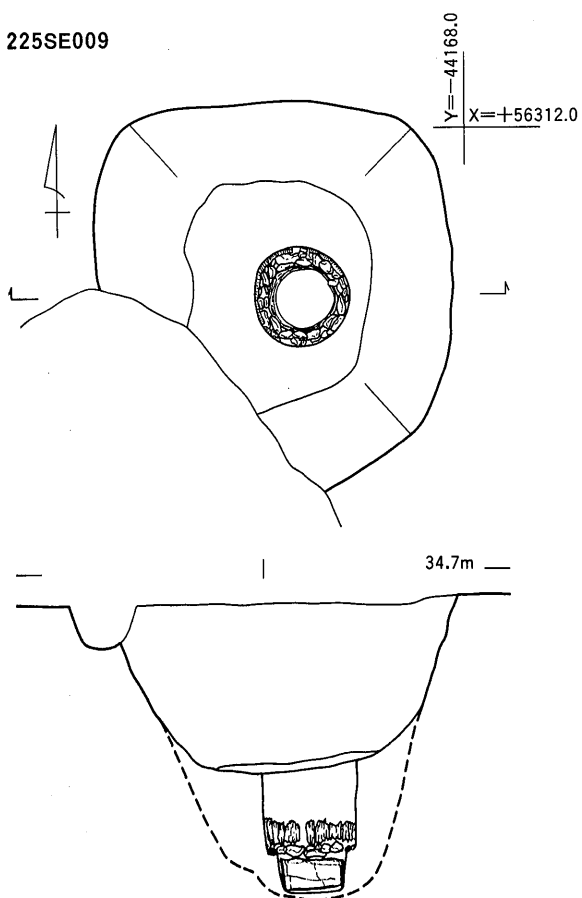
本址の時期は、出土遺物の様相から、XIX期（14世紀初頭）前後の埋没と考えられる。

225SE010（第9図、図版4）

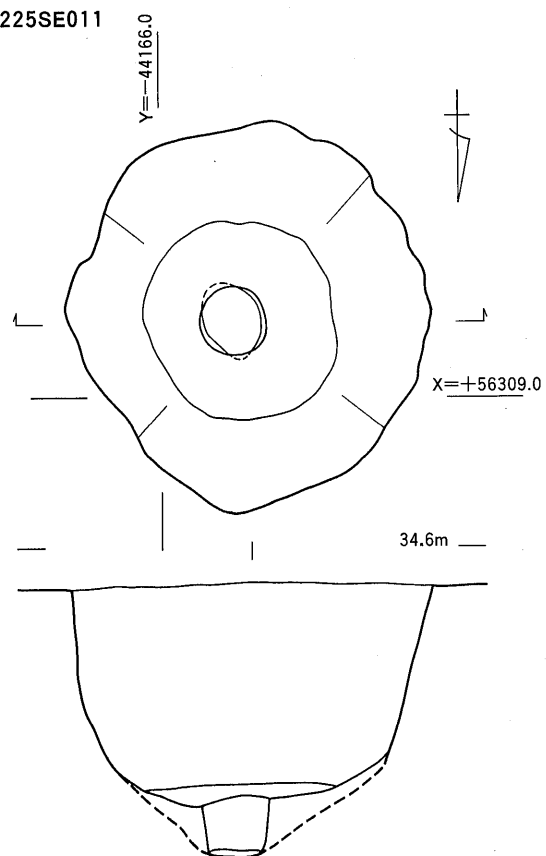
A10区で検出。他遺構との重複関係では225SE008に北側を切られる。検出面での平面形は円形を呈していたと解され、東西1.65m、深度1.8mで、底面標高は32.8mを計測する。検出面から約0.9m掘り下げた時点で、人頭大の花崗岩を円形に敷き並べた施設が1段検出され、石組井戸杵の残存と推測された。開口部は40.0～45.0cmを測り、下層からは結物と類推される腐朽著しい板材14枚と、ほとんど朽ちた曲物を確認した。板材は全周していないが井戸杵材、曲物は水溜と推定した。

遺構内覆土は、遺構上層（黒褐色土）、井戸杵内～水溜（黒褐色粘土）、裏込め（灰色土）に分かれ、

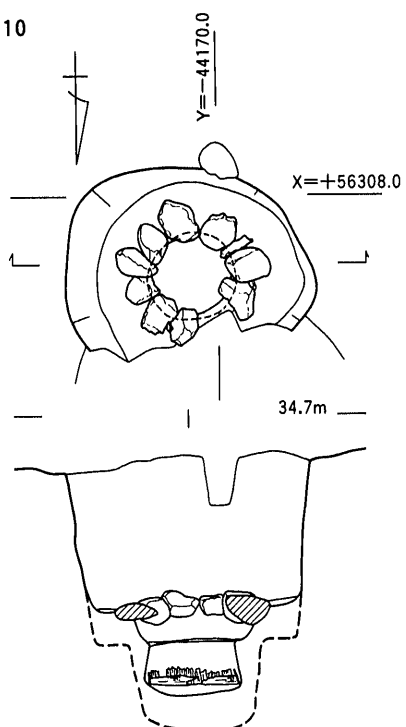
225SE009



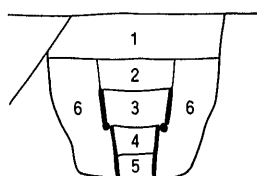
225SE011



225SE010

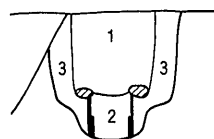


225SE009



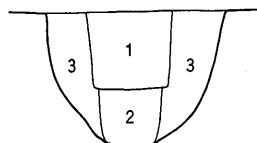
- 225SE009
1. 明灰色土
 2. 黄褐色土
 3. 黑褐色粘土
 4. 灰色砂
 5. 灰色粘土
 6. 暗灰色砂

225SE010



- 225SE010
1. 黑褐色土
 2. 黑褐色粘土
 3. 灰色土

225SE011



- 225SE011
1. 暗褐色土
 2. 黄色粘土
 3. 暗黄褐色土

0 2m

第9図 225SE009・010・011実測図 (1/50)

黒褐色粘土中には人頭大の花崗岩を含有していた。また、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は茶褐色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、D期（XIV～XV期、12世紀中頃～後半）の埋没と考えられる。

225SE011（第9図、図版4）

A9区で検出。検出面での平面形は円形を呈し、東西2.45m、南北2.6m、深度は1.78mで、底面標高は32.5mを計測する。検出面から約1.4m掘り下げたところで径42.0～45.0cmの円筒状を呈する井戸枿を確認した。枿材は検出されなかった。

遺構内覆土は遺構上層（暗褐色土）、井戸枿内（黄色粘土）、裏込め（暗黄褐色土）に分かれ、遺物は暗褐色土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期については、出土遺物中に同安窯系青磁碗および、底部ヘラ切りと糸切りの土師器坏aが観察されたことから（出土遺物一覧表参照）、D期（XIV～XV期、12世紀中頃～後半）頃の埋没と考えられる。

225SE014（第10図、図版5）

A6区を中心に検出。遺構南側が調査区外に延びている。他遺構との重複関係では225SE017を切って構築される。検出面での平面形は円形基調と解され、東西3.25m、深度2.1m、底面標高は32.7mを計測する。円形を呈する井戸枿は南東側に寄っており、検出面下1.1mで確認した。枿材は樽板24枚からなる結物で径65.0～70.0cm、残存高は最大38.0cmを測り、外面には幅2.0cm程度の箍の痕跡が観察された。

遺構内覆土は井戸枿内（上層から茶色土・灰色土）、裏込め（暗灰色土）に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SE015（第10図、図版5）

B7区で検出。他遺構との重複関係では225SK012に切られ、225SD029、225SD030を切って構築される。検出面での平面形は円形を呈し、径2.15～2.4m、深度は1.8mで、底面標高は32.6mを計測する。井戸枿は確認されなかった。検出面下約1.4mで確認された径0.85～1.05m、深さ0.45mの円形を呈する掘り込みは、水溜の掘り方と考えられる。

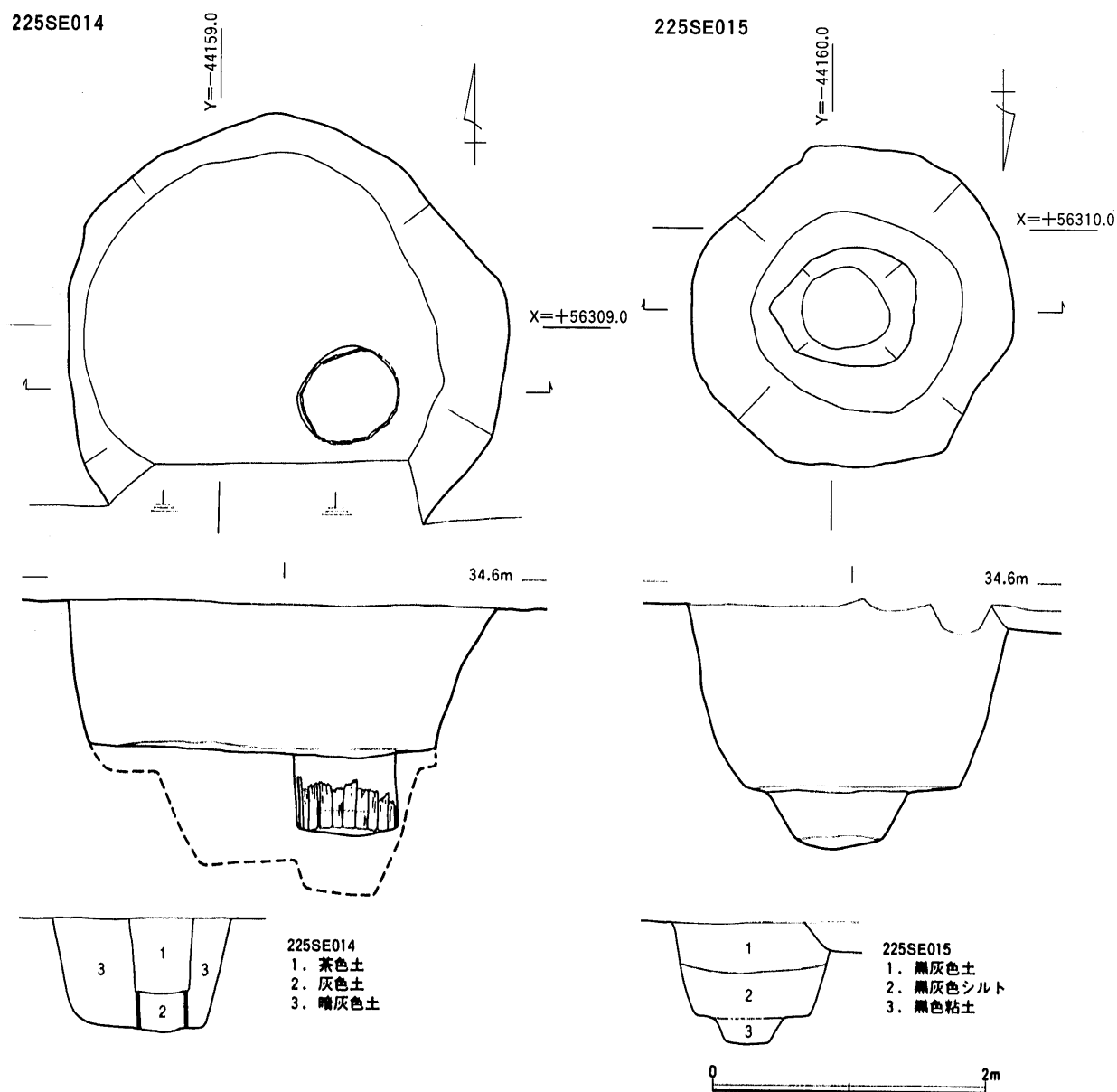
遺構内覆土は上層から黒灰色土、黒灰色シルト、黒色粘土に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、XI～XII期（11世紀中頃～後半）の埋没と考えられる。

225SE017（第11図、図版5）

B5・6区で検出。他遺構との重複関係では225SE014に南西を切られる。検出面での平面形は円形基調であるがやや歪む。径は東西3.35m、南北3.3m、深度は1.9mで、底面標高は約32.8mを測る。円形を呈する井戸枿はやや南西側に寄っており、検出面下約1.2mで確認した。枿材は検出されなかった。

遺構内覆土は遺構上層（暗灰色土）、井戸枿内（上層から暗灰色粘土・灰色砂）、裏込め（暗灰色砂）に分かれ、遺物は暗灰色砂を除く各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。



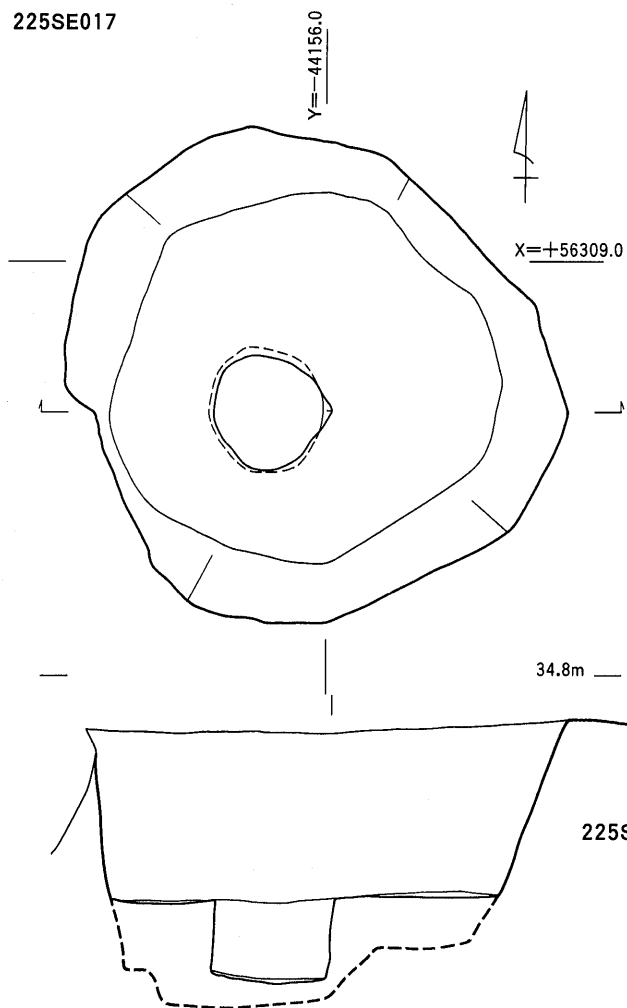
第10図 225SE014・015実測図 (1/50)

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

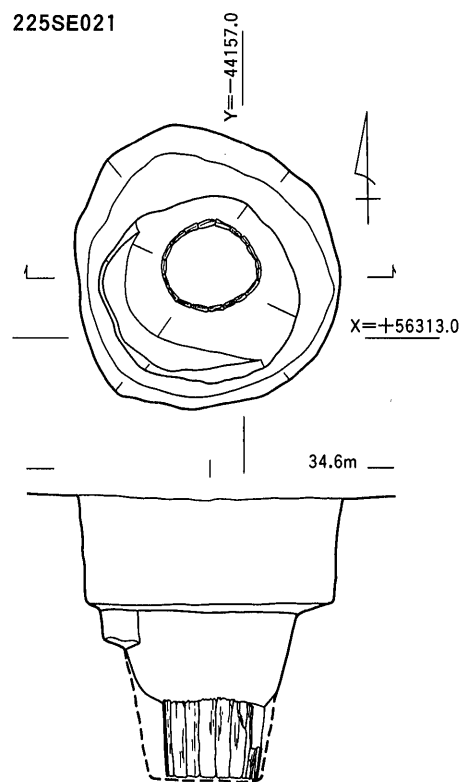
225SE020（第12図、図版6）

調査区東端のD1区で検出。他遺構との重複関係では225SE052を切って構築される。検出面での平面形は円形を呈する。径は2.8m、南北3.0m、深度は検出面から2.1mで、底面標高は32.5mを計測する。井戸枠は石組で、平面プランの南西側に寄った位置に構築される。開口部径は0.95～1.0m、最下段で径0.5～0.6m、深さは最上段から最大1.75mを測り、拳大から長径40.0cm程度の花崗岩を用いて乱石積みされるが、稚拙な構築のためか南東側や北側が孕んでいる。水溜には径43.0～45.0cm、残存高16.0～20.0cmの曲物を据える。

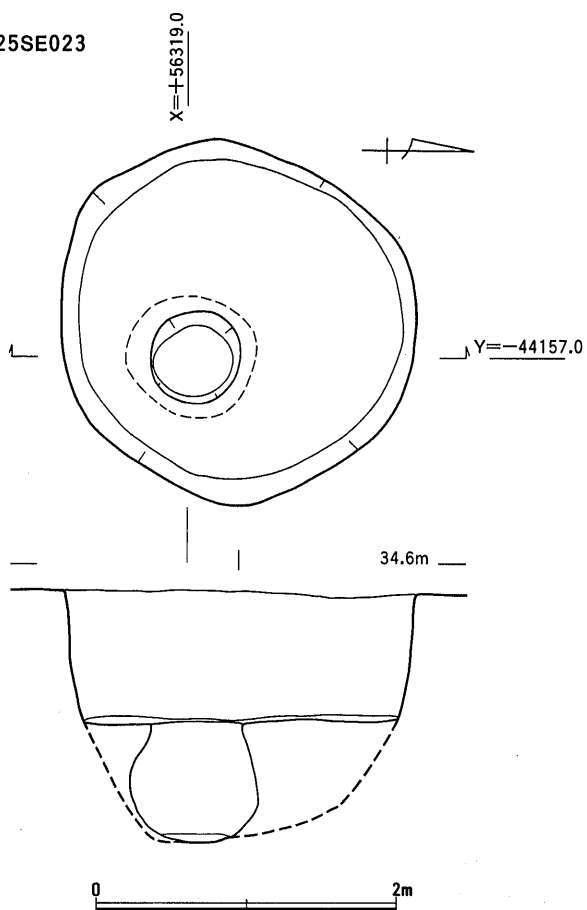
225SE017



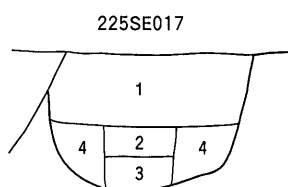
225SE021



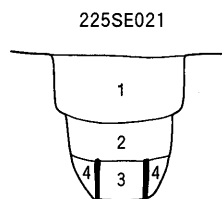
225SE023



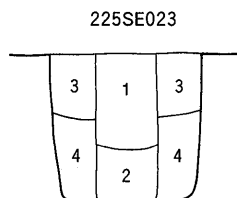
225SE017
1. 暗灰色土
2. 暗灰色粘土
3. 灰色砂
4. 暗灰色砂



225SE021
1. 暗灰色土
2. 黄灰色土
3. 灰色粘土
4. 灰色砂

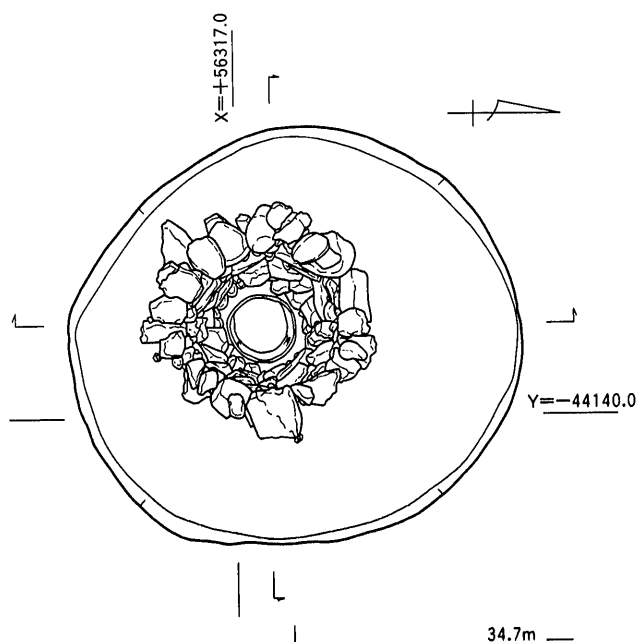
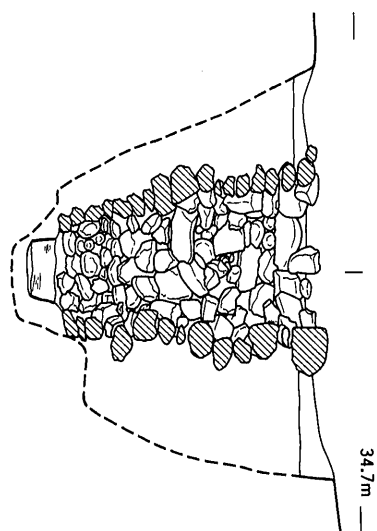


225SE023
1. 黑褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗灰色土
4. 灰色砂



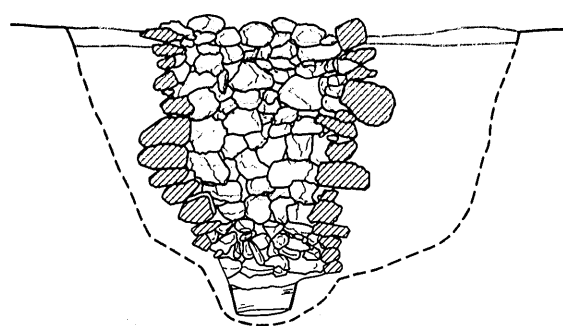
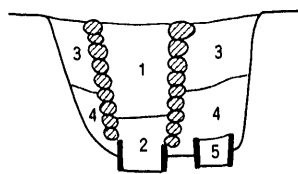
第11図 225SE017・021・023実測図 (1/50)

225SE020新

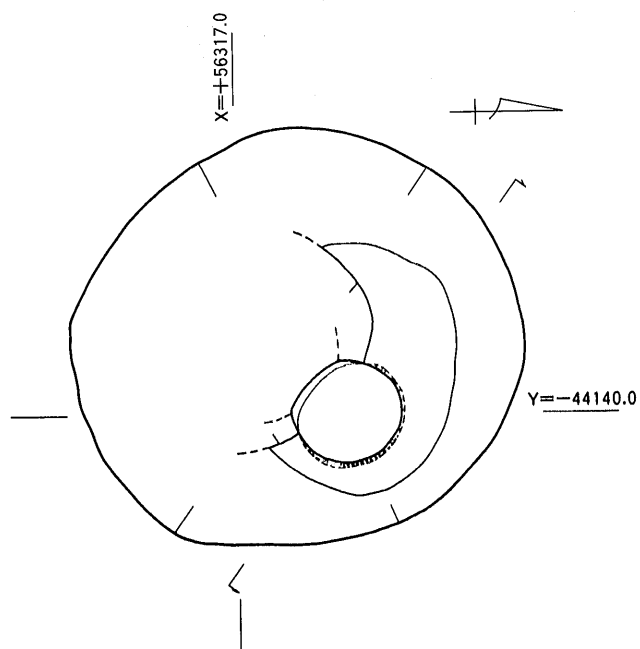
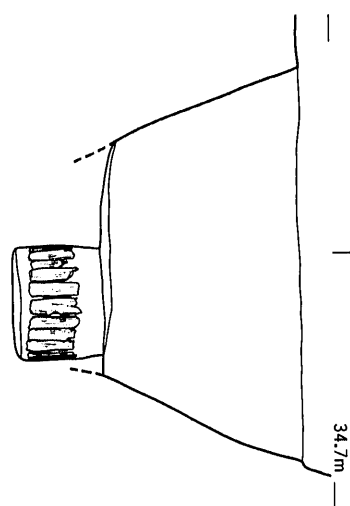


225SE020

1. 茶色土
2. 灰色土
3. 暗褐色土
4. 暗灰色土
5. 黑褐色粘土



225SE020旧



第12図 225SE020実測図 (1/50)

裏込め土掘り下げ時に黒褐色の円形プランを確認面下約1.3mで検出した。検出した旧井戸枠は径70cm、深さ60cmの円筒状を呈し、枠材は腐朽の著しい板材を13枚確認し結物と考えられた。旧井戸底面の標高は32.6mを測る。

遺構内覆土は、石組井戸枠～水溜内（上層から茶色土・灰色土）、裏込め（暗褐色土・暗灰色土）、旧井戸枠内（黒褐色粘土）に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水しなかった。なお、最深部の地山層は透水性の低い橙色粘土であり、本址は溜井であった可能性がある。

本址の時期は、出土遺物の様相から、旧井戸がD期（XIV～XV期、12世紀中頃～後半）頃埋没、井戸再構築はF期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃、最終埋没はG期（14世紀初頭～後半）と考えられる。

225SE021（第11図、図版6）

調査区の中央やや東側C6区から単独の検出。検出面での平面形はほぼ円形を呈し、径は東西1.75m、南北1.9m、深度は検出面から1.88mで、底面標高は32.5mを計測する。確認面下約1.35mで円形の井戸枠を確認した、枠材は桹板19枚からなる結物で、径60.0～66.0cm、残存高最大53.0cmを測る。

遺構内覆土は、遺構上層（上層から暗灰色土・黄灰色土）、井戸枠内（灰色粘土）、裏込め（灰色砂）に分かれ、遺物は灰色砂を除いて各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、C期（XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半）頃の埋没と考えられる。

225SE022（第13図、図版7）

調査区東端A・B1区での検出。遺構東側が調査区外へと延びており、全容は明らかでない。他遺構との重複関係では225SE047、225SE034、225SE033および225SK032を切って構築される。検出面での平面形は円形を基調とするが歪んでいる。最大径は南東方向で4.4m、深度は1.95mで、底面標高は32.6mを計測する。井戸枠は平面プラン北側に寄った位置の検出面下約1.3mから検出された。円筒状を呈するとみられ、径は南北63.0cmを測る。枠材は結物と推定される6枚の板が北側から出土した。板の残存高は最大74.0cmを測る。

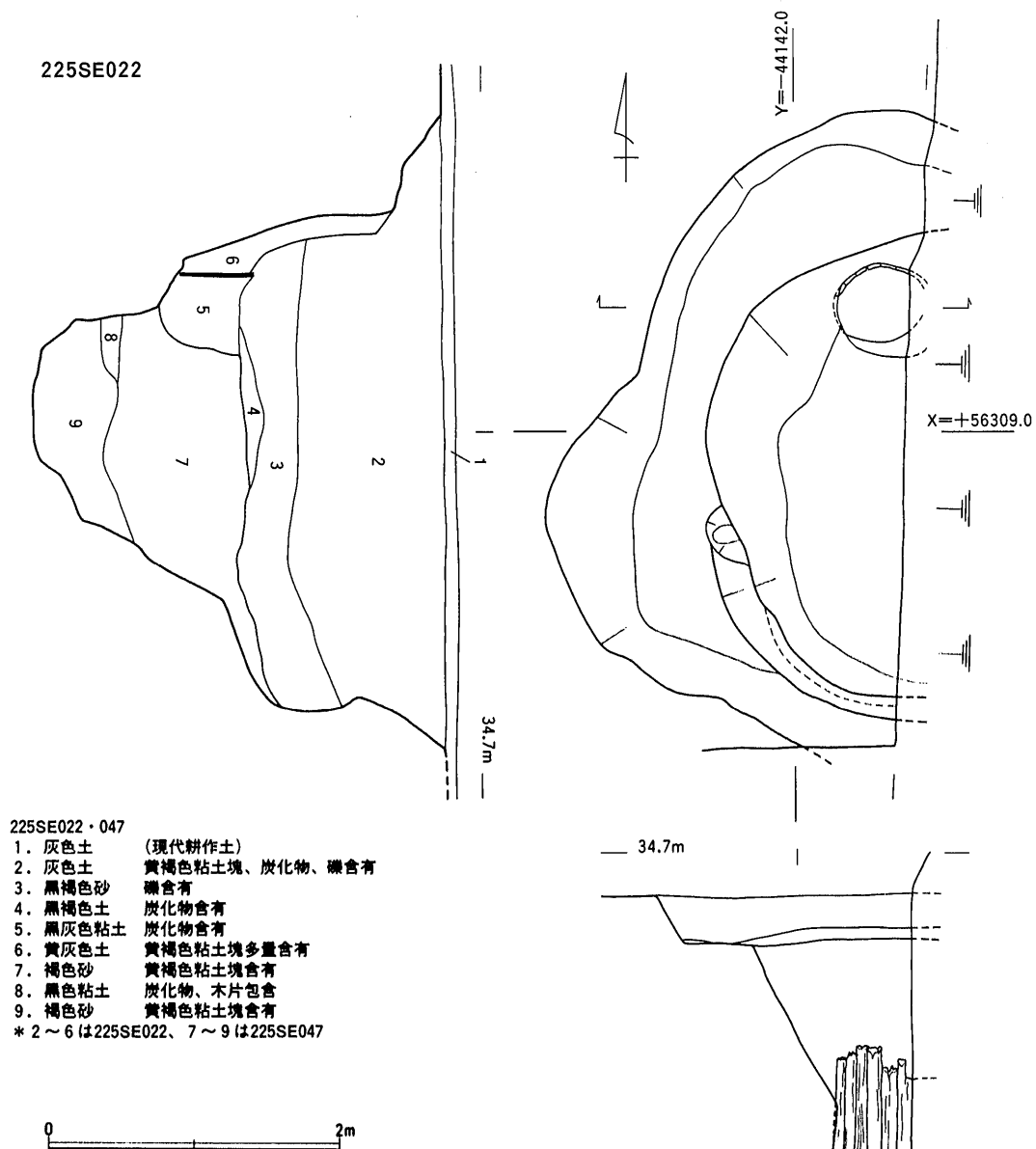
遺構内覆土は、灰色土（現代耕作土）に覆われており、遺構上層（上層から灰色土・黒褐色砂・黒褐色土）、井戸枠内（黒灰色粘土）、裏込め（黄灰色土）に分かれ、遺物は灰色土、黒褐色砂、黒灰色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は茶色砂であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SE023（第11図、図版7）

調査区中央部北側E6区で検出。他遺構との重複関係では225SE031を切って構築される。検出面での平面形は円形を呈し東西2.35m、南北2.4m、深度は1.65mで、底面標高は約32.8mを測る。井戸枠は南東側に寄った位置から検出された。平面形は円形を呈するが下半ではオーバーハングが著しく、径60.0～85.0cmを測る。枠材は検出されなかった。

遺構内覆土は、井戸枠内（上層から黒褐色土・暗褐色土）、裏込め（上層から暗灰色土・灰色砂）に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘まで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。



第13図 225SE022実測図 (1/50)

本址の時期は、出土遺物の様相から、C期（XIV～XV期、11世紀後半～12世紀前半）頃の構築、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SE025（第14図、図版7）

調査区北西側H14区から単独の検出。検出面での平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、南北2.2m、東西1.75m、深度2.05mで、底面標高は32.6mを測る。井戸枠は検出面下1.65mで検出し、材の遺存状態は悪いものの、方形縦板組横棧の形態を採っていることが理解された。規模は一辺63.0cm、縦板の残存高は最大18.0cmを測る。

遺構内覆土は、遺構上層（暗褐色土）、井戸枠内（灰色土）、裏込め（茶色砂）に分かれ、遺物は暗褐色土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、Ⅸ期（10世紀中頃）の埋没と考えられる。

225SE031（第14図、図版8）

調査区中央部北側E7区から検出。他遺構との重複関係では225SE023に切られる。検出面での平面形は円形基調とみられる。南北2.3m、深度は1.9mで、底面標高は約32.6mを計測する。検出面下約0.7mで方形の掘り方を検出、同じく地表面下約1.5mで方形の井戸枳を検出したが、枳材は検出されなかった。ただし井戸枳底面の西辺には長さ48.0cmの杭が打ち込まれており、枳材の一部と類推される。

遺構内覆土は、上層から黒褐色土・灰色土に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰白色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、Ⅹ期（10世紀後半～11世紀前半）頃の埋没と考えられる。

225SE033（第6図、図版8）

調査区東端B1区で検出。他遺構との重複関係では225SE022に遺構東側を切られ、225SE034を切って構築される。検出面での平面形は円形を呈し、径は南北で2.05m、深度は1.87mで、底面標高は32.6mを計測する。井戸枳は検出面下1.5mで検出され、径70.0cmの円形を呈する。深度は35.0cmを測る。枳材は検出されなかった。

遺構内覆土は、上層から暗褐色土・茶色砂・暗灰色土に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、ⅩⅢ～ⅩⅣ期（12世紀前半～中頃）の埋没と考えられる。

225SE034（第14図、図版8）

調査区東側のB1区で検出。他遺構との重複関係では225SE022、225SE033に切られる。検出面での平面形は円形を基調とするがやや歪んでおり、径は東西で2.3m、深度は1.85mで、底面標高は32.7mを計測する。井戸枳は腐朽が著しいが、1辺80.0cmほどの方形縦板組隅柱の形態を採ることが理解され、その内側には径70.0～80.0cm、残存高最大25.0cmの丸太削り抜き材を水溜として据える。

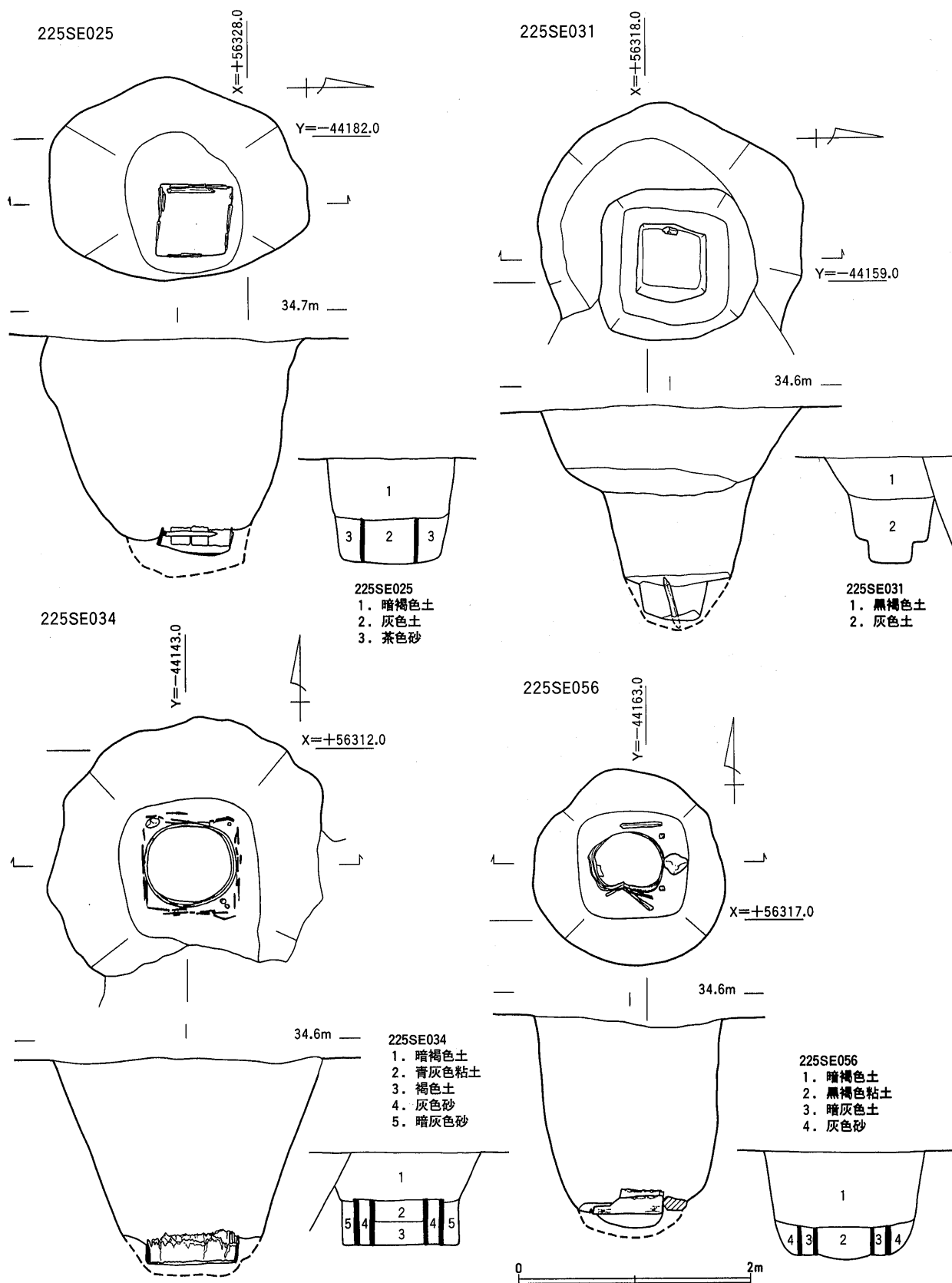
遺構内覆土は、遺構上層（暗褐色土）、井戸枳内（上層から青灰色粘土・褐色土）、裏込め（内側から灰色砂・暗灰色砂）に分かれ、遺物は暗褐色土、青灰色粘土、褐色土および灰色砂から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、Ⅶ期（9世紀後半）の埋没と考えられる。

225SE036（第15図、図版9）

調査区東側C・D1・2区から検出された。検出面での平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、径は東西3.6m、南北4.4m、深度は2.8mで、底面標高は32.6mを計測する。井戸枳は検出面下約2.4mで発見された長辺横板短辺縦板組で縦板は内側から横棧で支持されるが、南側は土圧を受けて材が内側に倒れ込んでいる。長辺1.3m、短辺1.15mを測る。

井戸枳は模式図に掲げた木組法を採る。東側と西側には両端部に方形の枳穴を穿った横板を立て、これに両端凸形の枳を造り出した角材を組み合わせて横棧にし、外側には縦板を4枚ずつ立て並べる。縦板の合目には裏側から薄板をあてがうことで水密性を高めている。各部材寸法は、横板が長さ1.3m、厚さ2.0～3.0cm、幅28.0cm、枳穴は6.0cm角、横棧は長さ1.25m、5.0cm角、縦板が幅22.0～32.0cm、厚さ2.0～3.0cmを測る。枳材の据え付けに際しては裏込め土とともに拳大の礫（花崗岩）を用いて固定を



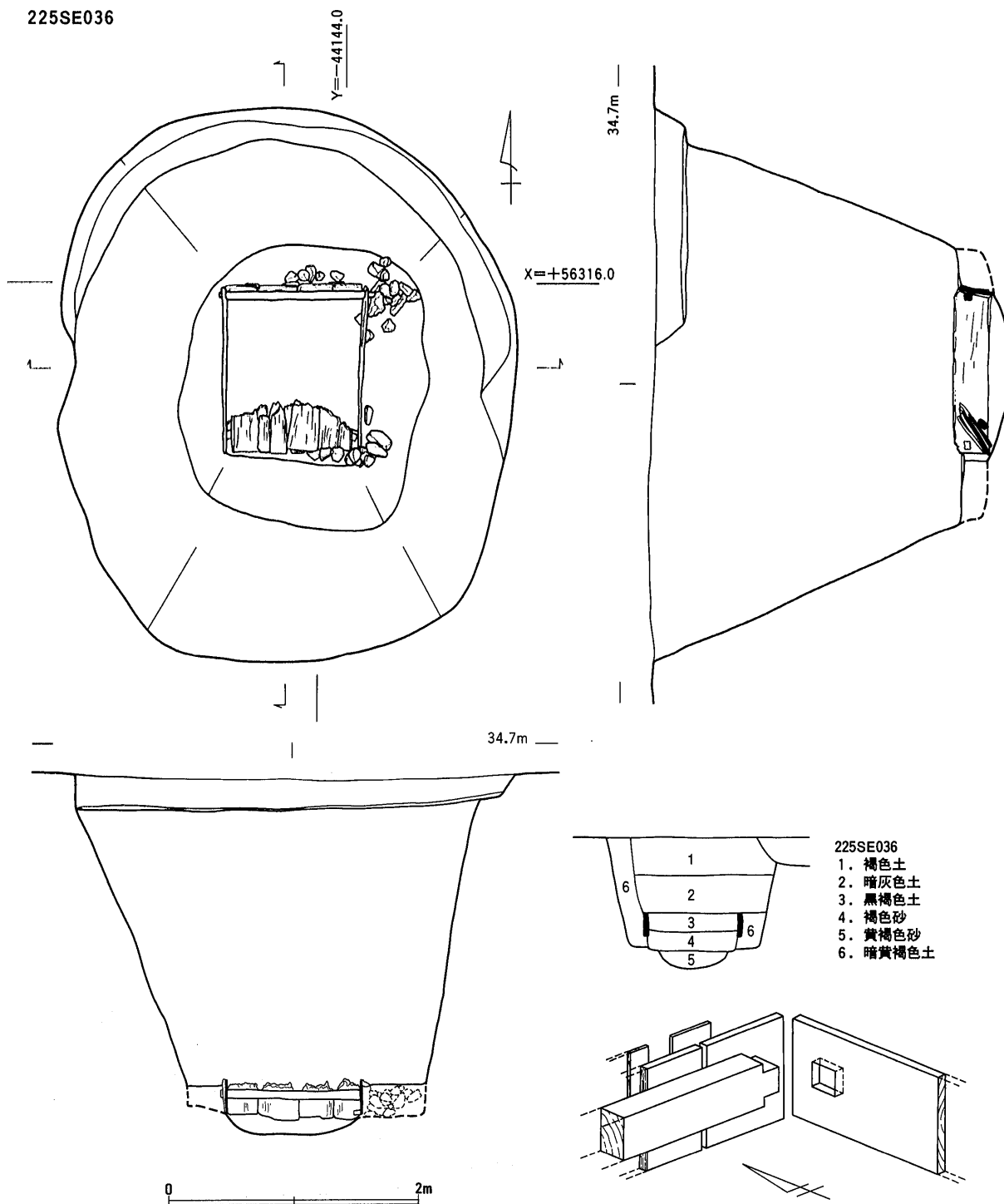
第14図 225SE025・031・034・056実測図 (1/50)

図ったものと推測され、北東および南西隅部を中心に礫集積がみられた。

遺構内覆土は、遺構上層（上層から褐色土・暗灰色土）、井戸枠内（上層から黒褐色土・褐色砂、黄褐色砂）、裏込め（暗黄褐色土）に分かれ、遺物は各層から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、Ⅷ期（9世紀後半～10世紀前半）頃の埋没と考えられる。

225SE036



第15図 225SE036実測図 (1/50)

225SE047 (第6・13図)

調査区東端のA・B1区から検出。225SE022の下層から検出されたもので、遺構東側は調査区外に延び全容は不明である。遺構上面での平面形は不整形を呈し、南北3.2m、深度は1.2mで底面標高は31.6mを測る。井戸枠は円形と推定されるが枠材は検出されなかった。

遺構内覆土は、第13図土層断面に図示したように上層から褐色砂、黒色粘土、褐色砂に分かれ、遺物は黒色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は透水性の低い橙色粘土であり、本址は溜井であった可能性がある。

本址の時期は、出土遺物から、E期(XVI～XVII期、13世紀前後～前半)頃の埋没と考えられる。

225SE052 (第6図)

調査区東端のD1区から検出。調査区際での部分的な検出であったため遺構の全容解明には至らなかったが、検出面下約1.0mまで調査を行い、円形を呈する井戸と類推した。他遺構との重複関係では遺構北側を225SE020に切られる。

遺構内覆土は、上層から暗褐色土、褐色砂、暗灰色土が堆積しており、遺物は各層から出土した。本址は調査終了に至るまで湧水はなかった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、D期(XIV～XV期、12世紀中頃～後半)頃の埋没と考えられる。

225SE056 (第14図、図版10)

調査区中央部北側のD8区から検出した。他遺構との重複関係は無く、単独の検出。検出面での平面形は円形を呈し、径は東西1.65m、南北1.7m、深度は1.9mで、底面標高は32.6mを計測する。検出面下1.5mで井戸枠を検出した。枠材は南側から土圧を受けた上に、腐朽が進んでおり遺存状態が悪いが、方形横板組隅柱と考えられる。水溜は径が東西60.0cm、南北45.0cm、残存高最大15.0cmを測る曲物であるが、同様に土圧を受け歪んでいる。

遺構内覆土は、遺構上層(暗褐色土)、水溜内(黒褐色粘土)、水溜裏込め(暗灰色土)、裏込め(灰色砂)に分かれ、遺物は暗褐色土、黒褐色粘土から出土した。本址は完掘に至るまで湧水せず、最深部の地山層は灰色砂礫であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、Ⅷ～Ⅸ期(9世紀後半～10世紀中頃)の埋没と考えられる。

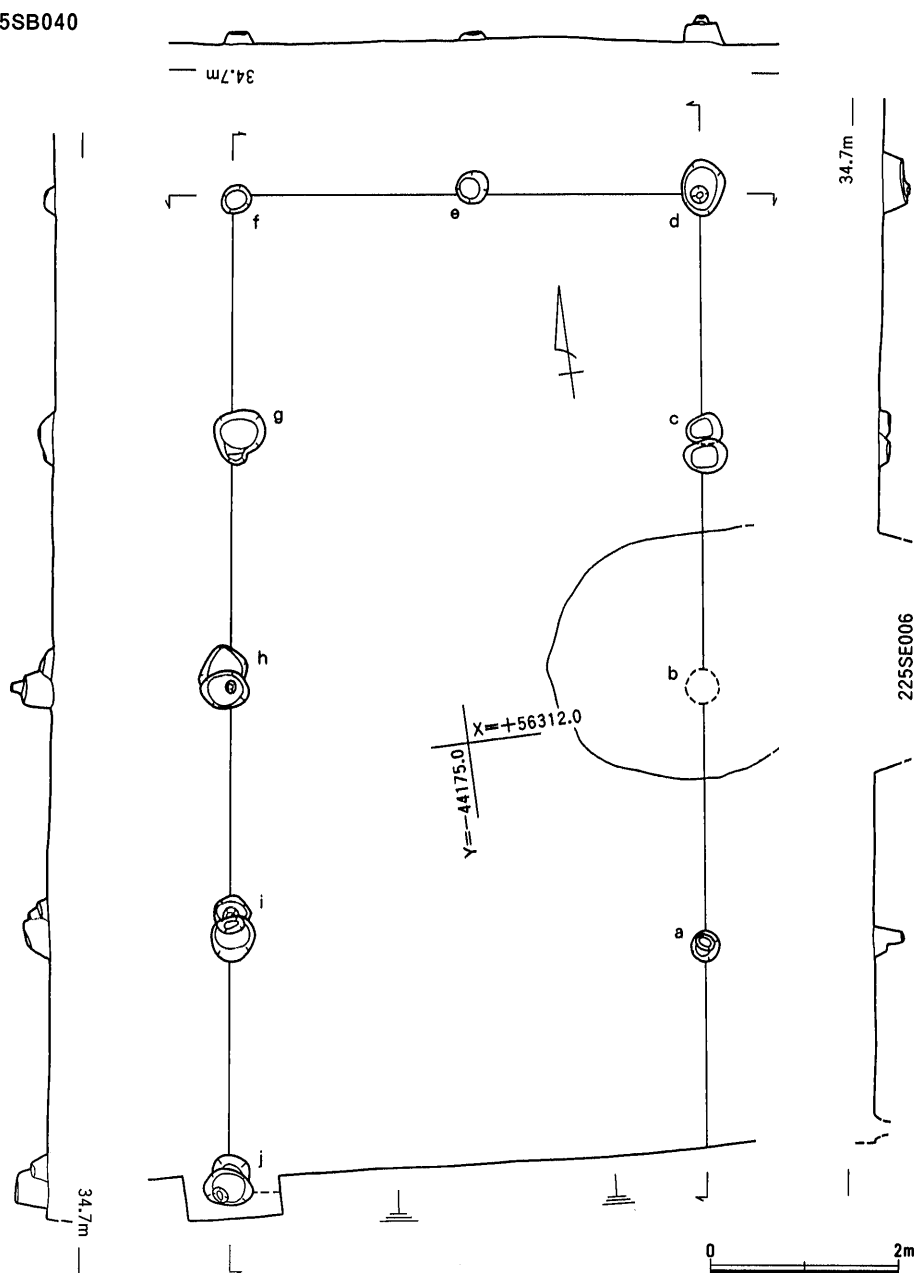
2) 掘立柱建物

225SB040 (第16図、図版10)

調査区の西側で検出した。東西(梁行)2間、南北(桁行)4間の側柱建物と推定したが、桁方向はさらに南側(調査区外)へ延びる可能性もある。他遺構との重複関係では整地225SX050を切って構築され、225SE006に切られる。規模は東西5.45m、南北10.5mを測り、座標北を基準とした主軸方位はN-7°46'-Eを指す。各柱穴の平面形はおおむね円形であり、柱穴c、h、i、jでは重複がみられた。柱穴dでは径20.0cmを測る円形の柱痕が観察された。柱痕には黒褐色土、掘り方には暗黄褐色土が堆積していた。また、重複関係の新しい柱穴は暗褐色土で、その他の柱穴埋土は暗灰色土であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、平安中期～後期頃の埋没と考えられる。

225SB040

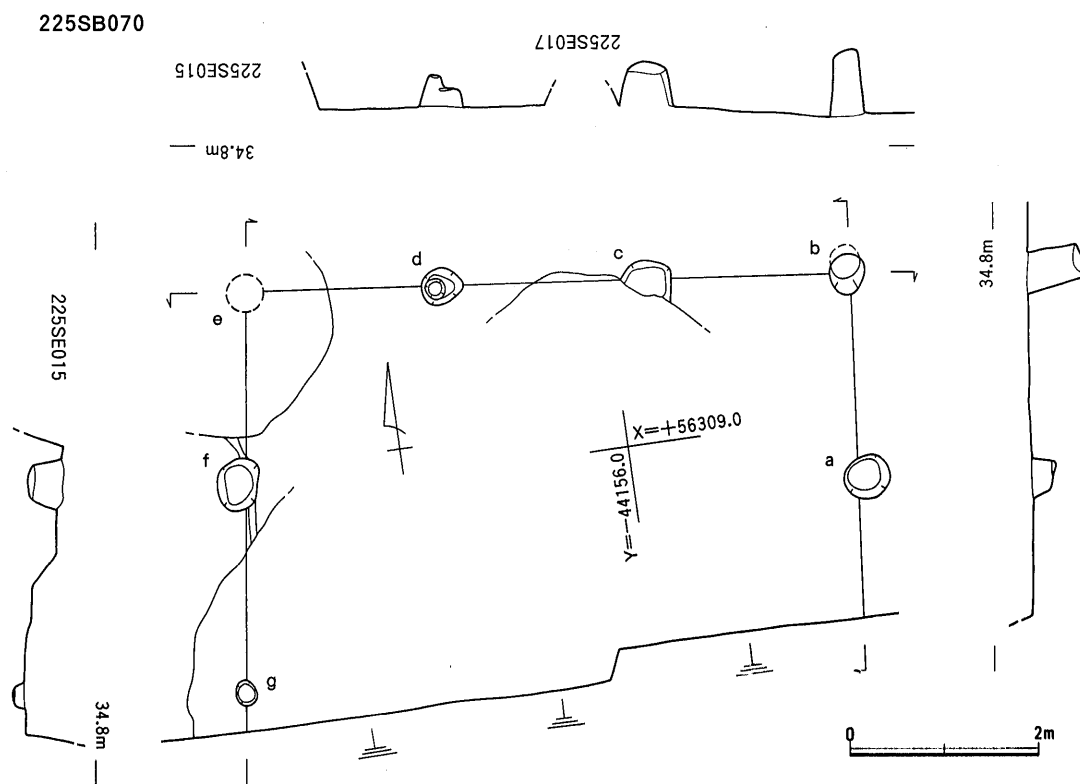


第16図 225SB040実測図 (1/80)

225SB070 (第17図)

調査区中央部南端で検出した。東西は3間とみられ、南北は2間以上で南側は調査区外に延びている。検出範囲での規模は東西6.4m、南北4.3mを計測し、座標東を基準とした主軸方位は $E-4^{\circ}36'-S$ を指す。他遺構との重複関係では225SE015、225SE017、225SD030に切られ、各柱穴の平面形はおおむね円形を呈する。柱穴bに黄褐色土が堆積していたほかは、暗灰色土の単層であった。

本址の時期は、切り合い関係や出土遺物の様相から、おおむね平安中期～後期頃の埋没と考えられる。



測る。平面形は西端が方形、他は円形で暗褐色土が堆積していた。本址は調査区南端で発見されたことから、南側に展開する掘立柱建物の一部である可能性もある。

本址の時期は、遺物が出土しなかったため、時期決定資料に欠けるが、想定される切り合い関係から平安後期頃の所産と推定される。

4) 溝

225SD001 (第6図)

調査区北西側E11区を中心に検出した。平面形は東西に長い不整形で、遺構底面は凹凸が著しい。規模は長さ6.15m、最大幅1.7mを測り、座標東を基準とした主軸方位はE-1°54'-Nを指す。検出面からの深度は最大で31.6cmを測る。覆土は暗褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期(XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭)頃の埋没と考えられる。

225SD029 (第6図、図版10)

調査区中央部南側のB7区で検出した。方向はやや蛇行しながら南北に延びている。底面は僅差(5.2cm)であるが北に傾斜する。検出された長さは5.8m、最大幅は0.65m、検出面からの深度は最大19.7cmを計測する。他遺構との重複関係では225SE015に切られる。覆土は暗褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、平安中期頃の埋没と考えられる。

225SD030 (第6図)

調査区中央部南側のA7区で検出した。225SD029に沿う形で南北方向に延びている。検出された全長は1.43m、最大幅は0.6m、検出面からの深度は浅く、最大8.4cmを計測する。他遺構との重複関係では225SE015、225SD029に切られる。覆土は灰褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、平安中期頃の埋没と考えられる。

225SD035 (第6図)

調査区東側のC1～3区で検出した。他遺跡との重複関係では225SE036を切って構築される。2ヵ所で途切れながらも東西方向に延びており、東側は調査区外に延びている。検出された全長は6.7m、最大幅0.82m、深度は検出面から最大0.18mを測る。覆土は暗褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物が僅少で時期決定資料に乏しいが、切り合い関係も考慮すると平安中期～後期頃の所産と推定される。

5) 土 坑

225SK004 (第6図)

調査区西端部のD14区を中心に検出した。平面形は円形を呈し、径は1.73m、深度は検出面から0.5mを測る。覆土は上層から暗灰色土、黒褐色土、暗黄灰色土が堆積していた。

本址の時期は、出土遺物の様相から、D期(XIV～XV期、12世紀中頃～後半)の埋没と考えられる。

225SK012 (第6図、図版11)

調査区中央部南側のB7・8区で検出した。平面形はやや歪んだ円形を呈し、最大径は2.1m、深度

は検出面から0.3mを測る。覆土は黒褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SK013（第6図）

調査区中央部南側A 8区で検出した。平面形は不整形で南北1.95m、東西2.05m、深度は検出面から最大0.62mを測る。覆土は暗褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SK016（第6図）

調査区中央部南側A 8区で225SK013に切られる形で検出。南側は調査区外に延びており、全容は不明瞭。東西2.1m、深度は検出面から最大0.42mを測る。覆土は黒色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SK018（第6図）

調査区東側のA 2区で検出した。平面形は楕円形で南北1.3m、東西1.45m、深度は検出面から最大0.45mを測る。覆土は暗褐色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、E期（XVI～XVII期、13世紀前後～前半）の埋没と考えられる。

225SK019（第6図）

調査区東側のA 2区で225SK018に切られる形で検出した。平面形は不整形で南北1.75m、東西1.45m、深度は検出面から最大0.4mを測る。覆土は炭化物を多量に含む黒色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SK032（第6図）

調査区東端部のA 1区から検出。他遺構との重複関係では225SE022に切られる。平面形は楕円形を呈し東西2.1m、南北1.45m、深度は検出面から0.59mを測る。覆土は黒色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物の様相から、F期（XVII～XIX期、13世紀前後～14世紀初頭）頃の埋没と考えられる。

225SK038（第6図）

調査区中央部のC 8区から検出した。平面形は南北に長軸を持つ楕円形で南北0.95m、東西0.5m、深度は検出面から0.19mを測る。覆土は焼土塊を多量に含む灰色土の単層であった。

本址の時期は、出土遺物が僅少で時期決定資料に乏しいが、おおむね12世紀以降の所産と考えられる。

6) 整 地

225SX050 (第5・6図)

調査区西端部で検出した。他遺構との重複関係は225SE005、225SB040に切られている。凹地状地形を人為的に埋め立てた土層と考えられ、西側と南側はさらに調査区外に広がっている。検出範囲は東西6.8m、南北10.8mに及び、厚さは最大60cmを測る。埋土は上層より黒色土、黒褐色土、黄褐色土、暗灰色土が堆積していた。なお、出土遺物は暗褐色土として取り上げた。

整地の時期は、切り合い関係、出土遺物の様相から、平安前期～中期頃と考えられる。

225SX055 (第5・6図、図版11)

調査区東側の広範囲で検出した。他遺構との重複関係では225SE036に切られる。自然流路225SD060を人為的に埋め立てた土層と考えられ、北東から南西方向へ帯状に分布しており、北側と南側はさらに調査区外に広がっている。方向は座標北を基準とした場合、N-26°55'-Eを指向する。層厚は最大で53cmを測る。埋土は上層より炭化物を含有する暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積していた。なお、出土遺物は暗褐色土として取り上げた。

整地の時期は、切り合い関係、出土遺物の様相から、最終埋没はⅧ期以前の平安前期頃と考えられる。

7) 流 路

225SD060 (第5・6図、図版11)

調査区東側で検出したもので、整地225SX055に覆われている。方向や平面分布の様相は225SX055とはほぼ同様であり、整地層を除去した状態が最終河床と考えられる。最終河床面の標高は北側が相対的に高いことから、水流は南に向かっていたものと解される。

調査区南側では河床面を構成する暗灰色砂から遺物が出土した。このため遺物の分布範囲に応じてトレンチを設定し、さらに下層の堆積状況を精査した。土層は色調や粒度の違う砂層やシルト層が細かな単位で互層堆積しており、流水性の堆積構造を呈していた。遺物は暗灰色砂からは弥生時代中期土器を主体的に検出し、下層の暗黄灰色シルト、黄灰色シルト、黒褐色砂礫、黒色砂の各層からは縄文時代後～晩期の土器、石器が出土した。しかしながら部分的な確認にとどまったため、流路の規模や、縄文時代晩期包含層の可能性が指摘される黄褐色粘土との層位的関係を把握するに至らなかった。

平安時代前期に形成された225SX055と、225SD060の最終河床を構成し弥生時代中期土器を包含する暗灰色砂との間には、時間的な隔たりがあまりにも大きく不整合を生じている。また、両者の年代的ギャップを埋める土層が介在する状況は観察されなかった。このような現象から類推され得る原因として、流路の浸食作用により暗灰色砂の上位堆積層が流失した可能性が挙げられる。したがって浸食による最終河床形成と、整地との間には時間差がないものと考えられ、最終河床面の時期は平安時代前期頃と推定しておく。

8) 小 穴

225SX067 (第6図)

調査区西側D12区で検出した。平面形は円形を呈し最大径0.33m、深度は浅く検出面から7.4cmを測る。覆土は暗灰色土の単層で、長径24cmの花崗岩が含まれていた。

本址の時期は、出土遺物が僅少で時期決定資料に乏しいが、おおむね平安時代以降の埋没と推定される。

3. 遺物

1) 井戸出土遺物

225SE002暗灰色土出土遺物 (第18図)

土師器

坏 a (1) 口径11.5cm、器高2.3cm、底径7.7cmに復原される。器面が荒れており調整が不明瞭であるが、底部切り離しは糸切りと推測される。

小皿 a (2~8) 口径8.2~8.8cm、器高0.9~1.15cm、底径5.9~7.4cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、3と5には切り離し後の板状圧痕が観察される。

鉢 (9) 口縁部から体部の破片で残存高4.1cmを測る。口縁部を横ナデ、体部外面を回転ナデ、内面をナデ調整で仕上げる。焼成は良好で、胎土は浅黄橙色に発色する。

国産陶器

甕 (10・11) いずれも常滑産甕の口縁から体部上半の破片。10は残存高11.4cmを測る。口縁部から頸部内外面を横ナデして、端部は斜め上方に小さく摘み上げる。体部外面は縦位のナデ、内面は指頭調整で輪積み痕を消す。中野編年 (中野 1995) 4 型式に比定され、遺構時期より古相と考えられる。11は残存高15.5cmを測る。N字状口縁の縁帯幅が比較的狭いことから、中野編年 6 a 型式に比定されよう。両資料ともに胎土は堅緻で焼成良好。

白磁

合子身 (12) 口径5.5cm、器高2.0cm、底径5.4cmに復原される。体部外面に縦位の櫛目を施す。焼成不良のため、胎土は淡い橙色を呈し、体部外面および内面に施された釉は灰緑色に発色する。

石製品

滑石製品 (13) 滑石を素材とし、上部を丸く、下面を平滑に成形し、中央に円孔を穿つ。高さ2.5cm、下面径5.0cm、孔径1.6cmに復原される。紡錘車と推定され、類似資料が大宰府条坊跡第89次調査SK122 (『大宰府条坊跡Ⅶ』) から出土している。

225SE002黒褐色粘土出土遺物 (第18図、図版12)

土師器

坏 a (14) 口径11.4cm、器高2.0cm、底径8.4cmに復原される。器面が荒れ、底部切り離しは不明瞭であるが、板状圧痕が観察される。

瓦類

平瓦 (15) 凹面には模骨痕および布目圧痕と、その上に同心円の叩き目が観察される。瓦分割後に同心円の工具をあてがい再調整を行ったものとみられる。凸面は側縁平行のヘラ調整が施される。胎土は軟質で絞胎になっており、酸化焰焼成のためにぶい黄橙色に発色する。

225SE003暗灰色土出土遺物 (第19図、図版12)

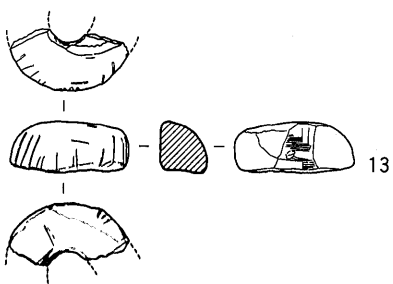
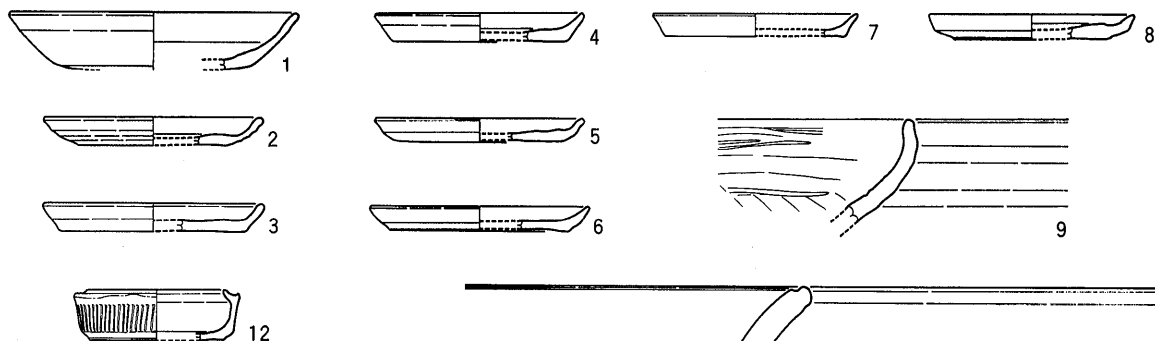
土師器

坏 a (1~3) 口径10.6~12.8cm、器高2.2~2.5cm、底径7.5~8.8cmを測る。底部切り離しは2がヘラ切り、3が糸切り。1の体部内面には糸の付着痕跡が観察される。2の内面には煤が付着する。

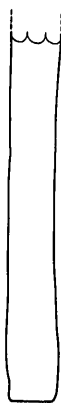
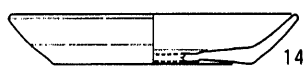
坏 a × 小皿 a (4) 口径12.0cm、器高1.5cm、底径8.0cmに復原される。底部には焼成前に穿孔を行っており、円孔は5ヵ所遺存していた。外面底部から体部、内面口縁端部に油煙が付着する。

小皿 a (5~10) 口径7.7~10.6cm、器高1.0~1.3cm、底径6.2~7.6cmに復原される。底部切り離し

225SE002暗灰色土

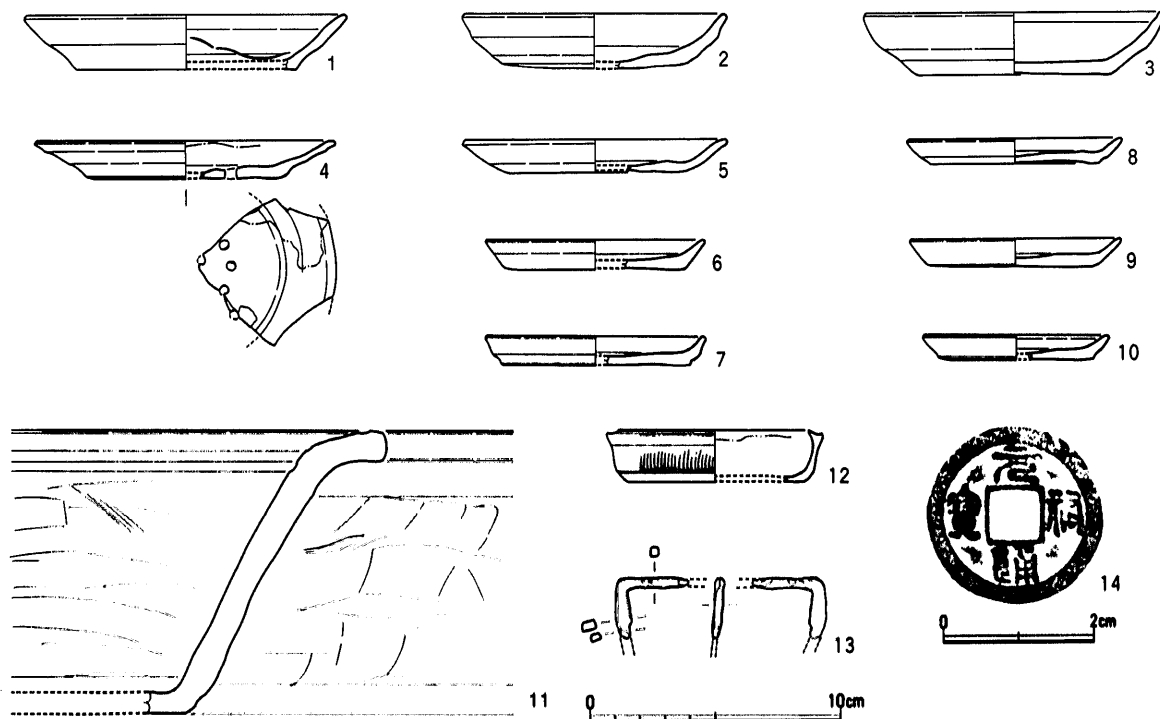


225SE002黑褐色粘土



第18図 225SE002遺物実測図 (1/3)

225SE003暗灰色土



第19図 225SE003遺物実測図 (1~13-1/3、14-1/1)

は5がヘラ切り、他は糸切り。板状圧痕が5を除いて観察された。

瓦質土器

火舎×盤(11) 口縁部から底部の破片で残存高11.3cmを測る。口縁は外反し、屈曲部内面には浅い凹線が1条巡る。器面はナデ調整で仕上げられる。

白磁

合子身(12) 口縁から底部の破片。口径7.5cm、器高2.05cm、底径7.1cmに復原される。回転ナデで成形した後、体部外面に櫛目を入れる。釉は口縁部および、外面体部下半から底部を除いて施される。全体に酸化焰焼成が進み、釉は暗オリーブ色、胎土はにぶい黄橙色に発色する。

金属製品

鉸具?(13) 銅を素材とし、断面方形に鍛造する。2.4×3.0cmが遺存し、厚さは0.3~0.4cmを測る。
 銭貨(14) 元祐通寶。銭名を篆書で鋳込む。法量は「出土銭貨計測表」に掲載した。

225SE005黒褐色土出土遺物 (第20図)

土師器

坏a(1) 口径12.2cm、器高3.0cm、底径8.1cmに復原される。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が観察される。

丸底碗a(2) 口径12.8cm、器高3.9cm、底径10.1cmに復原され、底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が観察される。

碗c(3~6) 3は高台を除いてほぼ遺存する。口径15.9cm、残存高6.0cmを測る。内面はミガキbおよびミガキcによって仕上げられる。外面は回転ナデ調整。4は体部の破片。口径18.4cmに復原され、

残存高は5.3cmを計る。5は底部の破片。高台径8.7cm、残存高3.4cmを測る。高台外面には油煙が付着する。6は体部下半の破片。高台径7.9cm、残存高3.1cmを測る。

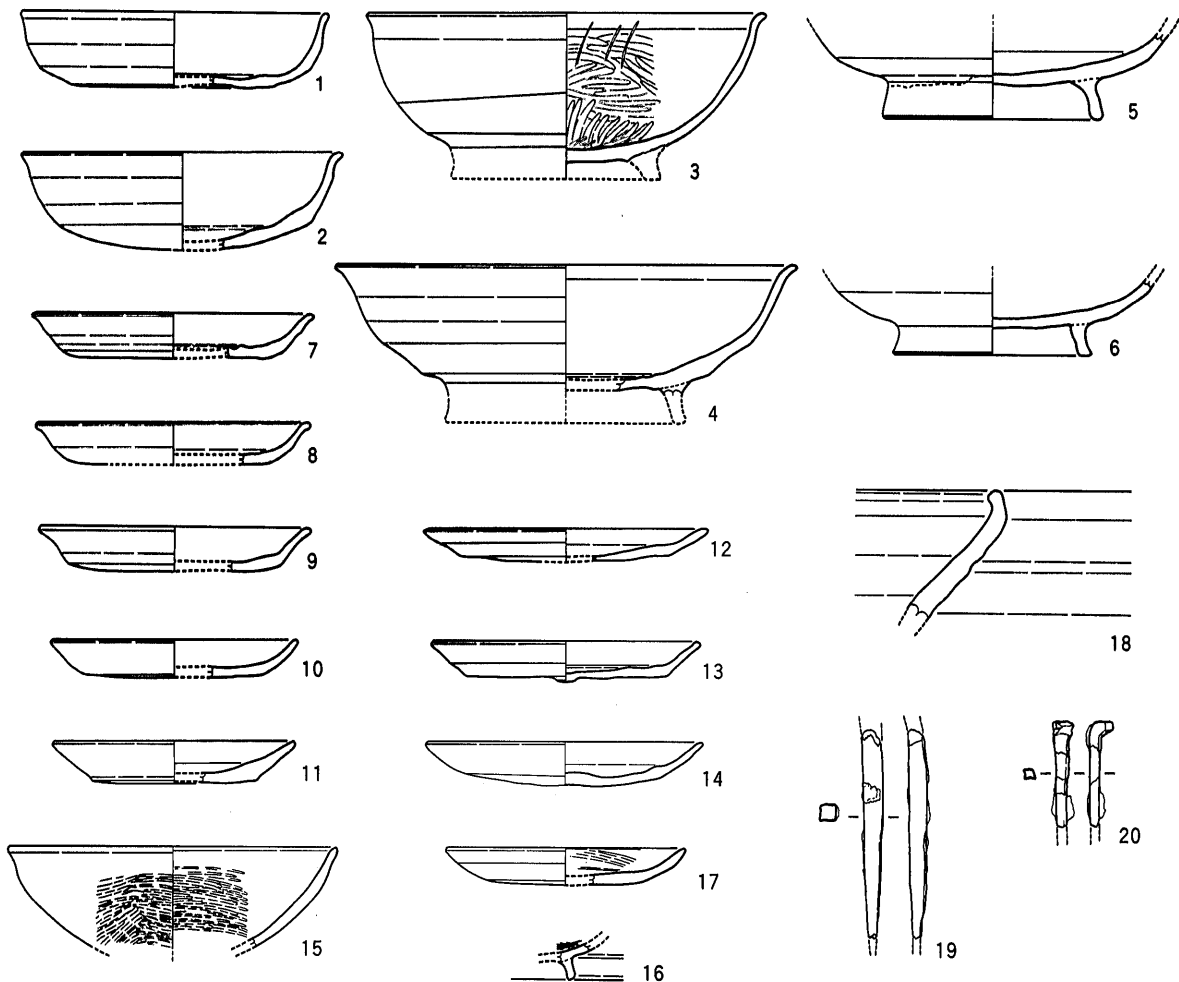
小皿a（7～14） 口径9.6～11.4cm、器高1.3～1.8cm、底径6.6～8.8cmを計測する。底部切り離しはヘラ切り。12～14の底部には板状圧痕が観察される。

黒色土器B類

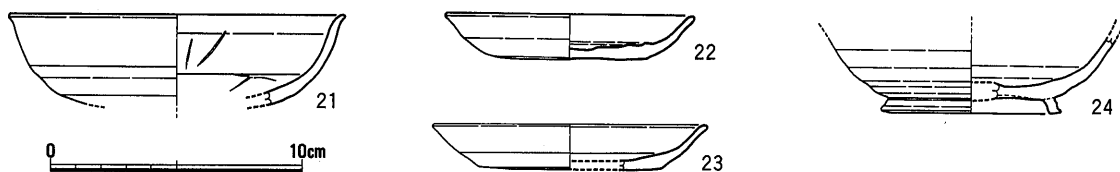
碗（15） 口縁部から体部の破片。口径13.1cmに復原され、残存高は4.1cmを計測する。器面にはミガキを密に施す。搬入品か。

碗c（16） 高台の破片。残存高1.4cmを測る。器面のミガキは密に施される。高台は歪んでいる。

225SE005黒褐色土



225SE005黒褐色粘土



第20図 225SE005遺物実測図 (1/3)

皿 a (17) 口縁から底部の破片。口径9.6cm、器高1.5cm、底径6.2cmに復原される。器面には粗いミガキが施される。底部切り離しはヘラ切り。

須恵質土器

鉢? (18) 口縁部から体部の破片。残存高4.2cmを測る。外面はナデ調整で仕上げられ、焼成は甘い。

金属製品

鉄釘 (19・20) 19は頭部と先端部を欠損しており、断面方形に鍛造する。残存長8.4cm、厚さ最大0.7cmを測る。20は先端部を欠損しており、頭部は折り曲げる。残存長4.2cm、厚さ最大0.3cmを測る。

225SE005黒褐色粘土出土遺物 (第20図)

土師器

丸底坏 a (21) 口縁から底部の破片。口径13.4cm、器高3.6cm、底径8.3cmに復原される。内面はミガキ b により仕上げられる。外面は回転ナデ。底部切り離しはヘラ切り。

小皿 a (22・23) 口径10.0~11.0cm、器高1.8cm、底径6.2~6.3cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り。

緑釉陶器

碗 (24) 体部下半から高台の破片。高台径7.2cmに復原され、残存高は3.1cmを測る。底部糸切り離し後、高台を貼り付ける。濃緑色の釉を器面全体に施す。一次焼成時に胎土の膨張、亀裂が生じたらしく、破断面にも釉の付着が観察される。近江産。

225SE006暗灰色土出土遺物 (第21図、図版12)

土師器

坏 a (1~4) 口径12.2~13.0cm、器高2.3~2.5cm、底径7.8~8.7cmに復原される。底部切り離しは糸切り。1・3の底部には板状圧痕が観察される。

小皿 a (5~9) 口径8.0~9.0cm、器高0.8~1.2cm、底径6.6~7.6cmに復原される。底部切り離しは糸切り。9の内面には煤が観察される。

黒色土器B類

碗 (10) 口縁部から体部の破片。残存高2.2cmを測る。口縁は外反し、内側に沈線が1条巡る。器面は細かなミガキが密に施される。搬入品。

瓦質土器

火舎×盤 (11) 残存高6.9cmを測る。口縁部は外反し、屈曲部内側および口縁端部内側に凹線を巡らせる。

陶器

甕 (12) 常滑産甕の口縁部から頸部の破片。残存高は6.0cm、N字状口縁の縁帯幅は3.2cmを測る。器面はナデ調整で仕上げられるが、外面には一次調整痕が観察される。中野編年6b型式に比定される。

青磁

碗 (13) 口縁部から体部上半の破片。残存高2.3cmを測る。口縁部は屈曲し、外方に引き延ばされ端部は薄く尖る。釉は薄く掛けられるが失透気味で緑灰色に発色し、細貫入とともに微少なピンホール状の釉切れを生じる。胎土は灰色で砂味が強く黒色微粒子と3mm大の小礫を含有している。未分類資料。

中国陶器

耳壺 (14) 口縁部から肩部にかけての資料。口径11.1cmに復原され、残存高は3.3cmを計測する。口

縁部は「く」字形に外反し、内傾面に目跡が付く。外面肩部には沈線が1条巡る。胎土は明橙灰色を呈し、黒色粒子を含有する。Ⅵ類と類推される。

鉢(15) 口縁部の破片。にぶい褐色の釉に淡褐色から灰白色に発色する釉を施す。Ⅰ－2b類。

金属製品

銭貨(16) 皇宋通寶。銭名を篆書で鋳込む。法量は「出土銭貨計測表」に掲載した。

木製品

櫛(17) 挽歯式の横櫛。左右が欠損するほか、残存する15枚の歯は1枚を除き先端部が失われている。歯の挽き出し位置を決める切り通し線は背の上縁に平行し緩やかな曲線を描く。歯は3.0cm(一寸換算)あたり9枚を挽き出しており密度が粗い。表面には漆が施され光沢のある黒褐色を呈する。樹種は未同定であるが硬質感の強い材を用いる。現存幅5.0cm、背の厚さ1.0cm、残存する歯の長さは3.7cmを計測する。

ヘラ状製品(18) 素材は針葉樹と類推され、先端を鋭利に尖らせる。残存長9.4cm、最大幅2.0cm、厚さ0.55cmを測る。

箸(19) 素材は針葉樹と類推され、断面方形に面取りする。両端を欠損し、残存長11.65cm、厚さは0.5cmを測る。

225SE006暗褐色土出土遺物(第21図、図版12)

土師器

小皿a(土師器計測表参照) 口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.3cmを計測する。底部切り離しは糸切り。

小皿c(20) 口径7.8cm、器高2.1cm、高台径6.0cmに復原される。

鍋(21) 口縁部の破片で残存高1.5cmを計測する。端部を逆「L」字状に折り曲げ、上面を平坦にナデた後、平坦面に縄を押捺する。器面全体には煤が付着する。

灰釉陶器

瓶(22) 頸部の破片で残存高6.7cmを測る。器面は回転ナデ調整され、外面には釉垂れがみられる。

青磁

合子身(23) 口縁から体部の破片。口径9.7cmに復原され、残存高2.7cmを計測する。口縁受け部には目跡が1ヵ所残る。体部内面には目跡と同質の白色土が付着する。胎土および釉調から越州窯系青磁Ⅰ類系と考えられる。

青白磁

碗(24) 体部から高台の破片で高台径4.0cmに復原され、残存高2.6cmを測る。端正な角高台を削り出し、見込みには白化粧土で草文を描く。器面全体に施される釉は光沢と透明感があり、微少な気泡を生じ、淡い水色に発色する。胎土は白色を呈し黒色微粒子を含有する。

中国陶器

耳壺(25) 口縁部から肩部にかけての資料で横耳が1個遺存する。口径12.0cmに復原され、残存高は5.1cmを計測する。暗茶褐色の釉を外面から頸部内面に施すが剥離がみられる。Ⅲ－1類。本資料は上層の暗灰色土出土破片と接合関係が認められた。

石製品

砥石(26) 黒灰色を呈する偏平な細粒硬砂岩を石材とする。規模は5.4×7.3cm、厚さ1.2cmを測る。

Archaeological illustrations of various artifacts from the 225SE006 site, including pottery fragments, a coin, and bone or stone tools, numbered 1 through 26. The drawings show cross-sections, profiles, and detailed views of the items. A scale bar of 10cm is provided for items 25 and 26, and a 5cm scale bar is provided for items 17, 18, and 19.

225SE006暗褐色土

0 10cm

0 5cm

第21図 225SE006遺物実測図 (1~15・20~26-1/3、16-1/1、17~19-1/2)

225SE008暗褐色土出土遺物（第22図、図版12）

土師器

小皿 a（1） 口径8.0cm、器高1.0cm、底径6.8cmに復原される。底部切り離しは糸切り。

土師質土器

擂鉢（2） 口縁部から体部上半の破片。残存高は3.7cmを測る。口縁部内外面は横ナデし断面方形に成形する。体部外面は指頭による押圧調整、内面は横位、斜位のハケ目調整を行った後、擂目を施す。擂目は2条観察された。

瓦質土器

擂鉢（3） 口縁部から体部上半の破片。残存高は4.0cmを計測する。調整、成形技法は2に類似し、口縁部内外面を横ナデ調整し断面方形に成形する。以下は斜位のハケ目調整。内面に擂目と類推される沈線が1条観察される。

鍋×鉢（4） 口縁部の破片で、残存高1.8cmを測る。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦位のナデ、内面は縦位のナデの後横方向のハケ目調整を施す。

白磁

皿（5） 口縁から底部の破片。口径12.4cm、高台径7.0cm、器高3.6cmに復原される。体部は口縁に向かって器厚を減じながら内彎する。高台内は浅く削り込んでおり、底部の器肉は厚めで中央部が盛り上がる。体部上半は内外ともに横ナデがなされ、以下はケズリ調整。胎土は黄灰色を呈し、軟質緻密。釉は半光沢失透気味で黄色味を帯び、微細な貫入が入る。内面上半から外面中位まで施釉される。G期以降の製品。

青磁

盤（6・7） 6は体部下半の破片。残存高1.7cmを測る。外面に蓮弁文と類推される縦位の分割線、内面には縦に凹状の削りが観察される。龍泉窯系青磁Ⅲ類。

7は底部の破片。高台は畳付平坦面が比較的広い。高台径8.0cmに復原され、残存高は1.8cmを測る。釉は暗緑灰色に発色し、細貫入が入る。また焼成不良のためか釉中に細かな気泡を数多く生じている。龍泉窯系青磁Ⅲ'類。

輸入陶磁器

碗×皿（8） 底部の細片で、残存高は0.9cmを測る。外面は回転ヘラケズリによって、非常に低い高台が削り出される。内面には鉄釉で草文が描かれ、細貫入を生ずる半光沢質の透明釉が上掛けされるが、部分的に白濁がみられる。胎土はやや砂質味の強い灰白色で、微少な黒斑を含有する。焼成は良好。ベトナム産と推定される。

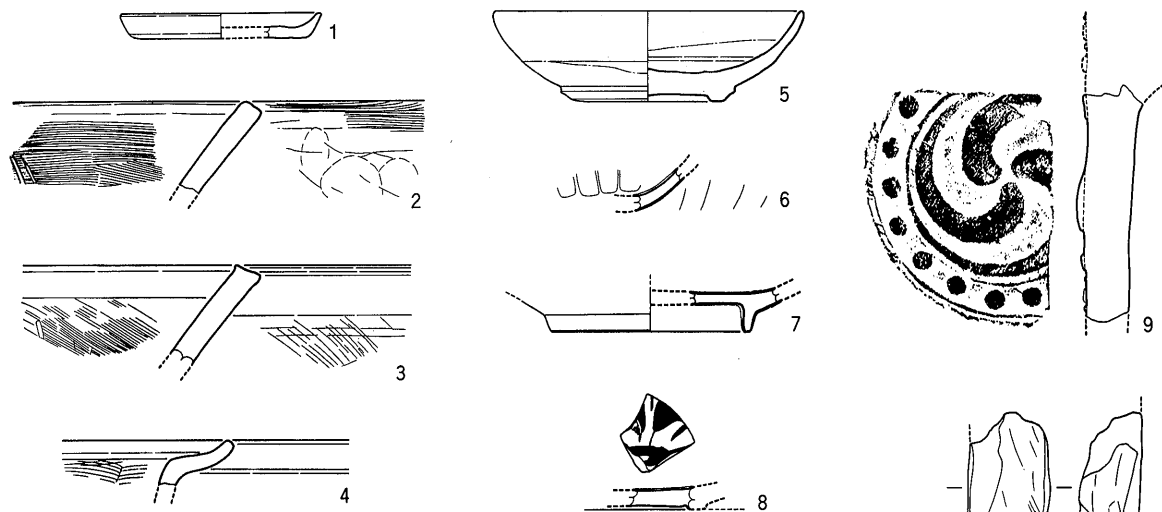
瓦類

軒丸瓦当（9） 瓦当面 $\frac{2}{3}$ 程度が残存する資料で、内区に巴文、外区に珠文を配置する。巴文は細長く尾を引き、外区とを分かち圏線状となる。珠文は遺存する数と間隔から20個に復原される。

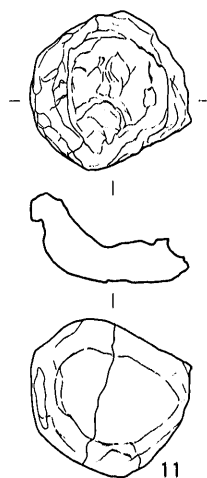
土製品

棒状製品（10） 用途不明の製品で、器面は直交する2面が遺存していることから、使用時の断面形は方形と推定される。器面はナデで仕上げられる。胎土は緻密で小礫を多く含んでおり、淡い桜桃色に発色する。残存規模は3.2×3.1cm、長さ6.5cmを測る。

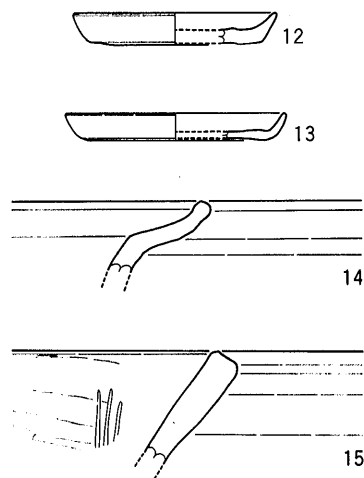
225SE008暗褐色土



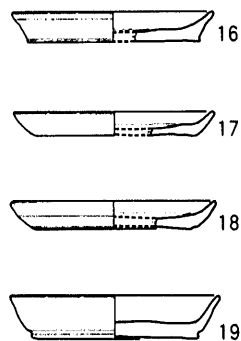
225SE008暗褐色粘土



225SE008暗灰色土



225SE009明灰色土



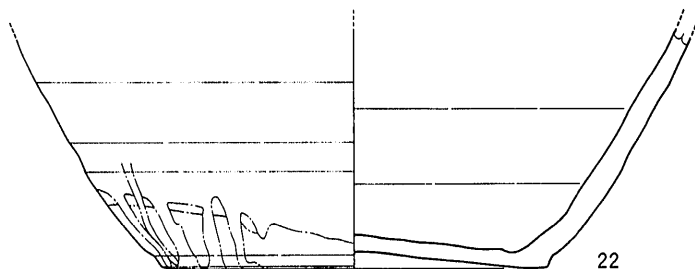
225SE009黑褐色粘土



225SE010黑褐色粘土



225SE011暗褐色土



第22図 225SE008・009・010・011遺物実測図 (1/3)

225SE008暗褐色粘土出土遺物（第22図、図版12）

金属製品

腕形滓（11） 腕形の鉋（鉄？）滓で気泡を多く生じている。現存高3.6cm、最大径6.5cm、重量105gを計測する。

225SE008暗灰色土出土遺物（第22図）

土師器

小皿 a（12・13） 12は口径8.1cm、器高1.3cm、底径6.9cm、13は口径8.8cm、器高1.1cm、底径7.6cmに復原される。両者とも底部は糸切り離しで、板状圧痕が観察される。13はやや古相と考えられる資料で、胎土には雲母を多く含んでいる。

鍋（14） 口縁部破片。残存高は2.7cmを測る。器面ナデ調整で仕上げられ、外面には煤が付着する。

瓦質土器

播鉢（15） 口縁部から体部上半の破片。残存高は4.0cmを測る。口縁部内外面を横ナデ調整し、断面方形に成形する。外面下半は指頭調整。内面に播目と類推される沈線が3条観察される。

225SE009明灰色土出土遺物（第22図）

土師器

小皿 a（16～19） 口径8.0～8.4cm、器高0.9～1.7cm、底径6.2～6.8cmに復原される。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。

225SE009黒褐色粘土出土遺物（第22図）

土師器

小皿 a（20） 口径8.6cm、器高1.05cm、底径6.2cmに復原される。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。

225SE010黒褐色粘土出土遺物（第22図）

土師器

小皿 a（21） 口径9.0cm、器高1.1cm、底径7.2cmに復原される。器面が摩耗しており、調整は不明瞭ながら底部切り離しは糸切りと類推される。

225SE011暗褐色土出土遺物（第22図）

中国陶器

耳壺（22） 胴部下半のみ遺存。底径15.5cm、残存高9.6cmを測る。灰黄色の胎土に化粧掛けを行い、鉄錆釉、緑灰色の釉を掛け、内面には刷毛状工具で灰黄色の釉を塗る。胎土、釉調の特徴から、Ⅲ類もしくはⅣ類と類推される。

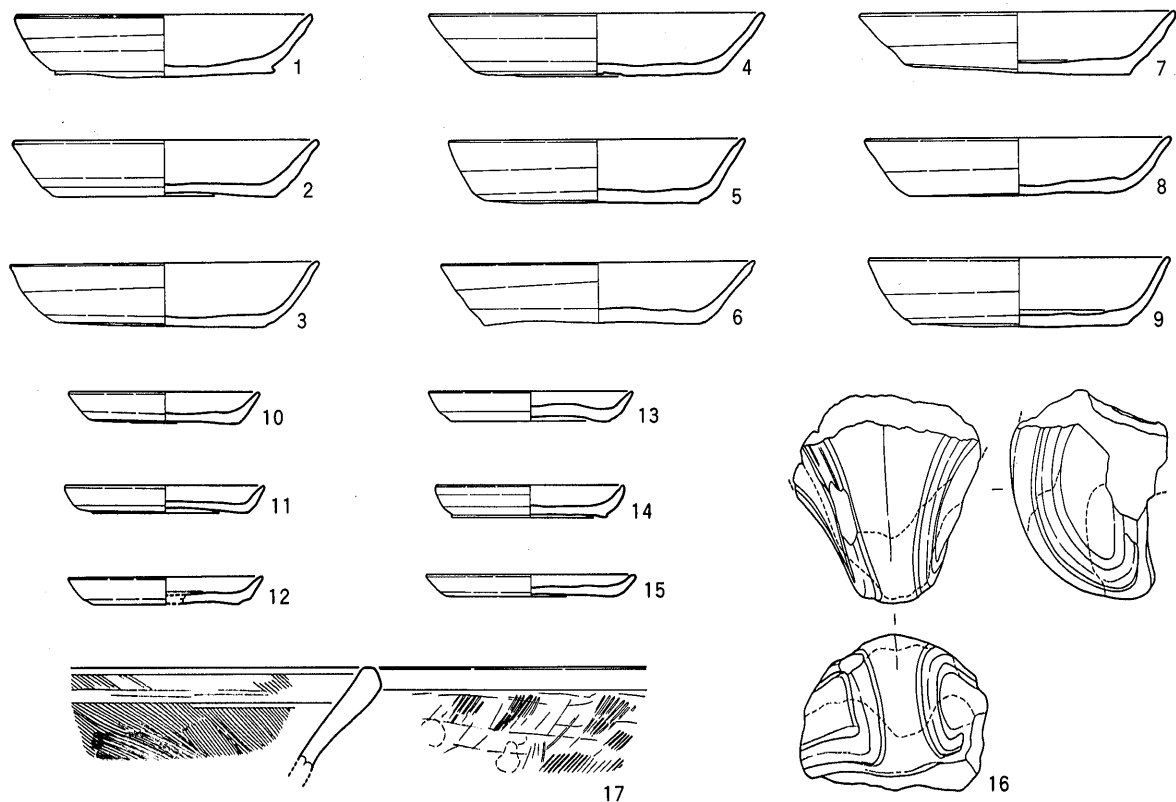
225SE014茶色土出土遺物（第23図、図版13）

土師器

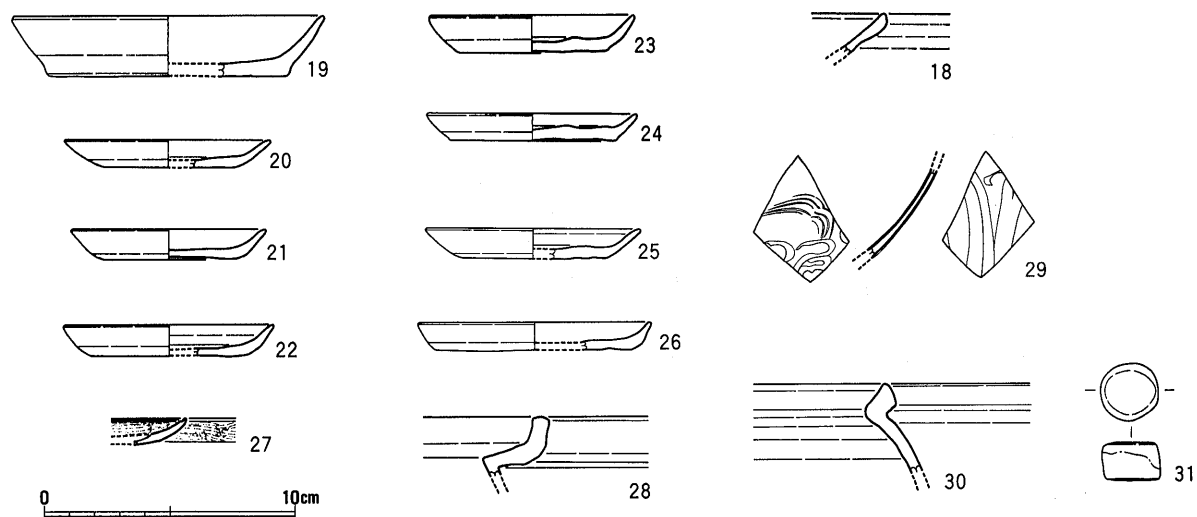
坏 a（1～9） 口径11.8～12.6cm、器高2.25～2.8cm、底径8.4～9.8cmに復原される。底部切り離しはいずれも糸切り。3・4・8の器面には煤が付着する。

小皿 a (10~15) 口径7.6~8.4cm、器高0.9~1.3cm、底径5.7~6.8cmに復原される。底部切り離しは糸切り。10・11・15には板状圧痕が観察される。

225SE014茶色土



225SE014暗灰色土



第23図 225SE014遺物実測図 (1) (1/3)

土師質土器

脚 (16) 火舎あるいは風炉の脚と類推され、残存高8.4cmを測る。逆烏帽子形の器形を有し、外面側縁には2条の平行沈線が巡る。接地面には器面の摩耗がみられ、外面から側面にかけては煤が付着する。

瓦質土器

鉢 (17) 口縁部から体部上半の破片。残存高4.1cmを測る。口縁部内外を横ナデ、内面を斜位のハケ調整、体部外面は指頭調整後に疎らな斜位のハケ目を施す。

中国陶器

皿 (18) 口縁部から体部上半の破片で、残存高は1.6cmを測る。口縁部は玉縁状に肥厚し、胎土は橙色、釉は暗茶褐色を呈する。未分類資料。

225SE014灰色土出土遺物 (第24図)

石製品

滑石製石鍋 (32) 口縁部から体部上半の破片。口径29.3cmに復原され、残存高は9.3cmを測る。外面は縦位の切削、内面は斜位の切削により成形される。外面の鏝より下には煤が付着する。C群。

木製品

皿 (33) 挽物で、木地には黒漆が施される。口径9.2cm、器高1.45cm、底径6.8cmに復原される。

板材 (34・35) 針葉樹を素材としているものとみられ、木取りは板目取り。規模は34が長さ21.4cm、幅5.9cm、厚さ0.8~2.9cm、柄は1.8×2.4cm、深さ1.7~1.9cm、35は長さ21.2cm、幅6.0cm、厚さ0.7~2.7cm、柄は1.9×2.5cm、深さ1.6~1.8cmを測る。

底板 (36) 結桶の底板と類推される板材で、素材は針葉樹であろうか、板目取りされた材を円形に成形する。径22.5cm、厚さ1.2cmを測る。

225SE014暗灰色土出土遺物 (第23図、図版13)

土師器

坏 a (19) 口径12.5cm、器高2.4cm、底径9.6cmに復原される。底部切り離しは糸切り。

小皿 a (20~26) 口径7.8~9.3cm、器高1.1~1.5cm、底径5.3~8.9cmを計測する。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。23の器面には煤が付着する。

黒色土器B類

小皿 (27) 残存高1.0cmに復原される。口縁内側に沈線を1条巡らす。器面には細かなミガキが密に施される。畿内系と考えられる。

瓦質土器

風炉 (28) 残存高2.4cmを計測する。口縁部はL字状に曲げ、器面は横ナデで仕上げられる。

青白磁

椀 (29) 体部の破片で残存高は3.4cmを測る。外面は鎬蓮弁文、内面には雲文を篋彫りする。釉は光沢質で淡い水色に発色し、微細な貫入が生ずる。胎土は白色緻密。

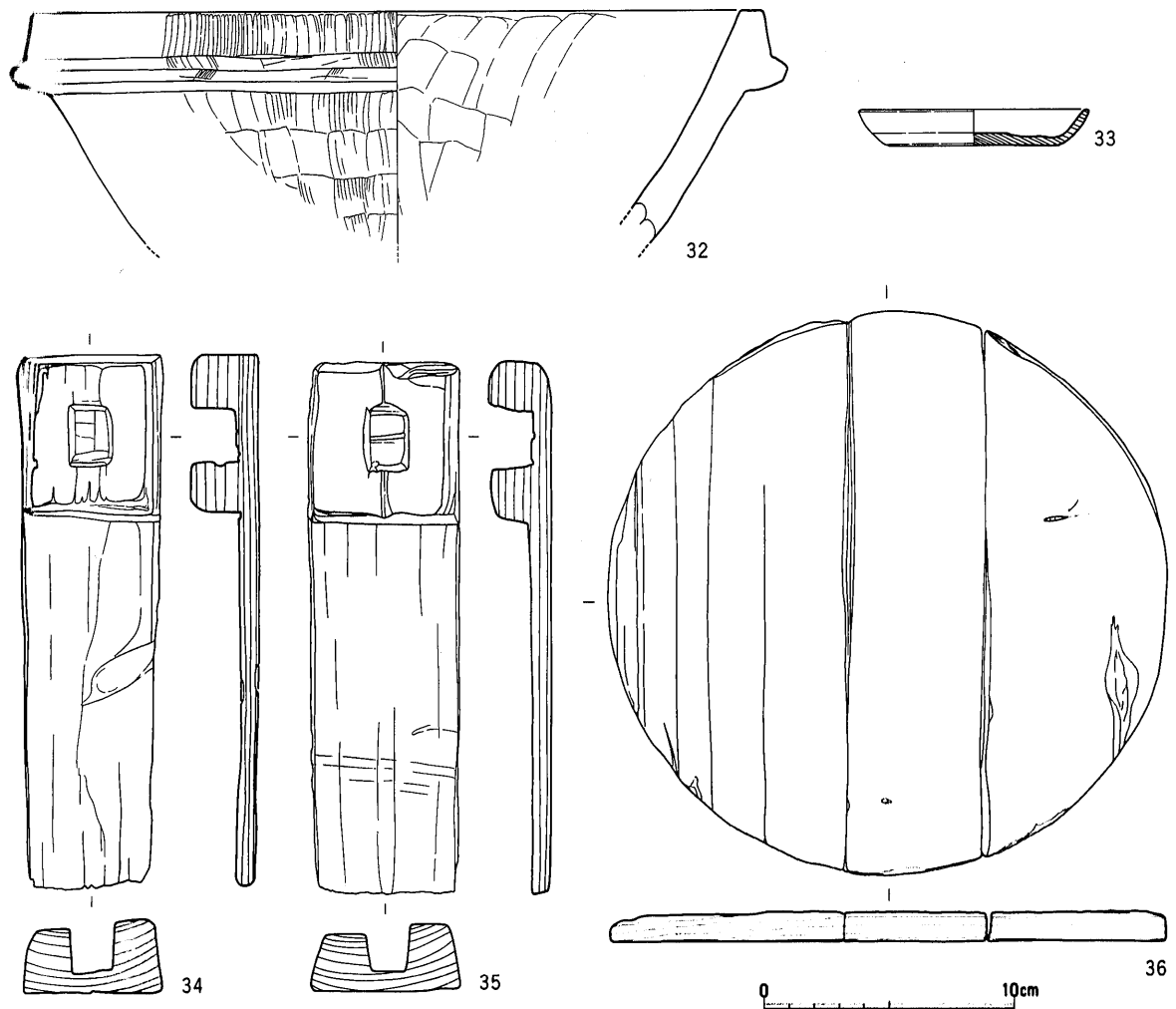
中国陶器

耳壺 (30) 口縁部から体部上半の破片。残存高3.6cmを計測する。胎土はにぶい橙色を呈し、白色、黒色粒子を含有する。釉は灰黄色に発色する。Ⅵ類あるいはⅦ類と推定される。

土製品

玉 (31) ナデ調整で粘土塊を円筒状に成形する。径2.0cm、高さ1.5cmを計測する。下半に煤が付着。

225SE014 灰色土



第24図 225SE014遺物実測図(2)(1/3)

225SE015 黒灰色土出土遺物 (第25図)

土師器

坏 a (1~3) 口径12.2~13.3cm、器高2.8~3.2cm、底径8.0~9.8cmに復原される。底部切り離しはヘラ切りで、2には板状圧痕が観察される。

丸底坏 a (4~6) 口径12.6~16.6cm、器高2.9~4.6cmに復原される。

碗 c (7・8) 口径14.2~14.4cm、器高5.4~5.5cm、高台径6.4~8.0cmを計測する。8の体部内外面には煤が付着する。

小皿 a (9~14) 口径10.0~11.0cm、器高1.0~2.1cm、底径6.4~8.6cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りで、9・10・13~15・17には板状圧痕が観察される。

小皿 a 2 (15~17) 口径10.2~10.6cm、器高1.1~1.2cm、底径6.4~6.7cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りで、15・17には板状圧痕が観察される。

黒色土器B類

皿 a (18) 口径11.2cm、器高1.6cm、底径8.0cmに復原され、内外面は細かなミガキが施される。搬

入品か。

緑釉陶器

碗 (19) 口径11.4cm、器高4.4cm、底径6.4cmに復原される。高台は削り出しで、体部内外面をミガキ調整した後、灰緑色に発色する釉を高台内を除き薄く施釉する。輪花状に口縁部を押圧する箇所が1ヵ所観察される。胎土は灰色で硬質。京都産。

皿 (20) 底部破片で、現存高0.9cmを測る。貼付高台で、淡緑色の釉を施すが斑に発色する。釉は器面からの剥離が著しい。胎土は軟質で灰白色を呈する。防長産。

灰釉陶器

碗×皿 (21) 底部破片で高台径6.0cmに復原され、残存高1.6cm。内面外周に釉をハケ塗りする。

白磁

碗 (22・23) 22は口縁部の破片で、偏平な玉縁。残存高1.8cmを測る。XI - 1類に比定される。23は体部の破片で、残存高3.8cmを測る。篋による縦押圧線が観察される。XI - 5類。

皿 (24) 口縁から体部の破片で、残存高2.3cmを測る。篋による縦押圧線が観察される。XI 類。

青磁

碗 (25) 体部下半から底部の破片。高台径6.7cm、残存高3.5cmを測る。越州窯系青磁Ⅲ - 1類。

合子身 (26) 口縁部から体部下半の破片で、残存高3.5cmを測る。口縁端部に目跡が1ヵ所残る。越州窯系青磁Ⅰ類。

瓦類

文字瓦 (27・28) 27はⅣ - 4類で、二重格子目に「安」銘の上部が観察される。28はⅧ類で斜格子目に「王」銘が観察される。

石製品

滑石製石鍋 (29) 口縁部の破片で、残存高4.0cmを測り、方形の耳が1ヵ所遺存する。A群。

225SE015黒灰色シルト出土遺物 (第26図、図版13)

黒色土器B類

小皿 (30) 口縁部から体部の破片で、残存高1.7cmを計測する。口縁内側に沈線を1条巡らし、器面は細かなミガキが密に施される。畿内系。

石製品

滑石製品 (31) 黒褐色を呈する滑石を素材とする。円盤状を呈していたものと推測され、中心部に円孔を穿っている。径10.0cm、円孔径0.8cm、中心での最大厚1.4cmに復原される。回転を与えての使用法が想定されるが、円孔はやや偏芯している。用途不明。

225SE015黒色粘土出土遺物 (第26図)

土師器

碗 c (32・33) 口径14.0~14.2cm、器高4.7~4.9cm、高台径7.0cmに復原される。

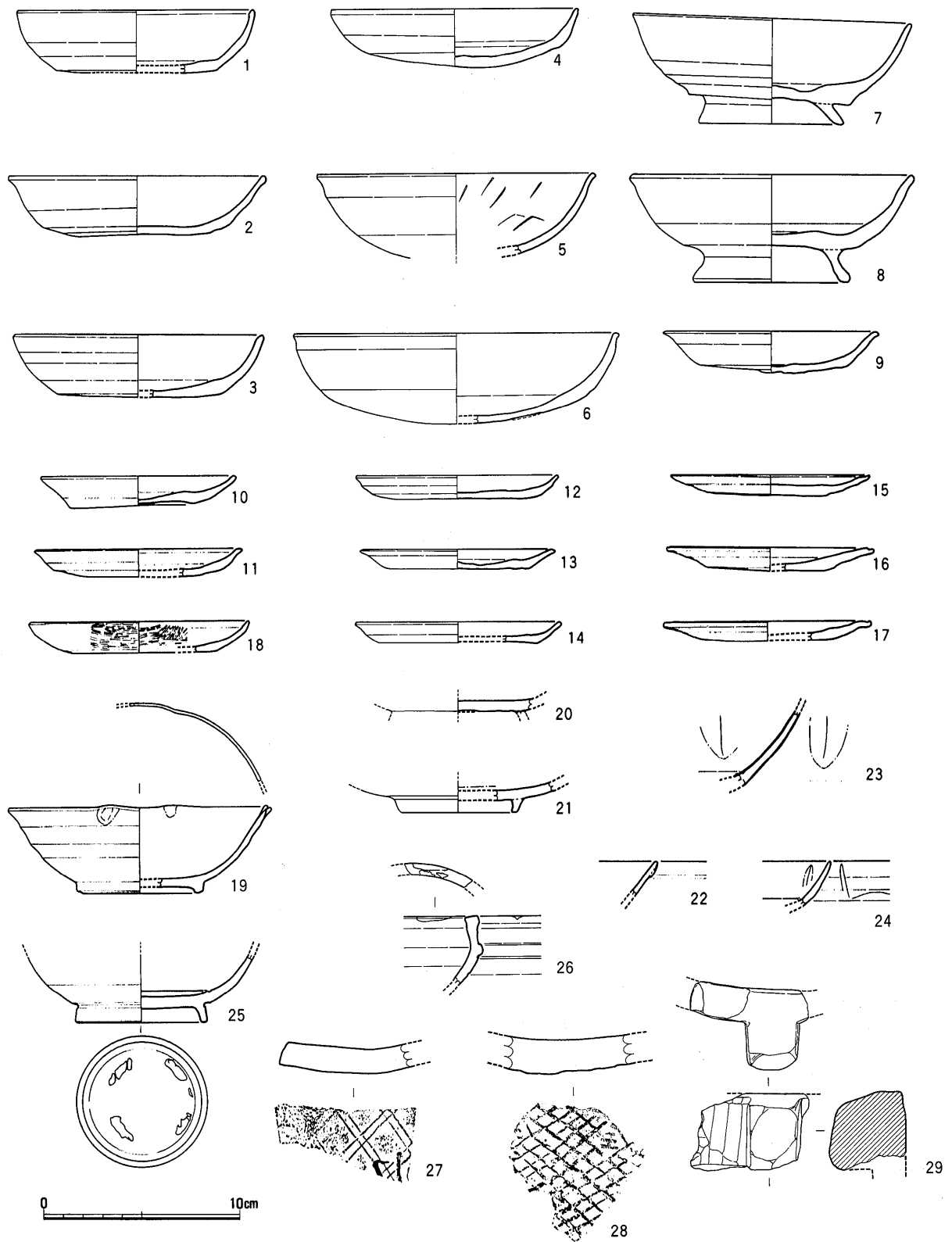
黒色土器B類

碗 c (34) 口径10.2cm、器高4.2cm、底径5.6cmに復原される。内外面をミガキ調整で仕上げる。

石製品

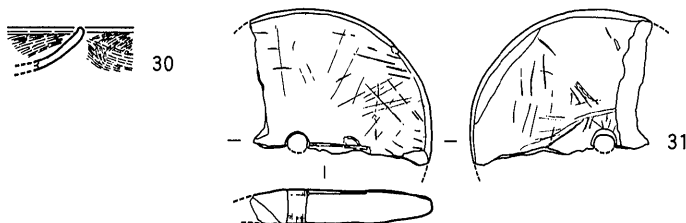
砥石 (35) 中粒の砂岩を素材とし、3面を使用する。表面には煤が付着する。残存規模10.0×15.6cm、厚さ5.5cmを測る。

225SE015黒灰色土

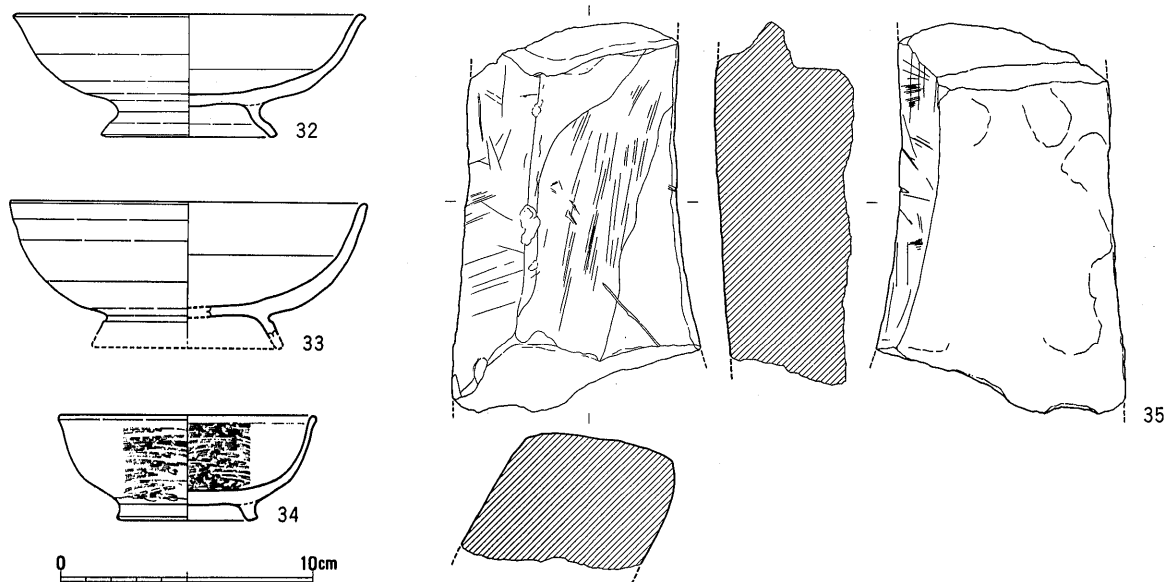


第25図 225SE015遺物実測図 (1) (1/3)

225SE015黒灰色シルト



225SE015黒色粘土



第26図 225SE015遺物実測図(2)(1/3)

225SE017暗灰色土出土遺物(第27図、図版13)

土師器

坏a(1) 口径12.6cm、器高2.4cm、底径9.0cmに復原される。底部切り離しは糸切り。

小皿a(2・3) 口径7.6~8.2cm、器高1.1~1.6cm、底径5.8~6.6cmを計測する。底部切り離しは糸切り。

黒色土器B類

硯(4) 硯尻の破片。側縁を上方へ緩やかに反らせ堤とし、縁辺には沈線を1条巡らせる。裏面には脚の痕跡が1カ所残る。器面には疎らなミガキ調整を加える。残存規模は3.0×3.5cm、残存高は1.3cmを測る。

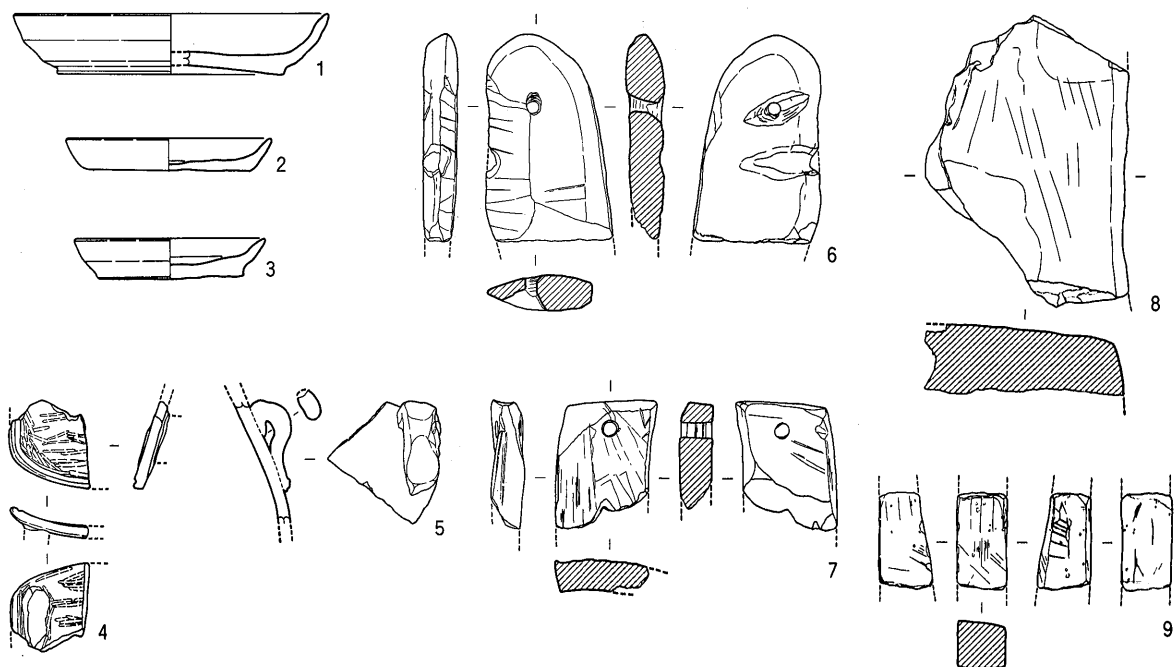
中国陶器

耳壺(5) 肩部の破片で縦耳が貼付される。残存高4.9cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、白色粒子を含有する。釉は緑灰色を呈する。

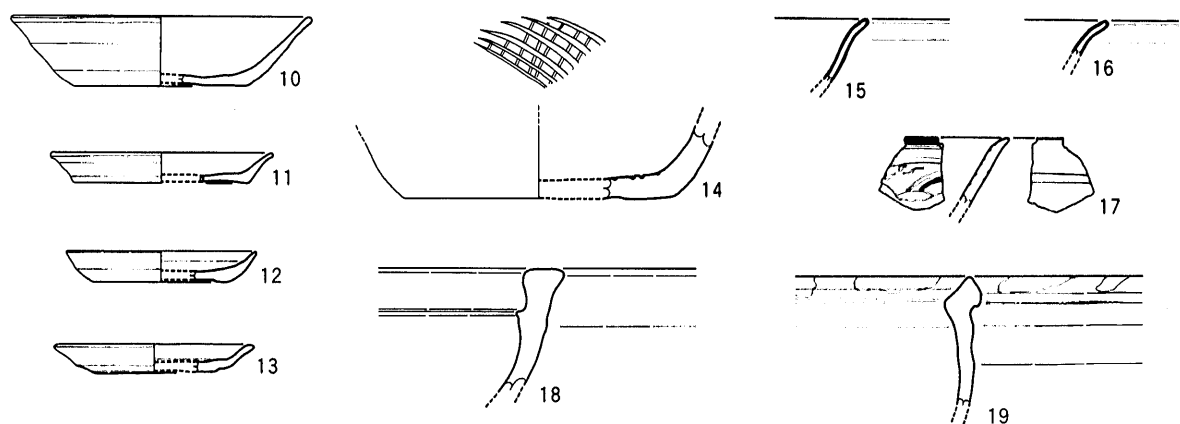
石製品

権(6・7) 6は緑灰色を呈する片岩系の石材。左側縁を刃部状に成形し、上部中央に円孔を穿つ。円孔の裏面側は大きく抉れている。残存長8.0cm、最大幅5.1cm、厚さ1.5cm、円孔径0.8cmを測り、重さ

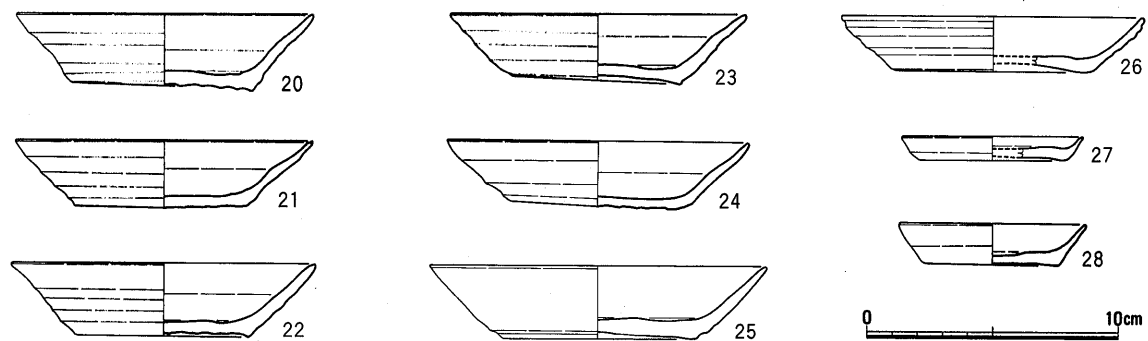
225SE017暗灰色土



225SE020茶色土



225SE020灰色土



第27图 225SE017遺物実測図、225SE020遺物実測図 (1) (1/3)

は90.5gを量る。

7は鐔付きの滑石製石鍋を転用したもので、鐔を削り取って短冊状に成形し、上部中央に円孔を穿つ。表面には石鍋使用時の煤が付着する。残存長5.0cm、最大幅4.1cm、厚さ1.4cmを測り、重さは40.0gを量る。

砥石(8・9) 8は砂岩を素材とし、2面を使用する。残存規模8.1×11.6cm、厚さ3.0cmを測る。

9は細粒砂岩を素材とし、4面を使用し、断面柱状を呈する。残存規模2.0×3.9cm、厚さ1.9cmを測る。

225SE020茶色土出土遺物(第27図、図版13)

土師器

坏a(10) 口径12.0cm、器高2.8cm、底径7.0cmを計測する。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。

小皿a(11~13) 口径7.6~8.8cm、器高1.1~1.2cm、底径4.8~7.0cmに復原される。底部切り離しは糸切りで、12には板状圧痕が観察される。13の胎土には雲母を多く含む。

国産陶器

卸皿(14) 底部から体部の破片。底径は10.6cmに復原され、残存高は2.9cmを測る。見込みに格子状の卸目を刻み、内外面に細貫入を生じる緑灰色の釉を施すが、剥落が著しい。胎土は灰色を呈し、砂味が強い。瀬戸産。

青磁

碗(15~17) いずれも口縁部から体部上半の破片。15、16は口縁部が外反し、端部を丸く収める。釉は内外面に厚めに施され、釉調は光沢質、失透気味で微少な気泡と細貫入を生じ緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈する。残存高は15が2.5cm、16が1.4cmを測る。いずれも高麗青磁と推定される。

17の口縁部は若干外反し、端部は尖る。内面には波濤状の文様と圏線、外面体部には2条の圏線が白色および黒色土で象嵌される。釉は失透気味で褐色を呈し、やや白濁。胎土は灰色を呈し、砂味が強い。残存高は2.8cmを測る。象嵌高麗青磁と考えられる。

中国陶器

鉢(18) 口縁部から体部上半の破片で、残存高は4.9cmを測る。I-2b類。

盤(19) 口縁部から体部上半の破片で、残存高は5.2cmを測る。I-2類。

225SE020灰色土出土遺物(第27・28図、図版13)

土師器

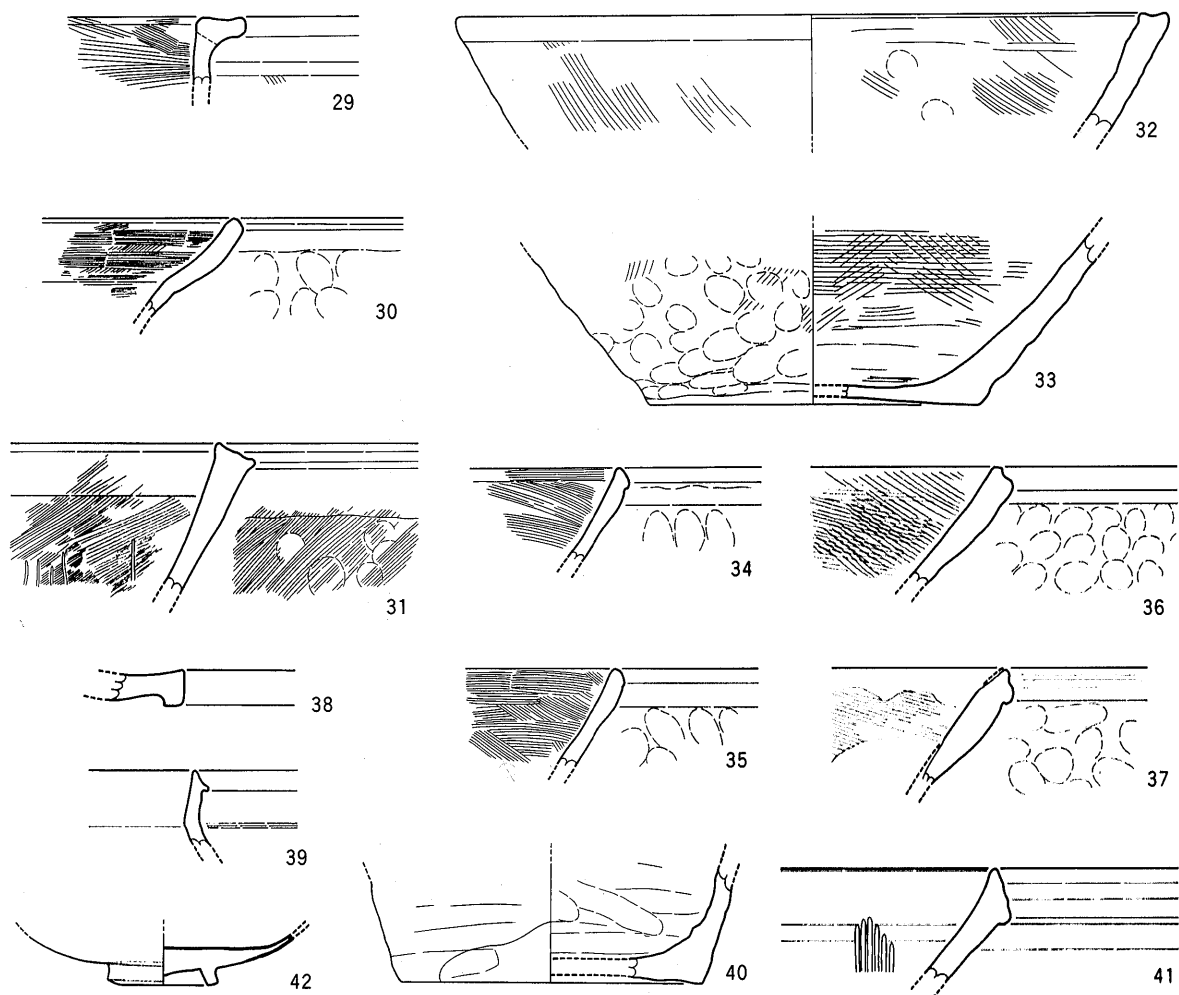
坏a(20~26) 口径11.8~13.4cm、器高2.2~3.1cm、底径6.7~7.7cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、板状圧痕が観察される。

小皿a(27) 口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.8cmに復原される。底部切り離し糸切りで、板状圧痕が観察される。

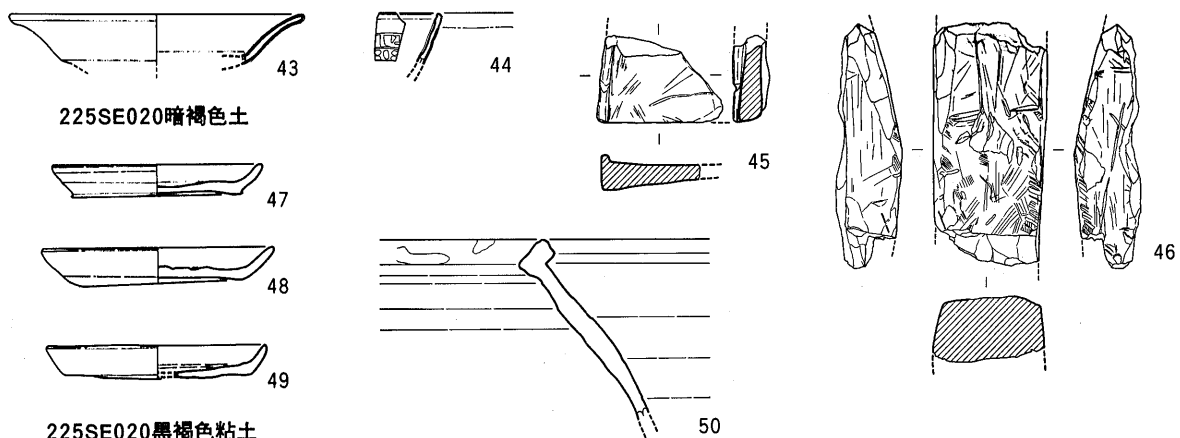
小皿b(28) 口径7.2cm、器高1.6cm、底径5.2cmに復原される。底部切り離し糸切りで、板状圧痕が観察される。

鍋(29・30) 29・30ともに口縁部から体部上半の破片。29は残存高2.7cmを測る。内面はハケ調整、口縁端部から外面はナデで仕上げ、口縁部を逆「L」字形に折り曲げる。30は残存高3.9cmを測り、外面は指頭調整、内面は横位のハケ調整。体部上半を外反させ、やや内彎気味に口縁部を作出し、端部を横ナデで丸く成形する。外面には口縁部を除き、煤が付着する。

225SE020灰色土



225SE020暗褐色土



225SE020黑褐色粘土



第28図 225SE020遺物実測図(2)(1/3)

土師質土器

播鉢 (31) 口縁部から体部上半の破片で、残存高6.0cmを測る。口縁部は横ナデで、端部を断面撥状に成形。外面は指頭調整の後、斜位のハケ目。内面も同様の調整を施した後、目の粗い播目を掻き上げるが、比較的下位でとどめる。胎土は硬質で角閃石をごく微量含有。外面には煤が付着する。

瓦質土器

鉢 (32~37) 32・34~37は口縁部から体部上半の破片で、33は底部から体部下半の破片。32の内面は指頭調整の後、斜位のハケ目。外面は斜位のハケ目。33の内面は横位から斜位のハケ目、外面は指頭調整の後、疎らなハケ目を施す。34~37は内面がハケ目、外面は指頭調整を施す。口縁部断面形は32が方形、34~37は端部を折り返して三角形に成形する。33の内面下半は使用による摩耗が著しい。34の器面は酸化焰焼成気味で赤褐色に、他は灰色から灰白色に発色する。32は口径28.4cmに復原され、残存高4.7cm、33は底径13.0cmに復原され、残存高6.9cm、34は残存高3.7cm、35は残存高3.9cm、36は残存高4.7cm、37は残存高4.5cmを測る。

火舎? (38) 口縁部の破片と推定される。残存高は1.4cmを測る。

国産陶器

壺 (39) 口縁部から頸部の破片で、残存高3.1cmを測る。口縁部は折り返される。常滑産。

瓶 (40) 底部および体部下半の破片。底径12.0cmに復原され、残存高は4.8cmを測る。内面は横位から斜位のナデ、外面ヘラケズリ調整される。胎土は灰色を呈し堅緻、緑灰色に発色する釉が体部上半に薄く掛かる。瀬戸産と類推される。

播鉢 (41) 口縁部から体部上半の破片。残存高4.5cmを測る。口縁部を断面三角形に成形する。内面は横ナデの後、播目を下から掻き上げる。胎土は赤褐色に発色し、粗い。備前産。

白磁

皿 (42) 高台から体部の破片。肉厚の高台を削り出す。釉は光沢質でやや青味がかかった白色を呈し、内面および体部下端まで厚めに施される。胎土は白色で堅緻。高台径4.4cm、残存高2.1cmを測る。B類。

青磁

皿 (43) 口縁部から体部上半の破片。口径11.8cmに復原され、残存高2.0cmを測る。底部から体部にかけて緩く屈曲し、口縁部は外反する。端部は丸く収める。濁化した釉は淡い緑灰色を呈し、厚く施しており、円形の釉切れがみられる。胎土は灰色で堅緻。黒色粒子を含有する。龍泉窯系青磁Ⅳ類。

青白磁

皿 (44) 口縁部から体部上半の破片。残存高2.0cmを測る。内面は型で浮文を打ち出す。釉は淡い水色を呈し、内外面に施釉した後、口縁部の小範囲を削り取る。露胎部は橙色に発色。

石製品

硯 (45) 滑石を素材とする破片。左側縁には小さな立ち上がりを削り出して堤とする。裏面は中央部を窪ませる。硯面は実測図上方へ傾斜し、左側縁も上方に向け幅を減じていることから、風字形もしくは馬蹄形状石硯の陸部分と類推される。残存部の規模は3.5×5.0cm、厚さ1.5cmを測る。

砥石 (46) 黒灰色を呈する粘板岩系の石材を用いる。表面両側面ともによく研磨され、裏面は座りをよくするためのごく簡単な研磨にとどめる。長さ9.7cm、幅4.6cm、厚さ2.7cmを測る。

225SE020暗褐色土出土遺物 (第28図)

土師器

小皿 a (47~49) 口径8.3~9.2cm、器高1.3~1.5cm、底径6.4~7.4cmに復原される。底部切り離し

は、いずれも糸切りで板状圧痕が観察される。

中国陶器

耳壺（50） 口縁から体部上半の破片。残存高7.2cmを測る。釉は光沢のない灰緑色に発色する。胎土は灰色緻密で暗紫色粒子を含有するが、微細な空隙を生じている。Ⅶ類。

225SE020黒褐色粘土出土遺物（第28図）

土師器

小皿 a（51） 口径9.1cm、器高1.5cm、底径7.0cmを計測する。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。

225SE021暗灰色土出土遺物（第29図）

瓦器

碗 c（1） 口径16.4cm、器高6.6cm、高台径6.8cmに復原される。口縁端部横ナデ、体部内外面はミガキ調整される。

青磁

水注（2） 体部の破片で、外面に刻みを入れた把手を貼付する。体部には横位の段を設け、その下に篋彫り縦線を施す。釉は灰緑色を呈し、胎土は緻密で、微量の黒色粒子を含有する。残存高3.2cmを測る。越州窯系青磁Ⅰ類。

225SE021灰色粘土出土遺物（第29図）

瓦器

碗 c（3） 口径16.8cm、器高5.2cm、高台径7.4cmに復原される。口縁端部横ナデ、体部内外面はミガキ調整され、煤が付着する。

225SE022灰色土出土遺物（第29図、図版14）

土師器

坏 a（4） 口径16.5cm、器高3.8cm、底径10.4cmに復原される。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が観察される。

土師質土器

鉢（5） 口縁部から体部上半の破片で、残存高は3.9cmを測る。口縁部横ナデ、体部内外面は回転ナデで仕上げられる。

国産陶器

甕（6） 口縁部から体部上半の破片で、残存高8.9cmを測る。口縁部を折り返し、玉縁状に整える。器面は茶褐色に発色、胎土は灰色を呈し、やや軟質で微小な空隙を生ずる。備前産。

白磁

摘み（7） 円筒形の基部に笠状の摘みを貼付する。高さ1.3cm、笠部径3.0cm、基部径1.5cmを測る。基部下端は静止糸切りとみられる。器面には化粧土を掛けた後、上面にのみ釉を施すが濁化が著しい。

中国陶器

水注？（8） 水注と類推される口縁部から体部上端の破片。口径8.0cmに復原され、残存高は4.3cmを測る。口縁部は折り返して偏平な玉縁状にする。頸部は比較的短く胴部上端には把手の一部と類推さ

れる粘土塊が貼付される。胎土は灰色を呈し、硬質緻密で、黒色・白色微粒子を多く含む。器面は灰色から暗赤褐色に発色する。未分類資料。

耳壺？（9） 体部の破片。縦耳が1ヵ所遺存し、体部には段を有する。釉は緑色を呈するが、内面は灰色味が強い。胎土は灰色を呈し、堅緻であり、暗紫灰色粒子を含有し微小な空隙を生じている。小破片のため器種認定が難しく、水注の可能性も考えられる。残存高は4.3cmを測る。未分類資料。

石製品

滑石製石鍋（10） 滑石製石鍋B群の口縁から体部上半の破片。転用が図られており、鐔下端の両端から切り込みを入れ、鐔の頂部にも切り込みを入れる。残存高6.4cm、幅3.9cm、厚さ1.3cmを測り、重さは74.5gを量る。

金属製品

銭貨（11・12） 11・12ともに皇宋通寶。11は篆書、12は真書で銭名を鋳込む。法量は「出土銭貨計測表」に掲載した。

225SE022黒褐色砂出土遺物（第29図）

土師質土器

火舎（13） 口縁部の破片。残存高2.7cmを測る。口縁部を逆「L」字形に折り曲げ、端部は上下に摘み出して肥厚させ、上部平坦面には巴文を押印する。器面には煤がまだらに付着する。

国産陶器

甕（14・15） 常滑産甕の口縁部破片。残存高は14が8.6cm、15が3.3cm測る。N字状口縁の縁帯幅から14は中野編年6 a 型式、15は同6 b 型式に比定される。

木製品

用途不明製品（16） 針葉樹と類推される板材を蒲鉾状に成形する。長さ6.2cm、幅8.1cm、厚さ1.3cmを測る。

225SE022黒灰色粘土出土遺物（第29図）

土師器

坏 a（17） 口径12.5cm、器高2.5cm、底径7.4cmに復原される。底部切り離し糸切りで、板状圧痕が観察される。

国産陶器

甕？（18） 胴部上半と推定した破片。残存高は5.1cmを測る。外面には斜格子と二重円内に十字を組み合わせた原体を押印する。内面は不定方向のナデ調整。胎土は白色粒子を多く含有し、やや軟質。器面は酸化焰焼成気味で、暗赤褐色に発色する。内面には油煙が葉脈状に付着している。

木製品

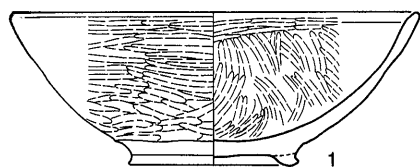
底板（19） 桶の底板と類推される。木取りは板目で、片面には黒色を呈する漆が塗布されている。長さ13.3cm、最大幅3.3cm、厚さ0.5cmを測る。

225SE023黒褐色土出土遺物（第30図、図版14）

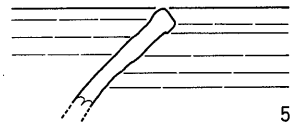
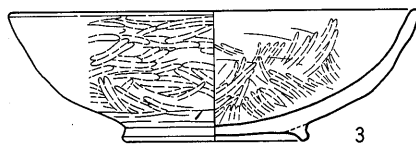
青磁

椀（1） 口縁部の破片で、残存高2.1cmを測る。内面には片篋彫りで劃花文を施す。龍泉窯系青磁Ⅰ－2類。

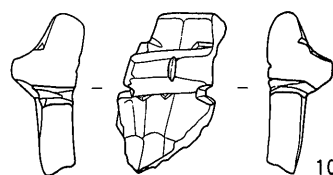
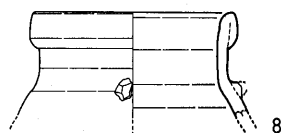
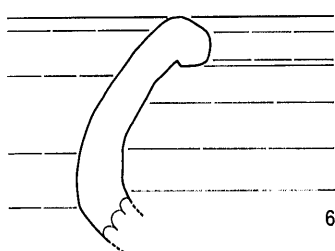
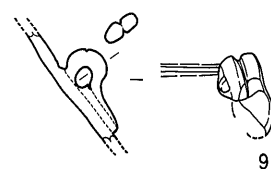
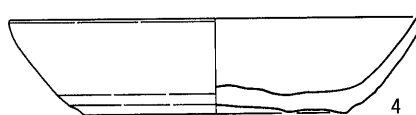
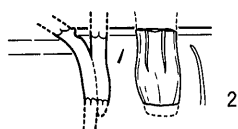
225SE021暗灰色土



225SE021灰色粘土



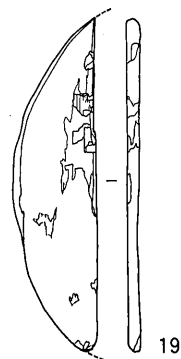
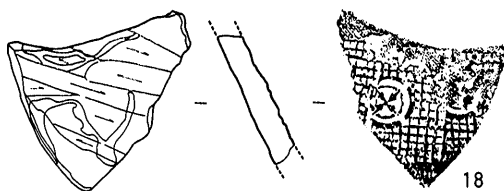
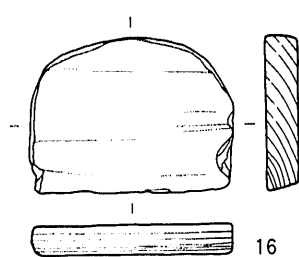
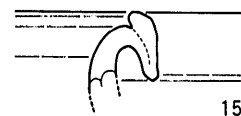
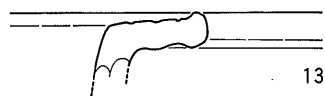
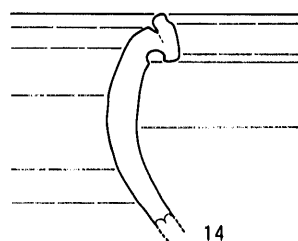
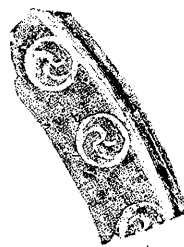
225SE022灰色土



225SE022黑褐色砂



0 2cm



225SE022黑灰色粘土



0 10cm

第29图 225SE021・022遺物実測図 (1~10・13~19—1/3、11・12—1/1)

中国陶器

耳壺（２） 肩部の破片で、残存高3.5cmを測る。段と印文の一部が観察される。Ⅳ－１類。

石製品

円盤状製品（３） 転用品で、鏝付きの滑石製石鍋を素材とする。鏝を削り取り円盤状に成形して、中心よりやや偏った位置に方孔を穿つ。径8.9～9.2cm、方孔は1.7×1.9cm、厚さ1.0～1.8cmを計測する。

225SE023暗褐色土出土遺物（第30図）

土師器

小皿 a（４・５） 口径8.4～8.5cm、器高1.2～1.35cm、底径6.6～6.7cmに復原される。底部切り離しは糸切りで、５には板状圧痕が観察される。

土製品

棒状製品（６） 断面方形を呈し、器面は丁寧なナデで仕上げられる。胎土は空隙が生じて粗く、小礫を多く含有する。用途不明。

225SE023灰色砂出土遺物（第30図、図版14）

土師器

小皿 c（７） 口径9.4cm、器高2.5cm、高台径7.0cmに復原される。

輸入陶磁器

壺（８） 類例から、イスラム陶器壺の胴部破片と考えられる。釉は外面が半透明で鮮やかな青緑色、内面は濁化した水色に発色する。厚く施釉されるが、素地との馴染みが悪く細貫入を生じ、剥離が著しい。淡黄灰色を呈する胎土は軟質で粉味が強く、極微小な空隙が入る。6.0×7.0cm大で残存高4.4cm、厚さ1.4cmを測る。

金属製品

鉤状製品（９） 鉄材を釣り針状に折り曲げ、基部に円環を作る。先端部は欠損。残存長4.3cmを測る。

225SE025暗褐色土出土遺物（第30図）

土師器

坏 a（10～12） 10は口径12.0cm、器高4.1cm、底径7.4cmを計測する。口縁部横ナデ、体部内外面は回転ナデ、底部はナデ調整が施され、切り離しは不明。口縁部内面と見込みに煤が薄く付着する。搬入品と考えられる。11は口径11.3cm、器高2.45cm、底径7.3cmを測り、12は口径11.0cm、器高2.3cm、底径8.2cmに復原され、ともに底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が観察される。

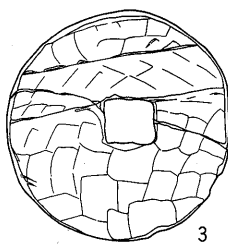
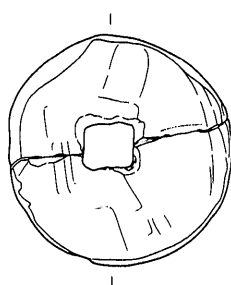
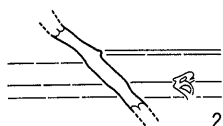
碗 c（13～15） 13は口径13.4cm、器高4.3cm、高台径7.4cm、14は口径12.2cm、器高4.2cm、高台径7.2cmに復原される。15は高台径7.2cmに復原され、残存高2.8cmを測る。14の内面にはミガキ b が観察される。

小皿 c（16） 口径11.4cm、器高2.2cm、高台径7.2cmに復原される。

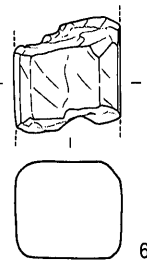
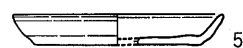
緑釉陶器

碗（17） 体部下半から高台の破片で、残存高2.1cmを測る。畳付内端を斜行させる高台を貼付け、内面見込み外周には段を持つ。胎土は灰色を呈し堅緻。釉は光沢質で暗緑色に発色し、内面見込みにトチン痕が観察される。近江産。

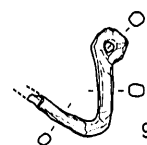
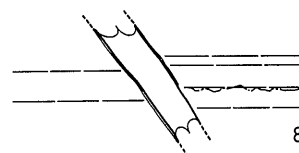
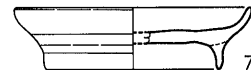
225SE023黒褐色土



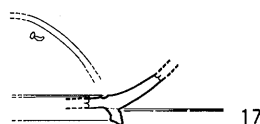
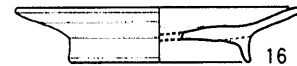
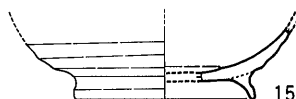
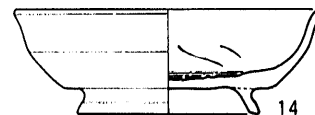
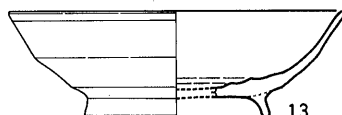
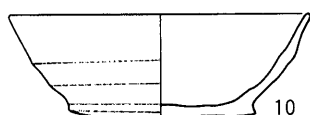
225SE023暗褐色土



225SE023灰色砂



225SE025暗褐色土



第30図 225SE023・025遺物実測図 (1/3)

225SE031黒褐色土出土遺物 (第31図)

土師器

坏 a (1～8) 口径10.2～11.9cm、器高2.0～2.3、底径6.8～7.8cmに復原される。底部切り離しはヘラ切りで、3と6には板状圧痕が観察される。1の底部外面には焼成前に一本線のヘラ描きが施される。2の底部中央には焼成後に径0.6cmの円孔が穿たれる。3の体部内面には煤が列点状に付着し、7の口縁部にも煤が付着する。

碗 c (9～13) 9は碗 c 1、10～13は碗 c 2となる。9は口径14.0cm、器高5.0cm、高台径7.4cmに復原される。10は口径15.2cm、器高5.6cm、高台径9.3cmに復原される。11～13は残存高2.9～3.2cm、高台径7.2～8.3cmを計測する。

小皿 a 2 (14) 口径15.0cm、器高2.6cm、底径9.3cmを計測する。底部切り離しはヘラ切り。

小皿 c (15・16) 15は口径12.9cm、器高2.1cm、高台径9.6cm、16は口径12.0cm、器高1.8cm、高台径7.7cmを計測する。

甕 a (17・18) 17は口縁部から体部上半の破片で、口径29.6cmに復原され、残存高7.6cmを計測する。口縁部内外面を横ナデ、体部外面には幅広のハケ目を縦位と横位に施す。内面はナデ調整。口縁端部には粘土粒が2カ所で貼り付き、外面には煤が付着する。

18は口径27.6cmに復原され、残存高14.3cmを計測する。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦位から横位のハケ目、内面は横位から斜位のハケ目を施す。

黒色土器B類

碗 c (19・20) 19は口縁部から底部の破片で、口径13.6cm、残存高4.6cmを測る。外面上半と内面下半に疎らなミガキが施される。20は口縁部を欠損する破片で、高台径7.2cmに復原される。残存高4.5cmを計測する。内外面に疎らなミガキが施される。

225SE031灰色土出土遺物 (第31図)

土師器

碗 c (21) 底部破片。高台径8.0cmに復原され、残存高2.1cmを測る。

須恵質土器

鉢 (22) 口縁部の破片。回転ナデで端部を玉縁状に仕上げる。篠窯産。

石製品

滑石製石鍋 (23) 滑石製石鍋の口縁部破片。転用が図られ、口縁直下に横位の刻みが巡る。残存高3.8cmを計測する。

225SE033暗灰色土出土遺物 (第32図、図版14)

土師器

坏 a (1) 口径13.0cm、器高2.3cm、底径8.4cmに復原され、底部切り離し糸切りと推定される。

小皿 a (2) 口径11.2cm、器高1.2cm、底径7.6cmに復原される。底部切り離しは糸切り。橙色に発色する胎土には雲母が多量に含まれる。

白磁

蓋 (3) 小壺の蓋と推定され、ほぼ完形。天蓋部には型による花文を打ち出す。裏面は横ナデで返りを摘み出し、指頭押圧で外周部を平坦にする。失透気味の釉を天蓋部に施す。径5.2cm、器高1.3cm、返り径2.2cmを測る

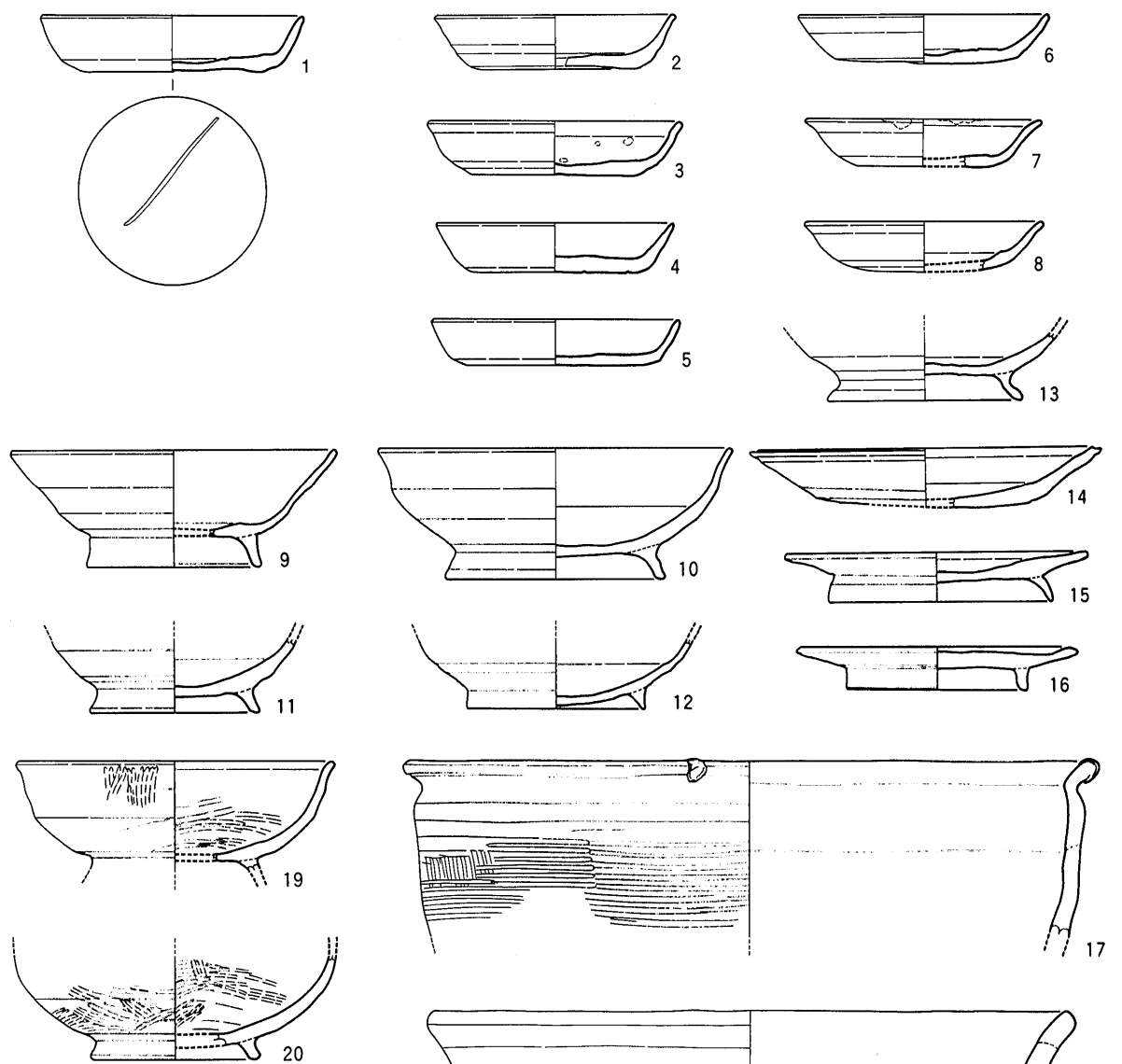
合子蓋 (4) 残存高1.3cmを測る。型押し成形で仕上げられる。淡い水色に発色し、細貫入を生じる釉を外面と内面天井部に施す。

225SE034暗褐色土出土遺物 (第32図、図版14)

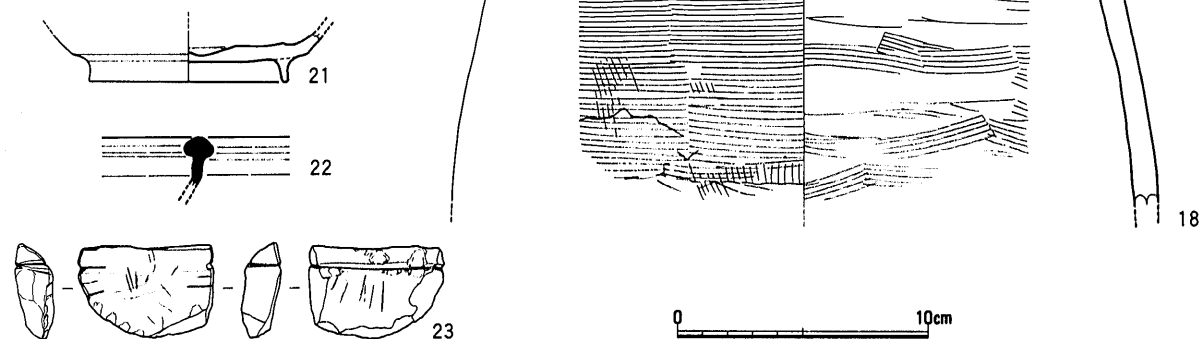
須恵器

小壺 (5) 口縁部から頸部の一部を欠損するが、他は遺存する。胎土に黒色粒子を含有する。口縁部から肩部にかけては回転ナデ、肩部以下は回転ヘラケズリを行う。底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を加える。口径5.4cmに復原され、器高9.2cm、底径6.2cmを計測する。本址より古相の資料か。

225SE031 黑褐色土



225SE031 灰色土



第31図 225SE031遺物実測図 (1/3)

土師器

坏 a (6~9) 口径12.2~13.0cm、器高3.2~4.0cm、底径6.4~7.5cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りで、6~8には板状圧痕が観察される。

碗 c (10~12) 10は口径14.1cm、器高4.4~4.9cm、高台径7.7cmを計測する。11は高台径9.8cm、残存高2.2cm、12は高台径9.0cm、残存高3.6cmを計測する。12の高台外面には煤が付着する。

小皿 a (13~15) 13は口径12.8cm、器高2.6cm、底径8.0cmに復原される。14は口径12.5cm、器高1.9cm、底径8.4cmを計測し、15は口径12.0cm、器高1.4cm、底径9.0cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り。

緑釉陶器

碗×皿 (16) 底部破片で、高台は貼付。高台径は8.0cmに復原され、残存高は1.3cmを測る。淡緑色に発色する釉を薄く施す。長門産と推定される。

白磁

碗 (17) 口縁部から体部上半の破片。小さな玉縁口縁を持つ。口径15.0cmに復原され、残存高3.1cmを計測する。I-1類。

青磁

蓋 (18) 天蓋部の破片で、残存高2.0cmを計測する。胎土は灰色を呈し、堅緻精良。緑灰色に発色する釉を薄く施す。越州窯系青磁I類。

石製品

スクレイパー (19) 輝石安山岩の剥片を素材とし、形状は中央にやや厚みを持つ半月状を呈する。二次加工は表裏に施され、刃部と考えられる左側縁の調整は表面からのみ行われる。縄文時代に比定される混入品。

225SE034青灰色粘土出土遺物 (第32図)

黒色土器A類

碗 c (20) 体部下半から底部の破片で残存高2.6cmを計測する。内面ミガキ、外面回転ナデ調整で仕上げられる。

225SE034褐色土出土遺物 (第32図)

土師器

坏 a (21) 口径12.0cm、器高3.5cm、底径7.1cmに復原される。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が観察される。

225SE034灰色砂出土遺物 (第32図)

土師器

坏 a (22) 口径12.2cm、器高3.9cm、底径7.2cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り。

225SE036褐色土出土遺物 (第33・34図、図版14)

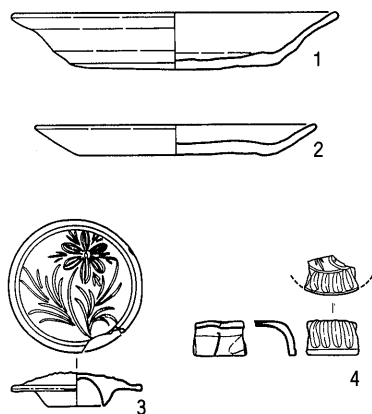
須恵器

小碗 c (1) 体部下半から底部の破片で高台径6.0cm、残存高2.4cmを測る。高台貼付後ナデ、体部内外面は回転ナデ調整で仕上げられる。胎土は明青灰色を呈し、やや堅緻。焼成は良好。

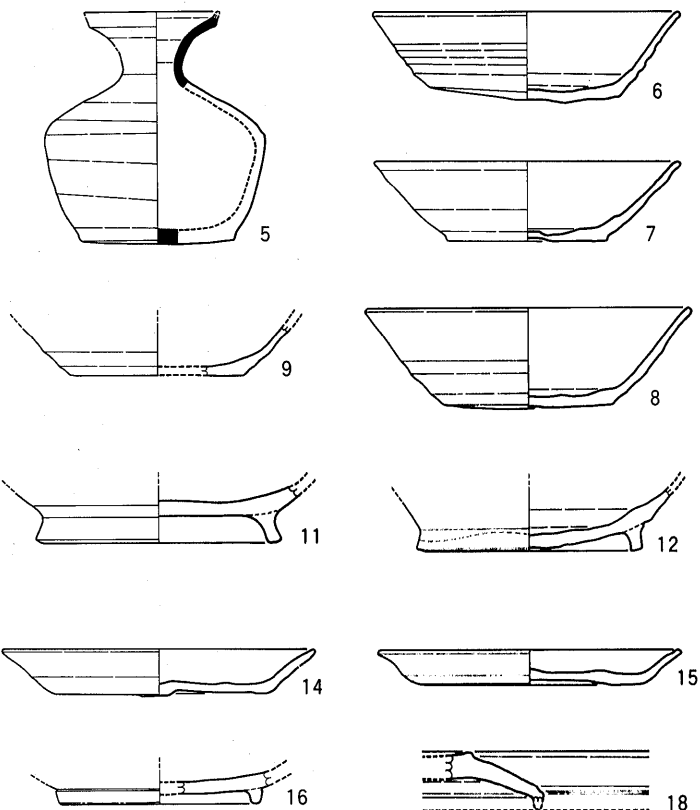
土師器

坏a (2~4) 2は口縁部から底部の細片で、残存高は3.1cmを測る。底部切り離しはヘラ切りと思われるが不明瞭。3・4は底部の破片で、3が底径8.0cmに復原され、残存高1.5cmを測る。4は底径7.1cm、残存高1.4cmを測る。底部切り離しはいずれもヘラ切りで、4には板状圧痕が観察される。

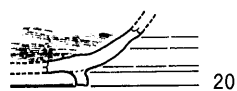
225SE033暗灰色土



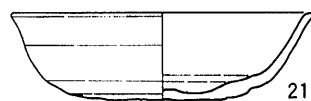
225SE034暗褐色土



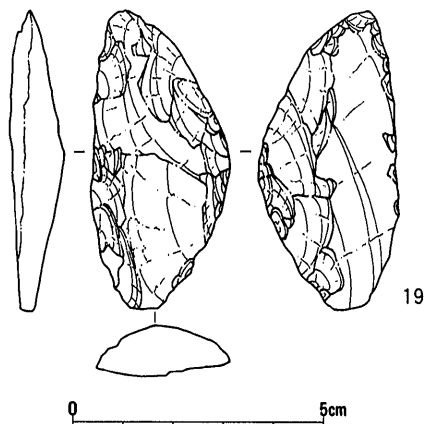
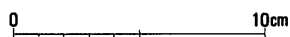
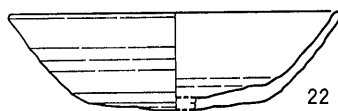
225SE034青灰色粘土



225SE034褐色土



225SE034灰色砂



第32図 225SE033・034遺物実測図 (1~18・20~22-1/3、19-2/3)

碗 c (5・6) いずれも体部下半から底部の破片で、高台径6.8～7.0cmに復原され、残存高2.2～2.6cmを測る。

黒色土器 A 類

碗 c (7・8) いずれも体部下半から底部の破片で、高台径8.6cmに復原され、残存高は2.7～2.9cmを測る。高台貼付後ナデ、体部外面回転ナデ、内面にはミガキが比較的密に施される。

緑釉陶器

碗×皿 (9) 体部下半から底部の破片で、高台径8.8cmに復原され、残存高は1.9cmを測る。糸切りの底部に高台を貼付け、内端部に段を有する。内面見込み外周には段を2段有する。釉は濃緑色に発色し全面に施す。胎土は灰色を呈し、堅緻。近江産。

灰釉陶器

碗 (10) 口径17.2cm、器高5.6cm、高台径8.3cmに復原される。体部内外面は回転ナデ、高台貼付後ナデを行った後、淡灰緑色に発色する釉を体部内面から外面高台脇付近まで漬け掛けする。

皿 (11・12) 11は底部破片で、高台径7.0cmに復原され、残存高は1.4cmを計測する。灰白色を呈する釉を体部内外面にハケ塗りする。12は口縁部の破片で、残存高は1.4cmを測る。段を有し、内面に緑灰色を呈する釉をハケ塗りする。

青磁

碗 (13) 輪状高台の外側を斜めにカットし、底部内面と高台畳付に三角形の目跡を持つ。口径16.2cm、器高5.6cm、底径6.2cmに復原される。越州窯系青磁 I - 2 a ウ類。

脚 (14) 胎土は灰白色を呈し、堅緻。器面には灰緑色に発色し、細貫入を生ずる釉を薄く施す。畳付は露胎で長門形の目跡が付く。底径10.0cmに復原され、残存高2.5cmを測る。越州窯系青磁 I 類。

壺×水注 (15) 口縁部破片で、器形は外反する。残存高は2.4cmを測る。胎土は青灰色を呈し堅緻であるが、芯はやや赤味がかかる。淡黄色の釉を器面に薄く施し、褐色を呈する釉を口縁部に上掛けする。長沙窯系青磁。

盤×鉢 (16) 口縁部破片で、残存高2.5cmを測る。口縁は玉縁状に肥厚させる。胎土はやや軟質で淡黄色を呈し、光沢質で浅黄色に発色する釉を薄く施す。長沙窯系青磁。

中国陶器

器種不明 (17) 口縁部の細片で、残存高1.6cmを測る。胎土は青灰色を呈し堅緻であるが、粒子が粗い。器面に施される釉は灰緑色から黒色に発色し、細貫入を生ずる。未分類資料。

瓦類

瓦玉 (18) 瓦を面取りして多面体を作る。2.0×2.0cmの規模を有する。

文字瓦 (19～22) 平瓦の凸面に斜格子文と「平井瓦」の陰刻を施す。I - 2 類。

鬼瓦 (23) 上半部の破片で、頂部は圭頭状を呈する。立体感に富む鬼面の眉が遺存し、憤怒の相が想像される。眉間には釘穴が観察され、外縁部には珠文が右側に6個、左側に7個遺存する。製作は型作りと考えられる。最大幅26.4cm、残存高13.9cm、厚みは5.5～9.5cm、釘穴径は開口部で1.7cmを測る。

軒丸瓦当 (24) 内区は複弁蓮華文、外区は珠文で4個が遺存する。

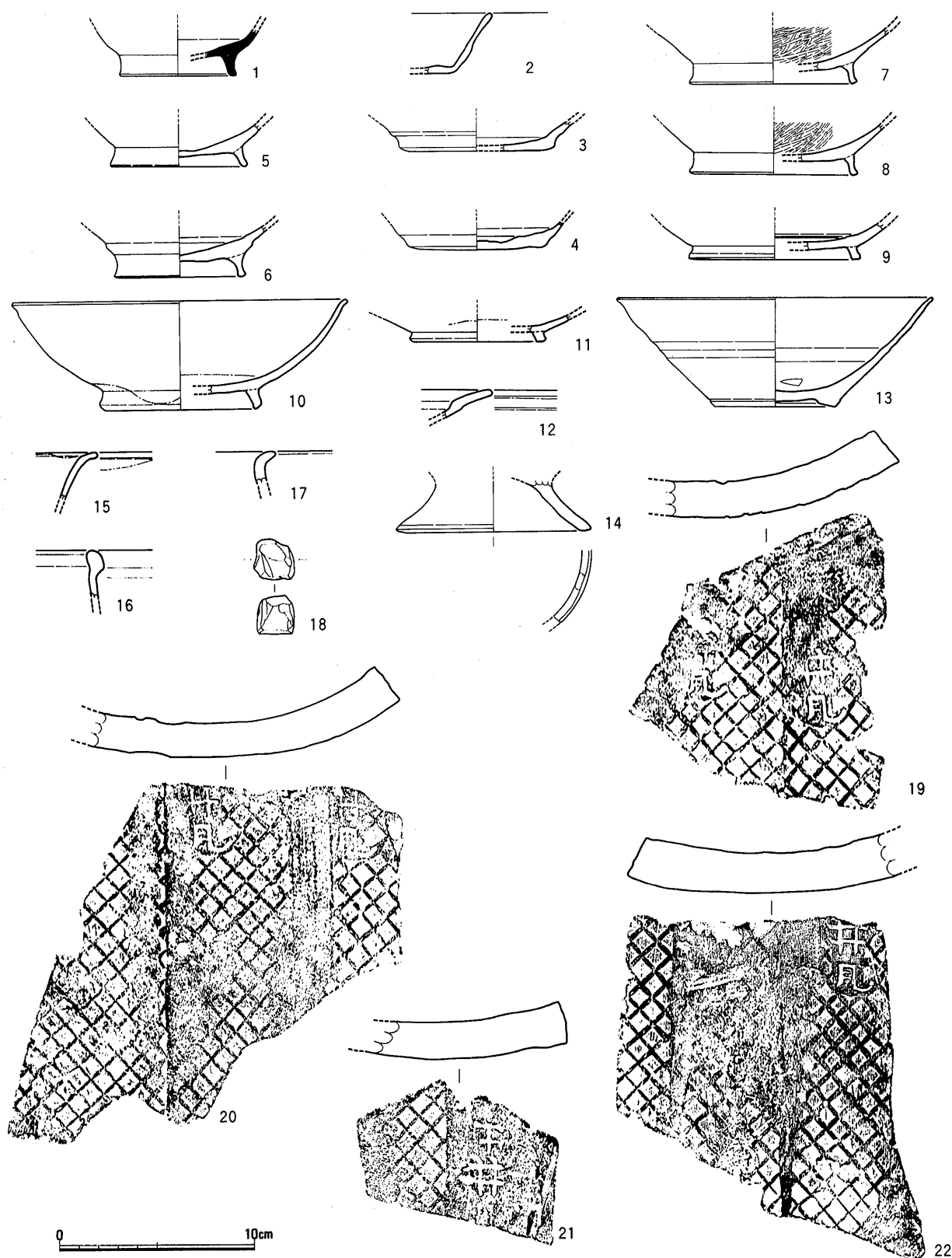
225SE036暗灰色土出土遺物 (第34図、図版15)

土師器

坏 a (25) 口径13.2cm、器高3.3cm、底径8.0cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り。

碗 c (26・27) 体部下半から底部の破片。26は高台径8.0cm、残存高2.9cm、27は高台径7.6cm、残存

225SE036褐色土



第33図 225SE036遺物実測図 (1) (1/3)

高2.9cmを計測する。

黒色土器A類

碗c(28) 体部下半から底部の破片。高台径8.2cmに復原され、残存高2.3cmを計測する。

須恵質土器

鉢(29・30) 29は体部下半から底部の破片。30は口縁から底部の破片。29は高台貼付、体部外面上半は回転ナデ、下半はヘラケズリ、内面は器面の摩耗が著しいが、ナデ調整が観察される。胎土は明青灰色を呈する。高台径13.0cmに復原され、残存高は5.0cmを測る。東海産か。

30は高台貼付、体部内外面は回転ナデ調整され、外面上位に断面三角形の凸帯を巡らす。胎土は暗青灰色を呈し堅緻、焼成は良好。口径25.0cm、高台径16.2cm、器高8.9cmに復原される。

灰釉陶器

碗(31) 体部から底部の破片で、高台径6.7cmに復原され、残存高は3.1cmを測る。口縁から体部は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後に高台を貼り付ける。緑灰色の釉を体部下端から高台、および内底面を除いて漬け掛けするが、釉が厚く溜まった箇所は濁化し乳白色を呈する。

青磁

蓋(32) 径10.2cmに復原され、残存高2.1cmを計測する。緑灰色の釉を外面に施す。胎土は青灰色を呈し堅緻だが、内面は重ね焼きの影響であろうか、黄褐色に発色する。下端には目跡が付着する。越州窯系青磁I類。

合子(33) 口縁から底部の破片。口径9.4cm、器高5.3cm、底径4.4cmに復原される。口縁受け部には目跡が6カ所遺存する。緑灰色の釉を器面に施す。本資料は上層の褐色土出土破片と接合した。越州窯系青磁I類。

その他の遺物

骨(R-016) イノシシの撓骨近位端(左)と、大型哺乳類の長骨骨幹である。

225SE036黒褐色土出土遺物(第35図、図版15)

土師器

坏a(34) 口径11.2cm、器高2.4~2.9cm、底径7.0cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が観察される。

碗c(35・36) 36は口径12.6cm、器高4.8cm、高台径7.3cm、37は口径14.6cm、器高5.0~5.2cm、高台径8.4cmを測る。

青磁

水注(37) 体部下半と類推される。緑灰色に発色する釉を内外面に施す。胎土は青灰色を呈し、堅緻。越州窯系青磁I類。

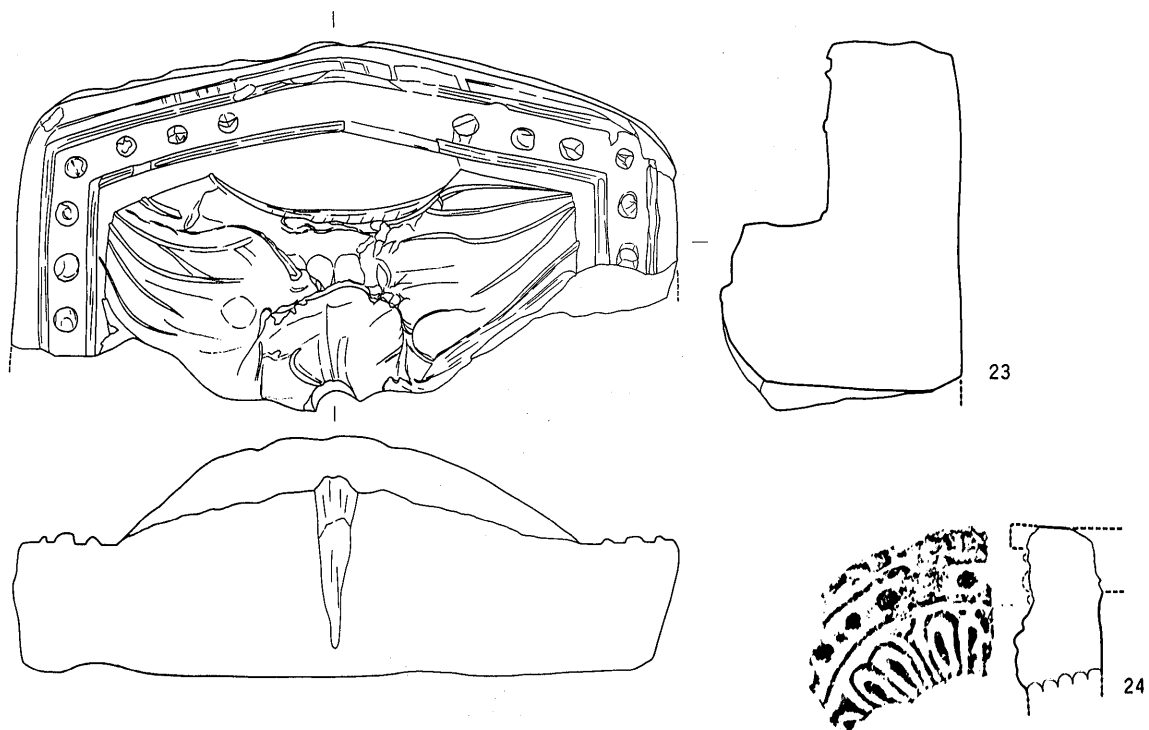
木製品

斎串(38・39) 38は針葉樹とみられる細長い板材の上端を圭頭状、下端は剣先状に尖らせる。両側面の左右対称位置を三角形に切り欠いた後、上端近くと中位側面の左右に切り込みを入れる。長さ25.4cm、最大幅1.8cm、厚さ0.2cmを計測する。39も斎串と類推される残片で、先端部を尖らせる。残存長12.6cm、最大幅1.6cm、厚さ0.15cmを計測する。

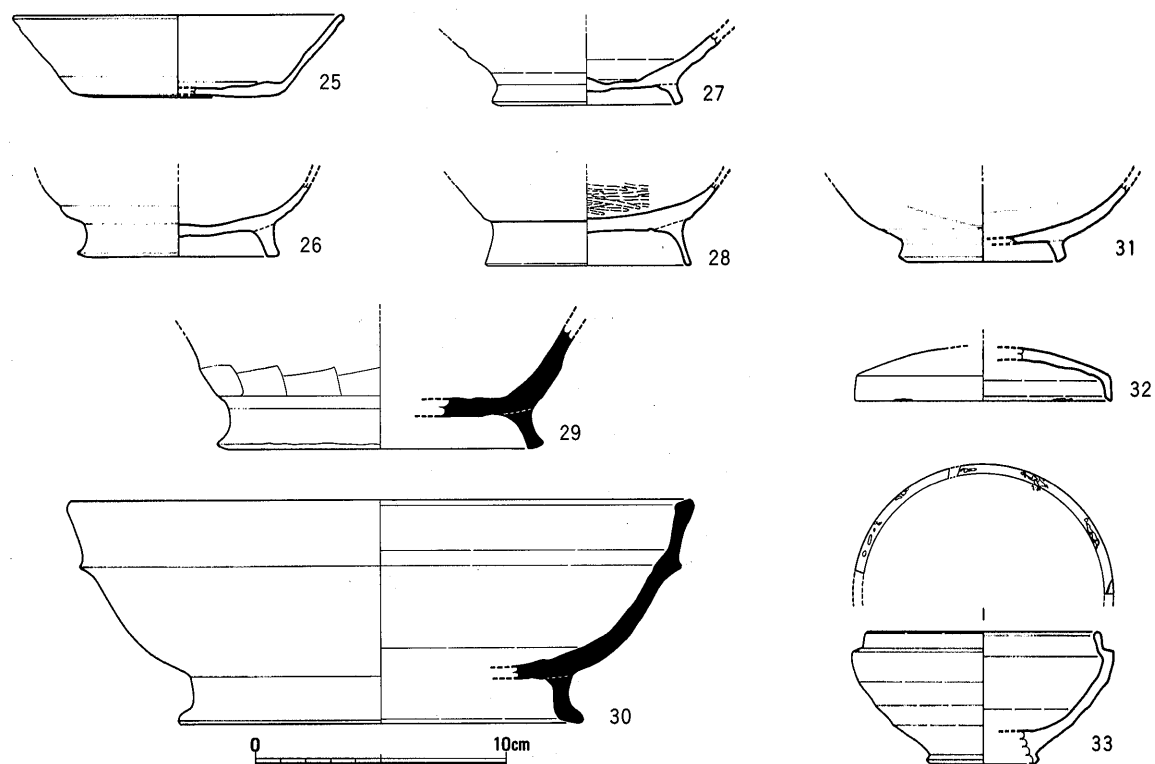
底板(40) 結桶の底板と類推される板材で、板目取りされる。残存長18.8cm、残存幅最大6.0cm、厚さ0.85cmを計測する。

櫛(41~44) いずれも挽歯式の横櫛。歯の挽き出し位置を決める切り通し線は、背の上縁に平行し

225SE036褐色土



225SE036暗灰色土



第34图 225SE036遺物実測図 (2) (1/3)

て直線的。歯の密度は非常に細かい。表面には漆が施され、光沢のある黒褐色を呈する。各遺物の規模は41は残存幅8.3cm、長さ4.4cm、背の厚さ1.15cm、42は残存幅7.3cm、長さ4.1cm、背の厚さ1.1cm、43は残存幅5.5cm、長さ3.3cm、背の厚さ0.8cm、44は残存幅2.6cm、長さ4.0cm、背の厚さ0.7cmを計測する。

225SE036暗黄褐色土出土遺物（第35図）

土師器

坏 a（45） 体部下端から底部の破片で、底径7.2cmに復原され、残存高は1.2cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。

碗 c（46） 体部下端から底部の破片で、残存高2.0cmを測る。

黒色土器 A 類

碗 c（47） 体部下端から底部の破片で、底径7.6cmに復原され、残存高は1.5cmを測る。内面には疎らなミガキが施される。

225SE047黒色粘土出土遺物（第35図）

土師器

小皿 a（48） 残存高1.25cmを計測し、底部切り離しは糸切り。

青磁

碗（49） 口縁部の破片で残存高2.0cmを測る。体部外面に蓮弁文を有し、暗緑色を呈する釉は気泡を多く生ずる。龍泉窯系青磁Ⅱ類。

225SE052暗褐色土出土遺物（第35図）

土師器

坏 a（50・51） 50は口縁部から体部下半の破片。口径16.4cmに復原され、残存高2.3cmを計測する。51は底部の破片、底径9.8cmに復原され、残存高は1.6cmを計測する。底部切り離しは糸切り。

小皿 a（52・53） 52は口径7.5cm、器高1.0cm、底径6.0cm、53は口径9.1cm、器高1.0cm、底径7.2cmに復原される。底部切り離しは糸切り。

須恵質土器

鉢（54） 体部下半から高台の破片。高台径12.0cmに復原され、残存高4.7cmを測る。体部外面はヘラケズリ調整、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。内面は使用により荒れている。胎土は灰色を呈し堅緻。東海産。

石製品

砥石（55） 細粒の砂岩を素材とし、1面が顕著に研磨される。5.05×5.4cm、厚さ1.7cmを計測する。

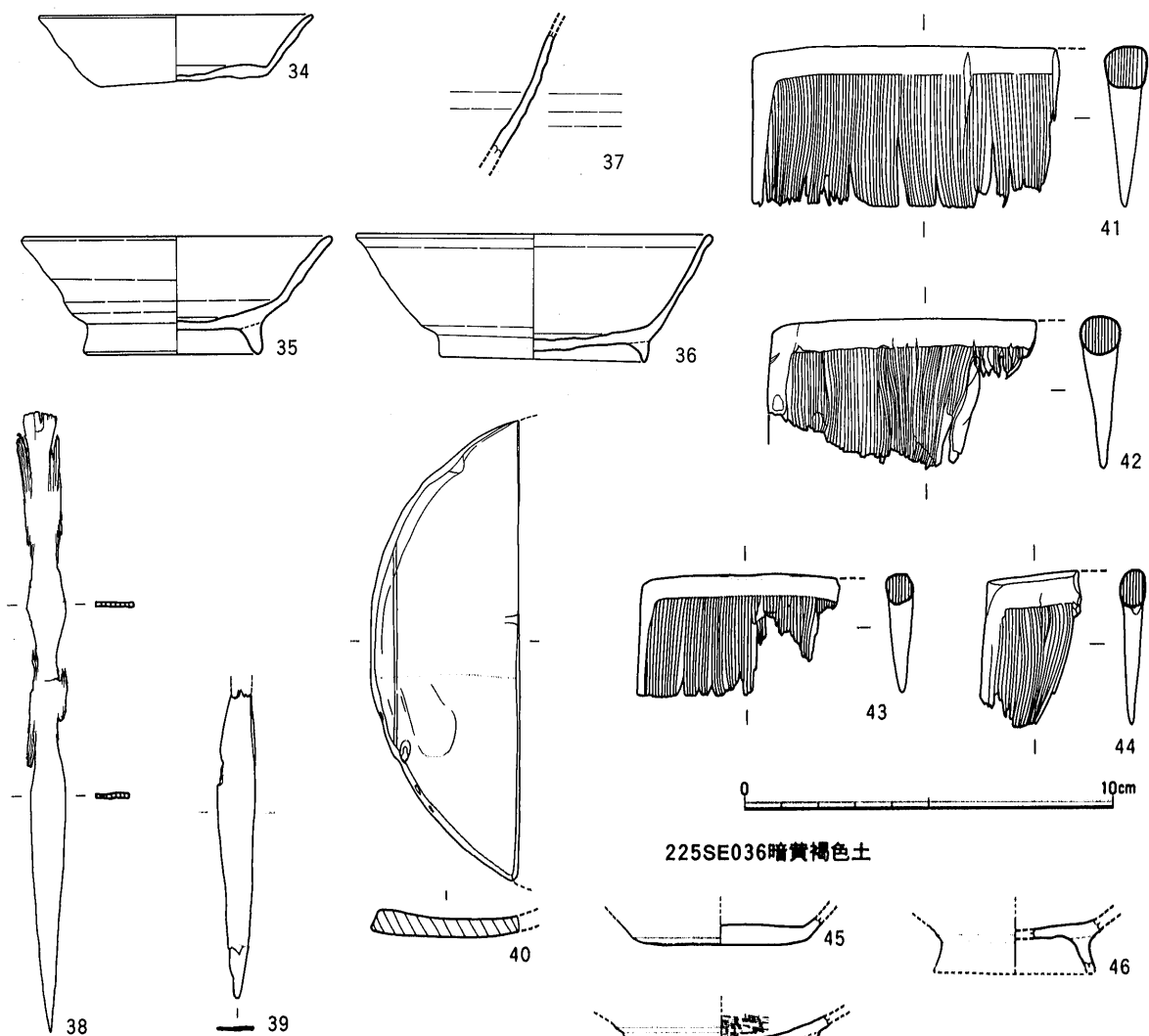
225SE056暗褐色土出土遺物（第36図、図版15）

土師器

坏 a × 皿 a（1） 体部下半から底部破片で、残存高1.2cmを測る。底部切り離しはヘラ切りで、煤が付着する。

碗 c（2～5） 2は碗 c 1、3は碗 c 2、他は不明。2は口径12.8cm、器高4.3cm、高台径8.2cmを計測し、内面口縁部付近には煤が付着する。3は口径13.6cm、残存高3.4cmを測る。4・5は体部下半から底部の破片で、4は高台径7.4cm、残存高1.8cm、5は高台径8.2cm、残存高2.1cmを計測する。

225SE036黒褐色土

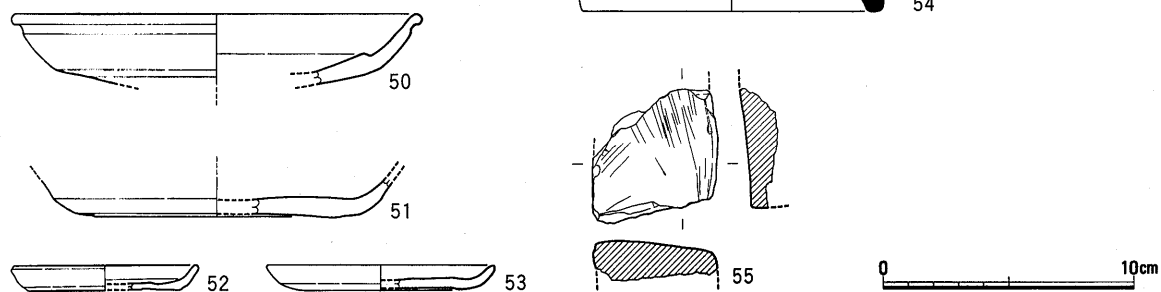


225SE036暗黄褐色土

225SE047黒色粘土



225SE052暗褐色土



第35図 225SE036遺物実測図(3)、225SE047・052遺物実測図(34~40・45~55—1/3、41~44—1/2)

鉢×鍋（6） 口縁部の破片で、残存高2.4cmを測る。内面は横位、外面は縦位のハケ目で調整され、口縁端部平坦面には縄が押捺される。

黒色土器A類

碗c（7） 体部下半から底部の破片で、残存高1.7cmを測る。高台貼付、外面は横ナデ、内面は細かなミガキを密に施す。畿内系。

黒色土器B類

碗（8） 口縁部から体部上半の破片で、残存高1.6cmを測る。ミガキが施されているものとみられるが、器面摩耗のため、不明瞭。畿内系か。

甕（9） 口縁部から体部上半の破片で、残存高1.8cmを測る。口縁部内外面横ナデ、内面下位にミガキ、外面下位は摩耗し、不明瞭。

緑釉陶器

碗（10） 体部下半から底部の破片で、残存高1.6cmを測る。高台は削り出しで、緑黄色に発色する釉を高台内を除いて施す。胎土は灰色を呈し、堅緻。京都産。

碗×皿（11） 底部の破片で、高台径6.4cmに復原され、残存高1.35cmを測る。底部回転糸切り後、畳付内端を斜行させる高台を貼り付ける。見込み外周には段を有する。光沢質で濃緑色に発色する釉を高台内を除き施す。近江産。

青磁

小碗（12） 口縁部から体部上半の破片、口径12.0cmに復原され、残存高は2.4cmを測る。口縁部内面から外面にかけて、灰色がかった水色に発色する釉を施す。胎土は黄灰色を呈し堅緻。長沙窯系青磁。

碗（13） 口縁部から体部下半にかけての破片で、残存高は4.8cmを測る。淡黄褐色に発色する釉を器面に施し、外面上位には褐色の釉を上掛けする。胎土は黄灰色を呈するが、やや赤味がかり堅緻。長沙窯系青磁。

石製品

滑石製品（14） 口縁部から体部下半の破片で、残存高8.0cm。内外面を切削し、口縁部断面を方形に仕上げる。石鍋の可能性はある。

225SE056黒褐色粘土出土遺物（第36図、図版15）

土師器

坏a（15） 口縁部から体部下半の破片で、口径11.6cmに復原され、残存高2.7cmを測る。

碗c（16） 体部下半から底部の破片で、高台径7.7cmに復原され、残存高1.9cmを測る。内外面に煤が付着する。

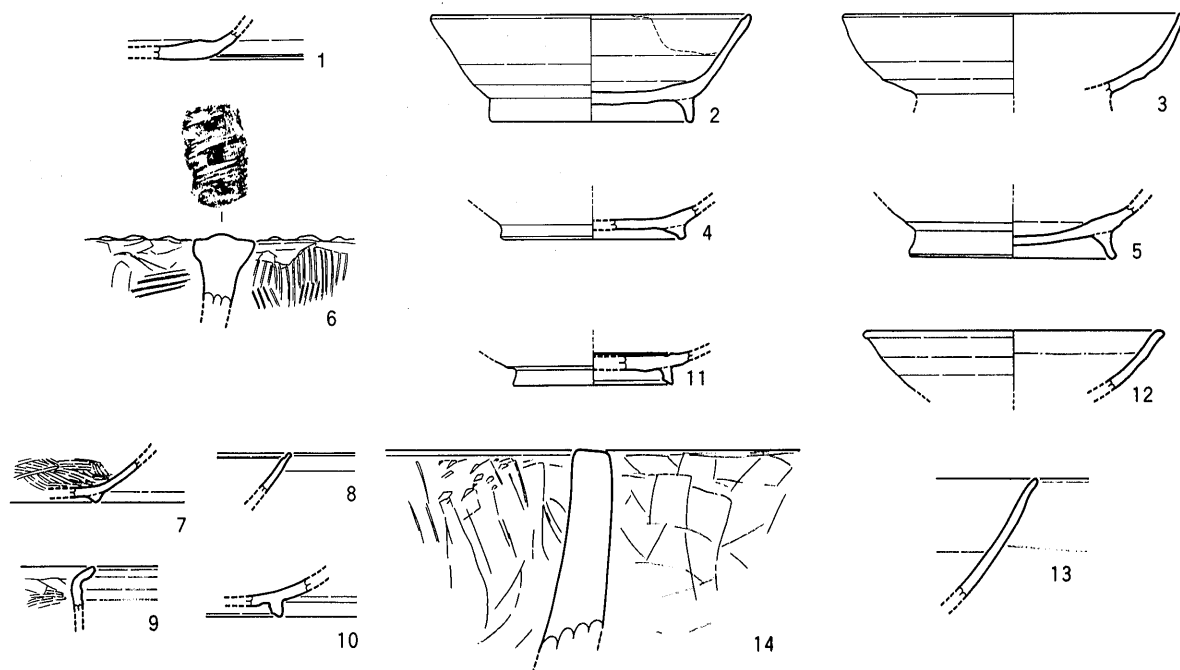
青磁

水注（17） 口縁部から肩部の破片で、口径8.4cmに復原され、残存高6.0cmを測る。頸部には偏平な把手が貼付される。光沢を失った釉は灰黄色を呈し、外面および内面頸部まで施される。胎土は灰黄褐色を呈し、堅緻。越州窯系青磁Ⅰ類。

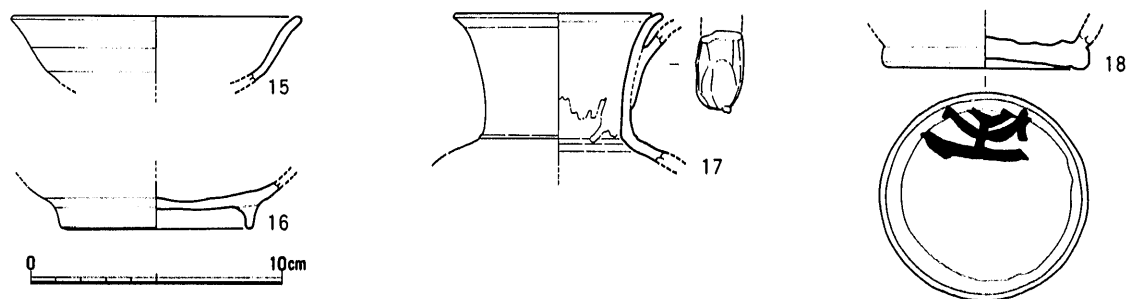
中国陶器

水注（18） X類の底部破片で、底径7.8cmを測る。外底面に墨書を施しているが、判読困難。

225SE056暗褐色土



225SE056黒褐色粘土



第36図 225SE056遺物実測図 (1/3)

2) 掘立柱建物出土遺物

225SB040暗褐色土 (第37図)

土師器

坏 a (1) 柱穴 j から出土。底部破片で、残存高1.0cmを測る。底部切り離しはヘラ切りと推測される。

碗 c (2) 柱穴 a から出土。高台部破片で、残存高1.7cmを測る。高台外面に煤が付着する。

緑釉陶器

碗×皿 (3) 柱穴 g から出土。口縁部破片で、残存高1.0cmを測る。淡緑色には発色する釉を薄く施す。京都産。

225SB070黄褐色土出土遺物 (第37図)

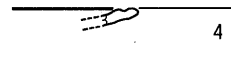
土師器

小皿 a 2 (4) 柱穴 b から出土。口縁部破片で、残存高0.7cmを測る。

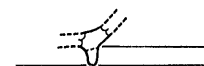
225SB040暗褐色土



225SB070黄褐色土

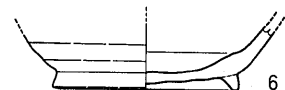


225SB070暗灰色土

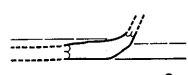


5

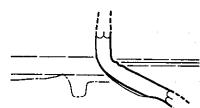
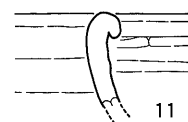
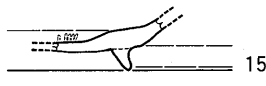
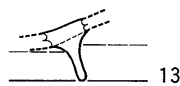
225SD001暗褐色土



225SD029暗褐色土



225SD035暗褐色土



0 10cm

第37図 225SB040・070、225SD001・029・035遺物実測図 (1/3)

225SB070暗灰色土出土遺物 (第37図)

土師器

碗 c (5) 柱穴 f から出土。底部破片で、残存高1.6cmを測る。器面は摩耗が著しい。

3) 溝出土遺物

225SD001暗褐色土出土遺物 (第37図)

土師器

碗 c (6) 底部破片で、高台径7.4cmに復原され、残存高2.4cmを測る。

青磁

碗 (7) 口縁部破片で、残存高2.1cmを測る。内面に花文の一部と類推される片彫が観察される。龍泉窯系青磁 I 類。

225SD029暗褐色土出土遺物 (第37図)

土師器

坏 a (8・9) いずれも底部破片で、残存高は 8 が1.5cm、9 が1.1cmを測る。底部切り離しは 8 がヘラ切り。9 も同様と推測される。

碗 c (10) 底部の破片で、高台径5.0cmに復原され、残存高1.3cmを測る。

甕 (11) 口縁部破片で、残存高3.8cm。内外面を横ナデ調整し、口縁部を折り返して玉縁状にする。

黒色土器 A 類

碗 (12) 口縁部の破片で、残存高1.7cmを測る。内面には比較的密なミガキを施す。

225SD035暗褐色土出土遺物 (第37図)

土師器

碗 c (13・14) いずれも底部破片で、残存高は13が2.5cm、14が2.0cmを測る。

黒色土器 A 類

碗 c (15・16) いずれも底部の破片で、内面に疎らなミガキが施される。15は残存高2.1cm、16は高台径9.0cm、残存高1.4cmを測る。

青磁

碗? (17) 口縁部の破片で、端部を丸く収める。緑黄色を呈し、細貫入を生ずる釉を内外に薄く施す。胎土は灰白色を呈し、やや軟質。長沙窯系青磁と類推される。

中国陶器

壺 (18) 頸部から肩部の資料。胎土は灰色を基調として褐色粒子を含有するが、内面側は酸化焰焼成気味で淡橙色に発色する。釉は緑黄色で、内面には濁化した釉垂れが観察される。

4) 土坑出土遺物

225SK004暗灰色土出土遺物 (第38図)

土師器

小皿 a (1・2) 口径9.2cm、器高1.1cm、底径7.0cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切り。1の底部には切り離し後の板状圧痕が観察される。

225SK012黒褐色土出土遺物 (第38図)

土師器

坏 a (3～5) 口径13.0～14.2cm、器高2.2～2.7cm、底径9.2～9.8cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、切り離し後の板状圧痕が観察される。

小皿 a (6～10) 口径8.0～8.6cm、器高0.9～1.4cm、底径5.7～7.2cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、6を除き、切り離し後の板状圧痕が観察される。8の口縁部には油煙が付着する。

中国陶器

水注 (11) 口縁部から頸部の破片。口径11.2cmに復原され、残存高は7.6cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、暗紫色粒子を含有する。釉は暗茶色に発色する。Ⅱ類か。

225SK013暗褐色土出土遺物 (第38図)

土師器

坏 a (12・13) 口径11.8～12.2cm、器高2.6～3.1cm、底径6.6～7.0cmに復原される。底部切り離しはいずれも糸切り。12の体部外面下半には煤が薄く付着する。

小皿 a (14～19) 口径7.4～8.8cm、器高1.0～1.4cm、底径5.0～6.8cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、16～18の底部には切り離し後の板状圧痕が観察され、19の内面には煤が付着する。

瓦質土器

鉢 (20) 口縁部の破片で残存高3.8cmを測る。外面不定方向のナデ、口縁端部横ナデ、内面は横位から斜位のハケ調整を行う。焼成良好。

225SK016黒色土出土遺物 (第38図)

土師器

坏 a (21～26) 口径12.0～12.8cm、器高2.5～3.0cm、底径7.3～8.6cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、26を除いて底部に切り離し後の板状圧痕が観察される。

小皿 a (27~30) 口径7.6~8.6cm、器高1.4cm、底径5.8~6.2cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、29を除いて底部に切り離し後の板状圧痕が観察される。27の器面には煤が付着する。

小皿 b (31・32) 口径6.7~7.0cm、器高1.7~1.8cm、底径4.5~4.8cmを計測する。底部には板状圧痕が観察される。

鍋 (33) 口縁部の破片で、残存高1.0cmを測る。横ナデの後に口縁上端の平坦面に縄を押捺する。

青白磁

梅瓶 (34) 体部の細片で、外面には渦文を施し、内面には強いロクロ目が観察される。光沢質で、明青灰色を呈する釉を内外面に施す。釉は細貫入を生ずる。

中国陶器

椀 (35) 天目椀の口縁部から体部下半の破片で、残存高4.1cmを測る。鉄化粧を施した後、茶色から漆黒色に発色する釉を厚く掛ける。胎土は堅緻で、灰色を呈し微少な空隙を生じている。

225SK018暗褐色土出土遺物 (第38図、図版16)

土師器

小皿 a (36・37) 口径8.2~8.4cm、器高1.1cm、底径6.8cmを計測する。底部は糸切り離し。

青磁

椀 (38) 口縁部から体部上半の破片で、残存高3.7cmを測る。外面には太い片彫り縦線。内面は片彫りで圈線と細密な櫛描文を施す。釉は半光沢で黄緑色に発色する。胎土は堅緻で、灰白色を呈する。初期龍泉・同安窯系青磁0類と考えられ、本址の時期より古相の資料である。

225SK019黒色土出土遺物 (第39図)

土師器

小皿 a (1~3) 口径7.4~10.0cm、器高1.1~1.2cm、底径5.6~7.6cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、1には底部切り離し後の板状圧痕が観察される。

白磁

皿 (4) 口径12.2cm、器高3.15cm、底径7.5cmに復原される。口縁端部以外全面施釉される。IX-1類。

石製品

滑石製石鍋 (5) 口縁部から体部上半の破片で、残存高4.1cmを測る。内面には煤が付着する。B群。

225SK032黒色土出土遺物 (第39図)

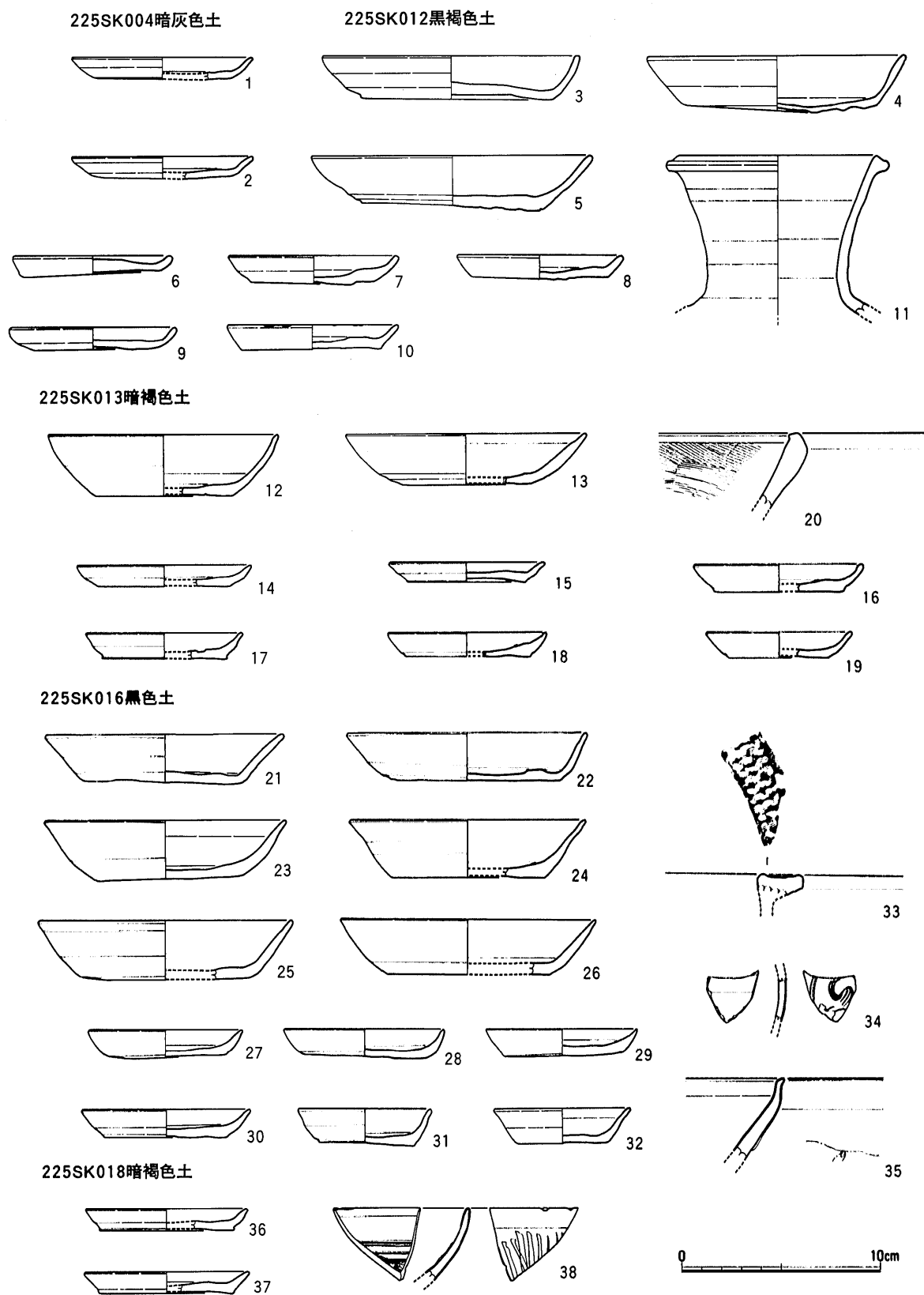
土師器

坏 a (6~8) 口径12.2~12.4cm、器高2.4~2.9cm、底径7.2~8.6cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、板状圧痕が観察される。6は器形が歪んでいる。

小皿 a (9~11) 口径8.6~8.8cm、器高1.1~1.4cm、底径6.8~7.0cmを計測する。底部切り離しはいずれも糸切りで、9・11には切り離し後の板状圧痕が観察される。

土師質土器

鉢 (12・13) 12は口縁部の破片で、残存高3.7cmを計測し、13は口縁部から体部上半の破片で、口径24.0cmに復原され、残存高は7.7cmを計測する。12は器面を横ナデ調整で仕上げ、口縁を歪めて片口を作り出す。外面には煤が付着する。13は外面が指頭調整の後に縦位のハケ調整、内面を横位から斜位のハケ調整、口縁部を横ナデする。

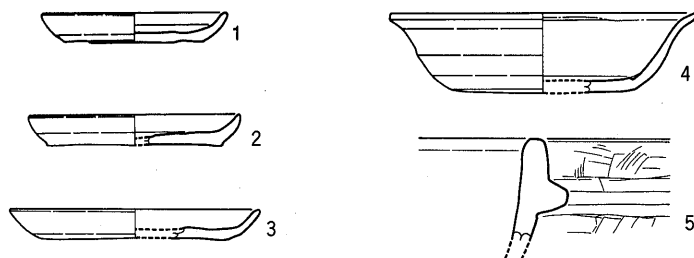


第38図 225SK004・012・013・016・018遺物実測図 (1/3)

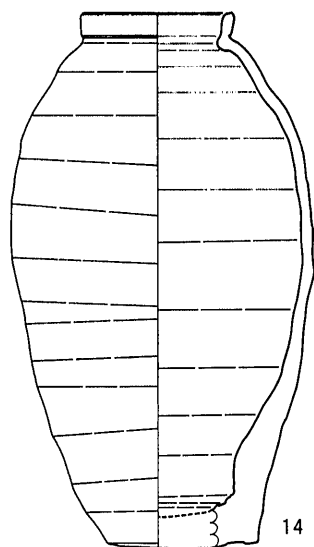
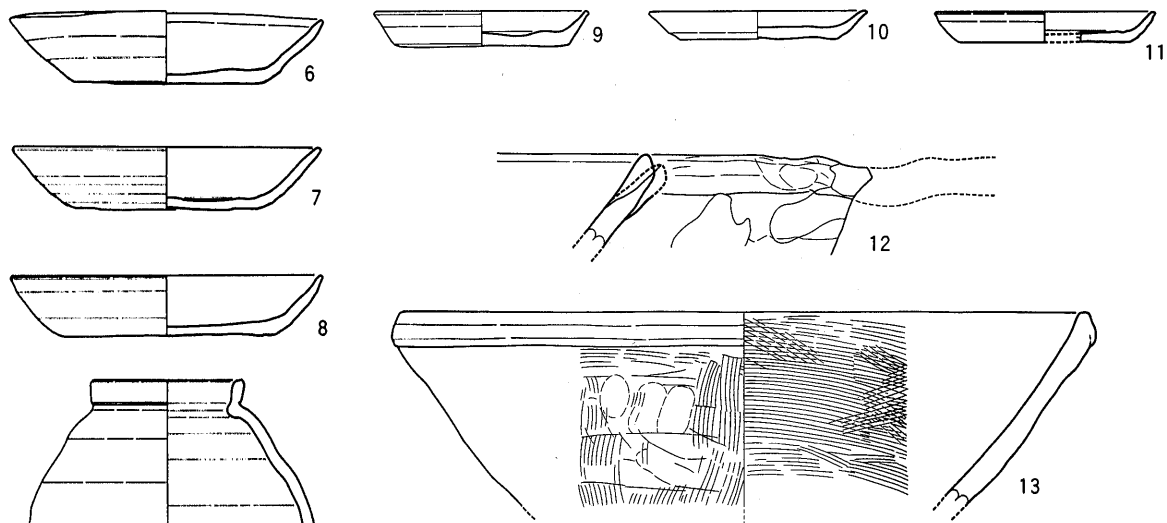
中国陶器

壺（14） 口縁部から底部まで $\frac{2}{3}$ 程度が遺存する資料で、225SE022灰色土および黒褐色砂出土破片と接合した。口径6.1cm、器高21.3cmを計測し、底径は6.0cmに復原される。短い頸部から口縁部を屈折させる器形で、胴部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ調整される。胎土は褐色がかった灰色を呈し、硬質緻密で黒色・白色粒子を含有する。釉は暗赤褐色に発色する。IV類。

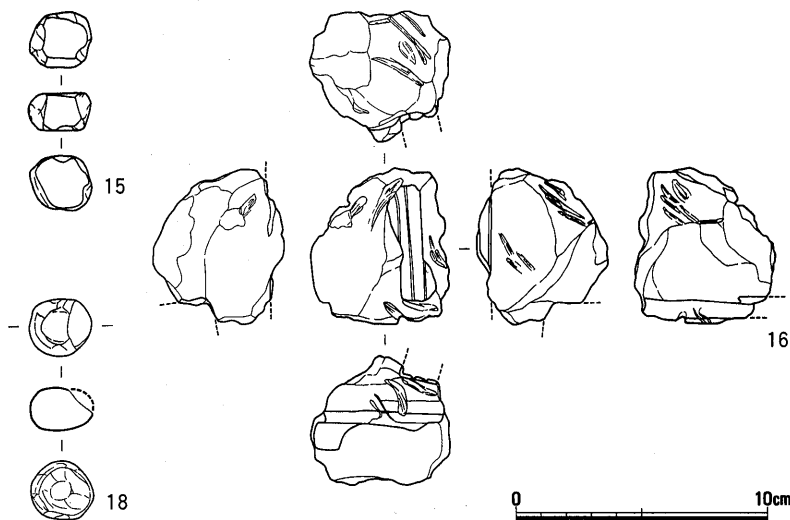
225SK019黒色土



225SK032黒色土



225SK038灰色土



0 10cm

第39図 225SK019・032・038遺物実測図 (1/3)

土製品

玉（15） 径2.3～2.5cm、厚さ1.5cmを計測する。土師質の器物を研磨し略円柱状に仕上げる。

焼土塊（16） 拳大の大きさで、直交する骨材の痕跡が観察される。

225SK038灰色土出土遺物（第39図）

中国陶器

瓶×小壺（17） 瓶あるいは小壺の底部と推定される破片で、底径は5.0cmに復原され、残存高は3.1cmを測る。胎土は灰色を基調とするが、内面側は酸化焰焼成気味で淡橙色に発色する。底部はヘラケズリ調整され、釉は灰緑色に発色する。

土製品

玉（18） 粘土塊をナデて、玉状に成形する。径2.3～2.5cm、厚さ1.7cmを測る。

5）整地出土遺物

225SX050暗褐色土出土遺物（第40図、図版16）

土師器

坏a（1） 口径10.6cm、器高3.1cm、底径7.6cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り。

碗c（2） 体部下半から底部の破片で、高台径8.0cmに復原され、残存高1.9cmを計測する。

黒色土器A類

碗c（3） 体部下半から底部の破片で、残存高2.7cmを計測する。内面には疎らなミガキを施す。

黒色土器B類

壺×甕（4） 口縁部の破片で、残存高2.15cmを測る。口縁部は外反し、内面はナデ、外面は横ナデ調整で仕上げられる。体部には円形と想像される孔が焼成前に穿たれ、胎土には雲母が多く含まれる。

石製品

石匙（5） 刃部が摘みに直行する横形の石匙である。輝石安山岩のやや大形の剥片を素材としたものと考えられ、二次加工は表裏面からの細かな調整剥離によって刃部が作出される。摘み部は抉り状の二次加工によって顕著に作り出されている。縄文時代の所産であり、混入品。

225SX055暗褐色土出土遺物（第40図、図版16）

土師器

碗c（6） 口縁部から底部の破片で、口径16.0cm、器高5.8cm、高台径6.8cmに復原される。胎土には赤色粒子を多く含む。

緑釉陶器

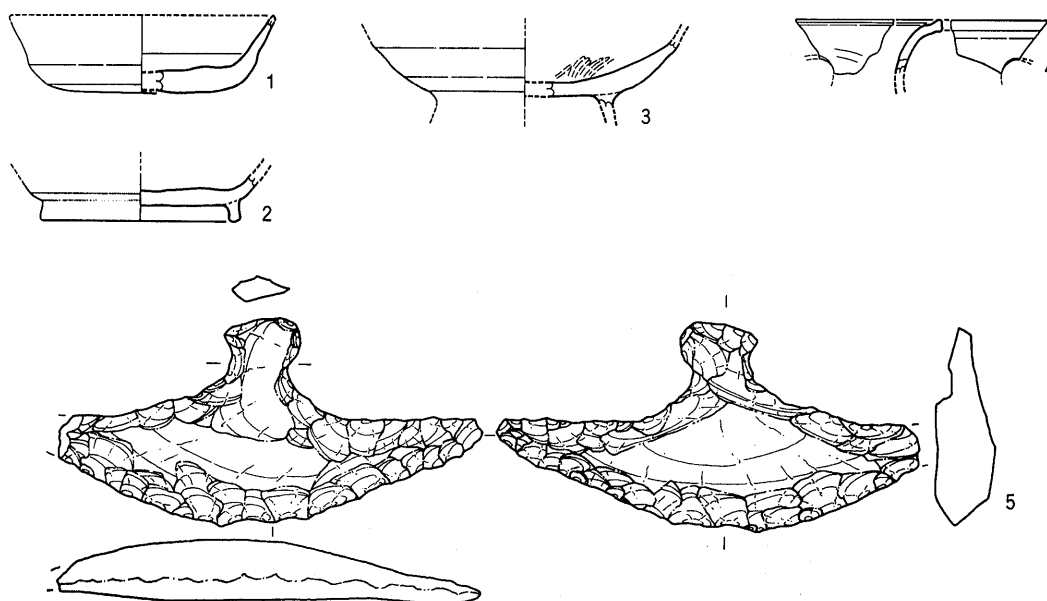
皿（7） 口縁部から体部上半の破片で、残存高1.2cmを測る。器面には淡緑色の釉を薄く施す。胎土は黄橙色を呈する。京都産と考えられる。

石製品

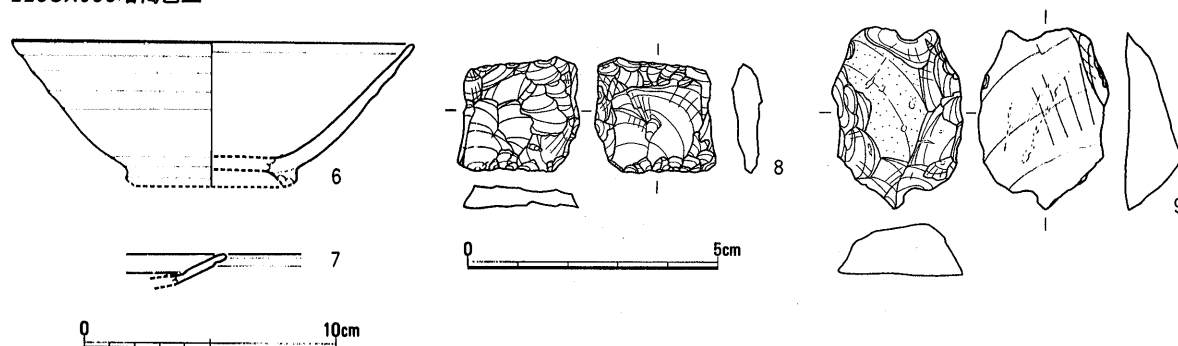
楔形石器（8） 黒曜石の剥片を素材としたものと考えられ、両極打法による二次加工が上下両端から施される。

スクレイパー（9） 黒曜石のやや厚みを持つ剥片を素材とするもので、二次加工は素材をほぼ全周する。主体となる刃部は厚みを持つ下端部と考えられ、全体の形状からエンド・スクレイパーの範疇に属するものと推測される。

225SX050暗褐色土



225SX055暗褐色土



第40図 225SX050・055遺物実測図（1～4・6・7—1/3、5・8・9—2/3）

6）流路出土遺物

225SD060暗灰色砂出土遺物（第41図、図版16）

弥生土器

甕（1） 口径27.0cmに復原され、残存高9.2cmを測る。器面調整は口縁部が横ナデ、体部内面は指頭調整後ナデ、体部外面は摩耗が著しく不明瞭。須玖式。

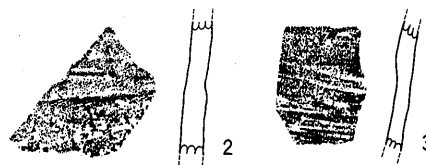
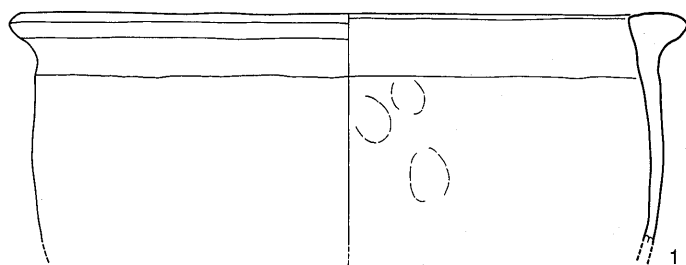
縄文土器

鉢形土器（2・3） 2・3は晩期の粗製鉢の胴部破片と考えられる。2は胎土に砂粒をやや多く含み、外面に削り風のナデが施される。3は貝殻条痕文が施され、内面ではミガキ風のナデによって条痕文が消される。

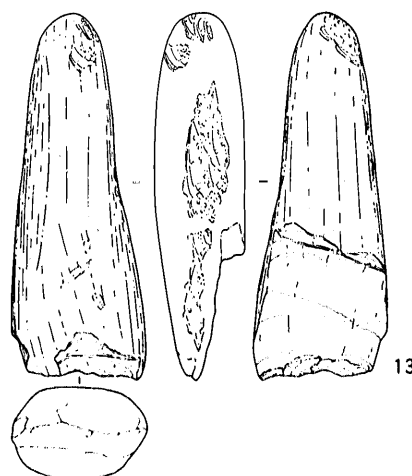
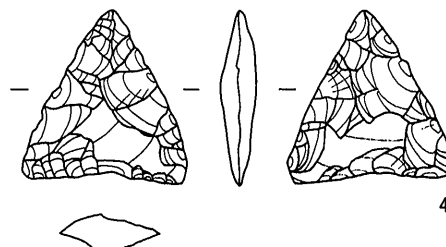
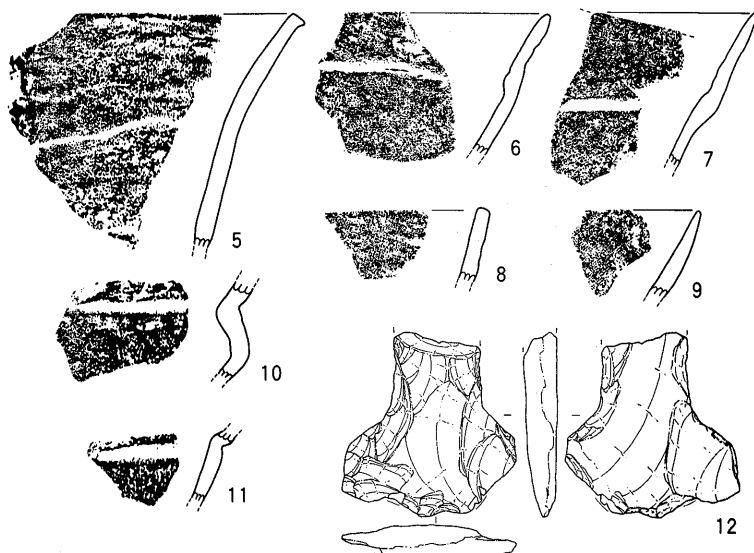
石製品

石鏃（4） 基部がわずかに凹むが、全体の形状から三角鏃に属するものである。黒曜石の剥片を素材とし、表裏に素材面を部分的に残す二次加工は縁辺から丁寧に施される。

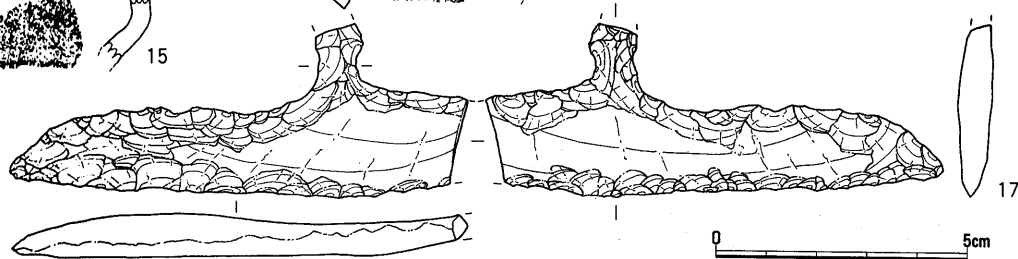
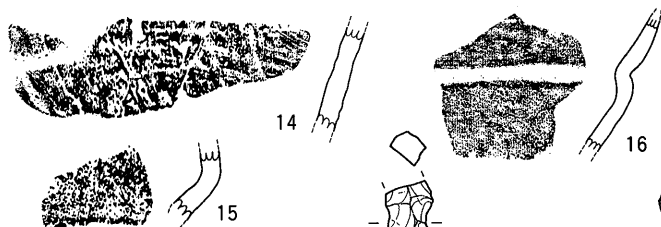
225SD060暗灰色砂



225SD060暗黄灰色シルト



225SD060黄灰色シルト

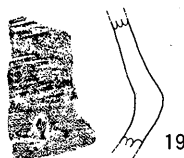


0 5cm

225SD060黒褐色砂礫



225SD060黒色砂



0 10cm

第41図 225SD060遺物実測図 (1 ~ 3・5 ~ 16・18・19-1/3、4・17-2/3)

225SD060暗黄灰色シルト出土遺物（第41図、図版16）

縄文土器

鉢形土器（5～11） 5・10は粗製の鉢である。5は口縁部が緩やかに外反して立ち上がり、口唇部の作りは平滑に仕上げられる。10の胴部破片では、内外面の屈折部に沈線状の削りが認められる。6～9・11は精製浅鉢である。6～9は口縁部破片であり、7は波状口縁を呈し外面の口縁部下が浅く沈線状に窪んで屈折部を作出している。6・7・9は胎土に細砂粒および角閃石を含み、焼成では内面が黒色処理されるもので同一個体の可能性がある。いずれも後～晩期に属するものと考えられる。

石製品

打製石斧（12） 緑色凝灰岩の剥片を素材とした打製石斧の欠損品と考えられ、残存部の形状から平面形は分銅形を呈するものと推測される。二次加工は縁辺部を中心に施され、胴部中央には調整加工による顕著な挟りを有する。刃部の調整加工から考えると頭部となる可能性もある。

磨製石斧（13） 斑瀧岩系の棒状礫を素材とした磨製石斧である。刃部を欠損するが、頭部が長い乳棒状を呈する。研磨は表裏を中心に施され、左側面は自然面、右側面と頭部に敲打痕が観察される。

225SD060黄灰色シルト出土遺物（第41図、図版17）

縄文土器

鉢形土器（14～16） 14・15は粗製鉢と考えられ、14は胎土に砂粒を多く含み、外面の調整では横方向の浅い条痕が施文された上に削りが加えられる。15は小片のため器形は明らかでないが、胴部の括れ部にあたると考えられる。16は晩期の精製浅鉢であり、内外面の調整ではミガキが顕著に認められる。

石製品

石匙（17） 刃部が摘み部に直交する横形を呈する石匙である。輝石安山岩の横長剥片を素材とし、刃部右側を欠損するが、幅広の刃部を持っていたものと推測される。調整加工は縁辺部を中心に丁寧な二次加工が施され、石摘み部の作り出しも顕著なものである。

225SD060黒褐色砂礫（第41図、図版17）

縄文土器

鉢形土器（18） 粗製鉢の胴部破片である。胎土には砂粒を含み、内外面には横方向への削り風のナデが施される。後～晩期に属する。

225SD060黒色砂出土遺物（第41図、図版17）

縄文土器

鉢形土器（19） 胴部中位屈折部付近の破片と見られる。胎土に砂粒と角閃石を含み、内外面の調整には条痕文が施される。

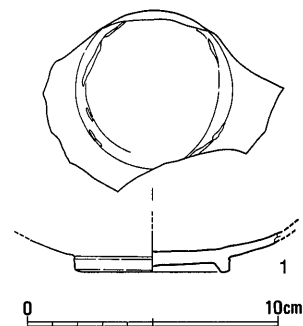
7) 小穴出土遺物

225SX067暗灰色土出土遺物（第42図）

緑釉陶器

皿（1） 体部から底部が遺存。残存高1.6cm、高台径6.2cmを測る。高台は削り出す。灰色の胎土に緑灰色の釉を高台内を除き薄く施す。内面に円形の重ね焼き痕が残る。京都産。

225SX067暗灰色土



第42図 225SX067遺物実測図（1/3）

8) 各層出土遺物

灰色土出土遺物 (第43図、図版17)

土師器

坏 a (1) 口径13.0cm、器高2.8cm、底径8.6cmに復原される。胎土は橙色に発色し、雲母を多く含有する。底部には径0.3~0.4cmの円孔を焼成後、不規則に穿つ。円孔は10ヵ所遺存する。

鍋 (2) 口縁部から体部上半の破片で、残存高4.1cmを測る。外面上半は横ナデ、下半と内面は斜位のハケ目調整で仕上げられ、口縁上端平坦面には縄を押捺する。

土師質土器

播鉢 (3) 口縁部から体部上半の破片で、口径29.8cmに復原され、残存高は5.5cmを測る。口縁部は横ナデ、体部外面は指頭調整、内面は斜位のハケ目調整の後、播目を下方から掻き上げる。

火舎 (4) 下半の破片で、脚が1ヵ所遺存する。底径33.0cmに復原され、残存高は10.4cmを測る。体部中位には断面三角形の凸帯を1条巡らせ、下端部は溝状の受けを横ナデで作出し、外面には指頭による押捺が等間隔に隙間なく施される。内面は指頭調整とナデで粗く仕上げる。内面と外面受け部に煤が付着する。

白磁

壺 (5) 口縁部の破片で、残存高2.3cmを測る。端部は丸く収めて玉縁状とし、半光沢で失透気味の釉を内外に厚く施す。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含んでおり、堅緻。Ⅲ類。

青磁

壺 (6) 口縁部から頸部の破片で、口径4.6cmに復原され、残存高3.4cmを測る。口縁部は玉縁とする。半光沢質で灰緑色に発色する釉は、細貫入を生じ、内外面に厚く施される。胎土は灰白色を呈し、堅緻であるが、焼成不良で赤味を帯びる箇所が観察される。龍泉窯系青磁Ⅰ類と類推される。

中国陶器

壺 (7) 頸部から肩部の破片で、残存高4.2cmを測る。肩部には細沈線を1条巡らし、線の上に蕾座を1個貼付する。釉は灰白色を呈し、外面および内面上半に施されるが濁化、発泡が著しい。胎土は赤褐色に発色し、堅緻。未分類資料。

土製品

輔羽口 (8) 残存長5.5cm、残存幅3.7cmを測る。通風部がごく小範囲遺存する。外面は被熱し黒灰色に変色しており、胎土の発泡、融解が進んでいる。

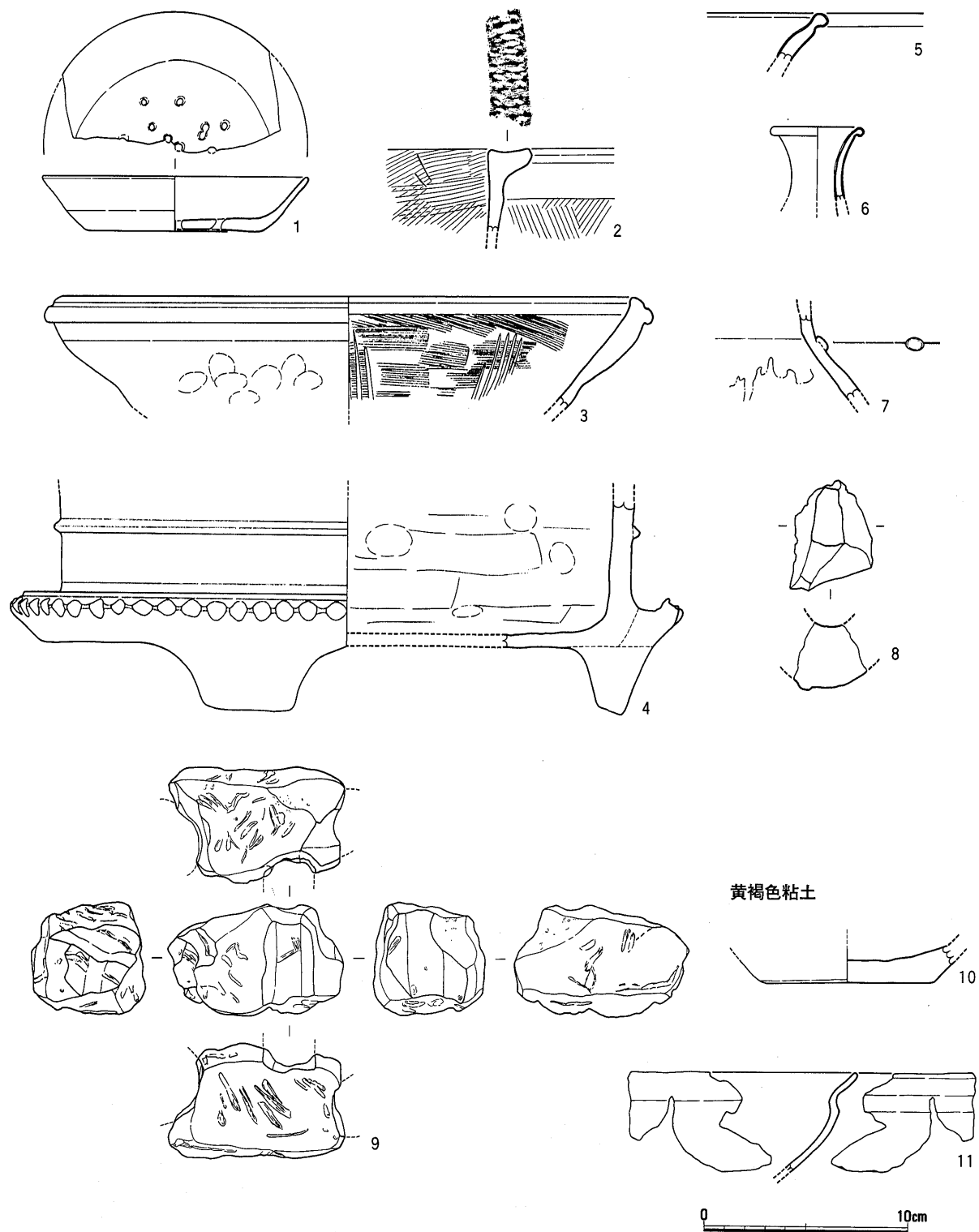
焼土塊 (9) 拳大の大きさで、骨材の痕跡が3ヵ所観察される。胎土にはスサの痕跡や微小な空隙が多量に入る。

黄褐色粘土出土遺物 (第43図、図版17)

縄文土器

鉢形土器 (10・11) 黄褐色粘土遺構面から出土した。10は粗製深鉢の底部と考えられるもので、二次的な被熱によって脆く、器面は摩滅している。底部の直径は8.6cmを測り、底部外面は赤化している。11は晩期の精製浅鉢の口縁部破片である。肩部で短く内傾した後に外傾して立ち上がり、色調は内外面とも黒色を呈する。

灰色土



黄褐色粘土

第43图 各層出土遺物実測図 (1/3)

VI. 自然科学分析

はじめに

本報告では、大宰府条坊跡第225次調査で検出された井戸跡から採取された土壌について、花粉分析、植物珪酸体分析、微細植物片分析を実施し、当該期の植生や畑作に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、9世紀後半から14世紀後半にわたる各井戸から採取された土壌6点（試料番号1～6）である。試料番号1は、13世紀前後～14世紀初頭とされる結物井戸（225SE002）の井戸枠内堆積土下層（黒褐色粘土）から採取された。試料番号2・3は、石組井戸（225SE020）から採取され、試料番号2は、14世紀初頭～後半とされる井戸枠内下層～曲物水溜の堆積土（灰色土）から、試料番号3は、12世紀中頃～後半とされる結物井戸枠内堆積土（黒褐色粘土）から採取された。試料番号4は、11世紀後半～12世紀前半とされる結物井戸（225SE021）の井戸枠内堆積土（灰色粘土）から採取された。試料番号5・6は、9世紀後半～10世紀前半とされる方形木組井戸（225SE036）から採取され、試料番号5は井戸枠より上層（暗灰色土）から、試料番号6は方形木組井戸枠内堆積土（黒褐色土）から採取された。

2. 分析方法

（1）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（2）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作や古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体ごとに、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(3) 微細植物片分析

各試料100cc（試料番号4は50cc）を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実・種子などの植物遺体を抽出する。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか 2000）等と比較して種類を同定し、個数を数えて表に示した。微細片を含むため個数推定が困難である種類は、「+」と示した。分析後の種実等は、種類ごとにビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施した。

3. 結 果

(1) 花粉分析（表1、図1、図版18）

結果を表1、図1、図版18に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

試料番号1では、木本花粉と草本花粉がほぼ同率で産出する。木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、マツ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、アカザ科、タンポポ科などを伴う。栽培植物であるソバ属の花粉も認められる。

試料番号2・3では、草本花粉の割合が高くなり、イネ科が多産する。その他の種類をみると、試料番号2では栽培種であるソバ属がやや多く産出し、試料番号3ではカヤツリグサ科が次いで多く産出する。また、試料番号3からは、水生植物であるサジオモダカ属、オモダカ属の花粉もわずかながら認められる。木本花粉をみると、マツ属が多産し、コナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴う。

試料番号4からは花粉化石、シダ類胞子は1個体も検出されなかった。

試料番号5・6では、草本花粉の割合が高く、イネ科が多産し、アカザ科、ヨモギ属などを伴う。その他では水生植物のミズアオイ属や、栽培種のソバ属の花粉も検出される。木本花粉をみると、マツ属とアカガシ亜属がほぼ同率で産出し、モミ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、シイノキ属などを伴う。

(2) 植物珪酸体分析（表2、図2、図版19）

結果を表2、図2、図版19に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号1では、栽培植物であるイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の産出が目立ち、初殻に形成される穎珪酸体も認められる。また、栽培種を含む分類群であるキビ属やオオムギ族の短細胞珪酸体も検出される。ただし、検出された植物珪酸体の形態から栽培種か否かを判別することは困難である。このほかネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。また、イネ科起源の植物珪酸体の他に樹木起源珪酸第IVグループ（近藤・ピアスン 1981）が検出される。第IVグループは、網目模様の付いた紡錘形を呈する。

試料番号2・3は、ともに試料番号1と同様な産出がみられる。すなわち、イネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の産出が目立ち、穎珪酸体も認められる。また、キビ属やオオムギ族の短細胞珪酸体も検出され、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。また、イネ科起源の植物珪酸体のほかに樹木起源珪酸第IVグループとともに第IIIグループも検出される。第IIIグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈する。

試料番号4では、検出される種類が他の試料と同様であるが、ヨシ属の産出が目立つ。また、キビ属

表1 花粉分析結果

種 類	試料番号	1	2	3	4	5	6
木本花粉							
マキ属	—	—	2	—	—	—	—
モミ属	3	1	6	—	5	7	—
ツガ属	11	1	4	—	5	3	—
マツ属単維管束亜属	—	—	—	—	1	1	—
マツ属複維管束亜属	21	40	20	—	11	15	—
マツ属(不明)	19	24	40	—	19	23	—
コウヤマキ属	2	—	—	—	2	—	—
スギ属	26	3	3	—	9	6	—
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	—	4	1	—	1	—	—
ヤナギ属	—	—	—	—	1	—	—
ヤマモモ属	2	—	4	—	7	—	—
ノグルミ属	—	—	—	—	—	1	—
クマシデ属—アサダ属	2	1	—	—	1	—	—
ハシバミ属	18	1	4	—	4	4	—
カバノキ属	—	—	—	—	1	—	—
ハハノキ属	3	—	—	—	—	—	—
ブナ属	3	1	1	—	1	—	—
コナラ属	1	1	—	—	1	—	—
コナラ属コナラ亜属	7	5	5	—	6	7	—
コナラ属アカガシ亜属	72	12	6	—	23	26	—
クリ属	2	—	1	—	—	1	—
シイノキ属	2	4	1	—	2	7	—
ニレ属—ケヤキ属	3	—	1	—	—	—	—
エノキ属—ムクノキ属	5	—	3	—	1	—	—
イスノキ属	—	—	—	—	—	2	—
キハダ属	—	—	1	—	—	—	—
ユズリハ属	2	—	—	—	—	—	—
アカメガシワ属	1	2	2	—	—	—	—
シラキ属	—	1	1	—	—	—	—
ツタ属	2	—	—	—	—	—	—
ノブドウ属	1	—	—	—	—	—	—
グミ属	—	—	—	—	—	1	—
ウコギ科	—	—	—	—	—	1	—
ミズギ属	1	—	—	—	—	1	—
カキ属	2	—	—	—	—	1	—
エゴノキ属	1	—	—	—	—	—	—
テイカカズラ属	—	—	—	—	1	—	—
草本花粉							
サジョモダカ属	—	—	1	—	—	—	—
オモダカ属	—	—	1	—	—	—	—
イネ科	172	208	480	—	396	301	—
カヤツリグサ科	6	2	113	—	25	17	—
ミズアオイ属	—	—	—	—	22	16	—
クワ科	—	—	3	—	9	10	—
ギンギン属	1	2	—	—	2	6	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	—	2	10	—	4	2	—
タデ属	4	1	—	—	1	6	—
ソバ属	3	19	—	—	2	1	—
アカザ科	25	7	16	—	76	56	—
スベリヒユ属	—	—	1	—	—	—	—
ナデシコ科	2	6	3	—	12	8	—
キンボウゲ科	—	—	—	—	1	2	—
アブラナ科	4	3	1	—	7	4	—
バラ科	1	—	—	—	—	—	—
フウロソウ属	—	—	1	—	—	—	—
アリノトウグサ属	—	—	1	—	—	—	—
セリ科	—	6	2	—	—	2	—
ギツネノマゴ属	—	1	—	—	—	—	—
オオバコ属	5	9	—	—	1	—	—
ヨモギ属	6	5	31	—	29	30	—
オナモミ属	—	—	—	—	1	—	—
キク亜科	—	—	2	—	11	7	—
タンポポ亜科	13	2	8	—	—	1	—
不明花粉	9	8	7	—	23	11	—
シダ類孢子							
ヒカゲノカズラ属	1	—	—	—	3	1	—
ゼンマイ属	2	3	5	—	11	10	—
イノモトソウ属	5	2	2	—	6	3	—
他のシダ類孢子	120	373	151	—	191	135	—
合 計							
木本花粉	212	101	106	0	105	106	—
草本花粉	242	273	674	0	599	469	—
不明花粉	9	8	7	0	23	11	—
シダ類孢子	128	378	158	0	211	149	—
総計(不明を除く)	582	752	938	0	915	724	—
その他							
ミスゴケ属	—	—	1	—	—	—	—

表2 植物珪酸体分析結果

種 類	試料	1	2	3	4	5	6
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		163	101	134	6	169	26
キビ族キビ属		13	10	12	—	15	6
タケ亜科ネザサ属		6	6	7	—	2	2
タケ亜科		104	14	45	20	62	19
ヨシ属		18	9	27	13	58	11
ウシクサ族コブナグサ属		18	3	15	58	14	3
ウシクサ族ススキ属		8	4	—	2	5	2
イチゴツナギ亜科オオムギ族		10	—	9	3	7	4
イチゴツナギ亜科		7	4	2	3	1	—
不明キビ型		6	8	8	11	17	1
不明ヒゲシバ型		73	45	68	34	113	23
不明ダンチク型		26	12	25	45	30	11
		17	13	30	26	43	10
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属		71	40	45	3	28	53
キビ族		4	—	—	—	2	2
タケ亜科ネザサ属		30	14	11	7	7	16
タケ亜科		10	6	13	15	9	6
ヨシ属		9	7	7	49	7	9
ウシクサ族		39	27	27	22	18	12
不明		22	10	14	12	11	15
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		469	229	382	221	536	118
イネ科葉身機動細胞珪酸体		185	104	117	108	82	113
総 計		654	333	499	329	618	231
珪化組織片							
イネ属珪酸体		39	12	27	1	12	11
樹木起源							
第Ⅲグループ		—	1	1	1	3	—
第Ⅳグループ		10	1	2	3	8	1

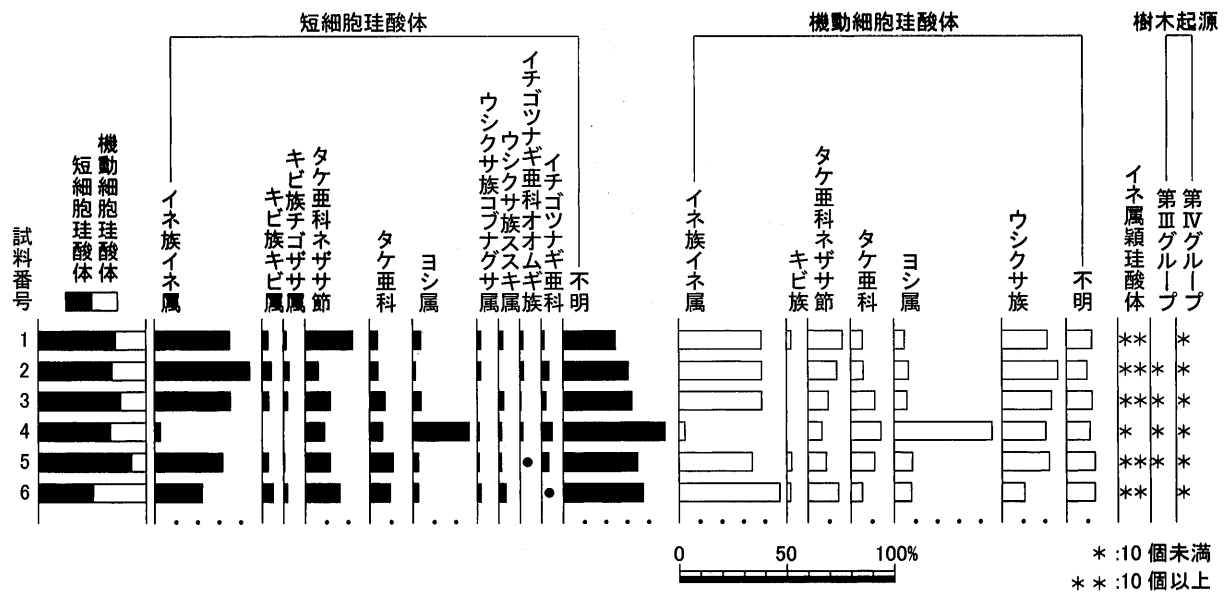


図2 各遺構の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

なお、イネ属珪酸体と樹木起源珪酸体の産状を*で示す。

は認められず、イネ属やオオムギ族も検出される。しかし、イネ属は他の試料と比較して検出個数が少ない。

試料番号5・6では、産出する割合が多少異なるものの、イネ属の産出が目立ち、穎珪酸体も認められる。また、試料番号5でキビ属、試料5と試料6でオオムギ族が検出される。このほかにはネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体（第Ⅲグループや第Ⅳグループ）が認められる。

（3）微細植物片分析（表3、図版20）

結果を表3、図版20に示す。被子植物18種類の種実と、木材、炭化材、蘚苔類、不明植物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の植物片を示す）、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の炭化物を示す）、昆虫遺骸、動物遺存体、土器の破片などが検出された。

検出された種実の遺存状態は比較的良好で、木本は広葉樹4種類（ヤマモモ、ヒサカキ属、マタタビ属、キイチゴ属）が、草本は単子葉類3種類（オモダカ科、イネ、カヤツリグサ科）、双子葉類11種類（ギシギシ属、タデ属、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、マメ類、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス科、キク科）が同定された。

種実遺体群集の種類構成は、試料番号1からは草本5種類が検出され、栽培植物のイネ、マメ類が検出された。その他に、タデ属、アカザ科、スベリヒユが検出された。

試料番号2は、カヤツリグサ科、タデ属、スベリヒユ、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属の草本5種類が検出され、試料番号3からは、木本1種類（マタタビ属）、草本7種類（オモダカ科、イネ、カヤツリグサ科、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、キク科）が検出された。

試料番号4は、カタバミ属が1個検出されるのみで、種実以外の部位の検出も少ない。

試料番号5からは、木本3種類（ヤマモモ、ヒサカキ属、キイチゴ属）、草本9種類（イネ、カヤツリグサ科、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス科）と種類数、個数ともに比較的多く検出された。

試料番号6からは、木本1種類（キイチゴ属）、草本6種類（イネ、ギシギシ属、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、ナス科）が検出された。

以下に、同定された種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

<木本>

- ・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核（内果皮）が検出された。茶褐色、歪な広楕円形でやや偏平。長さ7mm、幅6.5mm、厚さ5mm程度。内果皮は硬く、表面には短毛が密生し、微細な網目模様がありゴツゴツする。

- ・ヒサカキ属 (*Eurya*) ツバキ科

種子が検出された。茶～黒褐色、不規則な多角形でやや偏平、径1.5mm程度。一端に臍があり、臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

- ・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ2mm、幅1.5mm程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

- ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核（内果皮）が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形。長さ2～2.5mm、幅1～1.5mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

表 3 微細植物片分析結果

種類名	試料番号 遺構名	土壌分析量				
		部位 状態				
		1	2	3	4	5
		225SE002 黒褐色粘土 13世紀後半-14世紀初葉 100cc 197.84g	225SE020 灰色土 14世紀初葉-後半 100cc 215.36g	225SE020 黒褐色粘土 12世紀中頃-後半 100cc 193.24g	225SE021 灰色粘土 11世紀後半-12世紀前半 50cc 82.16g	225SE036 暗灰色土 9世紀後半-10世紀前半 100cc 194.40g
木本						
ヤマモモ		-	-	-	-	1
ヒサカキ属		-	-	-	-	1
マタタビ属		-	-	1	-	-
キイチゴ属		-	-	-	-	1
草本						
オモダカ科		-	-	1	-	-
イネ		-	-	1	-	-
		1	-	-	-	22
		-	-	6	-	2
カヤツリグサ科		-	2	4	-	5
ギシギシ属		-	-	-	-	-
タデ属		1	1	-	-	-
アカザ科		3	-	1	-	11
スベリヒユ		18	1	1	-	13
ナデシコ科		-	-	2	-	6
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイイチゴ属		-	1	-	-	1
マメ類		1	-	-	-	-
カタバミ属		-	1	-	1	5
イヌコウジュ属		-	-	-	-	4
ナス科		-	-	-	-	3
キク科		-	-	1	-	-
炭化						
木材		+	+	+	-	+
炭化材		+	+	+	+	+
蕨苔類		+	-	-	-	-
不明植物		+	-	+	-	+
不明炭化物		+	+	+	+	+
昆虫遺骸		+	+	+	-	+
動物遺存体		-	-	1	-	1
土器		-	2	6	-	-

注) 「+」は、微細片を含むため個数推定が困難である種類を示す。

<草本>

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1 mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と、胚乳を包む穎(果)が検出された。胚乳は炭化しているため黒色、長楕円形でやや偏平。長さ4~6 mm、幅2.5 mm、厚さ1.5 mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2~3本の縦溝がある。胚乳表面に穎が付着している個体もみられる。穎は淡褐色、炭化したものは黒色。長楕円形でやや偏平。長さ6~8 mm、幅3~4 mm、厚さ2 mm程度。基部に特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。カヤツリグサ属やスゲ属と思われる個体などを含む。カヤツリグサ属(*Cyperus*)の果実は黒褐色、狭倒卵形状のやや明瞭~明瞭な三稜形で先端部は尖り、基部は切形。長さ1.2 mm、径0.8 mm程度。果皮は硬く、表面にはごく微小な疣状突起が密布する。スゲ属(*Carex*)の果実は淡褐色ないし茶褐色。形態上差異のある複数の種を含む。倒卵形でやや偏平。長さ2 mm、幅1.5 mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗褐色、卵状三稜形。径3 mm程度。両端は急に尖り、稜は鋭い。果皮表面はやや平滑。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。ミゾソバ、ハナタデまたはイヌタデと思われる個体などを含む。ミゾソバ(*Polygonum cf. thunbergii* Sieb. et Zucc.)の果実は茶褐色、卵形状三稜形。長さ4 mm、幅2.5 mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面は微細な網目模様が発達しざらつく。ハナタデまたはイヌタデ(*Polygonum caespitosum* Blume subsp. *Yokusaiianum* (Makino) Danser—*Polygonum longisetum* De Bruyn)の果実は黒色、丸味のある菱形で三稜形。長さ2~3 mm、幅1.5 mm程度。表面はやや平滑で光沢が強い。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1 mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・スベリヒユ (*Portulaca oleracea* L.) スベリヒユ科スベリヒユ属

種子が検出された。黒色、腎臓状円形でやや偏平。径0.6 mm程度。一端が凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が密生する。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1 mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (*Potentilla—Duchesnea—Fragaria*) バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ0.9 mm、幅0.5 mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子の破片が検出された。炭化しているため黒色、完形ならば長楕円体。長さ6mm、径3mm程度。子葉の合わせ目から半分に分かれた1片である。種皮表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れ、表面が崩れているため臍は不明瞭。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.6mm、幅1.2mm程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4～7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状にみえる。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.2mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科 (*Solanaceae*)

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径2～3mm程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には臍を中心として同心円状に星型網目模様が発達する。網目模様は微細で、網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・キク科 (*Compositae*)

果実が検出された。茶褐色、狭倒皮針形でやや偏平。長さ2.5mm、径1mm程度。頂部は切形で、背腹両面には瘤状突起が分布する。

4. 考 察

各分析の結果、検出された植物化石群は、225SE021(試料番号4)を除いて、時代、遺構別に大きな変化は認められない。当該期の周辺植生を推定するために、木本類に着目すると、花粉化石群集では各試料ともマツ属とアカガシ亜属が多産する傾向が認められ、随伴する群集も比較的類似する。遺構別にみると、9世紀後半から10世紀前半とされる225SE036(試料番号5・6)では、マツ属とアカガシ亜属がほぼ同率で産出し、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹起源の花粉や、ヤマモモ属、クマシデ属ーアサダ属、コナラ亜属、シイノキ属などの広葉樹起源の花粉を伴う。13世紀前後から14世紀初頭とされる225SE002(試料番号1)では、アカガシ亜属が最も多く産出するものの、マツ属、スギ属なども多く認められ、ツガ属、クマシデ属ーアサダ属なども伴う。12世紀中頃から14世紀後半とされる225SE020(試料番号2・3)では、マツ属が多産し、コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴う。

アカガシ亜属はシイノキ属などとともに、暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であり、しばしば温帯針葉樹であるモミ属、ツガ属、スギ属などとともに林分を形成する。また、九州北部における既存の研究結果をみると、6,000～5,000年前頃からシイノキ属、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が成立したとされる(黒田・畑中 1979, Hatanaka 1985, 畑中ほか 1998など)。これらのことから当該期の後背域では、アカガシ亜属を主体としてシイノキ属、ヤマモモ属などを伴う照葉樹林が成立し、部分的にモミ属、スギ属などの温帯針葉樹や、コナラ亜属などの落葉広葉樹を伴っていたことが推定される。クルミ属、クマシデ属ーアサダ属、ハンノキ属、ニレ属ーケヤキ属、エノキ属ームクノキ属など、河畔や低湿地に生育する種を含む分類群が多量ではないものの検出されているが、これらは本遺跡北側を西流する御笠川の河畔や周囲の低湿地などに生育していたものに由来すると思われる。

一方、多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものの大半は複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は、生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は

日本各地で知られており、その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（例えば、波田 1987など）。九州北部においては、約1,500年前以降よりマツ属やイネ科花粉が急速に増加するとされており、農耕文化の発展を示唆するとされている（黒田・畑中 1979、波田 1987など）。よって、多産するマツ属は、当時の遺跡周辺や後背丘陵縁辺部などに生育する二次林に由来すると考えられる。また、花粉化石群集は、12世紀中頃から12世紀後半を境としてマツ属が増加する傾向が認められることから、周辺で二次林や植林として存在していたマツ林が、13世紀中頃から14世紀前半にかけてさらに増加した可能性が考えられる。

植物珪酸体群集では、ネザサ節を含むタケ亜科のほかに樹木起源の珪酸体が検出された。樹木起源のうちⅢ型はブナ科、タイザンボク、イスノキなどに形成され、Ⅳ型は、モクレン属、シイノキ属など多くの種類の葉に形成されると考えられている（近藤・ピアスン 1981）。西日本地域では、土壌中から樹木起源の植物珪酸体が多産することがしばしばあるが（杉山・早田 1994）、今回もこの一例であるといえる。なお、照葉樹林の代表的な樹木としてタブノキやクスノキなどクスノキ科の植物があるが、クスノキ科の花粉化石は膜が弱い化石としてはほとんど残らないため、花粉化石からクスノキ科が生育していたかどうかを推測することは難しい。樹木珪酸体は、クスノキ科の葉にも作られることから（杉山・早田 1994、杉山 2000など）、検出された樹木起源の珪酸体は、花粉化石で推定されているカシ類やシイのほか、クスノキ科に由来する可能性もある。

種実遺体群集では、225SE036からヤマモモ、ヒサカキ属、キイチゴ属が、225SE020からマタタビ属が検出された。いずれも硬い核や種皮を持つ鳥獣散布型種実で、森林のエッジ（縁）環境に多くみられる植物である。ヤマモモ、ヒサカキ属は照葉樹林の主要構成要素であることから、上述の花粉化石群集とも調和的である。低木類のキイチゴ属や藤本類のマタタビ属などは、これらの照葉樹林の林縁部などに生育していたものに由来すると思われる。なお、ヤマモモ、マタタビ属、キイチゴ属などは、果実が食用可能であることから、当該期に採取され、持ち込まれ利用されていた可能性が考えられる。

次に、草本類に着目すると、栽培植物およびその可能性がある種類の検出が認められた（表4）。225SE002、225SE020、225SE036の種実遺体群集では、イネの胚乳や穎が検出された。植物珪酸体群集もイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が多産し、穎珪酸体も認められた。イネは、畑の保温や保湿のために植物体（稲藁・稲穀殻）が敷藁として利用される場合もあるが、周辺域でイネが栽培もしくは持ち込まれ利用されていたことが推定される。また、ソバ属の花粉やマメ類の種子が検出されたことから、これらが栽培もしくは持ち込まれ利用されていたことが推定される。さらに、植物珪酸体ではキビ属やオオムギ族が検出された。これらの分類群には自生する種類も含まれるが、植物珪酸体で野生種と栽培種を区別することは、現時点では難しい。しかし、検出されたこれらの種類が栽培種に由来すると仮定すれば、キビ属やムギ類の栽培なども考えられる。なお、イネの胚乳や穎の一部、マメ類の種子は炭化していることから、火熱を受けたことが推定され、井戸内に投棄した可能性が考えられる。

栽培植物以外の草本類では、水生植物のミズアオイ属、オモダカ科（サジオモダカ属、オモダカ属など）や、やや湿ったところに生育する種類を含むカヤツリグサ科、タデ属（ミゾソバ？）などは、

表4 栽培植物およびその可能性がある種類の検出

時代	遺構名	試料番号	カキ属	イネ	イネ属	キビ属	オオムギ族	ソバ属	マメ類
14世紀初頭～後半	225SE020	2			◎	◎	◎	○	
13世紀前後～14世紀前後	225SE002	1	○	●	◎	◎	◎	○	
12世紀中頃～後半	225SE020	3		●	◎	◎	◎		●
11世紀後半～12世紀前半	225SE021	4			◎		◎		
9世紀後半～10世紀前半	225SE036	5	○	●	◎	◎	◎	○	
		6	○	●	◎	◎		○	

注) ○：花粉化石 ◎：植物珪酸体 ●：種実遺体の検出を示す。

前述の稲作に伴う水田雑草に由来する可能性がある。また、やや乾いたところに生えるものでは、花粉化石群集では、多産するイネ科や、アカザ科、ヨモギ属、サナエタデ節ーウナギツカミ節、アブラナ科、タンポポ亜科などが、植物珪酸体群集では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が、種実遺体群集では、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス科、キク科などが挙げられる。これらの多くは集落の周辺などの明るく開けた場所に草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから、当該期の調査区付近には明るく開けた草地が存在していたことが推定される。なお、種実が検出されたギシギシ属、アカザ科、ナス科、キク科などの一部には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられるが（青葉 1991）、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。

植物化石群集の種類構成が異なる11世紀後半～12世紀前半の結物井戸とされる225SE021（試料番号4）では、花粉は検出されず、種実遺体もカタバミ属1個のみの検出であった。植物珪酸体群集では、湿潤な場所に生育するヨシ属が多産することから、井戸が湿潤な場所に構築されていた可能性が考えられる。栽培植物では、イネ属の検出個数が少なく、オオムギ族は検出されるがキビ属は認められない。以上のことから、当該期にはイネ属やムギ類が存在した可能性は考えられるものの、井戸近辺における畑作の存在は考えにくい。この要因には立地や堆積環境の違いが反映されると思われる、今後の調査課題として残される。

これまでに弊社が実施した大宰府条坊跡の分析結果では、第176次調査の平安時代末の遺構でイネ属の植物珪酸体が、第168次調査の平安時代中期末の土坑と第170次調査の9世紀以降の井戸からソバ属の花粉が検出されている。また、花粉化石群集や大型植物遺体（種実や木材など）群集から、後背域の森林植生は、主にシイ・カシ類などの照葉樹から構成されていたことが推定されてきた（バリノ・サーヴェイ株式会社、未公表資料）。今回の分析結果も、イネとソバ属の栽培と照葉樹林の存在が推定され、既存の結果と調和的である。さらに、マメ類の種子や、キビ属、オオムギ族など植物珪酸体が検出されたことから、これらの栽培の可能性を示唆する結果となった。今後も本遺跡周辺における同時期の資料を蓄積し、特に栽培植物に着目した植生について検討していきたいと考える。

引用文献

- 青葉高 1991『野菜の日本史』八坂書房 317p
- 波田善夫 1987「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究ー松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態についてー」資料集 日本自然保護協会 41-49
- Hatanaka, K., 1985, Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. *Jornal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University*, 18, 29-71
- 畑中健一・野井英明・岩内明子 1998「九州地方の植生史」安田喜憲・三好教夫（編著）『図説日本列島植生史』朝倉書店 151-161
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p
- 近藤鍊三・ピアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12 217-229
- 近藤鍊三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体分析 その特性と応用」『第四紀研究』25 31-64
- 黒田登美雄・畑中健一 1979「花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷」『花粉』13 3-8
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p
- 杉山真二・早田勉 1994「植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第2報）ー九州南部の台地上における照葉樹林の分布拡大の様相ー」日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集 53-54
- 杉山真二 2000「植物珪酸体」『考古学と植物学』同成社 189-213

Ⅶ. 小 結

今次調査により、観世音寺南の御笠川南条坊地区において新たな調査事例を追加することができたことは大きな成果であった。発見遺構は井戸23基、掘立柱建物2棟、柵列3列、溝4条、土坑30基、整地2カ所、流路1条、小穴多数などが検出され、出土した遺物の時期は縄文時代後～晩期から中世に及ぶ。

本項ではまず、調査成果の状況について時代順に列記し、次に特記事項について述べることとする。

今次調査最古の遺物は縄文時代後期～晩期の土器、石器であり、続く弥生時代では前期および中期の土器が検出された。このことから弥生時代以前に人間活動が及んでいることが窺えたが、遺物はごく微量が自然堆積層や、古代遺構に混じって出土するにとどまり、活動は低調と考えられた。

古墳時代も前時代同様、遺構は検出されず、少量の遺物が後世の遺構覆土に混入するにとどまった。

奈良時代の埋没と推定され得る遺構は土坑S-62のみの検出であった。一方、遺物は前代に比べ増加する。なお調査地の地形は奈良時代終わり頃まで比較的起伏に富んでいた模様である。

平安時代に入ると前期から中期にかけて225SX050、225SX055のように門地や自然流路を埋め立てる整地が行われ街区が整備される。9世紀後半埋没の井戸225SE034をはじめとして、掘立柱建物などの生活関連施設が構築され、人間活動が活発化することが遺物の著しい増加からも看取される。遺構には、前期から中期埋没の柵列225SA045、中期から後期埋没の225SA065、225SA075、溝225SD035など、ほぼ正方位を向いているものが検出され、条坊内他地域と同様の規制が及んでいることが理解された。

中世では、13世紀埋没の225SD001がほぼ正方位を指向するなど、土地利用の在り方は平安時代を踏襲しているとみられ、検出遺構の性格にも基本的な変化はなかった。ただし掘立柱建物は検出されず、該期の居住域は調査区からやや外れているようである。遺構・遺物量は平安時代を凌駕しており、本遺跡の主体時期となる。特に13世紀後半頃に埋没した遺構が今次調査中最も多い。

今次調査発見の遺構中最も新しいものは井戸225SE008、225SE020であり、その最終埋没時期は14世紀後半以降であった。

次に特記される成果や問題点について述べることとする。

流路225SD060は、平安時代前期の整地225SX055によって埋め立てられており、想定される流下方向から御笠川の分流であったと目される。トレンチ設定によって下層の土層観察を行ったところ、流水性の堆積構造を示しており、層中からは縄文時代後～晩期の土器、石器が出土したことから、該期にも流水があったことが推定された。なお、古代～中世遺構の基盤層とした黄褐色粘土からも同様に縄文時代晩期の資料が出土したが、今次調査では両者の層位的関係を明らかにすることができず、今後の課題となった。

同じく225SD060の最終河床面からは弥生時代中期の土器を主体的に検出したが、225SX055と最終河床面とは、遺物相からみた土層形成時期に大きな隔たりがあり不整合を生じていた。こうした現象の一因として、流水の下刻により、両層間に介在する土層が流出した可能性が指摘され、流路の最終河床形成は整地とほぼ同時期の平安前期頃と解釈された。

発見遺構としては井戸の多さが特記され、底面を検出せず不確実だった1基（225SE052）を含め合計23基が検出された。時期は9世紀後半（225SE034）から14世紀後半（225SE008、225SE020）に至り、中世の所産が6割と主体を占める。

井戸の取水源については、井戸底面付近の地山層が砂礫層のものと、透水性が低い粘土層の両者がみられたことから、前者は地下水脈に依拠する涌井で、後者は天水等を利用する溜井と考えられた。この内、溜井と認められた井戸は225SE020と225SE047の2基のみであった。涌井とした井戸は調査時には

顕著な湧水がなかったが、原因はおそらく後世の環境変化によって地下水位が低下したためであろう。

確認した井戸枠もしくは水溜の底面を機能時の湧水位としてみると、21基が標高32.5～32.8mの範囲内に収まる点から、本地域の地下水位は平安時代から中世を通じて非常に安定していたことが看取される。溜井とした225SE047の底面標高は31.6mと平均より1.0m以上深く、使用目的の差違が窺われた。

井戸枠の枠材が残存し、且つ構造が類推される井戸は14基を数え、全体の6割にのぼる。構造および変遷については、平安時代前期から後期にかけては方形木枠組を基本形とし、今次調査井戸中最古の225SE034（9世紀後半）は縦板組隅柱、続く225SE036（9世紀後半～10世紀前半）は長辺横板短辺縦板組、225SE056（9世紀後半～10世紀中頃）は横板組隅柱、225SE025（10世紀中頃）は縦板組横板、225SE005（10世紀後半～11世紀中頃）は横板井籠組を採っている。結物が井戸枠に使用され始める時期が11世紀後半～12世紀前半埋没の225SE021で、北部九州での結物の井戸枠使用開始時期とされる11世紀後半（鈴木 2002）と比較して違和感がなく、以降の中世井戸は結物組が一般化している。また石組構造と類推される225SE010も現れ、14世紀後半には2基（225SE008、225SE020）が確認されており、本地域で通有化が進んでいるものと推測される。水溜には225SE034で丸太削り抜き材が採用されているほか、平安時代から中世を通じて曲物の利用が一般的であった。

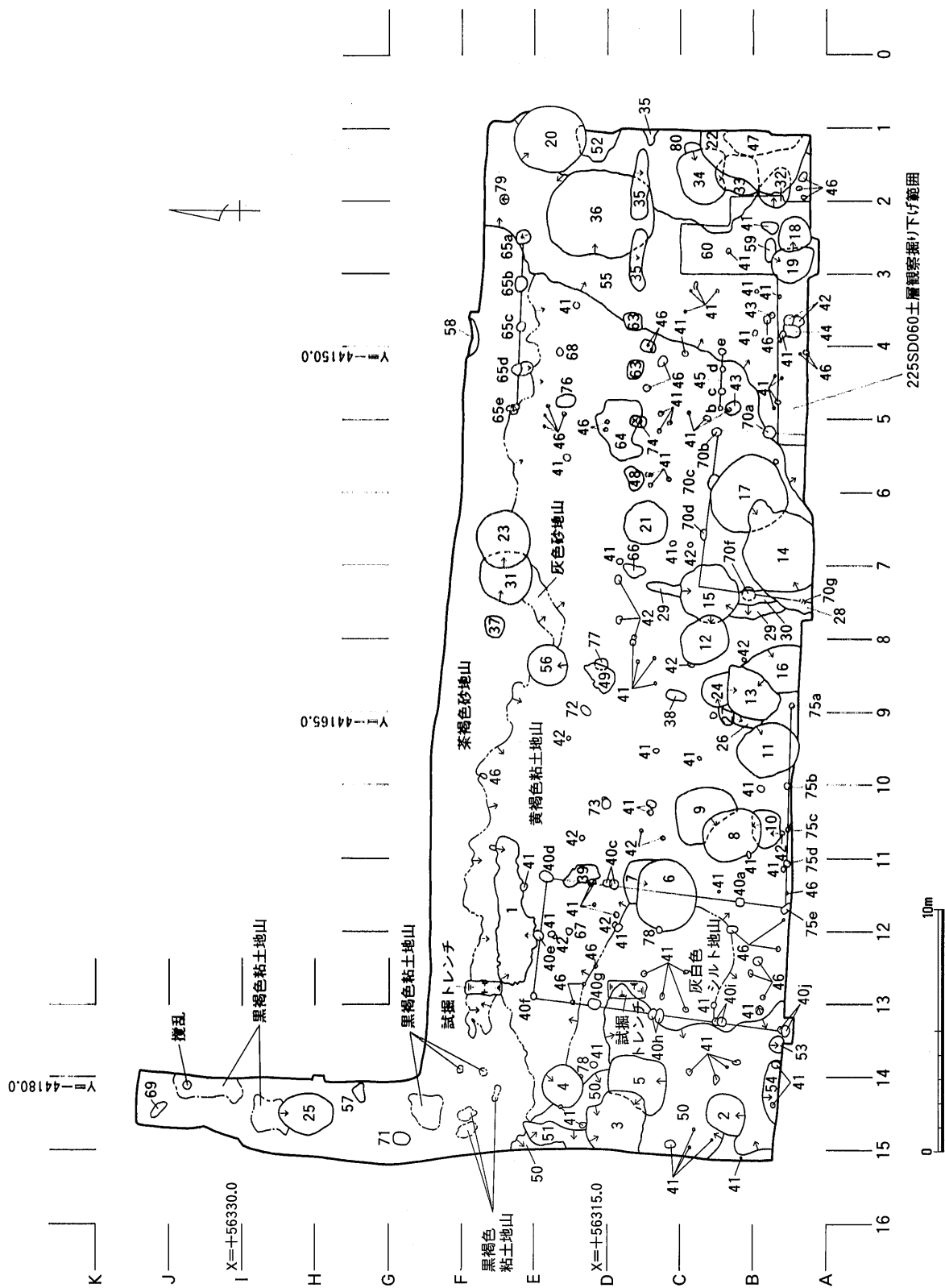
遺物としては、225SE023灰色砂からイスラム陶器が検出され、新たな資料を加えることができた。破片ではあるが、その特徴から初期イスラム陶器（山本 2002）と判断される。出土層位の下限は11世紀後半から12世紀前半と認められたが、本址が10世紀後半～11世紀前半埋没の225SE031を壊して構築されている点や、伴出遺物中には平安前期のものも多く含まれていたことから、本資料は遺構時期より古相の資料とともに灰色砂に混入した可能性も否定し難い。

今次調査では、遺構時期に準じて12世紀以降の遺物を多く検出したが、とりわけ中国産陶器の質量の充実が特徴として挙げられ、占有者の階層性が窺われた。大宰府条坊跡第19次調査をはじめとする既調査によって、本遺跡北側の観世音寺前面地区や、東側の五条地区はその多産地域として共通しており、本地区との関連性が注意される。

最後に、今次調査地は御笠川の影響を各期において受けていることが判明した。今後周辺地域で、その治水を視野に入れた開発過程が明らかにされることが期待される。

引用・参考文献

- 鏡山 猛 1968「大宰府都城の研究」風間書房
金田章裕 1989「大宰府条坊プランについて」『人文地理』41-5 人文地理学会
狭川真・ 1991「大宰府条坊跡の復元－発掘調査の成果から－」『条里制研究』6号 条里制研究会
井上信正 2001「大宰府の街区割りと街区政立についての予察」『条里制・古代都市研究』通巻17号 条里制・古代都市研究会
中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説 中世の陶磁器』真陽社
永井久美男（編） 1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類』兵庫県埋蔵銭調査会
奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録－近畿古代篇』
山本信夫 2002「日本・東南アジア海域における9～10世紀の貿易とイスラム陶器」国立歴史民俗博物館研究報告第94集 国立歴史民俗博物館
横田賢次郎 1983「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案」『研究論集』9 九州歴史資料館
横田賢次郎 1991「大宰府出土のベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No11 日本貿易陶磁研究会
山本信夫・山村信榮 1997「九州・南西諸島」『中世食文化の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第71集 国立歴史民俗博物館
横田賢次郎 1977「大宰府検出の井戸－特に形態分類を中心として－」『研究論集』3 九州歴史資料館
鐘方正樹 2003「井戸の考古学」『ものが語る歴史』8 同成社
宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻第5号 史学研究会
鈴木康之 2002「日本中世における桶・樽の展開－結物の出現と拡散を中心に－」『考古学研究』第48巻第4号 考古学研究会
山本信夫 1984『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財第8集 太宰府市教育委員会
井上信正 2002『大宰府条坊跡Ⅱ－第156・157・158次調査－』太宰府市の文化財第61集 太宰府市教育委員会
中島恒次郎ほか 1999『大宰府条坊跡Ⅺ－第149次調査－』太宰府市の文化財第43集 太宰府市教育委員会
城戸康利ほか 1995『大宰府条坊跡Ⅶ』太宰府市の文化財第28集 太宰府市教育委員会



大宰府条坊跡第225次調査 遺構番号台帳(1)

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋積土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
1	225SD001	溝	東西溝	暗褐色土	41の一部→1	F期	E10~12
2	225SE002	井戸	井戸枠は結物	暗灰色砂→黒褐色粘土→暗灰色粘土→暗灰色土		F期	B14
3	225SE003	井戸		暗黄褐色土→青灰色粘土→暗灰色土	5→3	F期	C14
4	225SK004	土坑		暗黄灰色土→黒褐色土→暗灰色土		D期	D14
5	225SE005	井戸	井戸枠は方形木枠、水溜は曲物	暗灰色土→黒褐色粘土→明灰色土→黒褐色土	50→5→3	X~XI期	C14
6	225SE006	井戸	井戸枠は結物、水溜は曲物	灰色土→青灰色粘土→暗褐色土→暗灰色土	7→6	F期	C11
7		土坑		暗褐色土	7→6	D期	C11
8	225SE008	井戸	井戸枠は石組+結物	灰色砂→黒褐色土→暗灰色土→暗褐色粘土→暗褐色土	9・10→8→41の一部	G期以降	B10
9	225SE009	井戸	井戸枠は結物?、水溜は曲物	暗灰色砂→灰色粘土→灰色砂→黒褐色粘土→黄褐色土→明灰色土	8→9	Ⅱ期前後	B10
10	225SE010	井戸	井戸枠は石組+結物?、水溜は曲物	灰色土→黒褐色粘土→黒褐色土	8・42の一部→10	D期	A10
11	225SE011	井戸		暗黄褐色土→黄色粘土→暗褐色土	26→11	D期	A9
12	225SK012	土坑		黒褐色土	15・12	F期	B7・8
13	225SK013	土坑		暗褐色土	27・16・24・26・13	F期	A8
14	225SE014	井戸	井戸枠は結物	暗灰色土→灰色土→茶色土	17・28・14	F期	A6
15	225SE015	井戸	井戸枠は結物	黒色粘土→黒灰色シルト→黒灰色土	30・29・15・12	XI・Ⅱ期	B7
16	225SK016	土坑		黒色土	16・13	F期	A8
17	225SE017	井戸		暗灰色砂→灰色砂→暗灰色粘土→暗褐色土	17・14	F期	B5・6
18	225SK018	土坑		暗褐色土	19・18	F期	A2
19	225SK019	土坑		黒色土(炭化物多量含有)	19・18	F期	A2
20	225SE020	井戸	新井戸枠は石組、水溜は曲物、旧井戸枠は結物	黒褐色粘土→暗灰色土→暗褐色土→灰色土→茶色土	52・20	新: G期以降 旧: D期	D1
21	225SE021	井戸	井戸枠は結物	灰色砂→灰色粘土→黄灰色土→暗灰色土		C期	C6
22	225SE022	井戸	井戸枠は結物?	黄灰色土→黒灰色粘土→黒褐色土→黒褐色砂→灰色土	47・34・33・32・22	F期	A・B1
23	225SE023	井戸	Ⅸ~Ⅹ期遺物一定量出土	灰色砂→暗灰色土→暗褐色土→黒褐色土	31→23	F期	E6
24		土坑		暗褐色土	27→24・13	Ⅳ期以降	B8
25	225SE025	井戸	井戸枠は方形木枠	茶色砂→灰色土→暗褐色土		Ⅸ期	H14
26		土坑		暗褐色土	27→26→13	?	B9
27		土坑		黒褐色土	27→24・26→13	Ⅳ期以降	B9
28		土坑		暗褐色土	70→30→29→28→14	平安時代前期以降	A7
29	225SD029	溝	南北溝	暗褐色土	30→29→15・28	平安時代中期	A~C7
30	225SD030	溝	南北溝	灰褐色土	70・30→29→15・28	平安時代中期	A・B7
31	225SE031	井戸	井戸枠は方形木枠?	灰色土(やや砂質)→黒褐色土	31・23	X期	E7
32	225SK032	土坑		黒色土	32・22	F期	A1
33	225SE033	井戸		暗灰色土→茶色砂→暗褐色土	33→22	Ⅷ~Ⅳ期	B1
34	225SE034	井戸	井戸枠は方形木枠、水溜は円形刳材	暗灰色砂→灰色砂→褐色土→青灰色粘土→暗褐色土	34→33→22	Ⅶ期	B1
35	225SD035	溝	東西溝	暗褐色土	36→35	平安時代中~後期	C1・3
36	225SE036	井戸	井戸枠は方形木枠	暗黄褐色土→黄褐色砂→褐色砂→黒褐色土→暗灰色土→褐色土	36→35	Ⅷ期	C・D1・2
37		土坑		暗褐色土		12c以降	E8
38	225SK038	土坑		灰色土(焼土塊多量包含)		12c以降	C8
39		土坑		暗褐色土		平安時代前~中期以降	D11
40	225SB040	掘立柱建物	2×4+α間の側柱建物 柱穴に新旧有	dは暗黄褐色土→黒褐色土、他は暗褐色土→暗灰色土	50→40→6	平安時代中~後期	A~D11~13
41		小穴群	調査区全域に分布	暗褐色土	42の一部→41の一部	平安時代前~中期以降	
42		小穴群	調査区全域に分布	暗灰色土	42の一部→41の一部	平安時代前~中期以降	

大宰府条坊跡第225次調査 遺構番号台帳(2)

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋積土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
43		小穴群	2穴検出	灰色土		12c以降	A3・B4
44		土坑		黒褐色土	42の一部→44	平安時代前～中期以降	A3
45	225SA045	柵列	4穴がほぼ東西方向に延びる(S-45aはS-70bに変更)	cのみ黒褐色土、他は暗褐色土	55→45	平安時代中～後期	B4
46		小穴群	調査区南側に主分布	黒褐色土	62・64→46の一部	D期以降?	
47	225SE047	井戸	S-22の下から検出	褐色砂→黒色粘土→褐色砂	47→33→22	E期	A・B1
48		たまり		暗黄褐色土(黄褐色ブロック多く含む)			C5
49		たまり		暗褐色土	77→49	E期	D8
50	225SX050	整地層		暗灰色土→黄褐色土→黒褐色土→黒色土	50→5・40	平安時代前～中期	A～D11～14
51		たまり		黒褐色土		平安時代?	D14
52	225SE052	井戸	調査区壁際のため未完掘	暗灰色土→褐色砂→暗褐色土	52→20	D期	D1
53		土坑		暗褐色土	50→53	平安時代前～中期	A13
54		土坑	調査区壁際のため未完掘 井戸の可能性有	暗褐色土	50・54→41	平安時代前～中期	A14
55	225SX055	整地層	流路S-60を埋め立てたもの	暗褐色土→黒褐色土→暗褐色土	60・55・36	平安時代前期	1～5ライン
56	225SE056	井戸	井戸枠は方形木枠、水溜は曲物	灰色砂→暗灰色土→黒褐色粘土→暗褐色土		Ⅷ～Ⅸ期	D8
57		たまり		暗褐色土			F14
58		土坑	調査区壁際のため未完掘 井戸の可能性有	暗灰色土		平安時代後期	E3
59		土坑		暗褐色土	59→19	平安時代後期以降	A2
60	225SD060	自然流路		黒色砂→黒褐色砂礫→黄灰色シルト→暗黄灰色シルト→暗灰色砂→灰黄色シルト	60→55	縄文時代晩期～平安時代前期	
61		土坑		暗褐色土			C3
62		土坑		暗褐色土	62→46	奈良時代以降	C4
63		土坑		暗褐色土	63→46		C4
64		たまり		暗黄褐色土	64→46		C5
65	225SA065	柵列	5穴が東西方向に並ぶ	cのみ黄褐色土→暗褐色土、他は暗褐色土		平安時代中～後期	E2～4
66		たまり		茶色土			C7
67	225SX067	小穴		暗灰色土		平安時代以降	D12
68		小穴群		暗灰色土(黄褐色ブロック含有)		平安時代以降	D4
69		たまり		暗褐色土			J14
70	225SB070	掘立柱建物	3×2+α間の側柱建物	bのみ黄褐色土、他は暗灰色土	70→17・28・30	平安時代中～後期	A・B5～7
71		土坑?		暗褐色土			F14
72		土坑		暗褐色土			D8
73		土坑		暗褐色土			D10
74		土坑		黒褐色土→暗褐色土			C5
75	225SA075	柵列	5穴検出 南側に展開する掘立柱建物の可能性有	暗褐色土	75→11	平安時代後期	A8～11
76		土坑		暗黄褐色土			D4
77		土坑		暗灰色土	77→49		D8
78		小穴群	2穴検出	茶色土		F期以降	C11・D14
79		小穴		黒褐色土			E1
80		土坑		茶色土	80→34	Ⅶ期以前	B1

大宰府条坊跡第225次調査 掘立柱建物・柵列・溝・整地層の座標方位一覧

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	政庁南門中点からの距離 (m)		遺構の方向
				南北距離 (Δx)	東西距離 (Δy)	
225SB040	北西隅柱穴任意点	56318.000	-44176.710	-384.216	647.897	G.N. 7° 46' 39" E
	南西隅柱穴任意点	56307.640	-44178.125	-394.590	646.586	
225SB070	柱穴 b 任意点	56310.600	-44153.450	-391.383	671.230	G.E. 4° 36' 0" S
	柱穴 d 任意点	56310.950	-44157.800	-391.077	666.877	
225SA045	東端任意中点	56310.270	-44150.200	-391.680	674.483	G.E. 0° 45' 50" S
	西端任意中点	56310.300	-44152.450	-391.673	672.233	
225SA065	東端任意中点	56318.500	-44145.400	-383.403	679.200	G.E. 1° 57' 41" S
	西端任意中点	56318.750	-44152.700	-383.226	671.898	
225SA075	東端任意中点	56307.400	-44164.750	-394.696	659.963	G.E. 2° 2' 26" S
	西端任意中点	56307.700	-44173.170	-394.480	651.540	
225SD001	東端任意中点	56319.200	-44170.100	-382.951	654.395	G.E. 1° 54' 33" N
	西端任意中点	56319.000	-44176.200	-383.211	646.397	
225SD029	北端任意中点	56313.420	-44159.780	-388.626	664.872	G.N. 9° 32' 50" E
	南端任意中点	56307.950	-44160.700	-394.105	664.007	
225SD030	北端任意中点	56309.620	-44160.300	-392.432	664.390	G.N. 2° 26' 49" W
	南端任意中点	56308.450	-44160.250	-393.601	664.452	
225SD035	東側任意中点	56313.300	-44141.700	-388.566	682.952	G.E. 3° 18' 39" S
	西端任意中点	56313.650	-44147.750	-388.276	676.899	
225SX055	北端任意中点	56320.000	-44142.640	-381.875	681.945	G.N. 26° 55' 36" E
	南端任意中点	56306.730	-44149.380	-395.212	675.338	

政庁南門中点からの距離は、政庁中軸線の振れ (G.N. 0° 34' 24" E) を考慮し算出している。

政庁南門中点は X = 55,708.680、Y = -44,820.730 (国土地理院第Ⅱ系) である。

出土銭貨計測表

径・厚はmm、量目はg

遺構名 / 土層名 / 挿図番号	銭貨名	天地銭径	左右銭径	天地内径	左右内径	銭厚	量目
225SE003 / 暗灰色土 / 第19図14	元祐通寶 (篆書)	24.02	23.85	18.76	18.66	1.60~1.74	3.8
225SE006 / 暗灰色土 / 第21図16	皇宋通寶 (篆書)	24.63	24.87	20.32	20.47	0.87~1.15	2.9
225SE022 / 灰色土 / 第29図11	皇宋通寶 (篆書?)	24.20	24.34	20.08	20.08	1.11~1.29	2.6
225SE022 / 灰色土 / 第29図12	皇宋通寶 (篆書)	24.11	23.96	20.11	20.12	1.14~1.39	2.6
225SE036 / 褐色土 / R-028	□□通寶 (篆書)	—	—	—	—	1.21~1.26	1.7

銭貨分類は水井久美『日本出土銭総覧』(1996年度版、兵庫埋蔵銭調査会) を参照した。

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表(1)

S-1 暗褐色土

A:内底ナデ B:板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	椀c	R-001	—	2.4+α	(7.4)	○	×	

S-2 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(イト?)	R-001	(11.5)	2.3	(7.7)	—	—	
	小皿a(イト)	R-007	(8.2)	1.0	(7.2)	○	—	
	小皿a(イト)	R-008	(8.2)	1.0	(6.2)	○	—	
	小皿a(イト)	R-004	(8.4)	1.15	(7.0)	○	—	
	小皿a(イト)	R-005	(8.4)	0.9	(6.6)	○	○	
	小皿a(イト)	R-006	(8.4)	1.0	(7.2)	○	—	
	小皿a(イト)	R-002	(8.8)	1.1	(5.9)	○	—	
	小皿a(イト)	R-003	(8.8)	1.1	(7.4)	○	○	

S-2 黒褐色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	R-001	(11.4)	2.0	(8.4)	○	○	

S-3 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(ヘラ)	R-002	(10.6)	2.2	7.5	○	×	煤付着
	坏a(イト)	R-001	(12.0)	2.5	7.7	○	×	
	坏a(イト)	R-004	12.4	2.3+α	—			
	坏a(イト?)	R-003	(12.8)	2.2	(8.8)	○	—	
	坏a×小皿a(ヘラ)	R-005	(12.0)	1.5	8.0	○	—	穿孔、油煙付着
	小皿a(イト)	R-010	(7.7)	1.0	(6.2)	—	○	
	小皿a(イト)	R-008	(8.1)	1.1	7.0	○	○	
	小皿a(イト)	R-007	8.4	1.1	7.6	○	○	
	小皿a(イト)	R-016	(8.4)	0.8	6.7	○	—	
	小皿a(イト)	R-009	(8.6)	1.0	(6.8)	○	○	
	小皿a(イト)	R-011	(8.6)	1.0	(6.8)	○	—	
	小皿a(イト)	R-013	(8.6)	1.0	7.7	○	—	
	小皿a(イト)	R-014	(8.6)	0.9	(7.8)	○	○	
	小皿a(イト)	R-012	(8.8)	1.2	(7.6)	○	○	
	小皿a(イト)	R-015	(8.8)	1.2	7.2	○	○	
	小皿a(ヘラ)	R-006	(10.6)	1.3	(6.8)	○	×	

S-4 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(9.2)	1.1	(7.0)	○	○	
	小皿a(イト)	R-002	(9.2)	1.1	(7.0)	○	×	

S-5 黒褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(ヘラ)	R-003	(11.0)	(1.7)	(7.7)		×	
	坏a(ヘラ)	R-002	(11.2)	1.8	8.0	×	×	
	坏a(ヘラ)	R-001	(12.2)	3.0	(8.1)	○	○	
	丸底椀a	R-004	12.8	(3.9)	10.1		○	
	椀c	R-006	15.9	6.0+α	—			
	椀c	R-005	(18.4)	5.3+α	—			
	椀c	R-007	—	3.4+α	(8.7)			油煙付着
	椀c	R-008	—	3.1+α	7.9			
	小皿a(ヘラ)	R-011	(9.6)	1.7	6.6	○	—	
	小皿a(ヘラ)	R-014	(9.8)	1.5	7.2	○	—	
	小皿a(ヘラ)	R-012	(10.8)	1.6	(8.0)	○	○	
	小皿a(ヘラ)	R-013	(10.8)	1.8	(8.4)	○	—	
	小皿a(ヘラ)	R-009	11.1	1.8	8.8		○	
	小皿a(ヘラ)	R-010	(11.4)	1.3	8.3	○	○	

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表(2)

S-5 黒褐色粘土

A:内底ナデ B:板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(ヘラ)	R-001	(13.4)	3.6	(8.3)			
	小皿a(ヘラ)	R-002	(10.0)	1.8	(6.2)	○	×	
	小皿a(ヘラ)	R-003	(11.0)	1.8	(6.3)	○	—	

S-6 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(イト)	R-001	(12.2)	2.3	(7.8)	○	×	
	坏a(イト)	R-002	(12.2)	2.5	8.2	○	○	
	坏a(イト)	R-004	(12.6)	2.4	(8.2)	○	×	
	坏a(イト)	R-003	(13.0)	2.3	(8.7)	○	○	
	小皿a(イト)	R-006	(8.0)	0.8	(6.6)	○	×	煤付着
	小皿a(イト)	R-008	(8.0)	1.0	(7.2)	○	—	
	小皿a(イト)	R-005	(8.4)	1.0	6.9	○	×	
	小皿a(イト)	R-009	(8.8)	1.2	(6.6)	○	—	
	小皿a(イト)	R-007	(9.0)	1.1	(7.6)	○	—	

S-6 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(8.6)	1.1	(6.3)	○	—	
	小皿c	R-002	(7.8)	2.1	(6.0)			

S-6 青灰色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-002	(8.2)	1.2	6.2	○	○	
	小皿a(イト)	R-001	8.7	1.0	7.2	○	○	

S-8 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(8.0)	1.0	(6.8)	○	—	

S-8 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(8.1)	1.3	6.9	—	○	
	小皿a(イト)	R-002	(8.8)	1.1	(7.6)	○	○	

S-9 明灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(8.0)	1.2	(6.8)	○	○	
	小皿a(イト)	R-002	(8.0)	0.9	6.4	○	○	
	小皿a(イト)	R-003	(8.2)	1.1	6.2	○	○	
	小皿a(イト)	R-004	(8.4)	1.7	6.7	○	○	

S-9 黒褐色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	(8.6)	1.05	(6.2)	—	○	

S-10 黒褐色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト?)	R-001	(9.0)	1.1	(7.2)	○	—	

S-12 黒褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(イト)	M-002	12.8	2.9	9.2	○	○	
	坏a(イト)	R-001	13.0	2.2	9.8	—	○	
	坏a(イト)	R-002	13.0	2.7	9.5	○	○	
	坏a(イト)	M-001	13.7	2.5	9.0	○	○	
	坏a(イト)	M-003	13.7	2.7	9.0	○	○	
	坏a(イト)	R-003	14.2	2.5	9.2	—	○	
	坏a(イト)	M-047	(15.0)	3.0	(9.0)	—	×	
	小皿a(イト)	M-038	(7.6)	1.5	(6.0)	○	×	
	小皿a(イト)	R-004	8.0	0.9	7.2	○	×	

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (3)

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

小皿 a (イト)	M-036	(8.0)	1.3	6.7	○	○	
小皿 a (イト)	M-008	8.2	1.3	6.5	○	—	
小皿 a (イト)	M-017	8.2	1.5	6.1	○	○	
小皿 a (イト)	M-019	8.2	1.3	6.5	○	—	
小皿 a (イト)	M-026	(8.2)	1.4	(6.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-028	(8.2)	1.3	(6.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-011	8.3	1.3	6.8	—	○	
小皿 a (イト)	M-013	8.3	1.4	6.5	○	○	
小皿 a (イト)	M-042	8.3	1.5	6.8	○	○	
小皿 a (イト)	R-006	8.4	1.2	7.0	○	○	油煙付着
小皿 a (イト)	M-010	8.4	1.5	6.5	○	○	
小皿 a (イト)	M-015	8.4	1.4	6.3	○	○	
小皿 a (イト)	M-016	8.4	1.3	6.7	○	○	
小皿 a (イト)	M-027	8.4	1.4	6.7	○	×	
小皿 a (イト)	M-025	(8.4)	1.3	(6.8)	○	○	
小皿 a (イト)	M-032	(8.4)	1.3	(7.0)	○	×	
小皿 a (イト)	M-045	(8.4)	1.1	(7.2)	○	×	
小皿 a (イト)	M-046	(8.4)	1.2	6.8	○	○	
小皿 a (イト)	R-007	8.5	1.2	5.7	○	○	
小皿 a (イト)	M-005	8.5	1.4	6.5	○	○	
小皿 a (イト)	M-006	8.5	1.2	6.5	—	○	
小皿 a (イト)	M-007	8.5	1.3	6.5	○	×	
小皿 a (イト)	M-018	8.5	1.2	7.0	○	○	
小皿 a (イト)	M-040	8.5	1.4	6.8	○	○	
小皿 a (イト)	R-008	(8.6)	1.3	7.0	○	○	煤付着
小皿 a (イト)	R-005	8.6	1.4	6.3	○	○	
小皿 a (イト)	M-009	8.6	1.1	6.5	○	○	
小皿 a (イト)	M-043	(8.6)	1.3	(7.0)	○	×	
小皿 a (イト)	M-004	8.7	1.4	7.0	○	○	
小皿 a (イト)	M-029	8.7	1.5	6.7	○	○	
小皿 a (イト)	M-039	8.7	1.4	7.5	○	×	
小皿 a (イト)	M-012	8.8	1.5	7.4	○	×	
小皿 a (イト)	M-022	(8.8)	1.4	(7.6)	○	×	
小皿 a (イト)	M-031	(8.8)	1.4	(7.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-034	(8.8)	1.6	(6.0)	○	×	
小皿 a (イト)	M-037	(8.8)	1.2	(7.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-041	8.8	1.5	7.4	○	—	
小皿 a (イト)	M-014	9.0	1.1	7.0	○	○	
小皿 a (イト)	M-020	(9.0)	1.5	(6.2)	○	○	
小皿 a (イト)	M-021	(9.0)	1.4	(7.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-035	(9.0)	1.3	(7.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-023	(9.2)	1.4	(7.8)	○	○	
小皿 a (イト)	M-030	(9.2)	1.2	(9.0)	○	×	
小皿 a (イト)	M-044	(9.2)	1.1	(7.4)	○	×	
小皿 a (イト)	M-024	(9.4)	1.2	(7.0)	○	○	
小皿 a (イト)	M-033	(9.4)	1.3	(7.0)	○	○	

S-13 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	(11.8)	3.1	(7.0)	○		煤付着
	坏 a (イト)	R-002	(12.2)	2.6	(6.6)	○		
	小皿 a (イト)	R-008	(7.4)	1.3	5.0	○		煤付着
	小皿 a (イト)	R-004	(7.9)	1.0	(6.0)	○		

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (4)

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

	小皿 a (イト)	R-006	(8.0)	1.3	(6.3)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-007	(8.0)	1.2	(6.3)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-005	(8.6)	1.4	(6.5)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-003	(8.8)	1.1	(6.8)	○		

S-14 茶色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-005	(11.0)	2.6	7.0	○	○	
	坏 a (イト)	R-014	(11.5)	2.4	(7.7)	○	×	
	坏 a (イト)	R-008	11.8	2.5	8.5	○	○	
	坏 a (イト)	R-004	12.0	2.8	8.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-010	(12.0)	2.5	8.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-012	(12.0)	2.3	(7.7)	○	○	
	坏 a (イト)	R-009	12.2	2.3	8.5	○	○	煤付着
	坏 a (イト)	R-013	(12.3)	2.5	(8.5)	○	—	
	坏 a (イト)	R-016	(12.3)	2.25	(9.0)	○	×	
	坏 a (イト)	R-007	12.4	2.5	8.4	○	○	煤付着
	坏 a (イト)	R-006	12.5	2.4	8.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-015	12.6	2.4	9.0	○	○	
	坏 a (イト)	R-017	(12.6)	2.3	(9.2)	○	—	
	坏 a (イト)	R-011	(13.4)	2.5	(9.8)	○	○	煤付着
	坏 a (イト)	R-002	(15.7)	3.2	11.0	○	○	
	坏 a (イト)	R-001	(16.0)	3.15	11.5	○	×	R-003と接合
	小皿 a (イト)	R-018	7.6	1.2	5.9	○	○	
	小皿 a (イト)	R-023	(7.6)	1.3	(6.2)	○	×	
	小皿 a (イト)	R-021	(7.8)	1.1	5.7	○	—	
	小皿 a (イト)	R-025	(7.8)	1.3	(5.9)	○	—	
	小皿 a (イト)	R-019	8.0	1.1	6.3	○	○	
	小皿 a (イト)	R-020	(8.2)	1.2	(6.3)	○	×	
	小皿 a (イト)	R-022	(8.4)	0.9	(6.8)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-024	(9.0)	1.45	(7.2)	○	○	

S-14 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	(12.5)	2.4	9.6	○	—	
	小皿 a (イト)	R-006	7.8	1.2	5.3	○	○	
	小皿 a (イト)	R-005	(8.2)	1.1	5.4	○	○	
	小皿 a (イト)	R-008	8.2	1.5	6.0	○	○	煤付着
	小皿 a (イト)	R-002	(8.4)	1.1	6.6	○	○	
	小皿 a (イト)	R-007	8.4	1.25	6.2	○	○	
	小皿 a (イト)	R-003	(8.6)	1.2	(5.8)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-004	(9.3)	1.1	(8.9)	○	○	

S-15 黒灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-004	(12.2)	3.2+ α	(8.3)	○		
	坏 a (ヘラ)	R-003	(12.8)	3.2	(8.3)	○		
	坏 a (ヘラ)	R-001	13.2	3.0	8.0	○	○	
	坏 a (ヘラ)	R-002	(13.3)	2.8	(9.8)	○		
	坏 a (ヘラ)	R-005	(14.5)	3.2+ α	(9.8)	○		
	丸底坏 a (ヘラ)	R-006	12.6	2.9	—	○	○	
	丸底坏 a (ヘラ)	R-008	(14.2)	4.1+ α	—	○		
	丸底坏 a (ヘラ)	R-007	(16.6)	4.6+ α	—	○		
	碗 c	R-009	14.2	5.4	6.4	○		
	碗 c	R-010	(14.4)	5.5	8.0	○		煤付着

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (5)

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

	小皿 a (ヘラ)	R-012	10.0	1.5	6.4	○	○	
	小皿 a (ヘラ)	R-013	10.0	1.0	7.2	○	○	
	小皿 a (ヘラ)	R-014	(10.4)	1.2	(6.9)	○		
	小皿 a (ヘラ)	R-015	(10.6)	1.4	(8.6)	○		
	小皿 a (ヘラ)	R-016	(10.6)	1.1	(8.3)	○	○	
	小皿 a (ヘラ)	R-011	11.0	2.1	7.7	○	○	
	小皿 a 2 (ヘラ)	R-017	10.2	1.1	6.4	○	○	
	小皿 a 2 (ヘラ)	R-018	(10.6)	1.2+ α	(6.5)	○		
	小皿 a 2 (ヘラ)	R-019	(10.6)	1.0+ α	(6.7)	○	○	

S-15 黒色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗 c	R-001	(14.0)	4.9	7.0	○		
	碗 c	R-002	14.2	4.7+ α	—	○		

S-16 黒色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-004	(12.0)	2.9	7.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-001	12.1	2.6	8.0	○	○	
	坏 a (イト)	R-002	12.2	2.5	8.5	○	○	
	坏 a (イト)	R-003	12.2	3.0	7.3	○	○	
	坏 a (イト)	R-005	(12.8)	3.0	(8.6)	○	○	
	坏 a (イト)	R-006	(12.8)	2.8	(8.2)	○		
	小皿 a (イト)	R-009	7.6	1.4	5.9	○		
	小皿 a (イト)	R-007	7.8	1.4	5.8	○	○	煤付着
	小皿 a (イト)	R-008	8.1	1.4	6.2	○	○	
	小皿 a (イト)	R-010	(8.6)	1.4	(6.2)	○	○	
	小皿 b	R-011	6.7	1.7	4.8	○	○	
	小皿 b	R-012	7.0	1.8	4.5	○	○	

S-17 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	M-002	(12.4)	2.4	9.0	○	○	
	坏 a (イト)	R-001	(12.6)	2.4	(9.0)	○	×	
	坏 a (イト)	M-001	(13.0)	2.4	9.5	○	○	
	坏 a (イト)	M-005	(13.0)	2.5	(9.4)	○	○	
	坏 a (イト)	M-003	(13.2)	2.7	(9.2)	○	○	
	坏 a (イト)	M-004	(13.6)	2.6	(9.0)	○	—	
	小皿 a (イト)	R-003	7.6	1.6	5.8	○	○	
	小皿 a (イト)	M-011	(8.0)	1.1	6.8	○	○	
	小皿 a (イト)	M-012	8.0	1.2	6.5	○	×	
	小皿 a (イト)	M-014	(8.0)	1.0	7.0	○	×	
	小皿 a (イト)	M-015	(8.0)	1.3	(7.0)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-016	(8.0)	1.1	(6.6)	○	×	
	小皿 a (イト)	R-002	(8.2)	1.1	(6.6)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-010	(8.2)	1.1	6.5	○	×	
	小皿 a (イト)	M-009	8.4	1.3	7.5	○		
	小皿 a (イト)	M-007	8.5	1.4	6.8	○	○	
	小皿 a (イト)	M-008	8.6	1.2	6.7	○	○	
	小皿 a (イト)	M-013	(8.6)	1.3	(6.0)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-017	(8.6)	1.5	(7.0)	○	×	
	小皿 a (イト)	M-006	8.8	1.6	6.0	○	○	

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (6)

S-18 暗褐色土

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	16.1	3.8	9.9	○		
	小皿 a (イト)	R-004	(7.0)	1.0	(5.9)	○		
	小皿 a (イト)	R-002	(8.2)	1.1	(6.8)	○		
	小皿 a (イト)	R-003	(8.4)	1.1	(6.8)	○		

S-19 黒色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a (イト)	R-001	(7.4)	1.1	(5.6)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-002	(8.2)	1.2	(7.0)	○		
	小皿 a (イト)	R-003	(10.0)	1.2	(7.6)	○		

S-20 茶色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	(12.0)	2.8	(7.0)		○	
	小皿 a (イト)	R-002	(7.6)	1.2	6.4	○	○	
	小皿 a (イト)	R-004	(8.0)	1.1	(4.8)	○		雲母含有
	小皿 a (イト)	R-003	(8.8)	1.2	(7.0)	○		

S-20 灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	11.8	3.1	7.2	○	○	
	坏 a (イト)	R-002	11.8	2.7	6.8	○	○	
	坏 a (イト)	R-004	11.8	2.8	6.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-005	12.0	2.7	6.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-007	(12.0)	2.2	7.3		○	
	坏 a (イト)	R-003	12.1	3.0	6.8	○	○	
	坏 a (イト)	R-006	13.4	2.9	7.7	○	○	
	小皿 a (イト)	R-008	(7.2)	0.9	(5.8)	○	○	
	小皿 b	R-009	7.4	1.6	(5.8)	○	○	

S-20 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a (イト)	R-002	8.3	1.3	6.8		○	
	小皿 a (イト)	R-004	(8.8)	1.4	(7.4)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-003	(9.0)	1.3	6.8		○	
	小皿 a (イト)	R-001	9.2	1.5	6.4		○	

S-20 黒褐色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a (イト)	R-001	9.1	1.5	7.0	○	○	

S-21 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a	M-001	(9.0)	1.0	(6.2)			
	小皿 a	M-002	(10.4)	1.2	(7.7)			

S-22 灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	(16.5)	3.8	10.4	○	○	
	小皿 a (イト)	M-006	(8.0)	1.3	(6.5)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-001	(8.1)	1.2	5.9	○	○	
	小皿 a (イト)	M-002	(8.1)	1.2	(6.3)	○		
	小皿 a (イト)	M-003	(8.2)	0.9	(6.3)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-004	(8.2)	1.4	(6.4)	○	○	
	小皿 a (イト)	M-005	(8.4)	1.4	(6.3)	○	○	

S-22 黒灰色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	R-001	(12.5)	2.5	7.4	○	○	

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (7)

S-23 暗褐色土

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a (イト)	R-002	(8.4)	1.2	(6.6)		○	
	小皿 a (イト)	R-001	(8.5)	1.35	6.7			

S-23 灰色砂

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 c	R-001	(9.4)	2.5	(7.0)			

S-25 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-002	(11.0)	2.3	(8.2)	○	○	
	坏 a (ヘラ)	R-001	11.3	2.45	7.3		○	
	坏 a	R-005	12.0	4.1	7.4			搬入品
	碗 c	R-006	12.2	4.2	7.2			
	碗 c	R-007	(13.4)	4.3	7.4			
	碗 c	R-010	—	2.8+ α	(7.2)			
	小皿 c	R-012	(11.4)	2.2	(7.2)			

S-29 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-001	—	1.5+ α	—	○		
	坏 a (ヘラ?)	R-002	—	1.1+ α	—			
	碗 c	R-003	—	1.3+ α	(5.0)			
	小皿 a (ヘラ)	R-004	—	1.5+ α	(7.0)	○		

S-31 黒褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-005	(10.2)	2.1	7.3			
	坏 a (ヘラ)	R-006	(10.2)	2.0	(6.8)	○		煤付着
	坏 a (ヘラ)	R-008	(10.2)	(2.1)	(7.4)			
	坏 a (ヘラ)	R-007	(10.6)	2.0	(7.6)			
	坏 a (ヘラ)	R-003	(11.3)	2.4	8.0			ヘラ記号
	坏 a (ヘラ)	R-004	(11.7)	2.1	7.8	○	○	
	坏 a (ヘラ)	R-002	(11.9)	2.3	7.2	○	○	煤付着
	坏 a (ヘラ)	R-001	12.4	2.3	7.1	○		穿孔
	小皿 a 2 (ヘラ)	R-009	15.0	2.6	9.3	○		
	小皿 c	R-011	(12.0)	1.8	7.7	○		
	小皿 c	R-010	12.9	2.1	9.6	○		
	碗 c	R-012	(15.2)	5.6	9.3	○		
	碗 c	R-013	—	3.0+ α	7.5	○		
	碗 c	R-014	—	2.9+ α	8.3			
	碗 c	R-015	—	3.2+ α	(8.0)	○		
	碗 c	R-016	—	2.3+ α	(7.2)	○		
	碗 c	R-017	—	3.2+ α	(7.2)	○		
	碗 c	R-018	(14.0)	(5.0)	(7.4)	○		

S-31 灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗 c	R-001	—	2.1+ α	(8.0)	○		

S-32 黒色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト)	M-001	11.2	2.7	7.7	○	○	
	坏 a (イト)	R-002	(12.2)	2.5	7.2	○	○	
	坏 a (イト)	R-001	12.4	2.9	7.5	○	○	
	坏 a (イト)	R-003	(12.4)	2.4	(8.6)	○	○	
	小皿 a (イト)	R-004	(8.6)	1.4	7.0	○	○	
	小皿 a (イト)	R-005	(8.7)	1.1	6.2	○		
	小皿 a (イト)	R-006	(8.8)	1.2	6.8	○	○	

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表 (8)

S-33 暗灰色土

A: 内底ナデ B: 板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (イト?)	R-001	(13.0)	2.3	(8.4)	○		
	小皿 a (イト)	R-002	(11.2)	1.2	7.6	○	×	雲母含有

S-34 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-002	12.2	3.5	7.5	○	○	
	坏 a (ヘラ)	R-003	(12.2)	3.2	(6.4)		○	
	坏 a (ヘラ)	R-004	(13.0)	4.0	6.7	○	○	
	坏 a (ヘラ)	R-005	—	2.1+ α	7.0			
	碗 c	R-006	14.1	4.4~4.9	7.7			
	碗 c	R-007	—	3.6	9.0			煤付着
	碗 c	R-008	—	2.2	9.8			
	小皿 a (ヘラ)	R-011	(12.0)	1.4	9.0			
	小皿 a (ヘラ)	R-010	12.5	1.9	8.4			
	小皿 a (ヘラ)	R-009	(12.8)	2.6	8.0			

S-34 褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-001	(12.0)	3.5	7.1	○	○	

S-34 灰色砂

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-001	(12.2)	3.9	(7.2)	○	×	

S-35 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗 c	R-001	—	2.5+ α	—			
	碗 c	R-002	—	2.0+ α	—			

S-36 褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a	R-001	—	3.1	—			
	坏 a (ヘラ)	R-002	—	1.5+ α	(8.0)			
	坏 a (ヘラ)	R-003	—	1.4+ α	7.1		(○)	
	碗 c	R-005	—	2.2+ α	(7.0)			
	碗 c	R-006	—	2.6+ α	(6.8)			

S-36 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a	R-001	—	3.6	—			
	坏 a (ヘラ)	R-002	(13.2)	3.3	(8.0)			
	坏 a (ヘラ)	R-003	—	2.2+ α	(7.6)			
	碗 c	R-004	—	2.9+ α	7.6			
	碗 c	R-005	—	3.0+ α	7.8			
	碗 c	R-006	—	2.9+ α	8.0		○	

S-36 黒褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-001	11.2	2.4~2.9	7.0		○	
	碗 c	R-003	12.6	4.8	7.3			
	碗 c	R-002	14.6	5.0~5.2	8.4		○	

S-36 暗黄褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏 a (ヘラ)	R-001	—	1.2+ α	(7.2)			
	碗 c	R-002	—	2.0+ α	—			

S-38 灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿 a	R-001	—	1.1+ α	—			

大宰府条坊跡第225次調査 土師器計測表(9)

S-40a 暗褐色土

A:内底ナデ B:板状圧痕

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗c	R-001	—	1.7+ α	—			

S-40j 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	R-001	—	1.0+ α	—	○		

S-47 黒色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a(イト)	R-001	—	1.25+ α	—			

S-50 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(ヘラ)	R-001	(10.6)	(3.1)	(7.6)	○		
	坏a(ヘラ?)	R-002	—	1.9+ α	—	○		
	坏a(ヘラ?)	R-003	—	0.8+ α	—	○		
	碗c	R-004	—	1.9+ α	(8.0)	○		

S-52 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a(イト)	R-001	(16.4)	2.3+ α	—	○		
	坏a(イト)	R-002	—	1.6+ α	(9.8)	○		
	小皿a(イト)	R-004	(7.5)	1.0	(6.0)	○	○	
	小皿a(イト)	R-003	(9.1)	1.0	(7.2)	○	○	

S-55 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗c	R-001	(16.0)	(5.8)	(6.8)			

S-56 暗褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a×皿a	R-001	—	1.2+ α	—			
	碗c	R-003	(12.8)	4.3	8.2			
	碗c	R-002	(13.6)	3.4+ α	—			
	碗c	R-004	—	2.1+ α	(8.2)			

S-56 黒褐色粘土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	R-001	(11.6)	2.7+ α	—			
	碗c	R-002	—	1.9+ α	7.7			

S-70b 黄褐色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a2	R-001	—	0.7+ α	—			

S-70f 暗灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗c	R-001	—	1.6+ α	—			

灰色土

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	R-001	(13.0)	2.8	8.6			穿孔

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表（1）

S-1 暗褐色土

須恵器	蓋3、高坏×器台、甕×壺
土師器	坏×皿a（イト）、碗c、高坏×器台
黒色土器A	碗c
龍泉窯系青磁 碗	I（1）
他器種	坏皿（1）
白磁 壺他	破片（1）
土製品	焼土塊

S-2 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、高坏、壺、甕
土師器	坏a（イト）、碗c、小皿a（イト）、鉢、甕、把手
黒色土器A	碗c、破片
黒色土器B	碗c 2
越州窯系青磁 碗	I（5）
皿	I×Ⅲ（2）
壺	壺×水注（1）
龍泉窯系青磁 碗	I（4）、I-1（1）、I-2（1）、Ⅱ（2）、Ⅱ-a（1）、Ⅱ-b（3）、Ⅲ（1）
同安窯系青磁 碗	I（1）、破片（2）
皿	I（3）
瓦 類	平瓦（格子叩）、破片（縄目叩）
石製品	滑石製石鍋、滑石製紡錘車？
須恵質土器	鉢（束播系）
緑釉陶器	破片（京都）（1）、破片（産地不明）（1）
灰釉陶器	碗（2）
国産陶器	甕（常滑）
白磁 碗	Ⅱ（2）、Ⅳ（1）、Ⅴ-4×Ⅶ-1・3（1）、破片（7）
皿	Ⅱ-1a×Ⅲ（1）、Ⅵ（1）、Ⅵ-1（1）、Ⅵ×Ⅶ（1）、Ⅶ（1）、Ⅶ-2b（1）、Ⅸ（3）、破片（1）
壺他	壺×水注（1）、合子身（1）
青白磁	小壺×合子（2）
中国陶器 壺	耳壺（1）、壺×水注（2）、壺×甕（3）、破片（2）
鉢	Ⅱ（1）
他器種	盤Ⅱ（1）、盤（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器壺（2）
金属製品	用途不明鉄製品

S-2 暗灰色粘土

須恵器	供膳具、甕
土師器	坏a（ヘラ、イト）、小皿a（イト）、小皿c
黒色土器B	碗
瓦 器	破片
龍泉窯系青磁 碗	I-2（1）
同安窯系青磁 碗	破片（1）
瓦 類	丸瓦（格子叩一角閃石含有）
須恵質土器	鉢
緑釉陶器	破片（産地不明）（1）
白磁 碗	破片（1）
皿	Ⅶ-b（1）
中国陶器 他器種	盤（1）

S-2 黒褐色粘土

土師器	坏a
龍泉窯系青磁 他器種	坏皿-3b（1）
瓦 類	平瓦（凹面に同心円叩）、平瓦

S-2 暗灰色砂

土師器	坏a（イト）、小皿a、煮炊具
黒色土器B	破片
白磁 碗	破片（1）

S-3 暗灰色土

須恵器	坏c、蓋3×高坏、壺、甕
土師器	蓋3、坏a（ヘラ、イト）、坏a（灯明）、坏a×小皿a（底部穿孔）、丸底坏、大坏c、碗c、碗c 2、小碗c、丸碗、小皿a（イト）、鉢、甕a
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
瓦 器	碗c
越州窯系青磁 碗	I（4）、I-2aウ（1）、I-2ア（1）、Ⅱ（4）
坏	I-3（2）
壺	Ⅱ（1）、壺×水注（頸部穿孔3カ所）（1）
龍泉窯系青磁 碗	I（1）、I-4（1）、Ⅱ-b（1）、Ⅲ-2c（細介）（1）、破片（1）
他器種	坏皿-3b（3）、Ⅲ（1）
同安窯系青磁 碗	Ⅱ（1）
皿	I（2）
瓦 類	平瓦（格子叩）、丸瓦（格子叩）、破片（縄目叩）
石製品	滑石製石鍋
須恵質土器	鉢（篠簜？）、鉢（束播系）
瓦質土器	鉢、火舎×盤
緑釉陶器	耳皿？（京都）（1）、碗（京都）（1）、碗（近江）（2）、碗（産地不明）（1）、壺（産地不明）（1）、破片（2）
国産陶器	甕（常滑）
白磁 碗	Ⅱ（1）、Ⅳ（3）、Ⅴ×Ⅶ（1）、Ⅸ（2）、破片（6）
皿	Ⅵ-1（1）、Ⅸ-1（2）、Ⅸ-2（1）
壺他	合子身（1）、鉢（1）、壺×水注（1）
中国陶器 壺	破片（4）
鉢	破片（2）
甕	破片（1）
他器種	盤I（3）、盤I-b（1）、盤Ⅱ（3）、盤Ⅲ（1）、水注（1）
銭 貨	元祐通寶（篆書・順読）
金属製品	銅製品（鉸具？）
土製品	焼土塊

S-3 青灰色粘土

土師器	坏a（イト）、碗c、坏a×小皿a
瓦 類	平瓦（格子叩）

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表(2)

S-4 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	坏a、小皿a(イト)、碗c、坏c×碗c、甕
製塩土器	煎煎土器
黒色土器A	破片
越州窯系青磁 坏	I(1)
鉢他	水注(1)
龍泉窯系青磁 碗	I-2(1)、I-4(1)
同安窯系青磁 碗	I(1)、I-1b(1)、破片(1)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)、文字瓦(I-2)
緑釉陶器	碗(防長)(1)
中国陶器 壺	破片(1)
土製品	焼土塊

S-5 黒褐色土

須恵器	蓋3、蓋4、蓋c、坏c、坏身×坏蓋、大甕a、甕、壺、壺蓋×皿
土師器	坏a×小皿a、丸底坏a、碗c、丸底碗a、皿a、小皿a(ヘラ)、小皿a2、甕b、甕?
製塩土器	?破片
黒色土器A	碗c、鉢
黒色土器B	碗c、碗c2、碗(搬入品?)、皿a
越州窯系青磁 碗	I(9)、I-2ア(1)、I-2ウ(1)、II(4)
同安窯系青磁 碗	破片(1)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(二重格子叩、縄目叩)
石製品	破片
須恵質土器	鉢?(玉縁、焼成甘い)
緑釉陶器	碗(京都)(3)、碗×皿(京都)(2)、破片(京都)(2)、破片(東海)(1)、碗(東海×近江)(3)、碗×皿(産地不明)(1)
灰釉陶器	碗(3)、破片(1)
中国陶器 壺	破片(2)
鉢	破片(1)
弥生土器	破片
金属製品	鉄釘、鉄鏃×刀子

S-5 黒褐色粘土

須恵器	蓋3、蓋b?、坏c、甕
土師器	蓋3、坏a、丸底坏a、碗c、小皿a、皿c、甕a、甕b?
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 碗	I(4)
瓦類	破片(格子叩、縄目叩)
緑釉陶器	碗(近江)(1)、破片(京都×防長)(1)
灰釉陶器	碗(1)
白磁 壺他	鉢III(1)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器壺(1)

S-6 暗灰色土

須恵器	蓋、坏c、甕、甕×壺
土師器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、高坏、甕a、煮炊具(角閃石含有)
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗(搬入品)、供膳具

瓦器	碗c、小皿c
越州窯系青磁 碗	I(7)、I-2ア(1)、I-2(1)、II(9)、破片(3)
壺	II系破片(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(4)、I-2a(1)、I-2(7)、I-3(1)、I-4(4)、II(3)、II-b(5)、破片(4)
皿	破片(1)
他器種	坏III-1a(1)、坏III-4(2)、坏III-5a(1)
同安窯系青磁 碗	I(3)、I-1(1)、I-1b(11)、I-1c(4)、破片(3)
皿	I(5)、破片(1)
青磁(未分類)	碗(1)
瓦類	丸瓦(格子叩)、文字瓦(I-2)、破片(格子叩、縄目叩)
木製品	櫛、ヘラ状製品、箸
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦質土器	火舎×盤
緑釉陶器	破片(長門)(1)、破片(京都)(2)、破片(産地不明)(1)
灰釉陶器	破片(1)
国産陶器	甕(常滑)
白磁 碗	II-1(1)、IV(6)、IV-1a(1)、V(1)、V-1×VII-2(1)、V-2×VII-4(1)、V-4×VII-1×3(2)、VII-1×4(1)、IX(2)、IX-1(1)、破片(13)
皿	II-1a×III(1)、IV(2)、VIII(1)、VIII-1b(1)、IX(2)、破片(2)
壺他	瓶(1)、壺(1)、水注(1)、合子(1)、破片(2)
青白磁	梅瓶(1)
中国陶器 壺	耳壺III-1(1)、耳壺VI(1)、破片(5)
鉢	I-2b(1)、破片(6)
甕	破片(6)
他器種	盤I(1)、盤II(4)、破片(4)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器(1)
銭貨	皇宋通寶(篆書・対読)
弥生土器	甕×壺
土製品	焼土塊

S-6 暗褐色土

須恵器	蓋4、高坏、壺、甕
土師器	坏a(イト)、碗×鉢、小皿a(イト)、小皿c、高坏、鍋
黒色土器B	碗c
瓦器	破片
越州窯系青磁 碗	I(4)、I-1a(1)
鉢他	合子身I系(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(4)、I-4(1)、I-2×4(1)、II-b(2)、破片(1)
皿	I(1)、破片(1)
同安窯系青磁 碗	I-1b(1)、I-1c(1)、III-1a(1)、破片(6)
皿	I(3)
瓦類	平瓦(格子叩)、破片
石製品	砥石、滑石破片
瓦質土器	鉢?

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覽表 (3)

緑釉陶器	破片(京都)(1)
灰釉陶器	瓶(1)
白磁 碗	Ⅳ-1(1)、Ⅴ-1×Ⅷ-2(1)、Ⅴ-4×Ⅷ-1・3(1)、破片(5)
青白磁	碗(1)、合子(1)
中国陶器 壺	耳壺Ⅲ(1)、破片〔B類〕(1)、破片(4)
鉢他	鉢×水注〔B類〕(4)
他器種	盤Ⅰ(1)、盤Ⅱ(4)、破片(1)

S-6 青灰色粘土

須恵器	甕、破片
土師器	碗c、小皿a(イト)、甕a、鍋?
黒色土器B	碗c
龍泉窯系青磁 碗	Ⅰ(1)、Ⅱ-b(1)
石製品	滑石破片

S-7 暗褐色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	坏a、甕
越州窯系青磁 碗	Ⅰ(1)
龍泉窯系青磁 皿	Ⅰ(3)
瓦類	平瓦(平行叩)

S-8 暗褐色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、甕a
龍泉窯系青磁 碗	Ⅰ-2(4)
他器種	盤Ⅲ(1)、盤Ⅲ'(1)
同安窯系青磁 碗	Ⅰ-1b(1)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(縄目叩)、軒丸瓦当(巴文)
土師質土器	搥鉢
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦質土器	搥鉢、鍋×鉢
国産陶器	甕(常滑)
白磁 皿	破片(G期以降)(1)
中国陶器 甕	Ⅱ(1)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器壺(1)
安南	碗(鉄絵)(1)
金属製品	鉈滓
土製品	棒状製品

S-8 暗褐色粘土

須恵器	甕×壺
土師器	坏a(イト)、碗c
越州窯系青磁 碗	Ⅱ(1)
龍泉窯系青磁 碗	Ⅲ(1)、Ⅳ(1)
同安窯系青磁 碗	Ⅰ(1)
瓦類	平瓦(格子叩)
須恵質土器	坏a(イト?)
国産陶器	甕(常滑)
白磁 碗	Ⅳ(1)、Ⅴ-1×Ⅷ-2(1)、Ⅷ(1)
皿	Ⅸ(1)、Ⅸ-1(1)

壺他	壺Ⅲ(1)
青白磁	梅瓶(3)
中国陶器 甕	Ⅳ(2)
他器種	盤Ⅱ-1a(1)、破片(2)
金属製品	鉈滓(碗形滓)

S-8 暗灰色土

須恵器	坏c、蓋×皿、壺、甕
土師器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、鍋
黒色土器A	破片
越州窯系青磁 碗	Ⅱ(1)
龍泉窯系青磁 碗	Ⅰ-1(1)、Ⅱ-b(5)、Ⅲ(1)
同安窯系青磁 碗	Ⅰ-1b(2)
瓦類	平瓦(縄目叩)
石製品	滑石製石鍋A群、B群
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦質土器	鉢、搥鉢
国産陶器	甕(常滑)
白磁 碗	Ⅴ(1)
皿	Ⅸ(1)
青白磁	皿(口禿?) (1)
中国陶器 壺	盤×鉢(緑釉)(2)

S-8 黒褐色土

須恵器	蓋3、坏×蓋、高坏、甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、碗c、坏c×碗c、高坏、煮炊具
黒色土器A	破片
瓦器	碗c
越州窯系青磁 碗	Ⅰ(1)
龍泉窯系青磁 碗	Ⅱ(1)
皿	Ⅰ-1(1)
同安窯系青磁 碗	Ⅰ-1c(1)
石製品	平玉石
須恵質土器	鉢(東播系)
白磁 碗	Ⅳ(1)
中国陶器 鉢他	鉢×水注(1)、鉢×盤(緑釉)(1)
銭貨	破片(銭名不詳)

S-9 明灰色土

須恵器	壺、甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、小皿b、煮炊具
黒色土器B	鉢×壺?、?破片
越州窯系青磁 碗	Ⅱ-2(1)
瓦類	平瓦(縄目叩、無文)
須恵質土器	鉢(東播系)
中国陶器 甕	Ⅳ(1)

S-9 黒褐色粘土

土師器	坏、小皿a(イト)
-----	-----------

S-9 灰色砂

須恵器	壺
-----	---

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表(4)

S-9 灰色粘土

土 師 器	供膳具
黒色土器A	供膳具
瓦 質 土 器	鉢

S-10 黒褐色土

須 恵 器	蓋1、蓋3、坏a、壺、甕
土 師 器	坏a(ヘラ、ヘラ×イト)、小皿a(イト?)、小皿c?、 碗c、煮炊具、貯蔵具?
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 坏	I(1)
瓦 類	平瓦(格子叩)
須恵質土器	破片(東播系か?)

S-10 黒褐色粘土

須 恵 器	甕
土 師 器	坏、碗×丸底坏、小皿a(ヘラ×イト)、小皿a2、煮炊具
黒色土器A	碗c
龍泉窯系青磁 碗	I(1)
同安窯系青磁 碗	I-1a(1)
瓦 類	平瓦(格子叩、縄目叩)
白 磁 碗	II-1(1)
弥生土器	甕(板付I式)

S-10 灰色土

須 恵 器	蓋3、蓋c、供膳具、高坏×壺b、鉢×壺a蓋、甕
土 師 器	坏a(ヘラ)、坏a(油煙)、坏c、小皿a(ヘラ×イト)、 碗c、鉢×壺、鍋、甕b、煮炊具(角閃石含有)
製 塩 土 器	煎熬土器
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	供膳具
瓦 器	碗
越州窯系青磁 碗	I(1)、I-2ウ(1)、II(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(1)
同安窯系青磁 皿	I(1)
瓦 類	丸瓦(格子叩、縄目叩)
緑釉陶器	碗(防長)(1)、破片(近江)(1)
灰釉陶器	壺(1)
白 磁 碗	Ⅷ-1b(1)、破片(1)
壺他	Ⅱ系破片(1)
中国陶器 他器種	破片(1)

S-11 暗褐色土

須 恵 器	蓋3、蓋c、坏c、壺b、壺e、甕
土 師 器	坏a(ヘラ>イト)、坏c、碗c、小皿a(イト)、高坏、 甕a、甕b、把手
黒色土器A	碗c
黒色土器B	供膳具、甕
瓦 器	碗c
越州窯系青磁 碗	I(4)、I-2(1)、I-2bウ(1)、I-5(1)、 II-2(2)、Ⅲ-1b(2)
皿	I(1)、?II(1)
同安窯系青磁 碗	I-1b(1)、II×Ⅲ(1)

瓦 類	平瓦(縄目叩)
緑釉陶器	破片(防長)(1)、破片(東海)(1)、破片(近江)(1)、 破片(京都×長門)(1)、破片(東海×近江)(2)
灰釉陶器	壺(1)
白 磁 碗	II(1)、V-1×Ⅷ-2(1)、V-2×Ⅷ-4(2)、 破片(6)
皿	破片(2)
中国陶器 壺	耳壺Ⅲ×Ⅳ(1)

S-12 黒褐色土

須 恵 器	坏a、坏c、小壺、壺、壺×甕
土 師 器	坏a(ヘラ?<イト)、小皿a(イト)、小皿a2、甕a、 把手
製 塩 土 器	焼塩壺
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	破片
瓦 器	破片
越州窯系青磁 碗	I(1)、II(4)、II-1b(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(2)、I-4(1)、II-a(1)、破片(1)
他器種	小碗I(1)、坏Ⅲ(1)
同安窯系青磁 碗	I-1b(1)
皿	I-1(1)
瓦 類	平瓦(縄目叩)、破片(格子叩)
石 製 品	砥石、平玉石
緑釉陶器	碗×坏(防長)(1)
灰釉陶器	供膳具(1)、破片(1)
白 磁 碗	Ⅸ(1)
壺他	壺×水注(1)、破片(2)
中国陶器 他器種	水注Ⅱ?(1)、破片(2)
金 属 製 品	用途不明鉄製品、鋳滓
土 製 品	焼土塊(角閃石含有)

S-13 暗褐色土

須 恵 器	供膳具、壺?、甕、風字硯か?
土 師 器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、小皿b、甕b
黒色土器A	碗c
瓦 器	坏a×小皿a、鉢
越州窯系青磁 碗	I(1)、II(2)、破片(1)
壺	水注×壺(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(4)、I-2(1)、II(1)、II-b(5)
同安窯系青磁 碗	I-1b(1)、破片(1)
皿	I-1(1)、I-2b(1)
瓦 類	平瓦
石 製 品	滑石製石鍋C群
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦 質 土 器	鉢
国産陶器	甕×壺(常滑)
白 磁 皿	Ⅸ(3)、破片(1)
壺他	水注(1)、壺(1)、破片(2)
中国陶器 鉢	鉢(1)、鉢×水注(2)
甕	破片[F類](1)、破片(3)

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覽表 (5)

金属製品	鉄釘
土製品	焼土塊

S-14 茶色土

須恵器	高坏×壺b、甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、貯蔵具
黒色土器B	破片
瓦器	鉢
龍泉窯系青磁 碗	I(2)、II-b(6)、III(1)、III-2c(細弁)(1)
他器種	坏III(1)
同安窯系青磁 碗	I-1b(1)
瓦類	平瓦(格子叩)、文字瓦(I-2)
土師質土器	脚
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦質土器	鉢
白磁 碗	V-2×Ⅷ-4(1)、破片(1)
皿	IX(2)、IX-1(1)、IX-2(1)、皿×壺(1)、破片(1)
中国陶器 壺	壺×水注[B類](3)
鉢	破片(2)
甕	破片(3)
他器種	盤II(1)、皿(1)
土製品	焼土塊

S-14 灰色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏c、甕
土師器	坏a、小皿a、煮炊具
龍泉窯系青磁 碗	II-b(3)、III-2c(外反、細弁)(2)
石製品	滑石製石鍋C群
木製品	漆碗、樽板、板材、結桶底板
須恵質土器	鉢
白磁 皿	Ⅷ(1)、IX-2(油煙)(1)

S-14 暗灰色土

須恵器	蓋3、蓋3×高坏、坏c、皿×高坏、壺×高坏、小壺、蓋、甕
土師器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、壺×甕、甕a、甕(角閃石含有)
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c、小皿(鐵内系)
瓦器	碗
越州窯系青磁 碗	I(9)、I-1(1)、II(2)、II-2d(1)
坏	I(輪花)(1)
壺	II(1)
鉢他	鉢I(1)、I破片(1)
龍泉窯系青磁 碗	I(10)、I-2(2)、I-4(2)、II(2)、II-a(1)、II-b(8)、II-c(1)、III-2c(直口)(1)
皿	I(1)
他器種	小碗II-b(1)、小碗III(1)、小碗III-1Ab(1)、坏III(3)、破片(2)
同安窯系青磁 碗	I-1(1)、I-1b(2)、破片(1)
皿	I(2)、I-1a(1)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(格子叩)
石製品	平玉石、滑石破片

須恵質土器	鉢(東播系)、鉢(篠簾)
瓦質土器	鉢、風炉
緑釉陶器	碗×皿(防長)(2)、碗×皿(京都)(3)、破片(長門)(3)、破片(京都×防長)(2)、破片(産地不明)(1)
灰釉陶器	碗(1)、破片(1)
国産陶器	甕×壺(常滑)
白磁 碗	I(1)、IV(2)、V-4×Ⅷ-1・3(4)、V-2×Ⅷ-4(2)、Ⅷ-1(2)、II系破片(1)、破片(10)
皿	II-1a×皿(1)、V×VI(2)、IX-1(3)、IX-1d(1)、破片(1)
壺他	合子(1)、壺(3)、壺?(1)、破片(5)
青白磁	碗(2)
中国陶器 壺	耳壺V(1)、耳壺VI×VII(1)、耳壺(5)、壺×水注(10)
鉢他	鉢×壺(8)、破片(14)
甕	IV(1)
黒釉陶器	破片(1)
金属製品	鉄釘
土製品	玉、焼土塊
その他	剥片(黒曜石)

S-15 黒灰色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏c、甕
土師器	蓋c、坏a(へら)、坏c、丸底坏a、碗c、碗c2、小皿a(へら)、小皿a2、高坏、甕、甕a
製塩土器	破片
黒色土器A	碗c、甕
黒色土器B	碗c、皿a(搬入品か?)、甕
瓦器	破片
越州窯系青磁 碗	I(9)、I-2aウ(1)、I-1a×I-3(1)、II(10)、II-2a(2)、II-2b(1)、III(1)、III-1(1)
坏	I(輪花)(1)、I-1×I-2a(1)、
鉢他	合子I?(1)、大碗I(2)、大碗I(輪花)(1)、壺×水注(2)、I破片(1)、II破片(1)、破片(2)
龍泉窯系青磁 碗	I(1)(混入)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩一枚造り)、文字瓦(I-5、IV-4、Ⅷ)、瓦主
石製品	滑石製石鍋A群、滑石片、平玉石
緑釉陶器	碗(京都)(1)、碗(東海)(1)、皿(京都)(1)、皿(防長)(1)、壺(東海)(1)、鉢×皿(京都)(1)、破片(京都)(5)、破片(長門)(1)、破片(防長)(5)、破片(京都×防長)(1)、破片(東海×近江)(5)、破片(産地不明)(1)
灰釉陶器	碗×皿(1)、壺(3)、破片(1)
白磁 碗	I(1)、XI-1(1)、XI-5(1)、破片(1)
皿	XI(1)
壺他	破片(4)
金属製品	鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓
土製品	焼土塊
その他	剥片(黒曜石)

S-15 黒灰色シルト

須恵器	蓋c、坏c、鉢、壺、甕
土師器	坏a(へら)、丸底坏a、碗c、鉢、甕a、甕b、甕(角閃石含有)、煮炊具(銅付)
黒色土器A	坏a、碗c、鉢×甕、甕

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (6)

黒色土器B	碗c、小皿(畿内系)
越州窯系青磁 碗	I (5)、I-5b (1)
瓦 類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(格子叩)、文字瓦(I-8a)、瓦玉
石 製 品	円盤状製品(滑石)、平玉石
緑釉陶器	碗(防長)(1)、碗(京都)(1)、碗(近江)(3)、盤×鉢(防長)(1)、破片(京都)(4)
灰釉陶器	壺(2)、碗×皿(1)、片(1)

S-15 黒色粘土

須 恵 器	壺×甕
土 師 器	坏a(ヘラ)、碗c、小皿a(イト)、甕b
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 碗	I-2ウ(1)
瓦 類	平瓦(格子叩)
石 製 品	砥石
緑釉陶器	蓋×合子(東海)(1)
そ の 他	種子(桃)

S-16 黒色土

須 恵 器	坏a、蓋3、甕
土 師 器	坏a(イト)、小皿a(イト)、小皿b、鍋
瓦 器	破片
越州窯系青磁 碗	I (1)、II (1)、II-b (1)
国産陶器	破片(常滑)
白 磁 碗	IX (1)、破片(1)
壺他	鉢(1)、破片(1)
青 白 磁	梅瓶(1)
中国陶器 鉢	鉢×壺[B類](1)
甕	IV (6)
他器種	水注[B類](1)
黒釉陶器	碗(1)
金属製品	鉄釘

S-17 暗灰色土

須 恵 器	蓋c、蓋×高坏、坏a、坏c、壺、壺(肥後)、甕、甕(内面擦痕有)
土 師 器	碗c、坏a(ヘラ<イト)、皿a(ヘラ?<イト)、小皿a(イト)、大坏×鉢、器台、甕a、甕b、甕(角閃石含有)
黒色土器A	坏a、碗c、甕
黒色土器B	碗c、硯
瓦 器	碗c、皿a
越州窯系青磁 碗	I (14)、I (輪花)(1)、II (10)
坏	I (1)
壺	II (1)、壺×水注II (1)
長沙窯系青磁 碗	I (1)
龍泉窯系青磁 碗	I (15)、I-1 (1)、I-2 (12)、I-2 (雲文?)(1)、I-2a (3)、I-3 (1)、I-4 (6)、I-6 (1)、I-2×4 (2)、II (3)、II-a (3)、II-b (12)、破片(1)
他器種	蓋皿(1)、坏皿-1 (1)、破片(1)
同安窯系青磁 碗	I (5)、I-1b (3)、III (1)
皿	I (4)、I-1 (10)、I-1b (1)、破片(3)

瓦 類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(格子叩)、破片(格子叩、縄目叩)、瓦玉
石 製 品	権(片岩系、穿孔有)、権(滑石製石鑄転用、穿孔有)、砥石
須恵質土器	鉢(東播系)
瓦質土器	鉢
緑釉陶器	壺(京都)(1)、破片(京都)(2)、破片(京都×防長)(2)、破片(産地不明)(1)
灰釉陶器	壺(3)、碗×皿(1)、碗(1)
国産陶器	鉢(常滑)、甕×壺(常滑)
白 磁 碗	I (2)、IV (4)、IV-1a (1)、IV-2 (1)、V (1)、V-1d (1)、V-4 (1)、V-1×Ⅷ-2 (1)、V-2×Ⅷ-4 (2)、V-4×Ⅷ-1・3 (10)、Ⅷ-2×3 (1)、Ⅷ-2~4 (1)、IX (3)、IX-1 (1)、破片(33)
皿	II-1a×Ⅲ (1)、VI (1)、V×VI (1)、VI (1)、Ⅷ (1)、Ⅷ-1b (1)、IX (2)、IX (油煙)(1)、IX-1 (3)、II系破片(2)、破片(5)
壺他	壺II系(1)、壺III (3)
青 白 磁	碗(1)、合子蓋(1)、?破片(1)
中国陶器 壺	IV (1)、小壺(1)、耳壺VI (1)、耳壺(5)、鉢×壺[B類](2)、鉢×壺(21)、壺×耳壺(4)、破片(17)
鉢他	IV-1 (1)、VI-1 (1)、鉢×水注[B類](2)、鉢×水注(4)、破片(6)
甕	I (4)、破片(3)
他器種	盤I (2)、盤III (2)、水注IV (5)、水注V-2 (1)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器(3)
縄文土器	深鉢?
金属製品	鉄釘、刀子?、用途不明鉄製品、鉄滓
土 製 品	玉、焼土塊
そ の 他	種子(桃)

S-17 暗灰色粘土

須 恵 器	蓋×高坏、壺、甕
土 師 器	坏a(イト)、小皿a(イト)、供膳具(ヘラ、イト)
越州窯系青磁 碗	II (2)
龍泉窯系青磁 碗	破片(1)
須恵質土器	鉢(東播系?)
緑釉陶器	皿(近江)(1)
白 磁 碗	破片(1)
中国陶器 壺	破片(2)

S-17 灰色砂

須 恵 器	供膳具、甕?
土 師 器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)
同安窯系青磁 碗	I (1)
須恵質土器	鉢(東播系)
白 磁 碗	破片(1)

S-18 暗褐色土

須 恵 器	供膳具、甕
土 師 器	坏a(イト)、碗c、小皿a(ヘラ<イト)、甕a、煮炊具(角閃石含有)
黒色土器B	供膳具
瓦 器	碗c
越州窯系青磁 碗	II (1)、II-b (1)

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表（7）

龍泉窯系青磁	碗	初期龍泉窯×同安窯系青磁0（1）、I（9）、II-a（1）、II-b（1）
同安窯系青磁	碗	I（2）、I-1b（2）、I-1c（1）
	皿	I-1（2）
瓦	類	平瓦（格子叩）、破片（縄目叩）
石製品		滑石破片
須恵質土器		鉢（東播系？）
緑釉陶器		碗×皿（近江）（1）
白磁	碗	V-4×Ⅷ-1・3（1）
	壺他	破片（2）
中国陶器	壺	Ⅵ（1）、破片（5）
	甕	Ⅵ（1）
	他器種	盤Ⅱ（1）、盤Ⅲ（1）
縄文土器		深鉢？

S-19 黒色土

須恵器		蓋3、坏c、甕
土師器		碗c、坏a（イト）、小皿a（イト）、煮炊具（角閃石含有）
黒色土器A		供膳具、煮炊具
黒色土器B		供膳具
瓦器		碗c
越州窯系青磁	壺	壺I×水注I（1）
	鉢	破片I（1）
龍泉窯系青磁	碗	I（1）、I-4（1）、II（1）、II-b（3）
	他器種	坏Ⅲ（1）
同安窯系青磁	碗	I-1（1）
	皿	I-2（1）
石製品		滑石製石鍋B群
須恵質土器		鉢？
緑釉陶器		破片（京都）（1）
白磁	碗	V-4×Ⅷ-1・3（1）、破片（3）
	皿	IX（3）、IX-1（1）
	壺他	壺Ⅲ（1）
中国陶器	他器種	盤Ⅲ？（1）、破片（1）

S-20 茶色土

須恵器		坏c、甕
土師器		碗c、坏a（イト）、小皿a（イト）、甕
黒色土器A		碗c
黒色土器B		碗、甕
瓦器		碗
越州窯系青磁	碗	I（1）、I（輪花）（2）、II-2（2）、II-2a（1）、Ⅲ（1）
	壺	II（1）
龍泉窯系青磁	碗	I（12）、II-b（1）、Ⅲ（1）、Ⅲ-2（1）、破片（1）
	他器種	坏Ⅲ-4（1）、破片（1）
同安窯系青磁	碗	I-1b（1）
	皿	I（1）
高麗青磁	碗	？破片（外反）（3）
	象嵌	碗（1）

瓦	類	平瓦（格子叩）、丸瓦（二重格子叩、格子叩）、軒丸瓦当（巴文）
石製品		滑石破片、砥石
土師質土器		鉢
瓦質土器		鉢
緑釉陶器		碗（京都）（1）、皿（京都）（1）
瀬戸		卸皿
国産陶器		破片（常滑）
白磁	碗	II？（1）、IV-1（1）、V-1×Ⅷ-2（1）、V-2（1）、IX（3）、破片（1）
	壺他	壺Ⅲ（1）
中国陶器	壺	壺×水注（1）
	鉢	I-2b（1）、水注V×鉢IV（1）
	甕	IV（1）、破片（1）
	他器種	盤I（1）、盤I-2（1）、盤Ⅱ（1）
弥生土器		壺
金属製品		鉄釘、鋳滓
その他		剥片（黒曜石）

S-20 灰色土

須恵器		供膳具、甕
土師器		碗c、坏a（イト）、坏b、小皿a（イト）、小皿b、鍋
黒色土器A		碗c
黒色土器B		甕
瓦器		鉢
越州窯系青磁	碗	I（1）
龍泉窯系青磁	碗	I（4）、II-b（5）
	皿	IV（1）
瓦	類	平瓦（格子叩）、丸瓦（格子叩）
石製品		硯（滑石）、砥石
土師質土器		擂鉢
須恵質土器		鉢（東播系）
瓦質土器		鉢、火舎？
瀬戸		瓶
国産陶器		擂鉢（備前）、壺（常滑）
白磁	碗	XI（1）、破片（2）
	皿	IX（1）、B類（1）
	壺他	鉢（1）
青白磁		皿（1）

S-20 暗褐色土

須恵器		蓋3、坏c、壺、甕
土師器		坏a（イト）、碗c、小皿a（ヘライト）、高坏、壺、甕a、甕b
黒色土器A		碗c
黒色土器B		供膳具、甕b
瓦器		碗c
越州窯系青磁	碗	大碗I（1）、大碗I-2bア（1）、I（6）、II（1）
	坏	II（1）
	壺	II（1）、壺×水注II（1）
龍泉窯系青磁	碗	I（2）、I-2（5）、I-4b（1）、I-6（1）、I-6a（1）、II（1）、II-b（13）、Ⅲ-2（1）、破片（1）

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表（8）

同安窯系青磁	碗	I-1 (1)、I-1b (1)、II (1)、III (3)、破片 (1)
	皿	I-1 (3)、破片 (2)
瓦	瓦	平瓦 (格子叩、縄目叩)、破片 (二重格子叩)、瓦玉
石製品		滑石破片、平玉石
須恵質土器		鉢 (東播系)、鉢 (篠窯)
瓦質土器		碗
緑釉陶器		破片 (近江) (1)、破片 (産地不明) (1)
瀬戸		破片
白磁	碗	V-2 (1)、V-2b (1)、V-1×Ⅷ-2 (1)、V-2×Ⅷ-4 (2)、IX (2)、Ⅹ (1)、破片 (7)
	皿	II-1a×III (5)、III-1 (1)、IV (1)、IV-2 (1)、V (1)、V×VI (2)、VI (1)、破片 (1)
	壺他	壺Ⅲ (6)、四耳壺Ⅲ (1)
中国陶器	壺	耳壺Ⅱ (2)、耳壺Ⅵ (1)、耳壺Ⅶ (3)、耳壺 (2)、壺C群 (2)、破片 (2)
	甕	破片 (1)
他器種		碗? (1)、盤 (1)、水注V (2)、破片 (1)
須恵質 (輸入)		朝鮮系無釉陶器壺 (2)、?破片 (1)
金属製品		鉄釘、鉄滓
土製品		土師器転用品 (おはじき?)、焼土塊
その他		箔×塗膜?

S-20 暗灰色土

須恵器	供膳具
土師器	坏a (イト)、碗c、小皿a (イト)

S-20 黒褐色粘土

須恵器	壺、甕
土師器	坏a (イト)、小皿a (イト)
越州窯系青磁	碗
	鉢他
	水注? I (1)
龍泉窯系青磁	碗
	I (1)、破片 (1)
瓦	瓦
	平瓦 (格子叩、指頭調整、角閃石含有)
瓦質土器	鍋
白磁	壺他
	壺Ⅲ (1)
中国陶器	壺
	IV (1)、耳壺 (1)

S-21 暗灰色土

須恵器	蓋3、蓋4、坏c、円面硯、甕、甕 (内面石灰付着)
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、皿a (ヘラ)、小皿a 2、器台、高坏、甕a、甕a (角閃石含有)、甕b
黒色土器A	碗c、鉢
黒色土器B	坏a、碗c
瓦	瓦
	碗c、坏×碗
越州窯系青磁	碗
	I (8)、I? (1)、I-1b (1)、II (8)
	壺
	II (1)
鉢他	水注I (1)
瓦	瓦
	平瓦 (格子叩、縄目叩)
緑釉陶器	碗 (京都) (2)、碗 (近江) (1)、碗×皿 (京都) (5)、碗×皿 (東海) (1)、破片 (京都) (9)、破片 (京都×長門) (1)、破片 (産地不明) (1)
灰釉陶器	碗 (1)、壺 (1)、破片 (3)
白磁	碗
	I-1② (1)、II-1 (1)、IV (1)、IV-1b (1)、V-2×Ⅷ-4 (1)、破片 (4)
	皿
	V-1 (1)、破片 (1)

壺他	壺Ⅲ (1)、破片 (1)、II系破片 (1)
中国陶器	壺
	耳壺IV? (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器壺 (4)
金属製品	鉄釘、鉄鏝、刀子、碗形滓、鉄滓

S-21 黄灰色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、甕
黒色土器A	碗c、鉢
瓦	瓦
	碗c
瓦	瓦
	破片 (縄目叩)
土製品	焼土塊

S-21 灰色粘土

須恵器	供膳具、壺×甕
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、把手、甕a
黒色土器A	碗c
黒色土器B	供膳具
瓦	瓦
	碗c
瓦	瓦
	破片
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器壺×鉢 (内面擦痕有) (1)

S-22 灰色土

須恵器	蓋3、坏a、坏c、壺、甕、甕×壺 (内面擦痕)
土師器	坏a (イト)、碗c、小皿a (イト)、小皿c、鉢、鍋、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	坏a、碗c、煮炊具
瓦	瓦
	小皿a、碗c、碗 (畿内系)
越州窯系青磁	碗
	I (2)、II (2)、II-2 (1)、II? (2)
鉢他	水注I (1)
龍泉窯系青磁	碗
	I (12)、I-2 (1)、I-4 (4)、II (14)、II-a (2)、II-b (43)、III (1)、III-2 (細弁) (2)、破片 (3)
他器種	坏Ⅲ (3)、坏Ⅲ-1 (1)、坏Ⅲ-1b (1)、破片 (2)
同安窯系青磁	碗
	I (2)、I-1b (8)、I-1c (1)、破片 (1)
皿	I (1)、I-2b (6)、破片 (7)
他器種	破片 (3)
瓦	瓦
	平瓦 (格子叩)、丸瓦 (格子叩、縄目叩)
石製品	滑石製石鍋B群 (転用)、C群、投丸?、滑石破片
土師質土器	鉢、羽釜、鉢×火舎
須恵質土器	鉢 (東播系)、片口鉢?
瓦質土器	鉢、播鉢
緑釉陶器	碗 (京都) (1)、破片 (京都) (2)
灰釉陶器	壺 (1)、破片 (1)
国産陶器	壺 (常滑)、甕 (常滑-表面付着物有)、甕 (備前)
白磁	碗
	II-1 (2)、IV (2)、V (3)、V-1×Ⅷ-2 (1)、V-4×Ⅷ-1・3 (7)、VI-b (1)、VI×Ⅷ (1)、Ⅹ (1)、Ⅹ-1 (1)、IX (2)、XI-5 (1)、II系破片 (7)、破片 (14)
	皿
	III-1 (1)、IV-1 (1)、V-2 (1)、Ⅷ (1)、Ⅷ? (1)、IX (15)、IX (油煙) (2)、IX-1 (8)、IX-2 (2)、II系破片 (1)、破片 (1)
	壺他
	摘み (1)、壺Ⅲ (5)、II系破片 (2)、破片 (10)、鉢Ⅲ (1)
青白磁	合子 (1)、合子? (1)

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表(9)

中国陶器	壺	壺Ⅳ(2)、壺A群(5)、壺B群(11)、壺C群(1)、壺(1)、壺×水注B群(1)、耳壺×水注(1)、破片(1)、破片[C? - b類](1)
	鉢他	I-2(1)、Ⅲ(1)、鉢×水注B群(1)、破片A群(播目有)(1)
	甕	甕Ⅳ(1)、破片(5)
	他器種	盤Ⅰ(12)、小盤Ⅰ(2)、盤Ⅰ-2(2)、盤Ⅱ(3)、水注Ⅳ(1)、水注Ⅵ(1)、水注? (2)、皿? (1)、破片A-1群(1)、破片A群(1)、破片B群(8)、破片(1)
須恵質(輸入)		朝鮮系無釉陶器壺(1)
銭貨		皇宋通寶(篆書、真書・対読)、破片(銭名不詳)
金属製品		鉄釘、刀子、鉄塊
土製品		焼土塊

S-22 黒褐色砂

須恵器	蓋、坏、壺、甕
土師器	碗c、坏a(イト)、小皿a(イト)、小皿b、甕b
黒色土器B	碗c、鉢?、甕
龍泉窯系青磁	碗 I(1)、Ⅱ-b(2)
同安窯系青磁	碗 破片(1)
瓦類	平瓦(縄目叩)
石製品	滑石製石鍋
木製品	用途不明製品
土師質土器	火舎
国産陶器	甕(常滑)
白磁	碗 V(1)、Ⅸ(1)、Ⅱ系破片(1)
中国陶器	壺 壺×水注A群(1)、壺×水注B群(1)
	鉢 鉢×水注A群(3)
	甕 甕×壺(1)
他器種	盤Ⅱ(2)
土製品	焼土塊
その他	種子(桃)

S-22 黒灰色粘土

須恵器	蓋c×高坏、供膳具、甕×甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、煮炊具
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	供膳具
越州窯系青磁	碗 Ⅱ(1)
龍泉窯系青磁	碗 I(1)、I-1a(1)、I-4(1)、Ⅱ-b(2)
同安窯系青磁	碗 I-1b(1)、Ⅳ-1b(2)
瓦類	丸瓦(格子叩)
木製品	結桶底板
須恵質土器	鉢(東播系)
国産陶器	甕? (外面押印)
白磁	碗 Ⅳ(1)、V-4b×c(1)
青白磁	合子(1)

S-23 黒褐色土

須恵器	供膳具、把手?、甕
土師器	碗c、坏a(イト)、小皿a(イト)、鉢×坏d、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	供膳具

瓦器	供膳具
越州窯系青磁	碗 Ⅱ(1)
龍泉窯系青磁	碗 I-2(1)、I-4(2)
同安窯系青磁	碗 I-1b(1)、破片(1)
瓦類	破片(縄目叩)
石製品	円盤状製品(滑石製石鍋B×C群の転用)
須恵質土器	鉢(東播系)
灰釉陶器	破片(1)
白磁	碗 Ⅵ-1(1)、V-1×Ⅷ-1・3(1)
	煮他 壺Ⅲ(1)
中国陶器	壺 耳壺Ⅳ-1(1)、耳壺破片(1)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器壺(1)
土製品	焼土塊

S-23 暗褐色土

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏a(イト)、碗c、小皿a(イト)、壺、甕b
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	供膳具
瓦器	供膳具
越州窯系青磁	碗 I(1)
龍泉窯系青磁	碗 I-4(1)
同安窯系青磁	碗 Ⅲ(1)
	皿 破片(1)
瓦類	丸瓦(縄目叩)
須恵質土器	鉢(東播系)
白磁	壺 破片(1)
土製品	棒状製品

S-23 暗灰色土

須恵器	蓋c、甕×甕
土師器	坏a(ヘラ>イト)、坏(灯明)、碗c、小皿a(イト)、皿a(ヘラ)、小皿a2、器台、鍋、羽釜、甕a(角閃石含有)、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
瓦器	碗c
越州窯系青磁	碗 I(2)、Ⅱ(3)、Ⅲ-1a(1)
同安窯系青磁	碗 I-1b(1)
	皿 破片(2)
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)、丸瓦(縄目叩)
須恵質土器	鉢(東播系)、鉢(篠簾)
緑釉陶器	碗×皿(京都)(1)、破片(京都)(1)
灰釉陶器	壺(2)、碗×皿(2)
白磁	碗 V-1×Ⅷ-2(1)
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器壺(3)

S-23 灰色砂

須恵器	蓋c、坏a、碗c、壺、甕
土師器	蓋3、蓋4、坏a(ヘラ)、碗c、小皿a(イト)、小皿c、鉢、壺?、甕a、甕a(角閃石含有)、甕b
黒色土器A	坏a×碗a、碗c
黒色土器B	碗c

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (10)

越州窯系青磁 碗	I (1)、II (2)、II-2 (1)
瓦 類	平瓦 (格子叩)、丸瓦
緑釉陶器	碗 (京都) (1)、碗 (近江) (1)、破片 (産地不明) (1)
白 磁 碗	IV (1)、V-1×Ⅳ-2 (1)、破片 (1)
中国陶器 他器種	破片B群 (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器壺 (1)
イスラム	壺 (1)
金属製品	鉄製鈎状製品

S-24 暗褐色土

土 師 器	供膳具
黒色土器A	碗c

S-25 暗褐色土

須 恵 器	蓋3、坏a、壺、甕、供膳具 (擦痕有)
土 師 器	蓋3、坏a (ヘラ)、坏a (搬入品か?)、碗c、碗c2、小皿c、供膳具 (イト)、鉢×盤、甕a、甕a (角閃石含有)、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c2
越州窯系青磁 碗	I (1)、I-5 (1)、II (5)、II-2 (1)
皿	II (輪花) (1)
壺	壺×水注I (1)
瓦 類	平瓦 (格子叩)、丸瓦 (格子叩)、文字瓦 (I-2)
須恵質土器	破片
緑釉陶器	碗 (近江) (1)

S-27 黒褐色土

須 恵 器	破片
土 師 器	坏a (イト)
中国陶器 鉢	破片? B群 (1)

S-28 暗褐色土

須 恵 器	供膳具、壺×甕
土 師 器	坏c、壺×鉢、煮炊具
黒色土器A	破片
瓦 類	破片 (縄目叩)

S-29 暗褐色土

須 恵 器	供膳具、壺e (肥後)、壺、壺×甕
土 師 器	坏a (ヘラ)、碗c、甕
黒色土器A	碗
黒色土器B	破片
瓦 類	破片 (格子叩、縄目叩)
緑釉陶器	碗×皿 (京都×防長) (1)、碗×皿 (京都×近江) (1)

S-30 灰褐色土

須 恵 器	坏、甕
土 師 器	坏a、碗c、小皿?
瓦 類	破片 (縄目叩)
白 磁 皿	IX (1) (混入)

S-31 黒褐色土

須 恵 器	蓋2、蓋3、碗×坏c、壺e
土 師 器	坏a (ヘラ)、坏a (転用品一底部中心に穿孔有)、碗c、碗c2、小皿a (ヘラ)、皿a、小皿a2、小皿c、甕a、甕b

黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 碗	I (2)、I-2 aア (1)、II (2)、II? (1)、I-2 b (1)
皿	I (1)
長沙窯系青磁	皿? (1)
瓦 類	丸瓦 (格子叩)、文字瓦 (I-2)、瓦玉
緑釉陶器	皿 (京都) (1)、碗×皿 (防長) (1)、破片 (京都) (1)、破片 (近江) (1)
白 磁 煮他	鉢II (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器? (1)
金属製品	鉄釘、板状鉄製品、鉋滓
土 製 品	焼土塊
そ の 他	剥片 (黒曜石)

S-31 灰色土

須 恵 器	坏c、甕×壺
土 師 器	坏a、坏c、碗c、坏×皿a、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 碗	I (3)、I-1 (1)
皿	皿×坏I (1)
壺	壺×水注II (1)
石 製 品	滑石製石鍋 (転用品)、滑石破片
須恵質土器	鉢 (篠窯)
灰釉陶器	壺 (1)

S-32 黒色土

須 恵 器	供膳具、壺×甕
土 師 器	坏a (イト)、碗c、小皿a (イト)
黒色土器B	供膳具
瓦 器	鉢
龍泉窯系青磁 碗	I (1)、II-b (3)
同安窯系青磁 皿	破片 (1)
瓦 類	平瓦
土師質土器	鉢
須恵質土器	鉢 (東播系)
緑釉陶器	破片 (近江?) (1)
白 磁 碗	VII (1)
皿	Ⅷ-1 b (1)、IX (1)、IX-2 (1)
中国陶器 壺	IV (1)、IV-1 (1)
鉢	? 破片B群 (1)
他器種	盤-1 (3)、盤I-2 (1)
土 製 品	玉、焼土塊 (多量)

S-33 暗褐色土

須 恵 器	蓋3、坏身 (小田編年II B)、高坏、甕
土 師 器	碗c、皿a (ヘラ)、供膳具 (イト)、甕a
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	小壺、供膳具
瓦 器	供膳具
越州窯系青磁 碗	I (1)、II (2)

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (11)

阿安窯系青磁 碗	I-1c (1)
瓦 類	破片 (格子叩)
石 製 品	滑石製石鍋A群
灰釉陶器	碗 (1)
白磁 碗	IV (1)、IV×V (1)、V-4×Ⅷ-1・3 (2)、破片 (1)
中国陶器 壺	破片C群 (2)
他器種	盤Ⅲ (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器壺 (1)

S-33 茶色砂

須恵器	甕
土師器	坏

S-33 暗灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a (ヘラ、イト)、丸底坏a、小皿a (イト)、甕b
白磁 壺他	小壺蓋 (花文) (1)
青白磁	合子蓋 (1)
木製品	桶底板

S-34 暗褐色土

須恵器	蓋3、蓋4、蓋c、坏a、坏c、碗c、高坏、小壺 (8c末~9c初)、壺、甕
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、皿a (ヘラ)、大鉢×大坏、甕a、甕b、甕 (角閃石含有)
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁 碗	I (4)、II (3)
鉢他	蓋I (1)
瓦 類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、丸瓦 (格子叩)
石製品	スクレイパー
緑釉陶器	碗×皿 (長門?) (1)
白磁 碗	I-1 (2)
壺他	破片 (1)
金属製品	用途不明鉄製品、鉾滓
土製品	玉 (転用品)

S-34 青灰色粘土

須恵器	供膳具
土師器	坏 (畿内系???)、供膳具
黒色土器A	碗c

S-34 褐色土

須恵器	蓋3、坏c、鉢b、甕、壺、甕
土師器	坏a (ヘラ)、坏a (イト-混入?)、坏c、坏a×皿a (ヘラ)、碗c、高坏、把手、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁 碗	I (1)
瓦 類	平瓦 (格子叩)、破片 (縄目叩)
緑釉陶器	破片 (京都×長門) (2)
金属製品	鉄釘

S-34 灰色砂

土師器	坏a (ヘラ)
-----	---------

S-35 暗褐色土

須恵器	蓋3、壺、甕b
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、甕a、甕b
黒色土器A	坏a、碗c
黒色土器B	碗c
長沙窯系青磁	碗? (1)
瓦 類	平瓦 (縄目叩)、破片 (格子叩)
中国陶器 壺	破片B群 (1)
金属製品	鉄釘

S-36 褐色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、坏c、小碗c、碗c、高坏、壺b、壺d×f、甕、把手
土師器	坏a (ヘラ)、碗c、大碗c×鉢、小皿a (ヘラ)、小皿a (イト混入)、高坏、供膳具 (漆付着)、甕a、甕b、甕 (角閃石含有)、把手
黒色土器A	碗c、供膳具 (脚有)、煮炊具
黒色土器B	供膳具
越州窯系青磁 碗	I (10)、I-2aア (1)、I-2aウ (1)、I-2ウ (1)、II (4)、II-2a (1)、II-2e (1)
坏	I (1)
壺	壺×水注 (1)
鉢他	合子I (1)、脚I (1)
長沙窯系青磁	水注 (1)、盤×鉢 (1)
瓦 類	鬼瓦、軒丸瓦当 (複弁)、道具瓦、文字瓦 (I-2)、平瓦 (格子叩、縄目叩)、丸瓦 (格子叩)、瓦玉
石製品	平玉石
緑釉陶器	皿 (京都) (2)、碗×皿 (防長) (4)、碗×皿 (近江) (4)、破片 (防長) (3)、破片 (京都) (2)、破片 (東海) (1)
灰釉陶器	碗 (2)、皿 (2)、碗×皿 (8)、破片 (1)
白磁 碗	I (3)
中国陶器 他器種	破片C群? (1)
金属製品	鉾滓
銭貨	破片 (□□通寶-混入?)
その他	剥片 (黒曜石)

S-36 暗灰色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、坏c、鉢、壺、甕
土師器	坏a (ヘラ)、坏a (内面赤色顔料付着)、碗c、小皿a (ヘラ)、皿a (ヘラ)、供膳具 (油煙)、鉢×壺、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁 碗	II (1)
坏	I (輪花) (1)
鉢他	合子I (1)、蓋I (1)
瓦 類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、文字瓦 (I-2)
須恵質土器	鉢、鉢 (東海?)
緑釉陶器	破片 (東海) (1)
灰釉陶器	碗 (2)、皿 (1)、壺 (1)、?破片 (1)
土製品	焼土塊
その他	骨

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (12)

S-36 黒褐色土

須恵器	供膳具、壺
土師器	坏a（ヘラ）、碗c、碗c2、甕a、把手
黒色土器A	碗c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁 鉢	水注I（1）
瓦 類	平瓦（格子叩）、破片（縄目叩）
木製品	斎申、櫛、桶底板

S-36 褐色砂

土師器	坏a（ヘラ）、蓋×高坏、大坏×鉢、煮炊具
灰釉陶器	碗×皿（1）

S-36 黄褐色砂

須恵器	破片
土師器	坏a（ヘラ）
黒色土器A	碗

S-36 暗黄褐色土

須恵器	蓋3、坏c、煮×甕
土師器	坏a（ヘラ）、碗c、甕a、甕b、煮炊具（角閃石含有）
黒色土器A	碗c
瓦 類	破片

S-37 暗褐色土

土師器	坏a（ヘラ、イト）、碗c、煮炊具
緑釉陶器	碗×皿（京都）（1）

S-38 灰色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	坏a（イト）、小皿a、甕a、甕b
黒色土器B	破片
白磁 碗	II系破片（1）
中国陶器 壺	瓶×小煮B群（1）
土製品	玉

S-39 暗褐色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	供膳具、煮炊具
黒色土器B	破片
瓦 類	破片（格子叩）
石製品	滑石製破片、平玉石
緑釉陶器	破片（京都）（1）

S-40 a 暗褐色土

土師器	坏a、碗c、煮炊具
-----	-----------

S-40 d 暗褐色土

須恵器	蓋3×高坏、供膳具（蓋？）
土師器	坏a

S-40 g 暗褐色土

土師器	供膳具、甕a
緑釉陶器	碗×皿（京都）（1）

S-40 h 暗褐色土

土師器	高台破片、供膳具
黒色土器A	碗c

S-40 j 暗褐色土

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ）、碗c？、甕（雲母多量含有）、煮炊具

S-41 暗褐色土（S-29以西）

須恵器	蓋4、坏c、坏c×皿c、壺×鉢、甕
土師器	坏a、碗c、皿a、供膳具（油煙）、供膳具（漆付着）、甕b
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁 碗	I（1）
石製品	平玉石
灰釉陶器	破片（2）
その他	剥片（黒曜石）

S-41 暗褐色土（S-29以东）

須恵器	坏c、蓋、鉢×煮、煮、甕、破片（内面摩耗）
土師器	坏a（ヘラ）、碗c、甕a（角閃石含有）
黒色土器A	碗c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁 鉢他	合子I（1）
瓦 類	平瓦（縄目叩）
緑釉陶器	破片（防長）（1）

S-42 暗灰色土（S-29以西）

須恵器	供膳具、壺
土師器	坏a、甕
黒色土器A	碗c
石製品	平玉石、破片（安山岩）

S-42 暗灰色土（S-29以东）

須恵器	供膳具
土師器	坏a（イト？）、煮炊具
瓦 器	破片

S-43 灰色土

須恵器	供膳具
土師器	坏a（イト）、碗c、小皿a（ヘラ、イト）
黒色土器A	碗c
黒色土器B	供膳具

S-44 黒褐色土

須恵器	坏
土師器	供膳具（ヘラ）、煮炊具（角閃石含有）
黒色土器A	破片

S-45 c 黒褐色土

土師器	坏a、煮炊具
-----	--------

S-45 d 褐色土

土師器	破片
黒色土器A	破片

S-45 e 褐色土

須恵器	煮炊具
土師器	坏a、碗c、煮炊具
瓦 類	平瓦（縄目叩）

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (13)

S-46 黒褐色土

須恵器	破片
土師器	坏a、椀×丸底椀、煮炊具
瓦器	椀
中国陶器 他器種	水注? B群 (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器 (1)
金属製品	鉄釘

S-47 黒色粘土

土師器	坏a (イト)、小皿a (イト)
龍泉窯系青磁 椀	? 破片 (1)
皿	I-2b (1)
瓦類	破片 (縄目叩)
石製品	滑石破片
白磁 椀	IV (2)

S-48 暗黄褐色土

須恵器	坏、甕
土師器	坏a
緑釉陶器	皿 (産地不明) (1)

S-49 暗褐色土

須恵器	供膳具、鉢、甕
土師器	坏a、椀c (Ⅱ期)、小皿a (イト)、甕a
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁 椀	I (4)、II (4)
長沙窯系青磁	破片 (1)、? 破片 (1)
龍泉窯系青磁 椀	I (1)、破片 (1)
同安窯系青磁 椀	破片 (1)、? 破片 (2)
皿	I (1)、破片 (1)
瓦類	破片 (格子叩)
須恵質土器	鉢 (東播系)
緑釉陶器	椀×皿 (防長) (1)
白磁 椀	破片 (2)
皿	破片 (1)
中国陶器 壺	耳壺Ⅵ-2 (1)、耳壺Ⅲ群か? (1)、小壺Ⅲ群 (1)、壺×水注Ⅲ群 (1)
他器種	盤Ⅰ (1)、水注Ⅹ (1)、破片Ⅲ群か?、破片 (1)
金属製品	鉄釘
その他	剥片 (黒曜石)

S-50 暗褐色土

須恵器	蓋3、坏a、壺×鉢、壺、甕
土師器	坏a (ヘラ)、椀c、小皿a (イト?)、甕a、甕b、破片 (角閃石含有)
黒色土器A	椀c
黒色土器B	壺×甕?
瓦類	平瓦 (格子叩)
石製品	横形石匙
灰釉陶器	破片 (1)
土製品	焼土塊

S-52 暗褐色土

須恵器	坏c、椀c、壺b、壺×甕
土師器	坏a (イト)、椀c、小皿a (イト)、甕b
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
瓦器	椀
越州窯系青磁 椀	I-2 (1)、II (1)
龍泉窯系青磁 椀	I-2 (1)、I-3a (1)、I-4 (1)
他器種	破片 (1)
同安窯系青磁 椀	破片 (3)
皿	I-1b (1)
瓦類	破片 (格子叩)
石製品	滑石破片、砥石
須恵質土器	鉢 (東海)
緑釉陶器	椀 (近江) (1)
灰釉陶器	破片 (1)
国産陶器	甕 (常滑)
白磁 椀	IV (1)、破片 (1)
皿	IV (1)
中国陶器 壺	耳壺Ⅱ (1)、耳壺Ⅲ×Ⅳ (1)
鉢	I (1)
須恵質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器 (1)

S-52 褐色砂

須恵器	甕
土師器	坏a (ヘラ)、椀c、坏a×丸底坏a
龍泉窯系青磁 椀	I-4 (1)
国産陶器	甕 (常滑)
中国陶器 他器種	破片 (1)

S-52 暗灰色土

土師器	供膳具
龍泉窯系青磁 椀	I (1)
同安窯系青磁 椀	破片 (1)
国産陶器	甕 (常滑)

S-53 暗褐色土

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	坏a (ヘラ)、椀c、高坏?、壺×鉢、甕a、甕b、破片 (角閃石含有)
黒色土器A	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦 (縄目叩)
石製品	滑石破片
灰釉陶器	椀 (2)

S-54 暗褐色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	坏a (ヘラ)、坏c、高坏?、甕
黒色土器A	椀
瓦類	破片 (格子叩)
その他	剥片 (黒曜石)

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (14)

S-55 暗褐色土

須恵器	蓋3、坏c、壺、甕
土師器	坏a、碗c、煮炊具
石製品	楔形石器（黒曜石）、スクレイパー（黒曜石）
緑釉陶器	皿（京都）（1）
弥生土器	甕（須玖式）
縄文土器	破片
その他	剥片（黒曜石）

S-56 暗褐色土

須恵器	蓋3、蓋c、蓋c（荒尾産）、坏、壺、甕a
土師器	坏a、坏a×皿a（ヘラ）、碗c、碗c2、鉢×鍋、甕a、甕b、甕（角閃石含有）、甕（古式土師器）
黒色土器A	碗c、碗c（畿内系）、甕？
黒色土器B	碗c（畿内系）、供膳具、甕
越州窯系青磁	碗 I（10）、I-1b（4）、II-2（1）
皿	II（1）
壺	II（1）
長沙窯系青磁	碗（1）、小碗（1）
瓦類	平瓦（格子叩、縄目叩）、丸瓦（格子叩、縄目叩）、文字瓦（1-2）、瓦E
石製品	滑石破片（石鍋か？）、平玉石
須恵質土器	鉢？、大甕
緑釉陶器	碗×皿（近江）（1）、碗（京都）（1）、破片（京都系）（1）、破片（東海）（9）、破片（防長）（3）
灰釉陶器	供膳具
金属製品	鉄滓（碗形滓）
その他	炭化物

S-56 黒褐色粘土

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ）、碗c、甕b
黒色土器A	供膳具
越州窯系青磁	碗 II（1）
鉢他	水注I（1）
瓦類	平瓦（格子叩）、丸瓦（格子叩）
中国陶器 他器種	水注X（墨書有）

S-58 暗灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a（イト）、碗c、小皿a（イト）、甕a
中国陶器 鉢	VI（2）、VI-1（1）

S-59 暗褐色土

須恵器	坏、甕
土師器	坏a（ヘラ）、小皿a（イト）
須恵質土器	鉢

S-60 暗灰色砂

土師器	坏？
石製品	石鏃（黒曜石）、磨石
弥生土器	甕（須玖式）
縄文土器	鉢形土器
その他	剥片（黒曜石）

S-60 暗黄灰色シルト

土師器	供膳具
石製品	打製石斧、磨製石斧、磨石
縄文土器	鉢形土器
その他	剥片（黒曜石）

S-60 黄灰色シルト

土師器	供膳具？
石製品	横形石匙、石錘、磨石
縄文土器	鉢形土器
その他	剥片（安山岩系）

S-60 黒褐色砂礫

石製品	磨石
縄文土器	鉢形土器

S-60 黒色砂

縄文土器	鉢形土器
------	------

S-62 暗褐色土

須恵器	鉢×壺
土師器	供膳具、煮炊具

S-67 暗灰色土

須恵器	坏
土師器	坏a（ヘラ）
緑釉陶器	皿（京都）（1）

S-68 暗灰色土

土師器	碗
-----	---

S-70b 黄褐色土

須恵器	坏蓋（小田編年Ⅲb～Ⅳ）、供膳具
土師器	小皿a2

S-70f 暗灰色土

須恵器	供膳具、甕
土師器	碗c、小皿？、鉢×壺、甕b
黒色土器A	碗

灰色土

須恵器	蓋1、蓋3、蓋c、坏蓋（小田編年Ⅳ前後）、壺蓋×高坏、坏c、碗c、皿a（ヘラ）、大皿c×鉢、壺、甕
土師器	蓋3、蓋c、坏a（ヘラ、イト）、坏a（赤色顔料付着）坏a（底部穿孔、油煙、雲母含有）、坏b、碗c、丸碗？、大碗×鉢、皿a（ヘラ）、小皿a（ヘラ、イト）、小皿a2、小皿b、小皿c、鍋、甕a、甕b、甕（角閃石含有）、把手
黒色土器A	碗c
黒色土器B	蓋3、坏、碗c、小皿a
瓦器	碗c、小皿a
越州窯系青磁	碗 I（18）、I-1（1）、I-2（3）、I-2ア（2）、I-2ウ（1）、I-2ア×ウ（1）、II（14）、II-2（3）、III（3）
皿	I（1）
坏	I（1）、I-3（1）
壺	I（1）
龍泉窯系青磁	碗 I（35）、I-1（3）、I-2（11）、I-4（3）、II（2）、II-a（7）、II-b（43）、III（8）、III-2（4）、III-2（口焼け）（1）
皿	I-2（油煙）（1）、破片（1）
他器種	坏III（2）、坏III-1（3）、壺I（1）

大宰府条坊跡第225次調査 出土遺物一覧表 (15)

同安窯系青磁	碗	I-1 b (21)、I-1 c (1)、Ⅲ (2)、破片 (9)
	皿	I-1 (1)、I-1 b (2)、I-2 (1)、I-2 b (3)、破片 (6)
高麗青磁	象嵌	破片 (1)
瓦	類	平瓦 (格子叩、縄目叩、二重格子叩)、丸瓦 (格子叩)、軒丸瓦当 (珠文)
石製品		滑石製石鍋、滑石破片、砥石、平玉石
土師質土器		鉢、溜鉢、火舎
須恵質土器		鉢 (東播系)、鉢
瓦質土器		鉢、硯?
緑釉陶器		皿 (京都) (1)、碗×皿 (京都) (4)、皿 (防長) (2)、碗×皿 (近江) (2)、破片 (防長) (3)、破片 (京都×防長) (2)、破片 (産地不明) (1)
灰釉陶器		碗 (2)、碗×皿 (3)、壺 (3)、破片 (4)
瀬戸		破片
肥前系陶磁器		染付磁器碗、磁器皿、破片
国産陶器		甕 (常滑)、鉢 (常滑)、溜鉢 (片口) (備前)、破片 (常滑)、破片 (産地不明)、土管 (近?現代)
白磁	碗	I (1)、Ⅱ-1 (3)、Ⅳ (11)、Ⅴ (2)、Ⅴ-1×Ⅳ-2 (4)、Ⅴ-2×Ⅳ-4 (4)、Ⅴ-4×Ⅳ-1・3 (5)、Ⅶ-b (1)、Ⅶ-1 (1)、Ⅶ-2×3 (1)、Ⅸ (3)、Ⅹ (1)、Ⅺ-1 b (1)、破片 (54)
	皿	Ⅶ (1)、Ⅸ (12)、Ⅸ-1 (4)、Ⅹ (1)、E群? (1)、破片 (10)
	壺他	壺 (1)、壺Ⅲ (5)、合子? (2)

青白磁		皿 (輪花、油煙) (1)、合子 (5)、破片 (1)
中国陶器	壺	Ⅳ (6)、破片B群 (3)、破片C群 (6)、耳壺Ⅵ (1)、耳壺Ⅺ (2)、耳壺Ⅻ (4)、壺×水注A群 (2)、壺×水注B群 (9)、破片 (1)
	鉢	I (1)、Ⅳ (1)、破片A群 (1)、破片B群 (1)、鉢×水注A群 (1)、鉢×水注B群 (1)、鉢×水注 (1)
	甕	Ⅳ (5)、破片 (5)、?破片 (1)
	他器種	碗 (1)、皿 (1)、盤 I (10)、盤 I-b (5)、盤 II (12)、盤 II-b (1)、盤 (緑釉) (1)、水注Ⅵ (1)、水注B群 (1)、水注?B群 (1)、破片A群 (8)、破片B群 (5)、破片C群 (2)、破片 (5)
須恵質 (輸入)		朝鮮系無釉陶器 (23)
黒釉陶器		破片 (1)
縄文土器		?破片
金属製品		鉄釘、鋳滓
土製品		磚、籬羽口、玉、棒状製品、焼土塊
その他		軽石

黄褐色粘土

縄文土器	鉢形土器
------	------

図 版



大宰府条坊跡第225次調査全景（南から）



調査区近景（東から）



225SE002全景（東から）



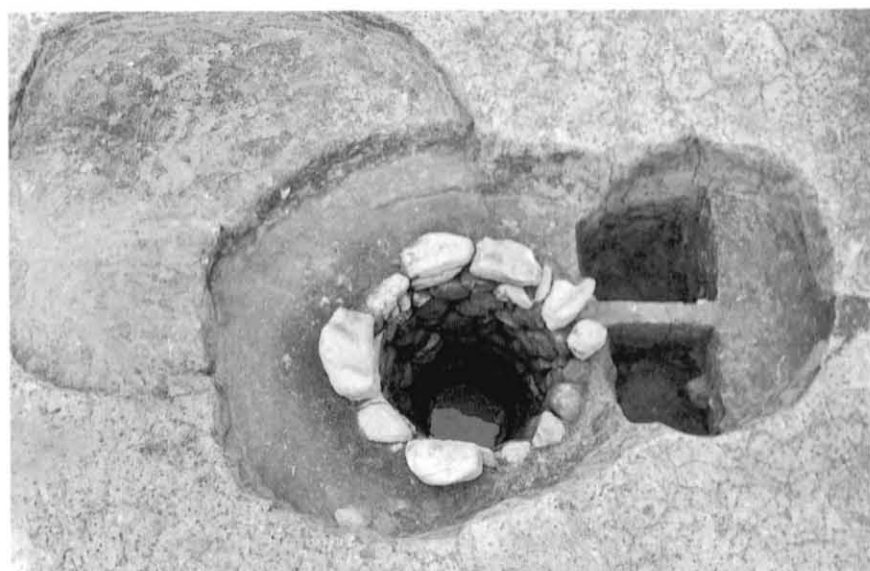
225SE003全景（東から）



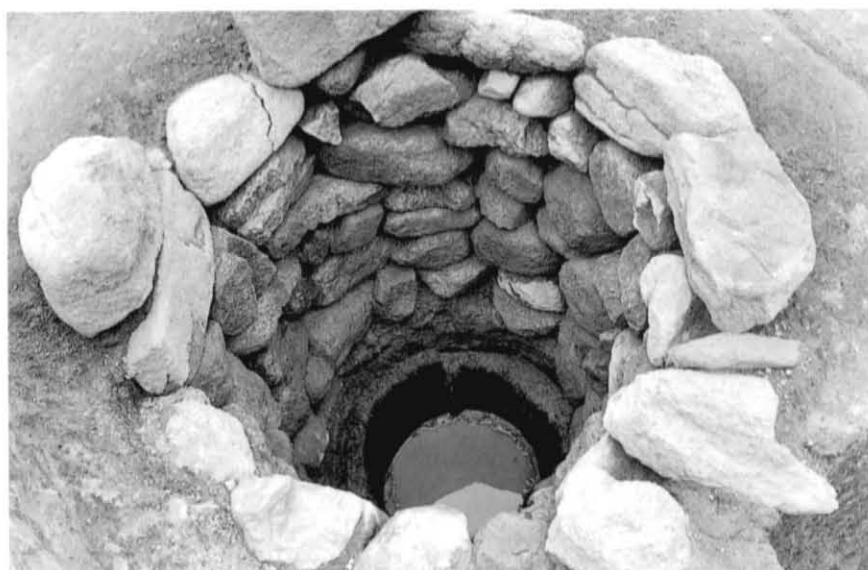
225SE005全景（東から）



225SE006全景（北から）



225SE008全景（西から）



225SE008石組詳細（南から）



225SE009全景（北から）



225SE010全景（西から）



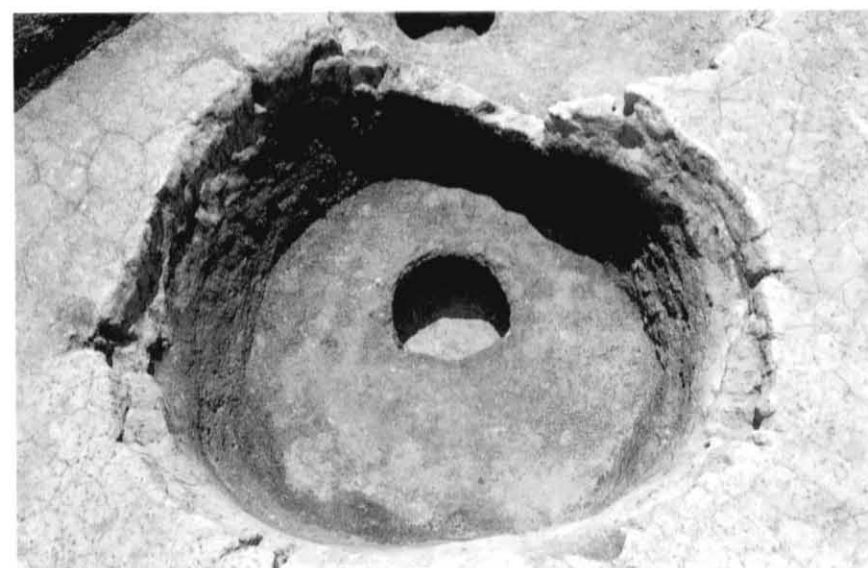
225SE011全景（北から）



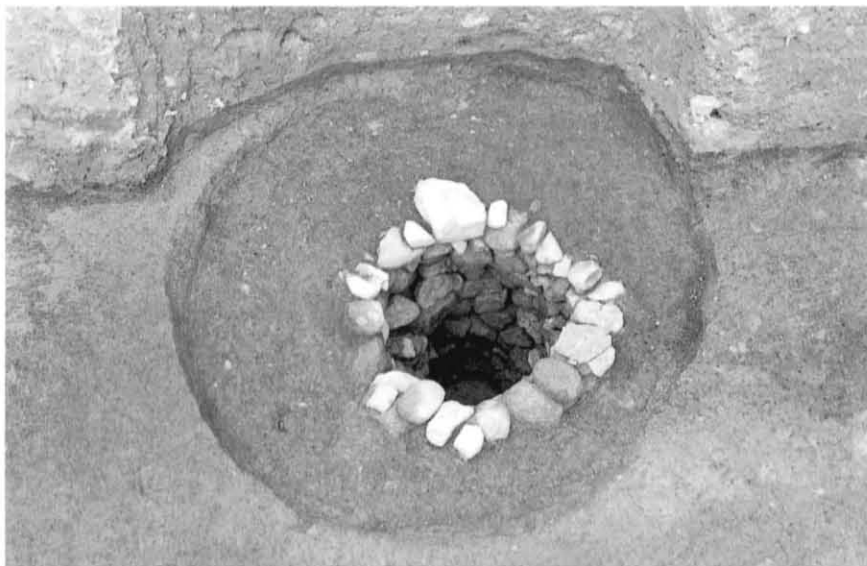
225SE014全景（東から）



225SE015全景（北から）



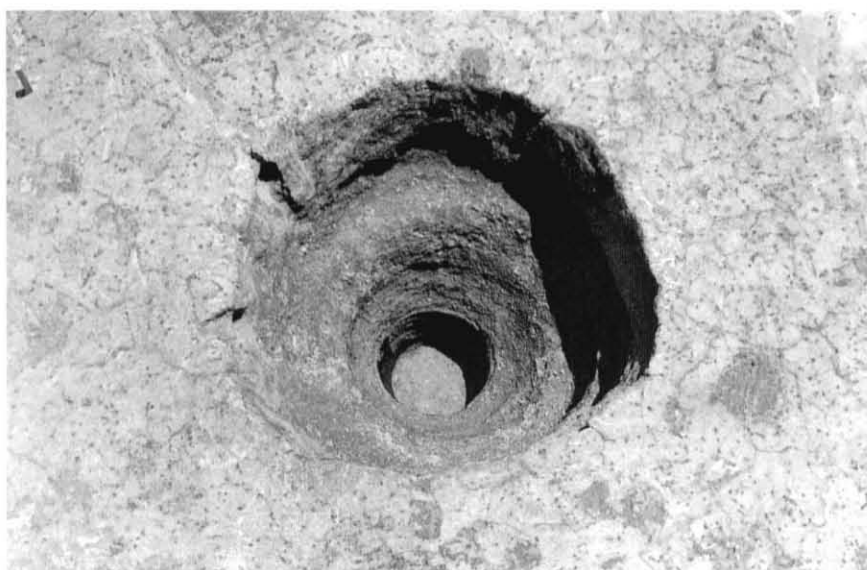
225SE017全景（北東から）



225SE020全景（西から）



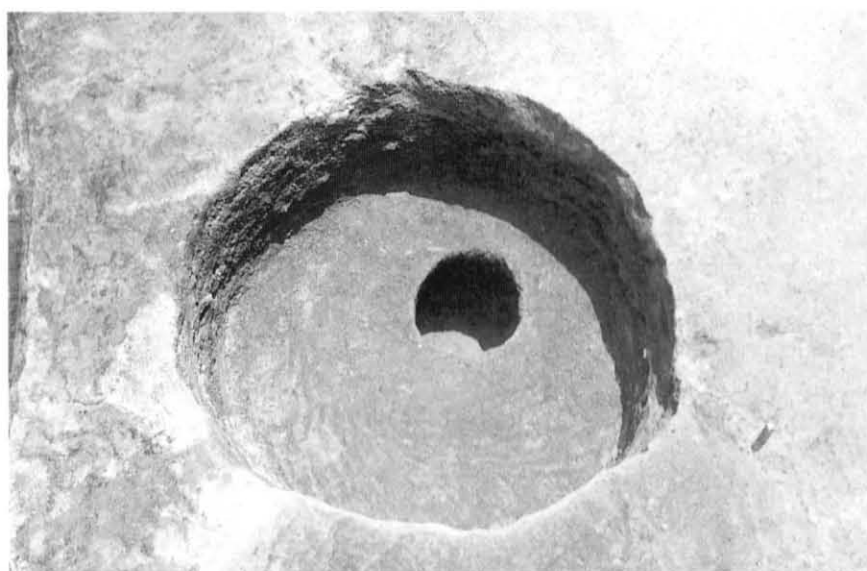
225SE020石組詳細（東から）



225SE021全景（西から）



225SE022全景（西から）



225SE023全景（西から）



225SE025全景（南から）



225SE031全景（西から）



225SE033全景（西から）



225SE034全景（西から）



225SE036全景（西から）



225SE036井戸枠詳細および遺物出土状態（東から）



225SE036井戸枠接合部詳細（南東から）



225SE056全景（南から）



225SB040全景（北から）



225SD029全景（北から）



225SK012全景（北から）



225SX055確認状況（北から）



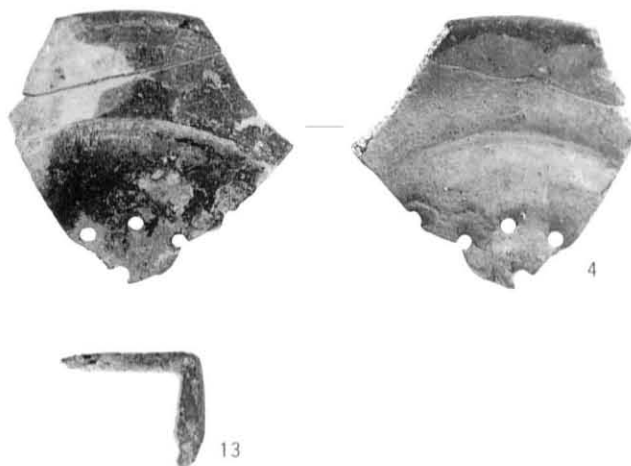
225SD060最終河床全景（北から）

图版 12

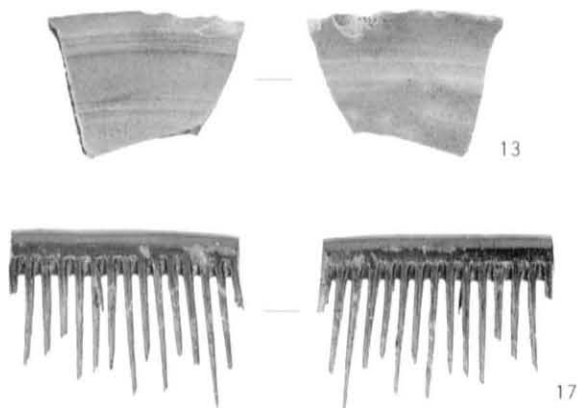
225SE002黑褐色粘土



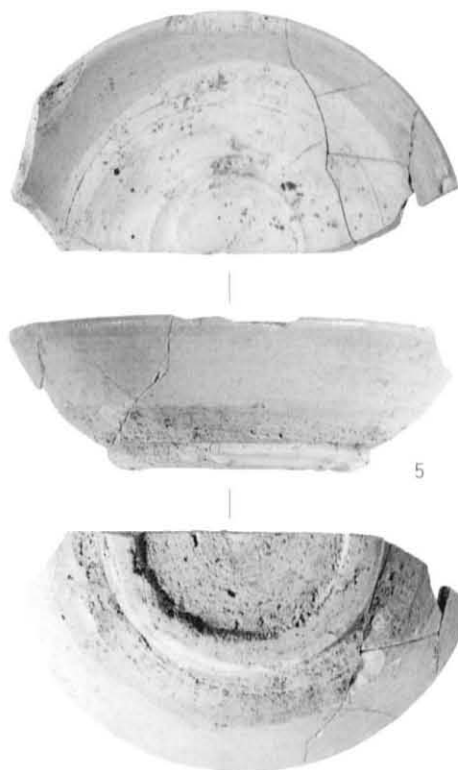
225SE003暗灰色土



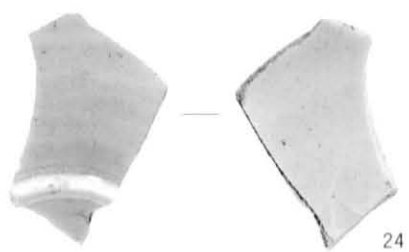
225SE006暗灰色土



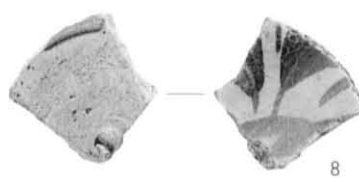
225SE008暗褐色土



225SE006暗褐色土



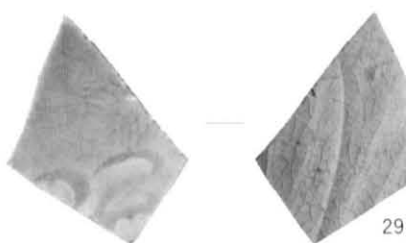
225SE008暗褐色粘土



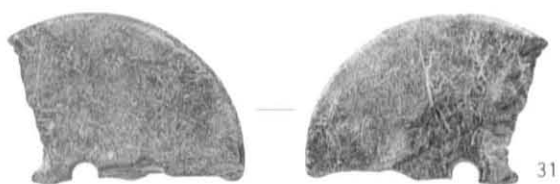
225SE014茶色土



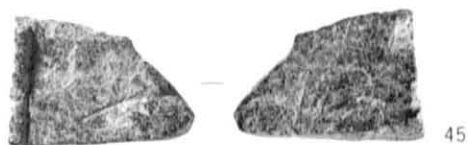
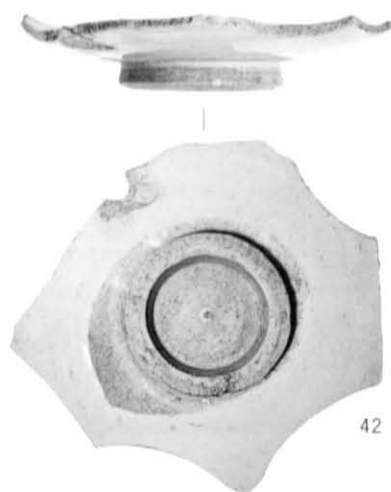
225SE014暗灰色土



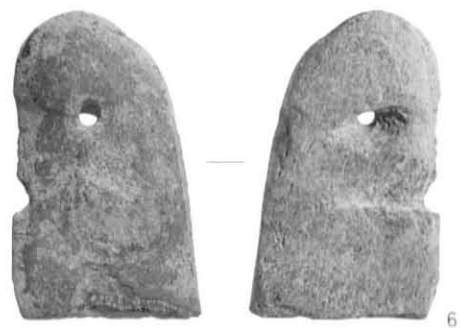
225SE015黒灰色シルト



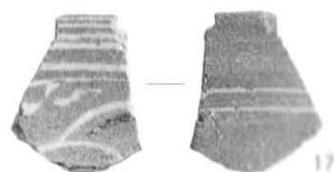
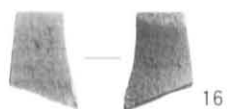
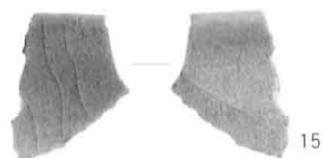
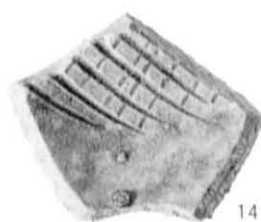
225SE020灰色土



225SE017暗灰色土

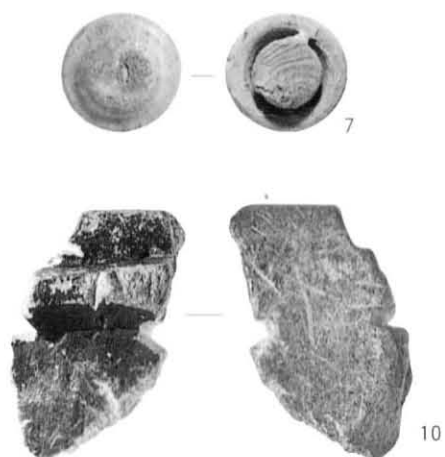


225SE020茶色土

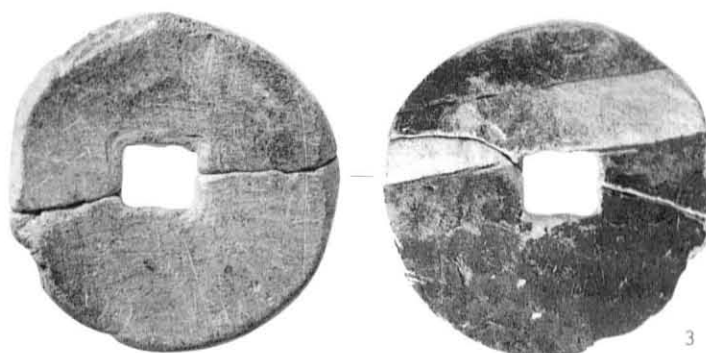


图版 14

225SE022灰色土



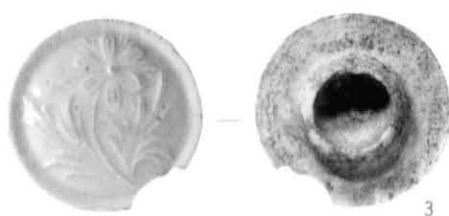
225SE023黑褐色土



225SE023灰色砂



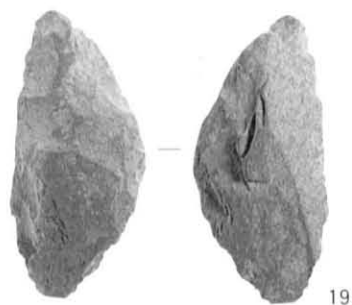
225SE033暗灰色土



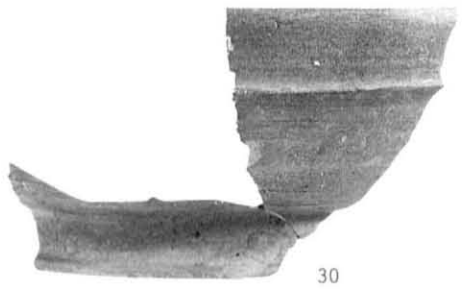
225SE036褐色土



225SE034暗褐色土



225SE036暗灰色土



225SE036暗灰色土



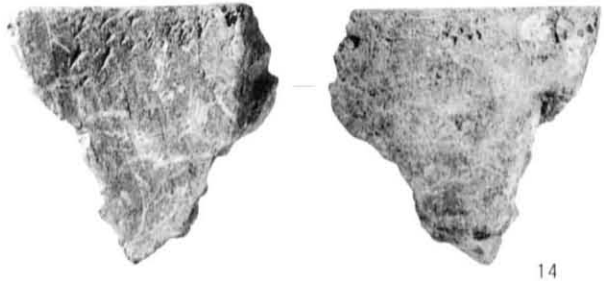
225SE036黑褐色土



R-016



225SE056暗褐色土

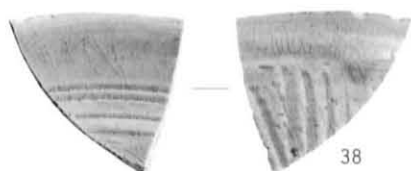


225SE056黑褐色粘土

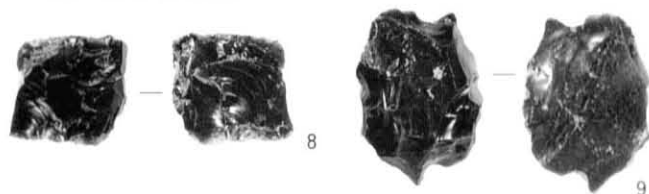


図版 16

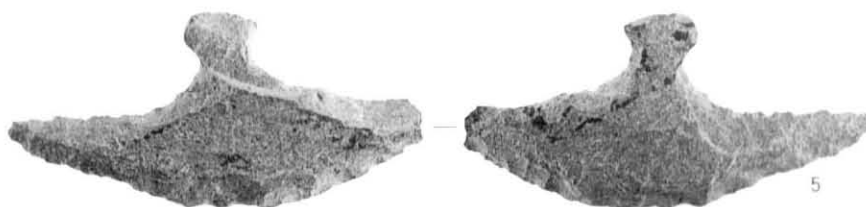
225SK018暗褐色土



225SX055暗褐色土



225SX050暗褐色土

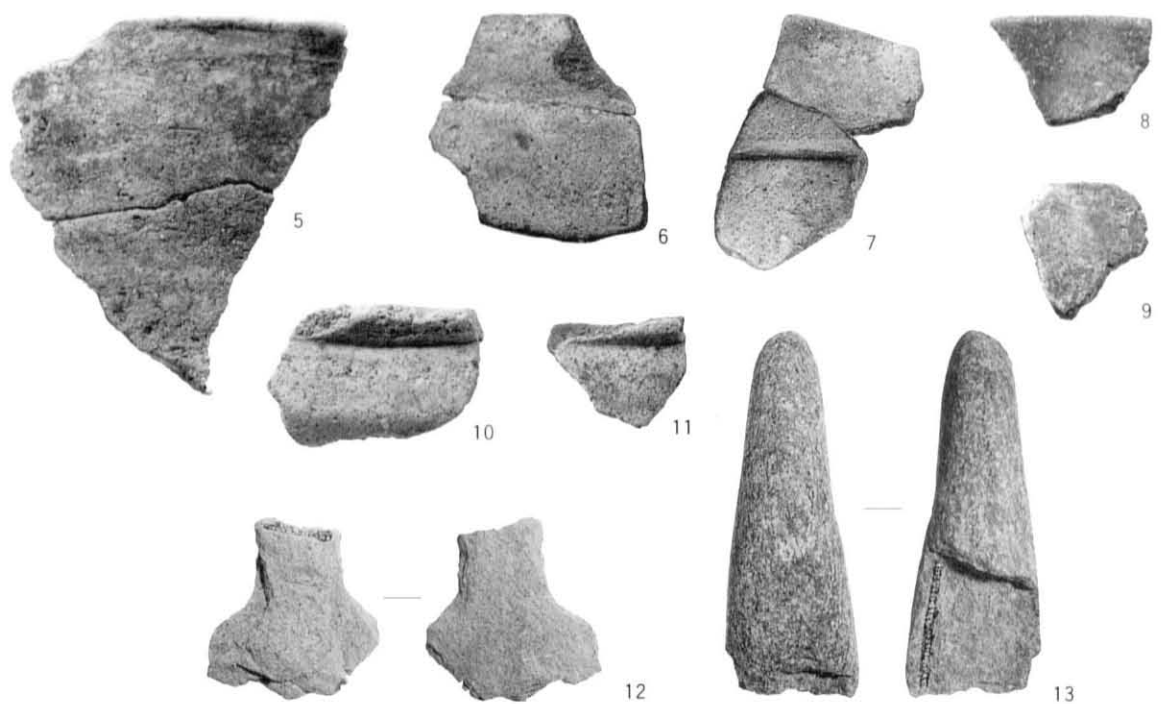


225SK018、225SX050・055出土遺物

225SD060暗灰色砂



225SD060暗黄灰色シルト



225SD060出土遺物

225SD060黄灰色シルト



14



15



16



17

225SD060黒褐色砂礫



18

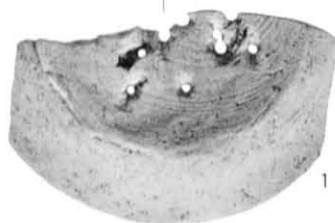
225SD060黒色砂



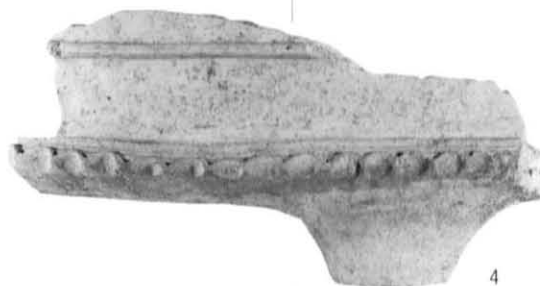
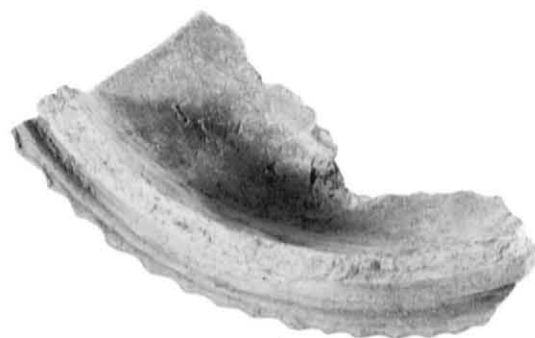
19

225SD060出土遺物

灰色土

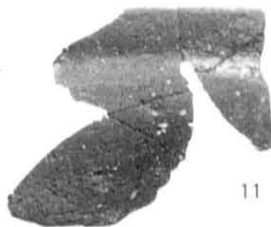


1



4

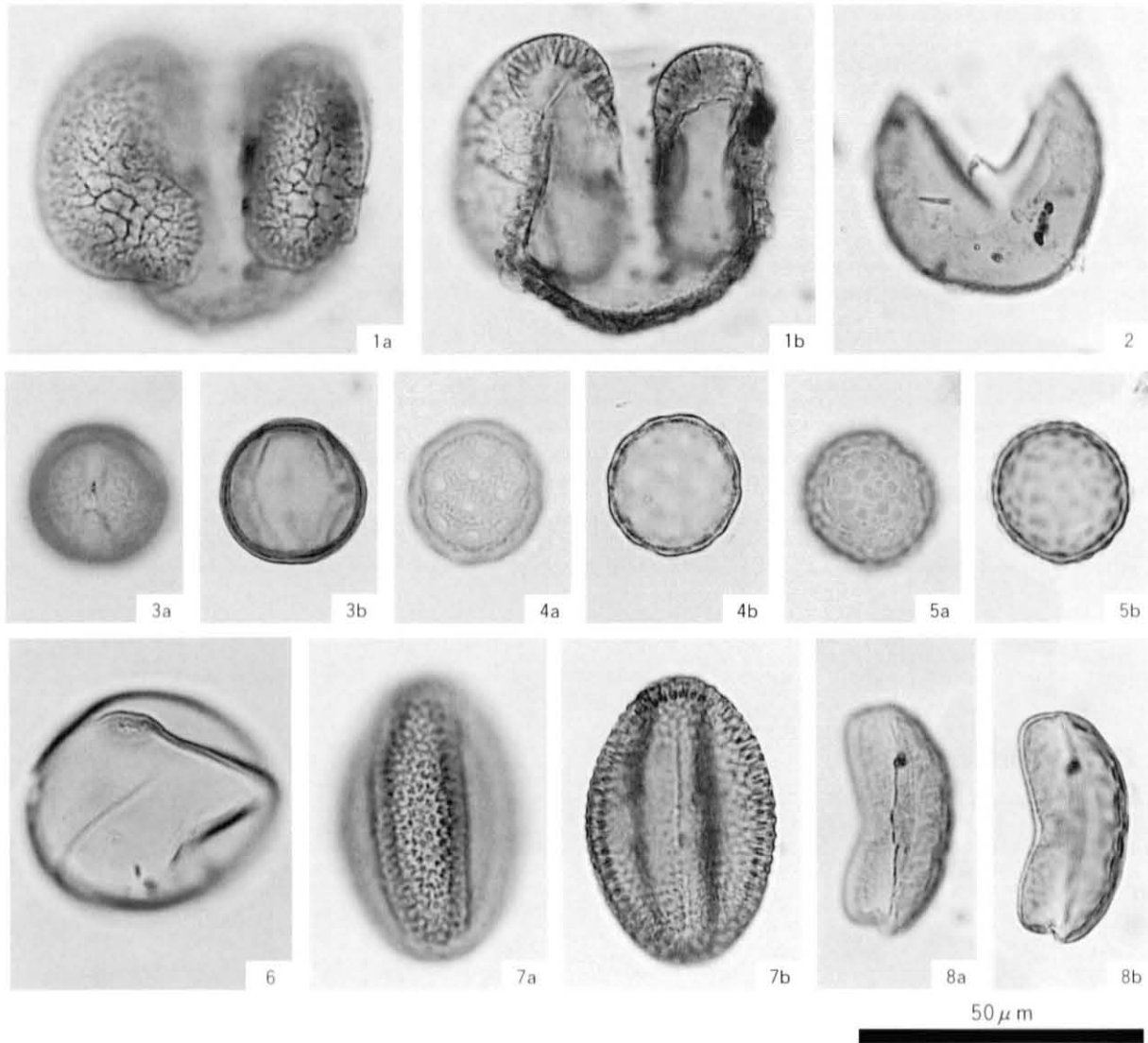
黄褐色粘土



11

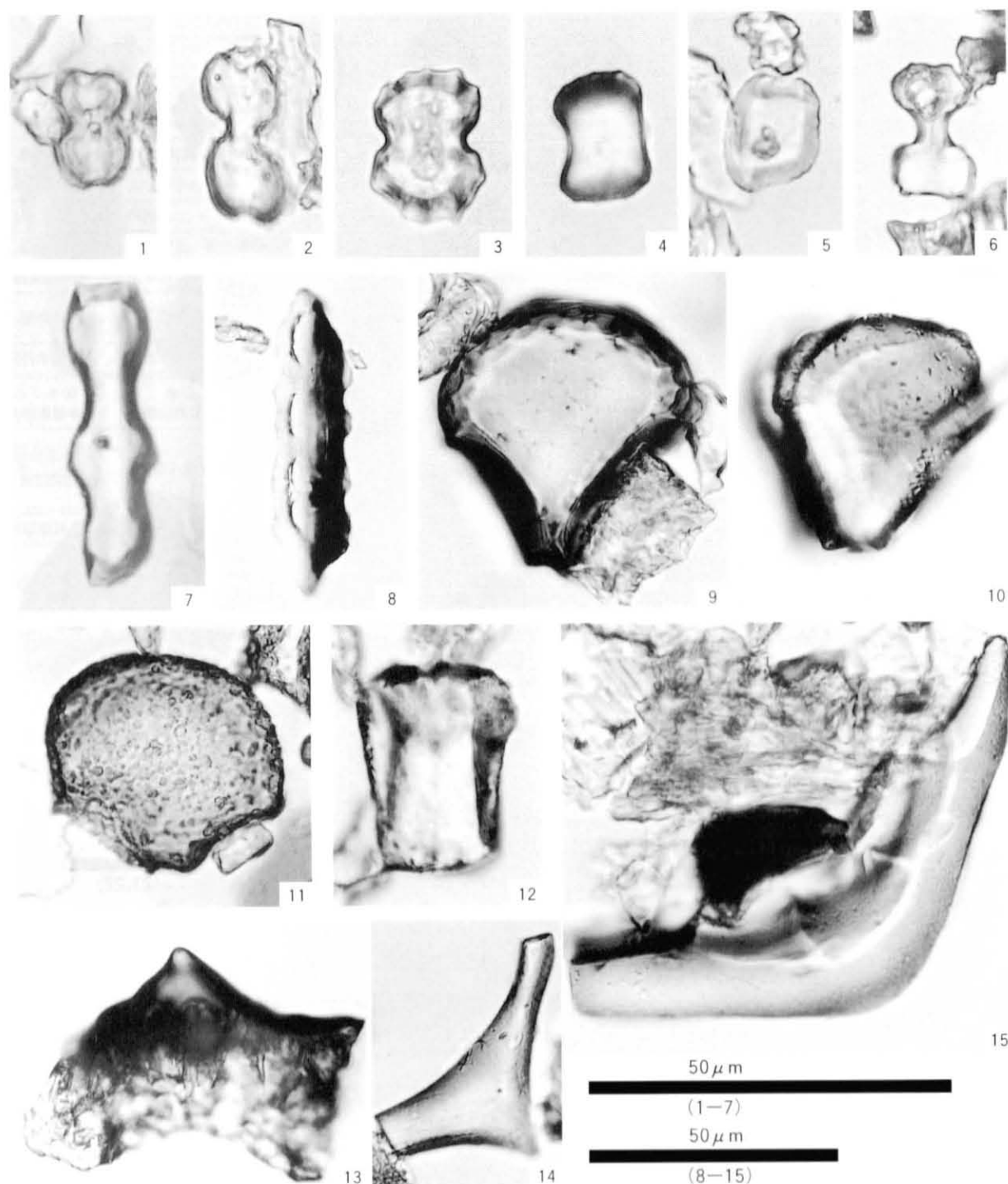


各層出土遺物



- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(試料番号2;225SE020) | 2. スギ属(試料番号1;225SE002) |
| 3. コナラ属アカガシ亜属(試料番号1;225SE002) | 4. アカザ科(試料番号5;225SE036) |
| 5. オオバコ属(試料番号5;225SE036) | 6. イネ科(試料番号5;225SE036) |
| 7. ソバ属(試料番号2;225SE020) | 8. ミズアオイ属(試料番号5;225SE036) |

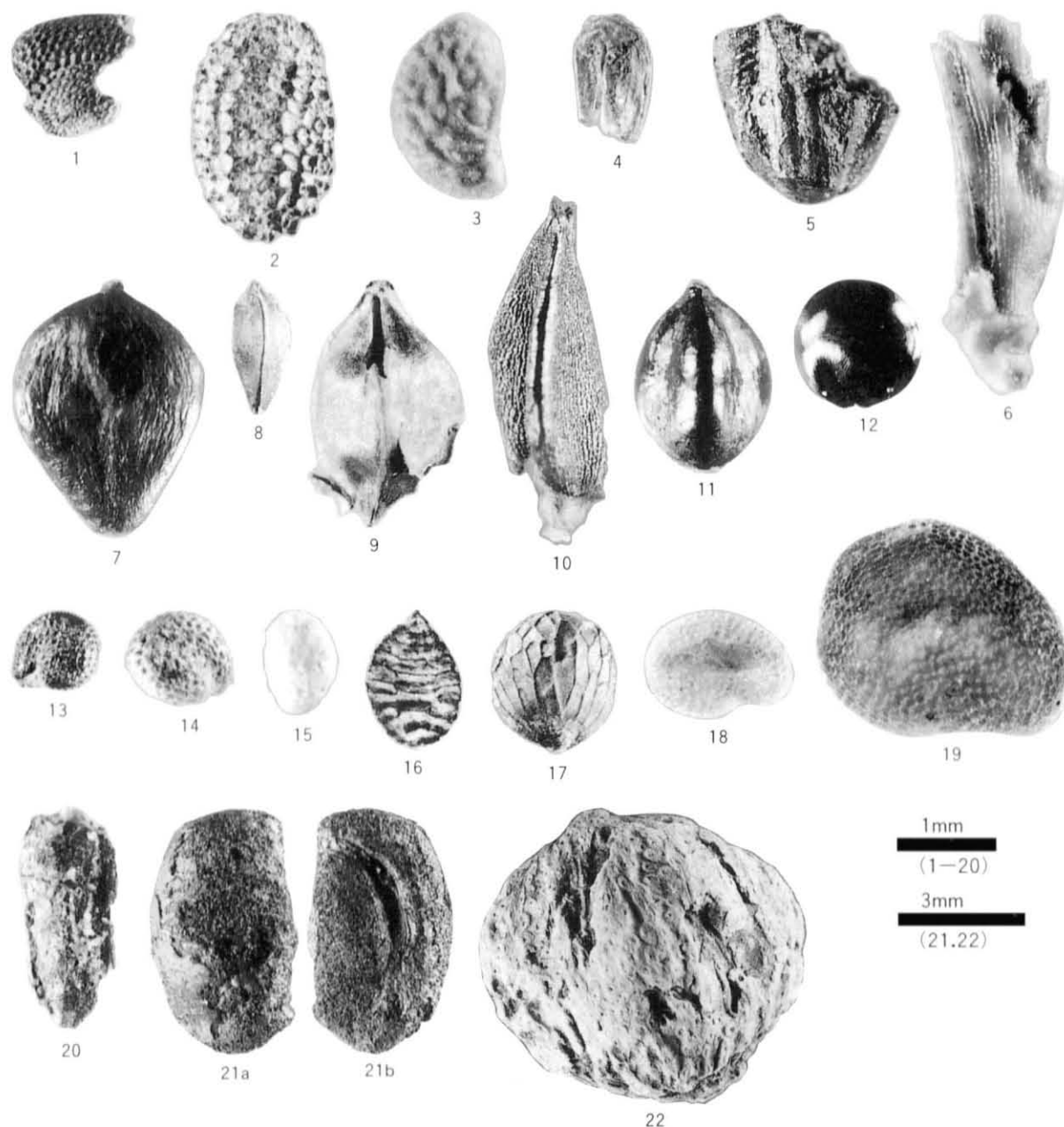
花粉分析試料の花粉化石顕微鏡写真



1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
2. キビ属短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
3. チゴザサ属短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
4. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
6. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号5;225SE036)
7. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号5;225SE036)
8. オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
9. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
10. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1;225SE002)
12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号5;225SE036)
13. イネ属穎珪酸体(試料番号1;225SE002)
14. 樹木起源第Ⅲグループ(試料番号5;225SE036)
15. 樹木起源第Ⅳグループ(試料番号1;225SE002)

植物珪酸体分析試料の顕微鏡写真

図版 20



1. ヒサカキ属種子 (試料番号5;225SE036)
2. マタタビ属種子 (試料番号3;225SE020)
3. キイチゴ属核 (試料番号5;225SE036)
4. オモダカ科種子 (試料番号3;225SE020)
5. イネ胚乳 (試料番号3;225SE020)
6. イネ穎 (試料番号5;225SE036)
7. カヤツリグサ科果実 (試料番号5;225SE036)
8. カヤツリグサ科果実 (試料番号5;225SE036)
9. ギンギン属果実 (試料番号6;225SE036)
10. タデ属 (ミゾソバ?) 果実 (試料番号1;225SE002)
11. タデ属 (ハナタデーヌタデ?) 果実 (試料番号2;225SE020)

12. アカザ科種子 (試料番号5;225SE036)
13. スベリヒユ種子 (試料番号1;225SE002)
14. ナデシコ科種子 (試料番号3;225SE020)
15. キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (試料番号2;225SE020)
16. カタバミ属種子 (試料番号5;225SE036)
17. イヌコウジュ属果実 (試料番号5;225SE036)
18. ナス科種子 (試料番号6;225SE036)
19. ナス科種子 (試料番号6;225SE036)
20. キク科果実 (試料番号3;225SE020)
21. マメ類種子 (試料番号1;225SE002)
22. ヤマモモ核 (試料番号5;225SE036)

微細植物片分析試料の種実遺体顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと 26									
書名	大宰府条坊跡 26									
副書名	第225次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第76集									
編著者	井上信正、香川達郎、佐々木竜郎、バリノ・サーヴェイ株式会社									
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所									
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1 TEL092-921-2121 玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9 TEL045-321-5565									
発行年月日	平成16（2004）年6月15日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第225次	右郭7条8坊	だざいふし 太宰府市 五条2丁目 188番地	402214	210044-225	+56315.0	-44165.0	20030228	20030715	756.0	集合住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
大宰府条坊跡 第225次	大宰府条坊	縄文晩期～弥生中期 9世紀～14世紀以降	流路 整地 井戸 掘立柱建物 櫓列 溝 土坑		縄文土器 弥生土器 須恵器 土師器 黒色土器 瓦器 須恵 質土器 土師質土器 国産陶器 貿易陶磁 金属製品 石製品 木製品			9～14世紀の井戸多数検出 初期イスラム陶器、ベトナム陶器、 墨書中国陶器水注、斎串出土 流路から縄文後～晩期土器出土		

太宰府市の文化財第76集

大宰府条坊跡 26

－第225次調査－

平成16（2004）年6月

発行 太宰府市教育委員会
〒818-0198 太宰府市観世音寺1-1-1

編集協力 玉川文化財研究所
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-8-9

印刷 株式会社アルファ
〒250-0001 神奈川県小田原市扇町5-25-23